

や ち よ し どう か み い せ き か み こう や し ら は た い せ き
八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡
ひ ら さ わ い せ き あ か さ く い せ き あ そ ち ゅ う が っ こ う ひ が し が わ い せ き
平沢遺跡・赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡

— 一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 15 集となる、一般国道 296 号道路改良事業に伴って実施した八千代市堂の上遺跡ほか 5 遺跡の発掘調査報告書です。堂の上遺跡では古墳時代中期の竪穴住居跡から石製模造品の未成品や製作剥片が多量に出土し、赤作遺跡では縄文時代前期末の土坑から顔面表現が施された土器が出土するなど周辺地域における当時の生活の状況を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関に心から感謝申し上げます

平成 28 年 3 月

千葉県教育委員会
文化財課長 永沼 律朗

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部千葉土木事務所による一般国道 296 号道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を取録したものである。

堂の上遺跡	八千代市堂の上 41-3 ほか	(遺跡コード 221-033)
上高野白幡遺跡	八千代市上高野 699-2 の一部ほか	(遺跡コード 221-038)
平沢遺跡	八千代市上高野 142 ほか	(遺跡コード 221-034)
赤作遺跡	八千代市米本 1956 ほか	(遺跡コード 221-027)
阿蘇中学校東側遺跡	八千代市米本 2716-2 ほか	(遺跡コード 221-028)
- 3 平成 24 年までの発掘調査・整理作業については、千葉県千葉土木事務所の委託を受け財団法人千葉県教育振興財団（平成 24 年度から公益財団法人）が実施した。平成 25 年度以降の発掘調査・整理作業は千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は第 1 章第 1 節の本文中に記した。
- 5 本書の執筆は旧石器時代と縄文時代石器を田島 新、縄文時代遺構と縄文土器を牧 武尊、その他・編集を黒沢 崇が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、八千代市教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、千葉県千葉土木事務所、守矢昌文（茅野市尖石縄文考古館）、三上徹也（長野県立上伊那農業高校）、石井友菜ほか多くの方々からご指導、ご協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記の通りである。

第 1 図	国土地理院発行	1/25,000	地形図「白井」「小林」「習志野」「佐倉				
第 2	・ 37	・ 52	・ 65	・ 84 図	八千代市発行	1/2,500	八千代市地形図
- 8 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 9 土器の観察表に記載した色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に基づいて記載した。
- 10 写真図版 1 の航空写真は京業測量株式会社による昭和 48 年撮影の写真を使用した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	4
第2章 堂の上遺跡	8
第1節 調査の概要	8
第2節 旧石器時代	8
第3節 縄文時代	16
第4節 弥生時代	30
第5節 古墳時代以降	36
第3章 上高野白幡遺跡	54
第1節 調査の概要	54
第2節 旧石器時代	56
第3節 縄文時代	57
第4節 弥生時代	58
第4章 平沢遺跡	74
第1節 調査の概要	74
第2節 旧石器時代	76
第3節 縄文時代	85
第5章 赤作遺跡	87
第1節 調査の概要	87
第2節 旧石器時代	87
第3節 縄文時代	96
第4節 中・近世	99
第6章 阿蘇中学校東側遺跡	107
第1節 調査の概要	107
第2節 旧石器時代	109
第3節 縄文時代	116
第4節 中・近世	119
第7章 総括	123
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 事業路線と周辺遺跡分布図	6	第34図 012	44
堂の上遺跡		第35図 021	44
第2図 周辺地形図と調査地点	9	第36図 土坑・ピット群・遺構外出土遺物	46
第3図 下層確認グリッド配置図	10	上高野白幡遺跡	
第4図 上層確認トレンチ配置図	10	第37図 下層確認グリッド配置図	54
第5図 第1ブロック出土遺物分布	11	第38図 上層確認トレンチ配置図	54
第6図 第1ブロック出土遺物	11	第39図 周辺地形図と調査地点	55
第7図 遺構分布図（平成12・14年度）	13	第40図 単独出土遺物分布及び出土遺物	56
第8図 遺構分布図（平成13年度）	14	第41図 遺構分布図・SK-001	57
第9図 遺構分布図（平成15年度）	15	第42図 遺構外出土縄文土器	58
第10図 縄文時代遺構（1）	17	第43図 SI-001	59
第11図 縄文時代遺構（2）	18	第44図 SI-002	60
第12図 遺構出土縄文土器（1）	20	第45図 SI-003（1）	61
第13図 遺構出土縄文土器（2）	21	第46図 SI-003（2）	62
第14図 遺構出土縄文土器（3）	22	第47図 SI-004（1）	64
第15図 遺構外出土縄文土器（1）	23	第48図 SI-004（2）	65
第16図 遺構外出土縄文土器（2）	24	第49図 SI-004（3）	66
第17図 遺構外等出土石器（1）	27	第50図 SI-005（1）	67
第18図 遺構外等出土石器（2）	29	第51図 SI-005（2）	68
第19図 001	31	平沢遺跡	
第20図 003	31	第52図 下層確認グリッド配置図	74
第21図 008	32	第53図 上層確認トレンチ配置図	74
第22図 009	32	第54図 周辺地形図と路線図	75
第23図 011	32	第55図 第1ブロック出土遺物分布	
第24図 013	33	- 器種別 -	77
第25図 020	33	第56図 第1ブロック出土遺物分布	
第26図 遺構外出土弥生土器	33	- 石材別 -	78
第27図 004	37	第57図 第1ブロック出土遺物（1）	
第28図 005（1）	38	- 集中A -	79
第29図 005（2）	39	第58図 第1ブロック出土遺物（2）	
第30図 005出土石製品剥片等（1）	40	- 集中A -	80
第31図 005出土石製品剥片等（2）	41	第59図 第1ブロック出土遺物（3）	
第32図 005出土石製品剥片等（3）	42	- 集中C -	81
第33図 005出土石製品剥片等（4）	43	第60図 第2ブロック出土遺物分布	82

第61図	単独出土遺物分布	82	第79図	H11-3区・4区遺構	103
第62図	SK-001・SK-002	86	第80図	H11-5区遺構	104
第63図	SK-001出土縄文土器	86	第81図	H14区遺構	105
第64図	遺構外出土縄文土器	86	第82図	H16区遺構	106
赤作遺跡			第83図	中・近世出土遺物	106
第65図	周辺地形図と路線図	88	阿蘇中学校東側遺跡		
第66図	下層確認グリッド配置図	89	第84図	下層確認グリッド配置図	107
第67図	上層確認トレンチ配置図	89	第85図	上層確認トレンチ配置図	107
第68図	第1文化層第1ブロック出土遺物分布	90	第86図	周辺地形図と路線図	108
第69図	第1文化層第1ブロック出土遺物	90	第87図	第1ブロック出土遺物分布	110
第70図	第2文化層第1ブロック出土遺物分布	91	第88図	第1ブロック出土遺物(1)	111
第71図	第2文化層第1ブロック出土遺物	91	第89図	第1ブロック出土遺物(2)	112
第72図	第3文化層第1ブロック出土遺物分布	92	第90図	第1ブロック出土遺物(3)	113
第73図	第3文化層第1ブロック出土遺物	92	第91図	遺構分布図(全体)	117
第74図	遺構分布図	94	第92図	遺構分布図(今回調査区)	118
第75図	SK-001・SK-021・023	97	第93図	SK-006・SK-013	119
第76図	SK-021・023出土土器	98	第94図	遺構外出土縄文土器	119
第77図	遺構外出土縄文土器	98	第95図	中・近世土坑(1)	121
第78図	H11-1区遺構	101	第96図	中・近世土坑(2)	122
			第97図	顔面表現付の土器の類例	124
			第98図	白玉製作工程模式図	125

目 次

堂の上遺跡		第11表	古墳時代土器類観察表	48
第1表	単独出土石器属性表	第12表	石製模造品未成品・剥片類計測表	50
第2表	第1ブロック出土石器属性表	上高野白幡遺跡		
第3表	第1ブロック出土石器組成表	第13表	単独出土石器属性表	56
第4表	遺構名称新旧対照一覧表	第14表	弥生時代遺構一覧表	69
第5表	縄文時代土坑一覧表	第15表	弥生時代石器属性表	69
第6表	縄文時代石器属性表	第16表	弥生時代土器類観察表	70
第7表	弥生時代竪穴住居跡一覧表	平沢遺跡		
第8表	弥生時代土器類観察表	第17表	第1ブロック出土石器属性表	83
第9表	古墳時代竪穴住居跡一覧表	第18表	第1ブロック出土石器組成表	84
第10表	古墳時代石器属性表	第19表	第2ブロック出土石器属性表	84

第20表	第2ブロック出土石器組成表……………84	第26表	第3文化層第1ブロック出土石器属性表 ……………93
第21表	単独出土石器属性表……………84	第27表	第3文化層第1ブロック出土石器組成表 ……………93
赤作遺跡			
第22表	第1文化層第1ブロック出土石器属性表 ……………93	第28表	土坑一覽表……………95
第23表	第1文化層第1ブロック出土石器組成表 ……………93	第29表	溝状遺構一覽表……………95
第24表	第2文化層第1ブロック出土石器属性表 ……………93	第30表	錢貨計測表……………102
第25表	第2文化層第1ブロック出土石器組成表 ……………93	阿蘇中学校東側遺跡	
		第31表	第1ブロック出土石器属性表……………114
		第32表	第1ブロック出土石器組成表……………116
		第33表	土坑一覽表……………118

図版目次

図版1	航空写真 (S=1/10,000)	図版20	弥生時代遺物 (3)
堂の上遺跡		図版21	弥生時代遺物 (4)
図版2	調査前・トレンチ	平沢遺跡	
図版3	トレンチ・基本土層・第1ブロック・001	図版22	基本土層・SK-001～SK-003・第1ブロック
図版4	001・003・004・005・008	図版23	旧石器・縄文土器・縄文石器
図版5	008・009・011・012・013・020	赤作遺跡	
図版6	020・021・022・002・007・010	図版24	調査前・調査区東側・基本土層・第1・2 文化層第1ブロック・SK-001
図版7	014・015・016・017・023・024・025・027	図版25	SK-002～SK-009
図版8	旧石器・縄文土器等	図版26	SK-010～SK-015・SK-017・SK-018
図版9	縄文時代遺物 (1)	図版27	SK-019～SK-022・SD-001～SD-004
図版10	縄文時代遺物 (2)	図版28	旧石器・縄文土器
図版11	縄文時代遺物 (3)	図版29	遺構外縄文土器・中近世遺物
図版12	弥生土器・古墳時代遺物 (1)	阿蘇中学校東側遺跡	
図版13	古墳時代遺物 (2)	図版30	調査前・基本土層・トレンチ・第1ブロック
図版14	005出土石製品剥片等	図版31	第1ブロック・SK-006・SK-013・SK-001 ～SK003
上高野白楯遺跡		図版32	SK-004・SK-005・SK-008～SK-012・ SK-014
図版15	調査前・トレンチ・単独出土・SI-001	図版33	旧石器・遺構外出土縄文土器
図版16	SI-002～SI-004		
図版17	SI-004・SI-005・SK-001		
図版18	旧石器・縄文土器・弥生時代遺物 (1)		
図版19	弥生時代遺物 (2)		

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

1 調査の経緯と経過

八千代市は、千葉県北西部の内陸に位置している。市内を東西に縦断する国道296号は、匝瑳市から成田など印旛地域を経由し船橋に至る幹線道路である。特に八千代市及び佐倉市周辺地域における宅地開発が大規模に進められた結果、幹線道路の交通量が著しく増大し、慢性的な交通渋滞を引き起こしている。そのため、交通の分散を図り、現国道の交通渋滞の解消を目指し整備計画が立てられた。この計画にあたって平成7年6月及び平成12年12月に千葉県千葉土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が、千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、事業計画地内に堂の上遺跡ほか5遺跡が所在する旨の回答を行い、その取扱いについて関係機関との協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査及び整理作業は、平成24年度までは、財団法人千葉県文化財センター（現 公益財団法人千葉県教育振興財団）、平成25年度から千葉県教育委員会がそれまでの事業を引き継ぎ実施した。

なお、平成9年度に同事業で実施した赤作遺跡、阿蘇中学校東側遺跡の一部の発掘調査成果については、平成10年度に報告書を刊行している。その後、平成11年度以降実施した堂の上遺跡ほか5遺跡の調査成果について、今年度報告書刊行となった。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

< (財) 千葉県文化財センター >

平成11年度 調査部長 沼澤 豊 北部調査事務所長 折原 繁

(発掘) 赤作遺跡

調査期間 平成11年8月1日～平成11年9月30日

担当者 研究員 織田良昭

調査対象面積 2,505㎡ 確認調査面積 上層290㎡ 下層99㎡

平成12年度 調査部長 沼澤 豊 北部調査事務所長 石田廣美

(発掘) 赤作遺跡 (阿蘇中学校東側遺跡)

調査期間 平成13年2月16日～平成13年2月28日

担当者 研究員 城田義友

調査対象面積 161㎡ 確認調査面積 上層161㎡ 下層6㎡

(発掘) 堂の上遺跡 調査期間 平成13年2月16日～平成13年2月28日

担当者 研究員 城田義友

調査対象面積 2,020㎡ 確認調査面積 上層201㎡ 下層80㎡

平成13年度 調査部長 佐久間 豊 北部調査事務所長 石田廣美

(発掘) 堂の上遺跡

調査期間 平成14年2月1日～平成14年3月25日

担当者 首席研究員 川端保夫

調査対象面積 2,436㎡ 確認調査面積 上層 243㎡ 下層 97㎡

本調査面積 上層 881㎡

平成14年度 調査部長 齋木 勝 北部調査事務所長 古内 茂

(発掘) 赤作遺跡

調査期間 平成14年10月1日～平成14年10月25日

担当者 主席研究員 池田大助

調査対象面積 1,194㎡ 確認調査面積 上層 119㎡ 下層 48㎡

本調査面積 上層 650㎡ 下層 64㎡

(発掘) 堂の上遺跡

調査期間 平成14年10月23日～平成14年11月29日

担当者 主席研究員 池田大助

調査対象面積 2,010㎡ 本調査面積 上層 2,010㎡

平成15年度 調査部長 齋木 勝 北部調査事務所長 古内 茂

(発掘) 堂の上遺跡

調査期間 平成15年9月1日～平成15年9月30日

担当者 研究員 立和名明美

調査対象面積 1,434㎡ 確認調査面積 上層 143㎡ 下層 57㎡

(発掘) 平沢遺跡

調査期間 平成15年9月1日～平成15年9月30日

担当者 研究員 立和名明美

調査対象面積 1,068㎡ 確認調査面積 上層 107㎡ 下層 43㎡

(整理) 堂の上遺跡・平沢遺跡

担当者 研究員 立和名明美

作業内容 堂の上遺跡：水洗注記記録整理 分類 接合・復元の一部

平沢遺跡：水洗注記記録整理

平成16年度 調査部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

(発掘) 赤作遺跡

調査期間 平成16年10月4日～平成16年10月29日

担当者 主席研究員 雨宮龍太郎

調査対象面積 927㎡ 確認調査面積 上層 136㎡ 下層 40㎡

(発掘) 阿蘇中学校東側遺跡

調査期間 平成16年10月4日～平成16年10月29日

担当者 主席研究員 雨宮龍太郎

調査対象面積 887㎡ 確認調査面積 上層 88㎡ 下層 36㎡

(整理) 赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡

担当者 主席研究員 雨宮龍太郎

作業内容 赤作遺跡：水洗 注記 記録整理 実測・トレースの一部

阿蘇中学校東側遺跡：水洗 注記 記録整理 トレースの一部

< (財) 千葉県教育振興財団 >

平成17年度 調査部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

(発掘) 平沢遺跡 調査期間 平成17年11月16日～平成17年12月28日

担当者 上席研究員 森本和男

調査対象面積 3,492㎡ 確認調査面積 上層 350㎡ 下層 140㎡

本調査面積 下層 620㎡

平成18年度 調査研究部長 矢戸三男 北部調査事務所長 古内 茂

(発掘) 阿蘇中学校東側遺跡

調査期間 平成18年6月1日～平成18年6月19日

担当者 上席研究員 田井知二

調査対象面積 1,142㎡ 確認調査面積 上層 154㎡ 下層 48㎡

本調査面積 下層 90㎡

平成22年度 調査研究部長 及川淳一 北部調査事務所長 野口行雄

(発掘) 上高野白幡遺跡

調査期間 平成22年8月1日～平成22年9月19日

担当者 主席研究員 石倉亮治 上席研究員 糸川道行

調査対象面積 2,023㎡ 確認調査面積 上層 237㎡ 下層 44㎡

本調査面積 上層 800㎡

(整理) 上高野白幡遺跡

担当者 主席研究員 石倉亮治

作業内容 記録整理の一部

平成23年度 調査研究部長 及川淳一 北部調査事務所長 野口行雄

(整理) 堂の上遺跡

担当者 主席研究員 川島利道

作業内容 水洗・注記の一部から接合・復元の一部

<公益財団法人千葉県教育振興財団>

平成24年度 調査研究部長 関口達彦 調査2課長 橋本勝雄

(整理) 堂の上遺跡

担当者 主席研究員 石倉亮治・香取正彦

作業内容 接合・復元の一部 実測 トレース

<千葉県教育委員会>

平成25年度 教育振興部文化財課長 湯浅京子 発掘調査班長 蜂屋孝之

(整理) 堂の上遺跡ほか5遺跡

担当者 主任上席文化財主事 香取正彦・土屋潤一郎・落合章雄

作業内容 記録整理の一部から実測・トレースの一部

平成26年度 教育振興部文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 蜂屋孝之

(発掘) 堂の上遺跡B地点 調査期間 平成26年8月1日～平成26年8月19日

担当者 主任上席文化財主事 香取正彦

調査対象面積 1,180㎡ 確認調査面積 上層118㎡ 下層24㎡

(整理) 堂の上遺跡ほか5遺跡

担当者 主任上席文化財主事 落合章雄

作業内容 実測・トレースの一部から原稿執筆の一部

平成27年度 教育振興部文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 蜂屋孝之

(整理) 堂の上遺跡ほか5遺跡

担当者 主任上席文化財主事 田島新 上席文化財主事 黒沢崇

文化財主事 牧 武尊

作業内容 原稿執筆の一部 編集 校正 収納 刊行

第2節 遺跡の位置と環境 (第1図)

堂の上遺跡ほか5遺跡(以下、本遺跡群)は八千代市を南北に流れる新川の東側、西印旛沼の南側にあたり、印旛沼に注ぐ高野川の支流により開析された標高23m～26mの台地上に位置する。本遺跡群の周辺は、ほとんど一帯が周知の埋蔵文化財包蔵地として知られる。以下、周辺の遺跡¹⁾について、発掘調査によって明らかになった遺跡を中心に今回の発掘調査成果に関連する時代ごとに説明する。

旧石器時代は、本遺跡群でも上高野遺跡を除いて石器集中地点が検出された。周辺では新川西岸の萱田遺跡群の権現後遺跡・北海道遺跡・ラサル山遺跡・井戸向遺跡・白幡前遺跡・坊山遺跡、本遺跡群南西側の村上遺跡において、石器集中ブロックが多く確認されている。特に、萱田遺跡群ではⅢ層からⅩ層にかけて多くの文化層が検出されており、多量の石器が出土している。また、赤作遺跡及び阿蘇中学東側遺跡では(財)千葉県文化財センターによって発掘調査が実施されており、Ⅳ層を中心に石器が出土している。

本遺跡群の縄文時代では早期から後期の遺物が出土した。特に堂の上遺跡では後期前葉を主体とする整

穴住居跡と土坑を検出し、赤作遺跡では、前期末の土坑から顔面表現のある深鉢土器破片が出土した。阿蘇中学校東側遺跡・赤作遺跡では今回の調査ではこの時期の成果は少ないが、これまでに(財)千葉県文化財センター及び八千代市によって発掘調査が実施され、前期～中期の埋甕や炉跡が調査されている。周辺の縄文時代の遺跡は、印旛沼縁辺部と新川両岸に密度が濃く分布する。時期としては縄文時代中期の阿玉台式期や後期の加曽利B式期の遺跡の割合が高い。早期の遺跡としては早期の竪穴住居跡と炉穴が検出された下高野新山遺跡・上谷遺跡、土坑や条痕文期を主体とする包含層が検出された境堀遺跡、炉穴群が検出されたヲサル山遺跡が分布する。貝塚では佐山貝塚・神野貝塚があり、ともに後期の汽水産の貝を主体とする貝塚である。佐山貝塚は一部調査が実施され、環状貝塚であることが判明している。本遺跡群の南東側に位置する井野長割遺跡は縄文時代後期から晩期にかけての環状盛土遺構を有する集落であり、国指定史跡となっている。

本遺跡群の弥生時代では、上高野白幡遺跡で中期の集落跡、堂の上遺跡で後期の集落跡が検出された。八千代市によって以前発掘調査された阿蘇中学校東側遺跡や平沢遺跡では後期の竪穴住居跡や方形周溝墓が検出されている。周辺の遺跡では新川を挟んで北西側に位置する田原窟遺跡において、中期後半の環濠集落跡が調査された。環濠(東西約120m、南北約100m)内には46軒の竪穴住居が営まれ、炉からは多量の炭化米が出土したという。栗谷遺跡では中期後半の方形周溝墓が検出されている。後期になると遺跡数は増加し、小規模な集落が多く確認されている。なかでも、権現後遺跡・ヲサル山遺跡では後期から古墳時代にかけての集落および方形周溝墓がまとも検出されている。栗谷遺跡では92軒の竪穴住居跡、境堀遺跡では22軒の竪穴住居跡と2基の壺棺墓、川崎山遺跡では竪穴住居跡が40軒以上調査されている。

古墳時代は、堂の上遺跡において今回の調査で中期の集落跡の一角が調査され、石製模造品(白玉)の製作剥片や未成品が伴う竪穴住居跡を検出した。周辺の遺跡では、特に前期の集落跡が多く分布する。井戸向遺跡では弥生時代後期の集落は小規模であったものの、古墳時代前期では集落規模を拡大している。権現後遺跡では中期の集落跡のなかに石製模造品の工房が4軒、北海道遺跡では12軒の存在が明らかにされている。川崎山遺跡でも7軒の竪穴住居跡から石製模造品製作関連遺物が出土しており、今回の堂の上遺跡で検出された遺構と同時期の資料も多く、関連が興味深い。

奈良・平安時代になると本遺跡周辺、特に新川を挟んだ対岸の萱田遺跡群や北部の栗谷遺跡・上谷遺跡・境堀遺跡において墨書土器の出土や掘立建物群等が検出され、集落が大規模に展開することが判明している。しかし、本遺跡群の今回の調査ではほとんどの時代における成果はみられなかった。

中・近世では、本遺跡群の内、阿蘇中学校東側遺跡と赤作遺跡において中・近世の土坑等が検出されているが、部分的であり遺物も極めて少なかった。前回の調査区や八千代市の調査区においても同様に、中・近世の土坑墓や溝が検出されている。当地域周辺は中世においては上高野村に属するが、平沢遺跡はちょうど米本村との境に位置する。周辺では14世紀から16世紀前半期の板碑が多く確認されており、なかでも米本地区が突出している。周辺の中世城館跡では、米本城跡、正覚院館跡が存在する。正覚院館跡からは堀跡が検出され、板碑や花瓶の破片が出土している。また、神野新山塚群や作畑塚群、村上第2塚群の塚が多く分布し、特に村上第2塚群からは中・近世のカワラケや常滑焼甕、銭貨等が出土し注目される。近世の本地域は、初期には葛飾郡に属し、17世紀半ばにはほぼ新川を境に東岸が印旛郡、西岸が千葉郡に属した。米本村は17世紀初頭には旗本領であるが、17世紀後半には佐倉藩領となった。天保7(1836)



第1図 事業路線と周辺遺跡分布図

年の米本村絵図によると、現在の「内宿」「上宿」「下宿」の集落やこれを通る街道等、本道跡群の周辺の状況が描かれ、今回調査した地域は街道の東側台地で、当時は畑と山林であったことが分かる。

注) 周辺の道跡については下記文献を参照した。

- 1975 「八千代市村上道跡群」(財)千葉県都市公社
- 1979 「萱田町川崎山道跡」八千代市道跡調査会
- 1980 「阿蘇中学校東側道跡」八千代市道跡調査会
- 1984 「阿蘇中学校東側道跡」八千代市道跡調査会
- 1984 「八千代市権現後道跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-」千葉県文化財センター調査報告第70集
- 1985 「八千代市北海道道跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-」千葉県文化財センター調査報告第86集
- 1986 「八千代市ワサル山道跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ-」千葉県文化財センター調査報告第116集
- 1987 「八千代市井戸向道跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-」千葉県文化財センター調査報告第123集
- 1991 「八千代市白幡前道跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ-」千葉県文化財センター調査報告第188集
- 1993 「八千代市坊山道跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ-」千葉県文化財センター調査報告第226集
- 1997 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)-東葛飾・印旛地区(改訂版)-」千葉県教育委員会
- 1998 「八千代市向地道跡」千葉県文化財センター調査報告第346集
- 1999 「主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書-八千代市雷道跡・雷南道跡-」千葉県文化財センター調査報告第359集
- 1999 「一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-八千代市赤作道跡・阿蘇中学校東側道跡-」千葉県文化財センター調査報告第360集
- 1999 「千葉県八千代市川崎山道跡-埋蔵文化財発掘調査報告書-」八千代市川崎山道跡調査会
- 1999 「千葉県八千代市正覚院館跡-埋蔵文化財発掘調査報告書-」八千代市道跡調査会
- 2001～2004 「千葉県八千代市栗谷道跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」第1分冊～第4分冊 八千代市道跡調査会
- 2001～2005 「千葉県八千代市上谷道跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第1分冊～第5分冊 八千代市道跡調査会
- 2003 「千葉県八千代市川崎山道跡d地点」八千代市道跡調査会
- 2004 「栗谷道跡・投山東道跡・雷南道跡・雷道跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 第3分冊」八千代市道跡調査会
- 2004 「向地道跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」八千代市道跡調査会
- 2004 「千葉県八千代市川崎山道跡h地点-店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書-」八千代市道跡調査会
- 2005 「千葉県八千代市堤堀道跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」八千代市道跡調査会
- 2007 「八千代市向地道跡・雷道跡・阿蘇中学校東側道跡-県早道路改良委託(幹線道路網整備)(主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査)」千葉県教育振興財団調査報告第562集
- 2008 八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史」通史編上 八千代市

第2章 堂の上遺跡

第1節 調査の概要（第2図～第4図、第4表）

堂の上遺跡における今回報告する調査区は伊藤沼南岸、高野川の支流が形成する小支谷に面した標高24mの台地上に位置する。平沢遺跡とは西端で接しているため、発掘調査にあたっては、公共座標に基づいて平沢遺跡と共通の20m×20mの方眼網を設定し大グリッドとした。小グリッドは2m×2mである。1AA-00の座標はX = -28,420、Y = 27,420である。大グリッドの名称は、西から東へA・B・C…、Zの次がAA・AB・AC…とし、北から南には1・2・3…と記号を付けた。

平成12年度に遺跡東端地点（調査対象面積2,010㎡）の確認調査を実施した。上層は全域から遺構が検出されたが、下層は旧石器の出土がなく確認調査で終了した。平成13年度には遺跡西端地点（調査対象面積2,436㎡）の調査を実施した。上層で遺構が確認され、881㎡の本調査を行った。下層については1か所から旧石器が出土したが、分布は広がらず、確認調査の範囲で終了した。平成14年度に平成12年度調査地点の上層本調査を実施した。平成15年度には、平成12・14年度調査区の西隣（調査対象面積1,434㎡）の調査を実施した。調査地は現在梨畑の耕作によって削平を受けており、上層遺構は平成14年度調査で半分調査した堅穴住居跡の残り部分と、土坑1基のみであった。下層も旧石器の出土はなく、確認調査で終了した。平成26年度には平成15年度の西隣（調査対象面積1,180㎡）の調査を実施した。近世の溝状遺構が検出したのみで、下層からの旧石器の出土もなかったため、確認調査で終了した。なお、浅い谷を挟んで西側に事業地内の遺跡範囲が残るが、試掘の結果、遺構・遺物とも検出されなかったことから、調査の必要がないと判断した。なお、調査年度により遺構番号等の付け方に違いがあったことから、報告書作成にあたり、第4表のとおり遺構名称を統一した。

第2節 旧石器時代

単独出土（第6図、第1表、図版8）

1は15AF-42グリッドで出土した。玉髄の二側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片（ないしは石刃）を素材とし、右側縁と左側縁下半部に調整加工を行っており、左側縁の加工の上半は表面から、下半は表面から行っている。また、刃部には微細な剥離痕が見られる。

第1ブロック（第5・6図、第2・3表、図版3・8）

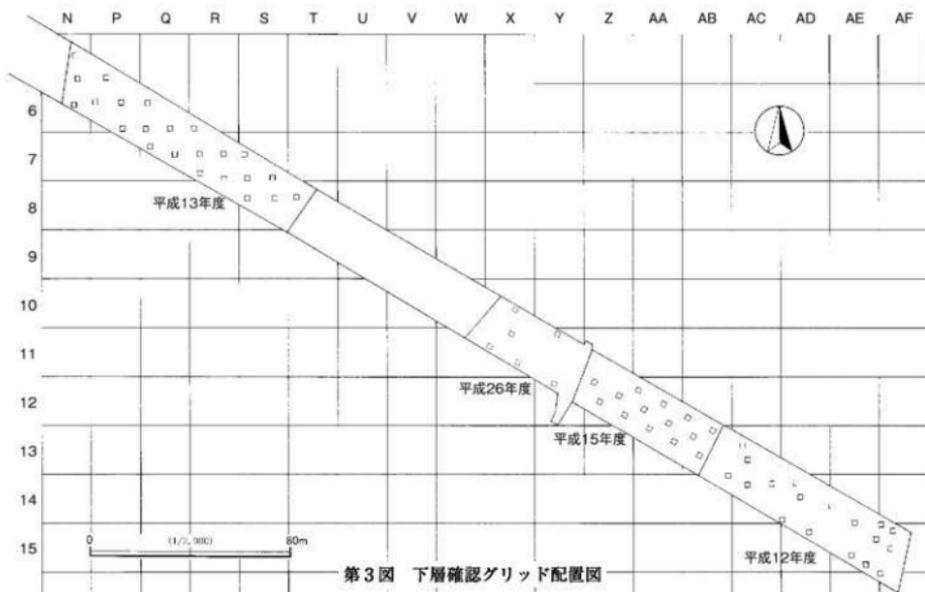
第1ブロックは7S-40・41・50・51グリッドに位置する。ブロックの規模と形状は長軸3m×短軸2mで18点の石器が分布する。出土層位はⅥ層からⅨ層にかけて50cmほどの高低差で包含されている。

器種構成は、二次加工剥片1点、剥片13点、砕片2点、石核1点、敲石1点である。石器石材は安山岩17点、砂岩1点である。

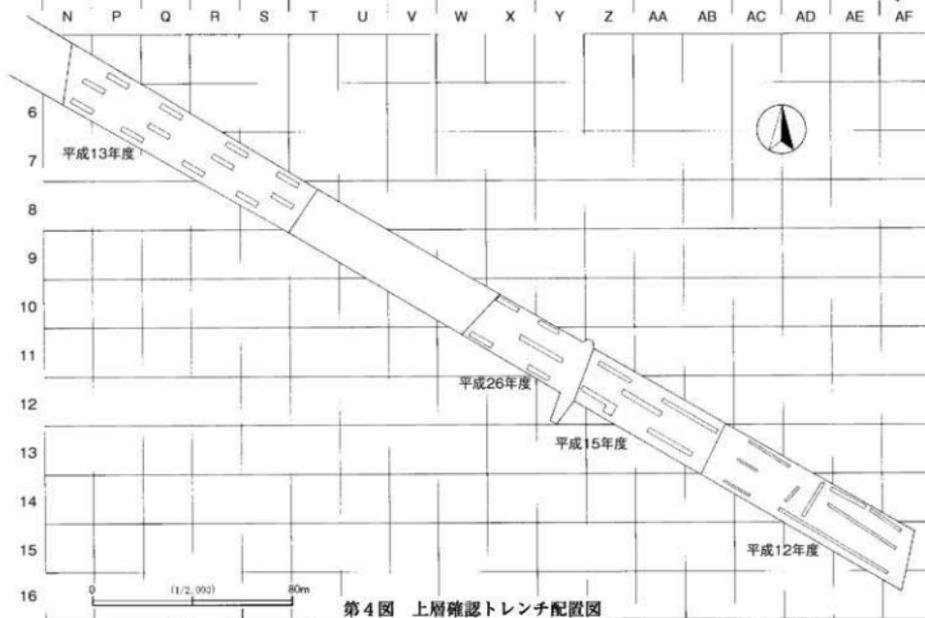
1は安山岩の二次加工のある剥片である。縦長剥片を素材とし、表面右側縁下半部に調整加工を行っている。2は安山岩の石刃状の縦長剥片である。3は安山岩の石核である。両面に求心的な剥離を行っており、不定形な剥片を剥離している。4は砂岩の敲石の破片である。末端に浅い敲打痕が見られる。5は安山岩の不定形な剥片の接合資料である。5の右側面に旧主要剥離面と考えられる剥離面が見られることから剥片を素材とした石核から、5bを剥離し、90度打面転移して5aを剥離している。



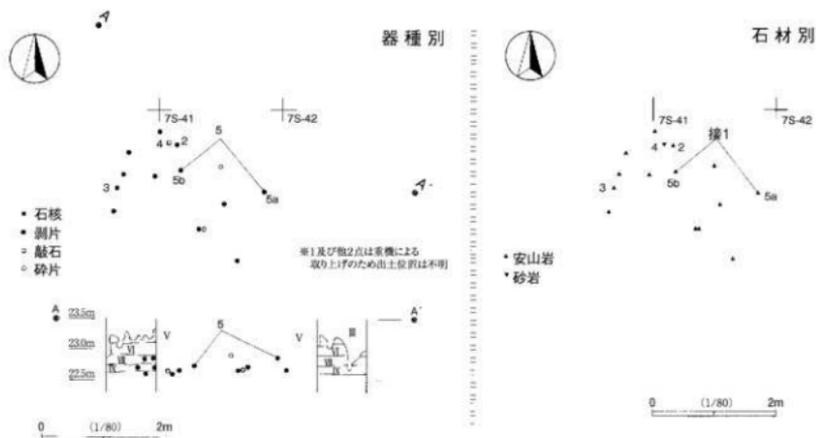
第2図 周辺地形図と調査地点



第3図 下層確認グリッド配置図

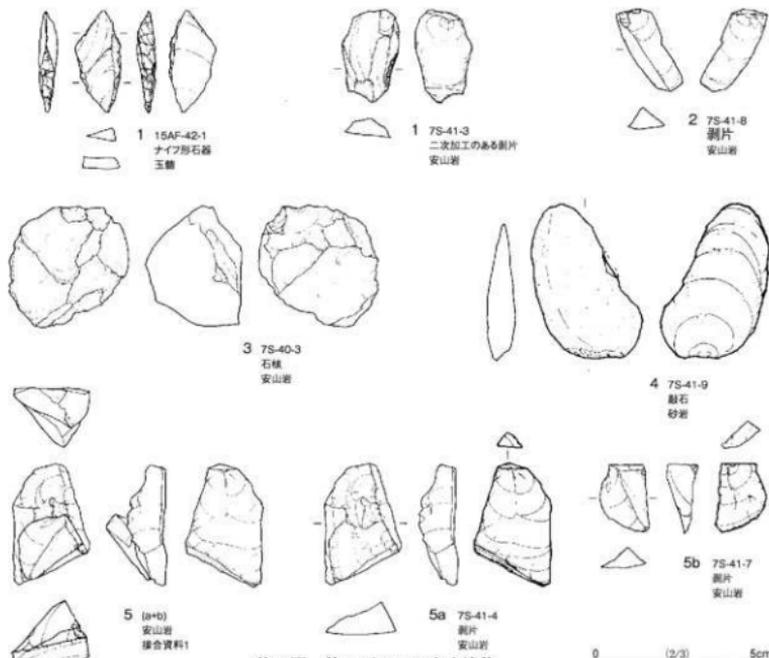


第4図 上層確認トレンチ配置図



第5図 第1ブロック出土遺物分布

単独出土



第6図 第1ブロック出土遺物

第1表 単独出土石器属性表

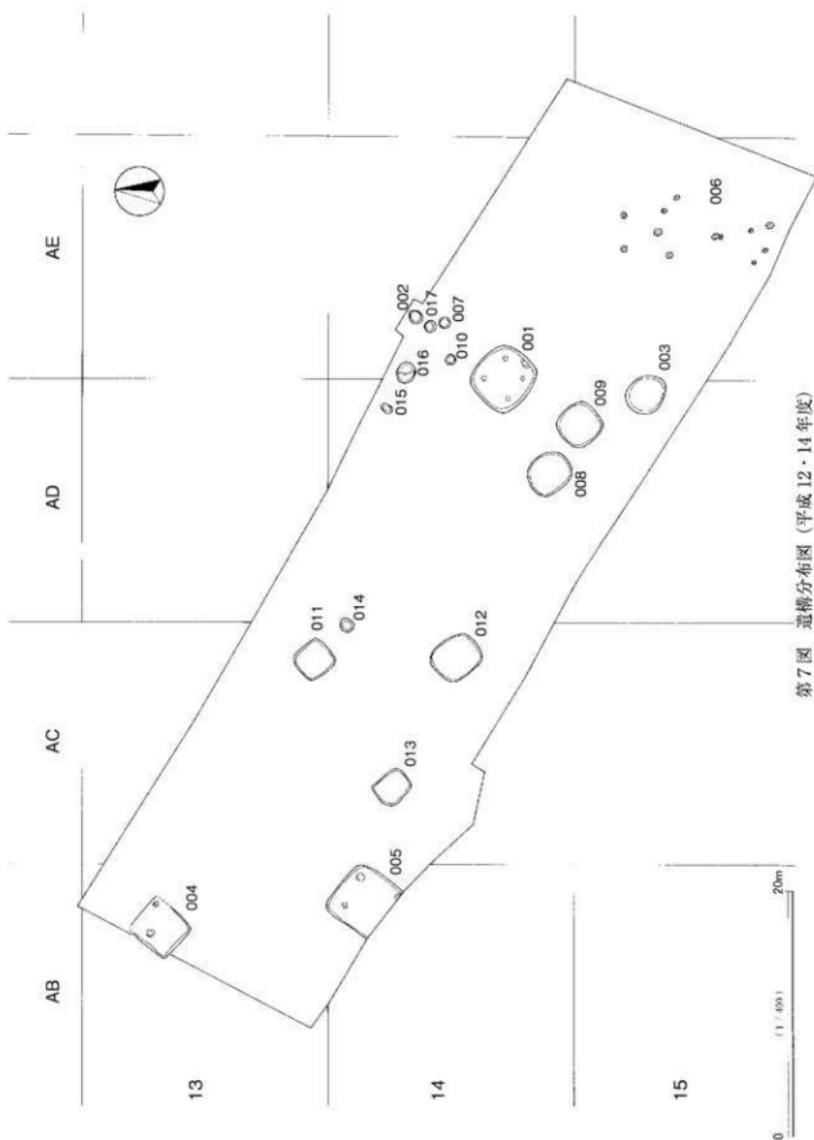
検出 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				mm	mm	mm	g		
第6図	1	15AF-42-1	ナイフ形石器	玉髄	31.5	14.0	5.1	2.1	

第2表 第1ブロック出土石器属性表

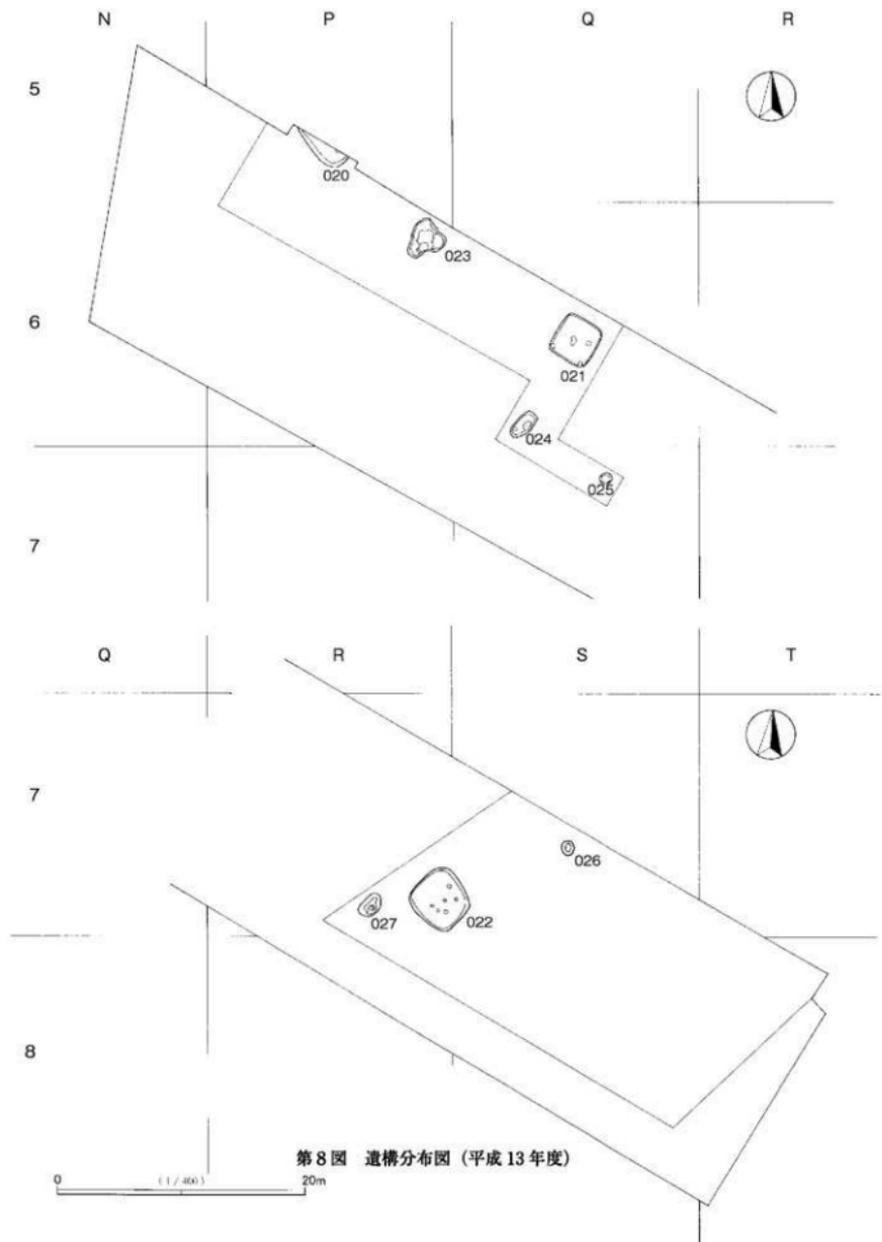
検出 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				mm	mm	mm	g		
第6図	1	7S-41-3	二次加工のある剥片	安山岩	33.5	17.5	5.0	2.8	
第6図	2	7S-41-8	剥片	安山岩	25.0	12.0	6.5	2.0	
第6図	3	7S-40-3	石核	安山岩	38.0	32.0	30.0	35.4	
第6図	4	7S-41-9	敲石	砂岩	47.0	34.0	9.0	12.3	
第6図	5a	7S-41-4	剥片	安山岩	38.0	20.4	10.0	7.8	
第6図	5b	7S-41-7	剥片	安山岩	21.0	15.0	6.0	2.4	
		7S-40-1	剥片	安山岩	13.0	9.0	1.5	0.4	
		7S-40-2	剥片	安山岩	18.0	7.0	2.6	0.2	
		7S-40-4	剥片	安山岩	22.0	8.0	3.3	0.8	
		7S-40-5	剥片	安山岩	14.5	5.5	2.8	0.3	
		7S-41-1	剥片	安山岩	19.0	8.0	8.9	1.5	
		7S-41-2	剥片	安山岩	29.0	17.5	10.2	4.5	
		7S-41-5	剥片	安山岩	12.5	23.5	3.6	1.4	
		7S-41-6	碎片	安山岩	7.5	3.5	2.2	0.1	
		7S-41-10	剥片	安山岩	25.0	26.0	3.3	3.1	
		7S-41-11a	剥片	安山岩	12.0	18.0	3.5	1.0	
		7S-41-11b	碎片	安山岩	5.5	6.0	1.2	0.1	
		7S-51-1	剥片	安山岩	13.0	8.0	5.2	0.5	

第3表 第1ブロック出土石器組成表

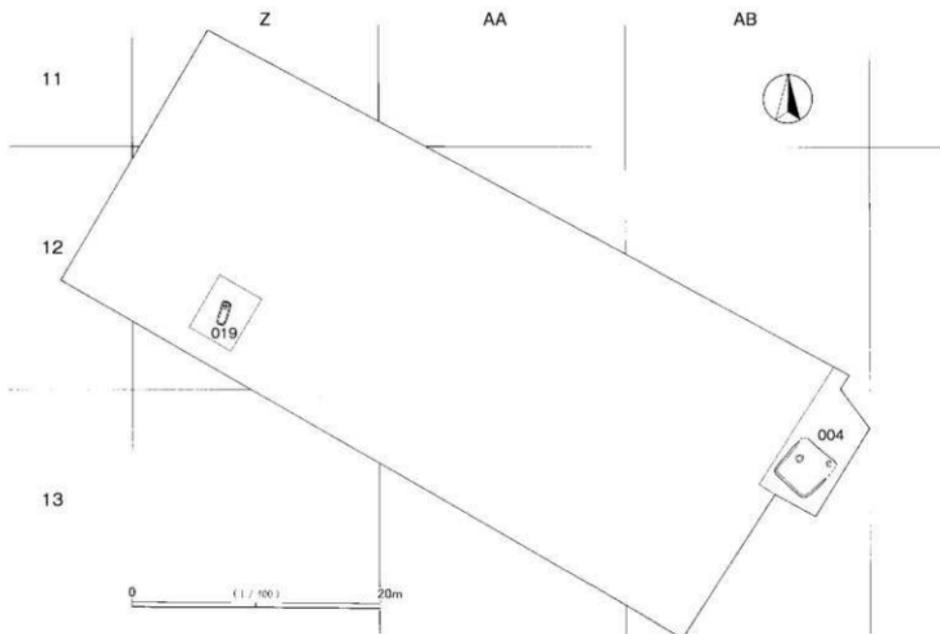
石材	器種	器種					点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
		二次加工の ある剥片	剥片	碎片	石核	敲石				
安山岩		1	13	2	1		17	94.44	64.30	83.94
砂岩						1	1	5.56	12.30	16.06
全体	点数合計	1	13	2	1	1	18	100.00	76.60	100.00



第7図 遺構分布図 (平成12・14年度)



第8図 遺構分布図(平成13年度)



第9図 遺構分布図 (平成15年度)

第4表 遺構名称新旧対照一覧表

報告No.	調査No.	調査年度	種類	時期	備考	報告No.	調査時No.	調査年度	種類	時期	備考
001	001	平成14年度	竪穴住居跡	弥生時代		017	SK3	平成12年度	土坑	縄文時代	
002	002	平成14年度	土坑	縄文時代		-	SK4	平成12年度	-	-	攪乱
003	003	平成14年度	竪穴住居跡	弥生時代		019	SK001	平成15年度	土坑	古墳時代～	
004	004	平成14年度	竪穴住居跡	古墳時代	SI001 (H15調査) 含	020	SI001	平成13年度	竪穴住居跡	弥生時代	
005	005	平成14年度	竪穴住居跡	古墳時代	SI001 (H12調査) 含	021	SI002	平成13年度	竪穴住居跡	古墳時代	
006	ビット群	平成14年度	ビット群	古墳時代～	033 (整理時仮称)	022	SI003	平成13年度	竪穴住居跡	縄文時代	
007	007	平成14年度	土坑	縄文時代		023	SK001	平成13年度	土坑	縄文時代	
008	008	平成14年度	竪穴住居跡	弥生時代		024	SK002	平成13年度	土坑	縄文時代	
009	009	平成14年度	竪穴住居跡	弥生時代		025	SK003	平成13年度	土坑	縄文時代	
010	010	平成14年度	土坑	縄文時代		026	SK004	平成13年度	土坑	縄文時代	
011	011	平成14年度	竪穴住居跡	弥生時代		027	SK005	平成13年度	土坑	縄文時代	
012	012	平成14年度	竪穴住居跡	古墳時代		-	SK006	平成13年度	-	-	攪乱
013	013	平成14年度	竪穴住居跡	弥生時代		-	SK007	平成13年度	-	-	攪乱
014	014	平成14年度	土坑	古墳時代～		-	SK008	平成13年度	-	-	攪乱
015	SK1	平成12年度	土坑	縄文時代		-	SK009	平成13年度	-	-	攪乱
016	SK2	平成12年度	土坑	縄文時代	006 (H14調査) 含	-	SD001	平成13年度	溝	近世以降	

第3節 縄文時代

1 竪穴住居跡

022 (第8・10図、図版6)

7R-89グリッドに所在し、縄文時代の土坑027の東に位置する。平面形はやや不整な隅丸方形で、長軸方位はN-44°-W、規模は長軸4.57m、短軸4.3m、深さ53cmである。ピットはP1～P6まで中央寄りに配置され、6本柱の構造であると考えられる。ピットの平面形はすべて楕円形で、深さはP1:32cm、P2:22cm、P3:43cm、P4:50cm、P5:29cm、P6:40cmである。竪穴の覆土は比較的レベルに堆積している。遺物はすべて小片で、図示し得る遺物は出土していないが、平面形から後期前葉と考えられる。

2 土坑 (第5表)

002 (第7・10・12・13・14図、図版6・9)

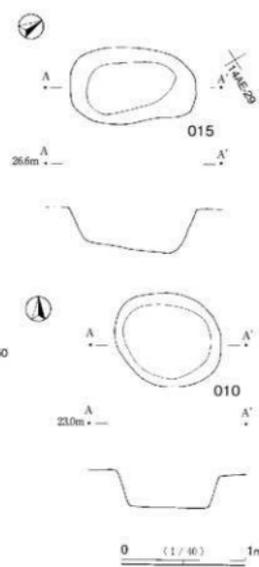
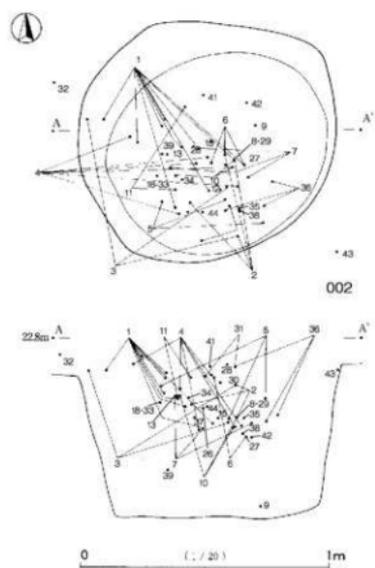
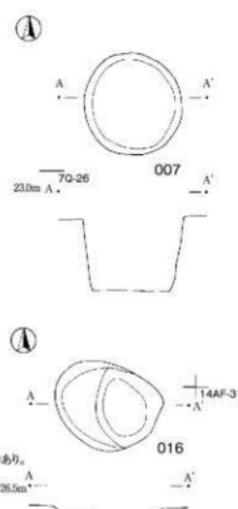
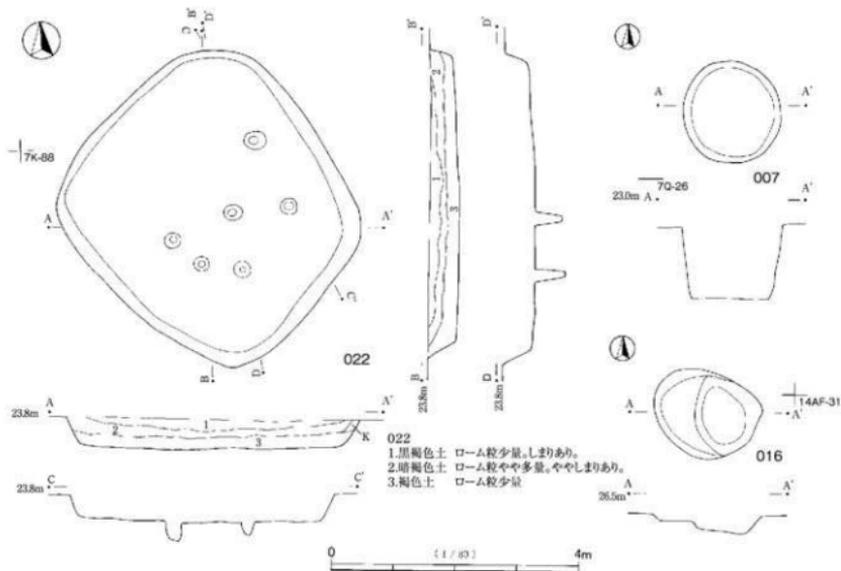
14AF-32グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-63°-E、規模は長軸長109cm、短軸長105cm、深さ62cmである。断面の形状は逆台形である。

遺物は称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式にかけての土器が出土している。1～3は同一個体である。覆土の上層及び中層から出土している。口縁部は4単位の貫通孔を伴う小波状である。口縁部が若干外傾し、幅の狭い無文帯となっている。胴部は縦位方向に削ったような調整痕を残しており、縄文の施文が行われた痕跡はない。波頂部の下に鈎手文が単位文様として描出され、その間を雑な沈線文で埋めている。4～6も同一個体である。口縁部に刺突を伴う隆帯が貼り付けられ、口唇部で若干突出しており、4単位を構成しているのであろう。口縁部の無文帯は、比較的幅広で、下端は隆帯で区画している。胴部には地文として蛇行する条線が雑に施され、一部には同一の工具による列点状の刺突文も施されている。口縁部の単位文となっている隆帯の下から垂下する単純な沈線が施され、その間に剣先状の沈線文が施されている。7～15はいずれも列状に刺突文が施されている。7・8は縦位の刺突文の列と、3～4本からなる櫛歯状工具による縦位の短い条線が地文として施され、雨だれ状の刺突文が数条垂下している。9～15は刺突文が胴部に施されている。11～14は胎土と施文の特徴から同一個体と考えられる。15は口縁部下に刺突文が横位に配列され、棒状工具とヘラ状工具の2つが使用されている。浅鉢の可能性もある。16～20は単列の刺突文が充填された区画文が施されている。これらは胎土と施文の特徴から同一個体と考えられる。21～25は櫛歯状工具による条線文が施されている。26は地文縄文で、沈線文の上にボタン状の貼付文があり、その中央に刺突を加えている。27は幅狭の無文帯の下端を沈線で区画している。28～30は同一個体である。表面は黒色を呈するが焼成はよく堅緻である。口縁部の無文帯の下端を隆帯で区画している。胴部には若干の縄文が認められるが、平滑にナデ調整され消された状態である。31～39は地文を縄文とする土器であり、40～46は無文の土器である。47・48は覆土上層から出土した底部破片である。

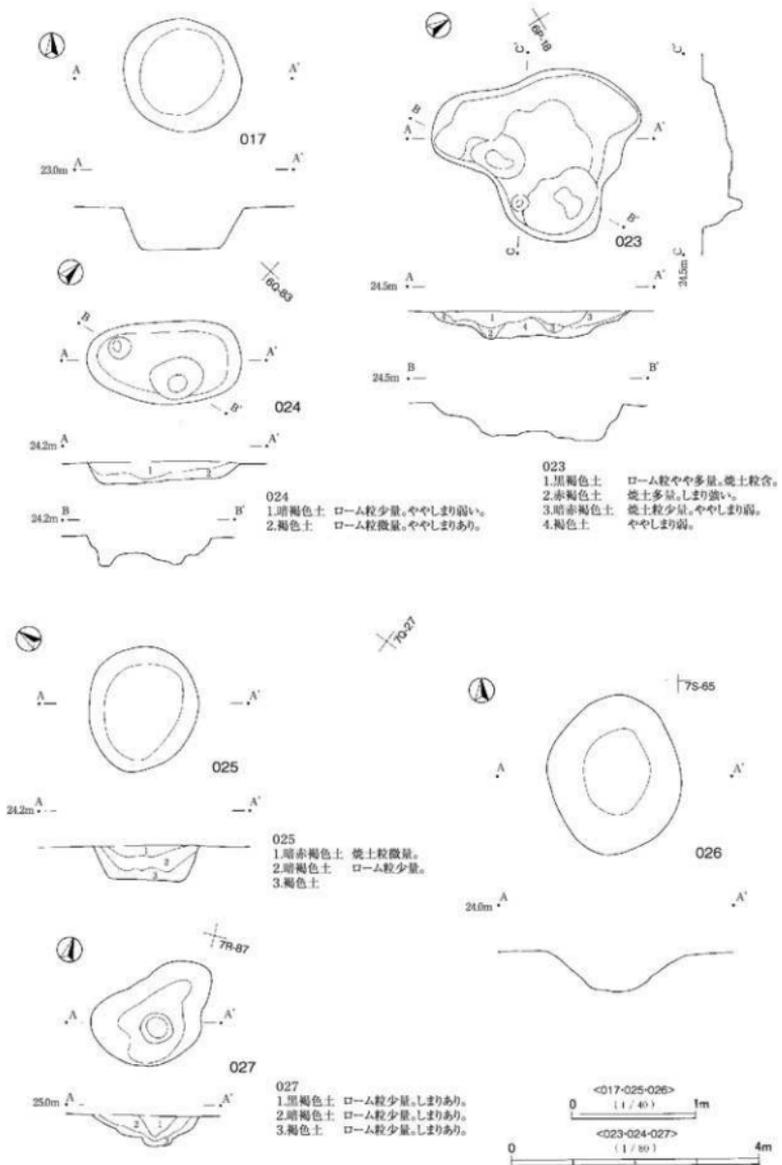
007 (第7・10・14図、第6表、図版6・10)

14AE-42グリッドに所在し、土坑002の南に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-18°-Wである。規模は長軸85cm、短軸80cm、深さ63cmであり、断面の形状は逆台形である。

遺物は称名寺Ⅱ式土器と穿孔された軽石製品が1点出土している。1～7はいずれも列状の刺突文が施されている。1・6は半截竹管の垂下する刺突文、2～5・7は雨だれ状の刺突文である。8～10は地



第10図 縄文時代遺構(1)



第11図 縄文時代遺構 (2)

第5表 縄文時代土坑一覧表

遺構No.	グリッド	平面形	長軸方位	長軸長 (cm) [下端]	短軸長 (cm) [下端]	深さ (cm)	ピット深さ (cm)
002	14AF-32	楕円形	N-63° -E	109 [93]	105 [82]	62	-
007	14AE-42	円形	N-18° -W	85 [73]	80 [67]	63	-
010	14AF-40	楕円形	N-53° -W	92 [72]	76 [59]	30	-
015	14AE-28	長方形	N-32° -E	100 [72]	60 [40]	32	-
016	14AF-20	楕円形	N-57° -W	174 [141]	140 [122]	30	21
017	14AE-32	円形	N-47° -W	97 [73]	91 [64]	34	-
023	6P-18	不整形	N-27° -E	345 [335]	281 [252]	36	P1-17,P2-10,P3-23
024	6Q-82	楕円形	N-47° -E	253 [213]	136 [96]	36	P1-18,P2-22
025	7Q-16	楕円形	N-55° -E	100 [87]	90 [63]	30	-
026	7S-64	楕円形	N-4° -E	130 [70]	108 [53]	30	-
027	7R-86	不整形	N-41° -E	218 [138]	137 [94]	36	16

文縄文の土器である。8は間隔が開いた縄文施文である。11は穿孔された軽石製品である。欠損しており、全体の形状は不明である。長さ4.6cm、幅5.9cm、厚さ1.8cm、重さ5.39gである。

010 (第7・10・14図、図版6・10)

14AF-40周辺グリッドに所在し、土坑007の西に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-53° -Wである。規模は長軸92cm、短軸76cm 深さ30cmで、断面の形状は逆台形である。

遺物は称名寺式土器が出土している。1～3はいずれも列状の刺突文が施されている。1は棒状の工具によって胴部に上から下へ刺突文が施される。口縁部の外面は若干の無文帯となっている。内面は全体をナデ調整後、同様の工具で横位にミガキ調整されている。4・5は同一個体の可能性がある。ともに複節の縄文が施文されている。

015 (第7・10図、図版7)

14AE-28に所在し、土坑016の西に位置する。平面形は長方形で、長軸方向はN-32° -Eである。規模は長軸100cm、短軸60cm、深さ32cmであり、断面の形状は逆台形である。図示し得る遺物は出土していない。

016 (第7・10・14図、図版7・10)

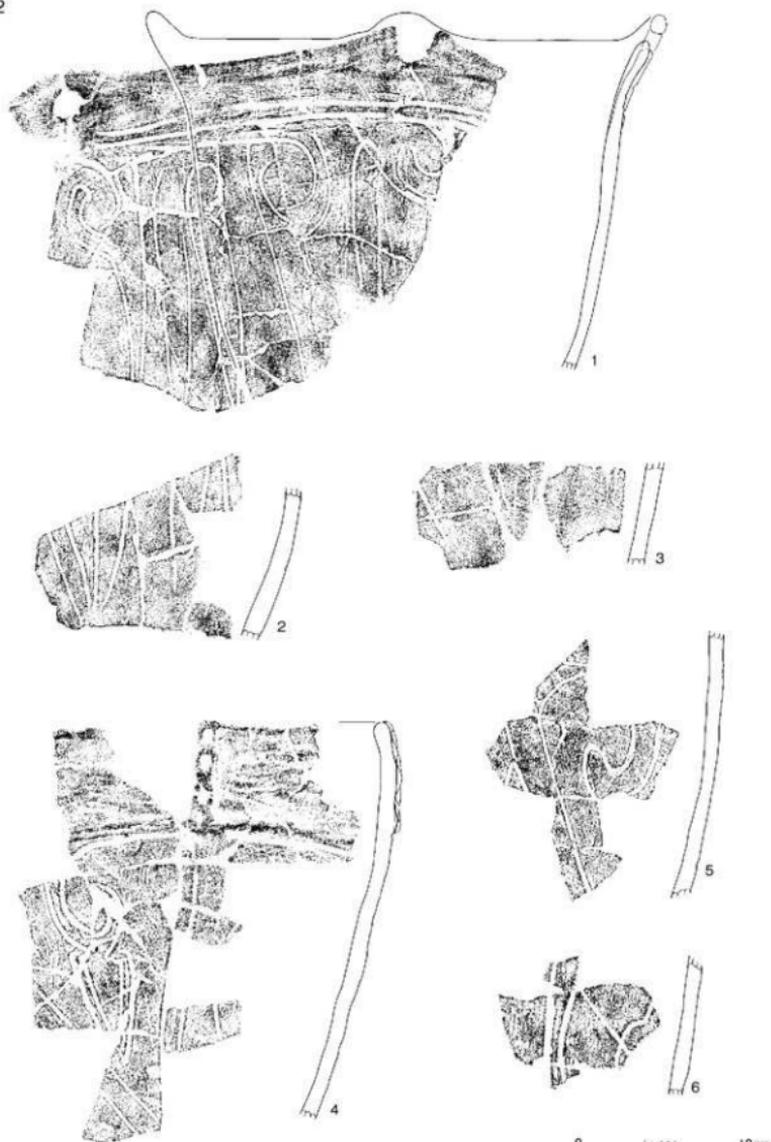
14AF-20周辺に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-57° -Wである。規模は長軸174cm、短軸140cm、深さ30cmであり、断面の形状は皿状である。底面は東側が一段低くなっている。無文の縄文土器が1点出土している。胎土や焼成等の特徴から後期堀之内式と考えられる。

017 (第7・11・14図、第6表、図版7・10)

14AE-32に所在し、土坑002の南西に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-47° -Eである。規模は長軸97cm、短軸91cm、深さは34cmであり、断面の形状は逆台形である。遺物はホルンフェルスの打製石斧とみられる破片が1点出土している。長さ5.1cm、幅5.1cm、厚さ1.7cm、重さ57.29gである。

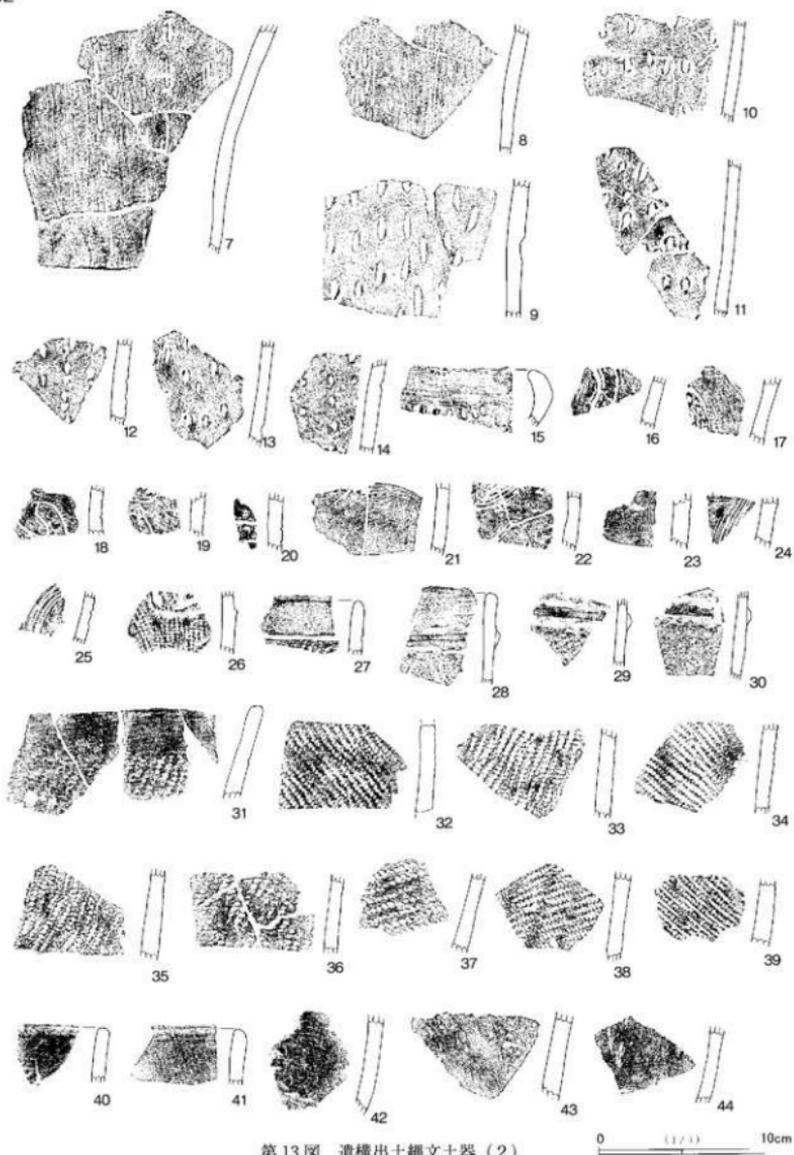
023 (第8・11図、図版7)

6P-18に所在し、土坑024の北に位置する。平面形は不整形で、長軸方向はN-27° -Eである。規模は長軸345cm、短軸281cm、深さは最深部で36cmである。断面の形状は皿状だが、底面は起伏があり、平らではない。第2層の底面は熱による硬化した部分が確認されたが、規模や不定形を呈することから堅穴住居跡の炉ではなく、炉穴の可能性が考えられる。図示できる遺物は出土していない。

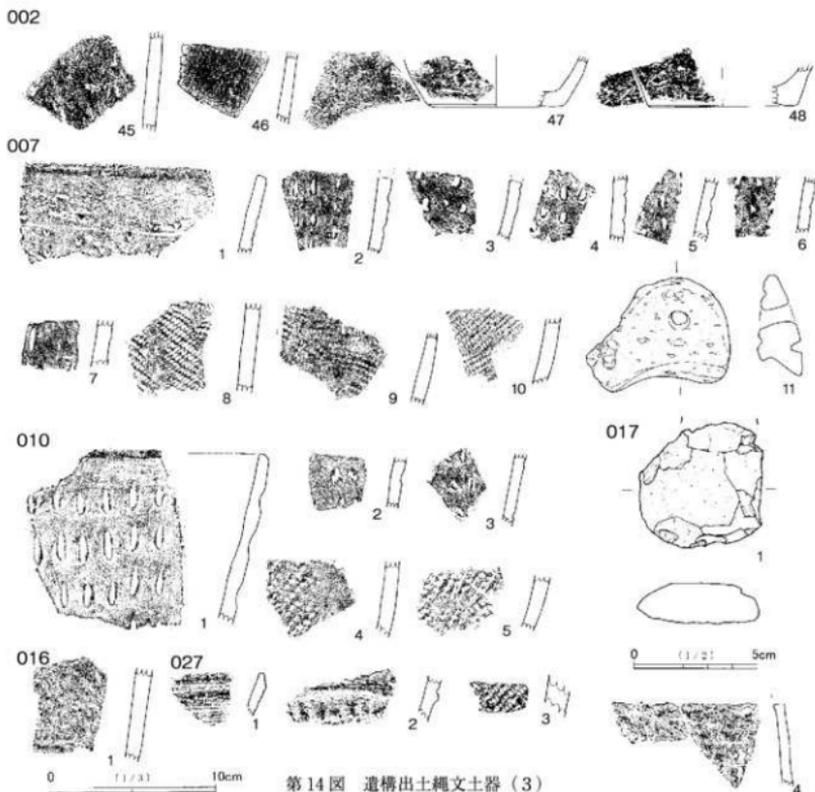


第12图 遺構出土縄文土器(1)

002



第13図 遺構出土縄文土器(2)



第14図 遺構出土縄文土器(3)

O24 (第8・11図、図版7)

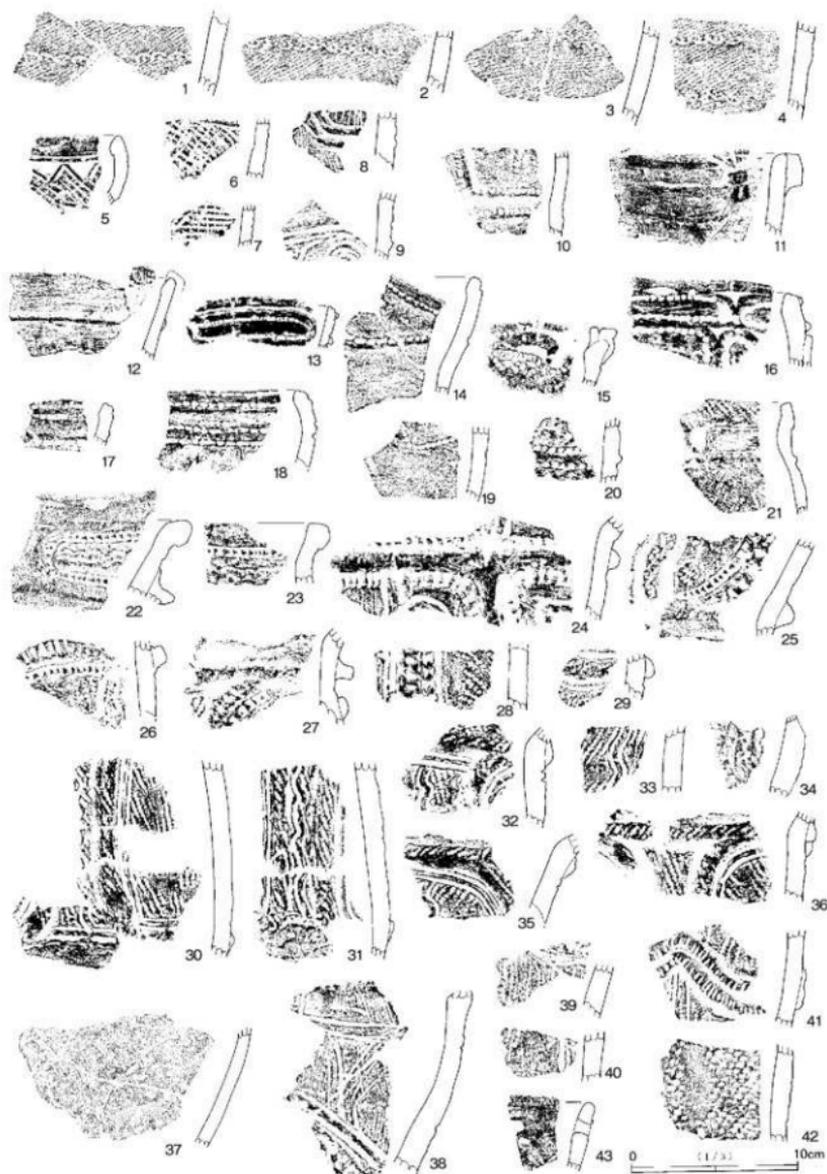
6Q-82に所在し、土坑025の北西に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-47°-Eである。規模は長軸253cm、短軸136cm、深さは36cmであり、断面の形状は皿状である。底面に浅いピットが2基ある。覆土はレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。図示し得る遺物は出土していない。

O25 (第8・11図、図版7)

7Q-16に所在し、竪穴住居跡022と土坑027の北西側に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-55°-Eである。規模は長軸100cm、短軸90cm、深さ30cmであり、断面の形状は逆台形である。覆土上層には焼土がわずかに含まれる。覆土はレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。図示できる遺物は出土していない。

O26 (第8・11図)

7S-64に所在し、竪穴住居跡022の北東に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-4°-Eである。規模は長軸130cm、短軸108cm、深さ30cmであり、断面の形状は浅鉢状である。図示できる遺物は出

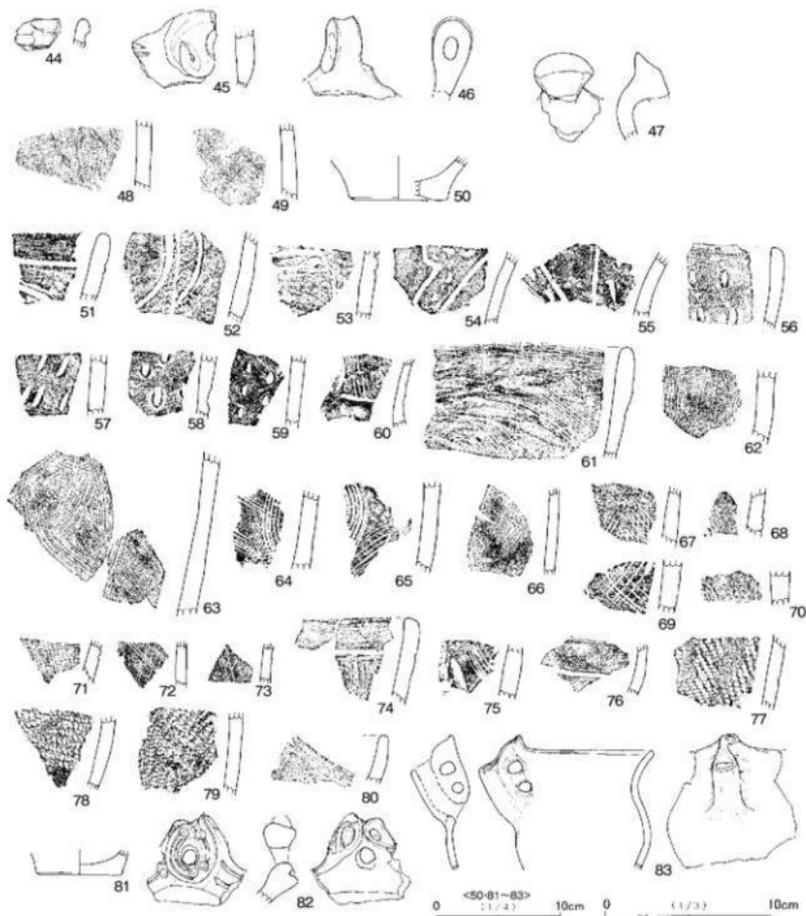


第15図 遺構外出土縄文土器(1)

土していない。

027 (第8・11・14図、図版7・10)

7R-86に所在し、竪穴住居跡022の西側に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-41°-Eである。規模は長軸218cm、短軸137cm、深さ36cmであり、断面の形状は浅鉢状である。底面の中央付近に浅いピットが1基検出された。遺物は早期から後期の土器片が出土している。1は半截竹管文と貝殻文が施されており、早期の田戸下層式と考えられる。2は隆帯に沿った半截竹管による単列の押引文を有すること



第16図 遺構外出土縄文土器(2)

から、中期の阿玉台Ⅰb式土器である。3は地文に縄文で後期堀之内式であろう。4は無文の土器である。薄く焼成は良好である。内外面の調整は粗い。早期沈線文系の土器と思われる。

3 遺構外出土遺物

土器（第15・16図、図版10・11）

遺構外から出土した土器は大きく2時期に分けられる。第1グループは中期（1～50）、第2グループは後期（51～84）に属するものである。

1～4は中期初頭の土器であり、結節縄文が施される。横位に施されることから前期末葉までさかのぼる可能性がある。2と3の内面はヘラ状工具によって縦位のミガキ調整されている。5～7は中期初頭の土器である。胎土に砂礫を多く含む。5は口縁部を内面に折り返して形成し、外面は三角印刻文が区画上端に沿って連続的に施される。近接する赤作遺跡で顔面突起のついた同種文様の施された十三菩提式が出土しているため、その時期までさかのぼる可能性がある。外面はナデ調整、内面はケズリ調整後にナデ調整されている。8・9は中期前葉の土器である。8は2条の隆帯が弧状に延び、縦位の沈線文を充填している。9は弧状の隆帯と沈線文を有し、胎土に砂礫や雲母を多く含む。内面は丁寧にミガキ調整されている。10は勝坂Ⅰ式であり、隆帯を挟むように角押文が施されている。胎土に砂粒を含み、内面に横位のナデ調整がなされている。11～14は阿玉台Ⅰa式土器であり、11は棒状の粘土紐を縦位に付して、それを粘土帯で覆っている。外面に輪積み痕を残し、内面はケズリ調整後にナデ調整されている。12は粘土帯を口唇部の外面から内面に向かって付している。13は小型深鉢の口縁部であり、隆帯に沿った単列

第6表 縄文時代石器属性表

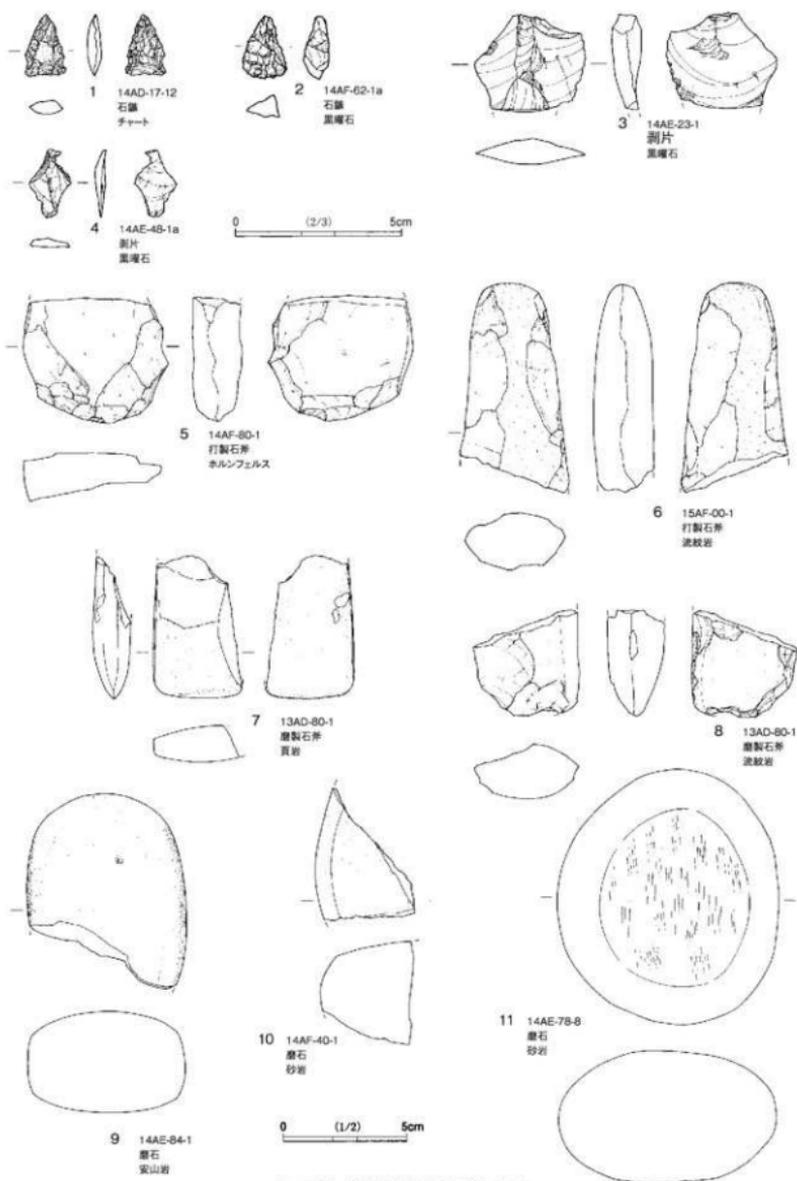
博覧 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				mm	mm	mm	g		
第14図	1	007-1	浮子	軽石	43.4	57.6	18.1	5.3	
第14図	2	017-5	打製石斧	ホルンフェルス	49.3	53.2	16.2	57.2	砂岩質
第17図	1	14AD-17-12	石鏃	チャート	18.7	11.8	4.3	1.0	
第17図	2	14AF-62-1a	石鏃	黒曜石	19.0	13.4	7.7	1.5	
第17図	3	14AE-23-1	剥片	黒曜石	29.2	34.0	9.0	6.7	
第17図	4	14AE-48-1a	剥片	黒曜石	20.1	13.0	3.0	0.4	
第17図	5	14AF-80-1	打製石斧	ホルンフェルス	50.1	59.0	20.0	75.3	
第17図	6	15AF-00-1	打製石斧	流紋岩	85.0	44.0	24.0	104.8	
第17図	7	13AD-80-1	磨製石斧	頁岩	59.0	36.0	15.5	46.2	
第17図	8	13AD-80-1	磨製石斧	流紋岩	44.0	43.5	23.0	43.6	
第17図	9	14AE-84-1	磨石	安山岩	80.0	64.5	40.7	730.9	
第17図	10	14AF-40-1	磨石	砂岩	54.8	41.0	43.0	100.3	
第17図	11	14AE-78-8	磨石	砂岩	104.2	90.2	53.6	729.6	
第18図	12	004-1	磨石	砂岩	37.9	65.5	34.1	116.6	
第18図	13	14AF-86-1	敲石	流紋岩	35.3	71.9	47.6	177.3	
第18図	14	14AE-77-3	敲石	砂岩	144.2	68.8	69.9	804.3	
第18図	15	14AE-87-2	敲石	ホルンフェルス	57.3	109.3	56.4	548.8	
第18図	16	004-1	石皿	安山岩	73.7	54.9	36.7	112.4	
第18図	17	14AE-77-2	磨石	花崗岩	95.3	74.5	58.7	563.8	土器の混和材に転用か
図版8	18	15AF-20-1	磨石	結晶片岩	63.6	77.6	53.9	322.1	土器の混和材に転用か
第18図	19	14AE28-1	台石	安山岩	63.3	57.6	56.6	274.6	古墳時代か
第18図	20	14AE-00-1	剥片	滑石	44.7	33.9	6.0	10.6	石製模造品関係

の角押文が施されている。内外面とも丁寧にミガキ調整されている。15は紐状の貼付文を有し、口唇部のものは内面に向かって延びており、内面は三角印刻文を有する。また、隆帯に沿って角押文が施されている。16～19は阿玉台Ⅰb式土器であり、16はY字状の隆帯を有する。口唇部から伸びる隆帯はV字を呈し、下部の隆帯と位置が一致していない。外面の無文帯および内面は丁寧なミガキ調整がなされている。21は隆帯に沿った角押文が施され、隆帯区画は突起によって区切られている。地文が縄文であり、単節RLが口縁部は横位、胴部は縦位に施される。末端は結節になっている。区画内は地文の磨消がなされ、内面はミガキ調整されている。施文の特徴から阿玉台式Ⅰb期に並行し、いわゆる「七郎内Ⅱ群土器」に類似した土器である。22～29は幅の広い角押文、もしくはキャクピラ文を有する阿玉台Ⅲ式土器である。22は隆帯に沿った幅の広い角押文を有し、隆帯区画内に半載竹管によって波状の沈線文が施されている。内面は丁寧にミガキ調整されている。23は口唇部下にキャクピラ文と波状の沈線文を有している。25～28は地文に縄文を有し、隆帯にキザミが施されている。隆帯を挟むように角押文もしくはキャクピラ文と、半載竹管による沈線文が施されている。29は隆帯を挟むように半載竹管による沈線文が施され、隆帯には縄文を有する。30～35は地文に縄文を有し、沈線文を有する阿玉台Ⅳ式土器である。いずれも胎土に砂礫を多く含むため、表面が滑らかではない。また隆帯に縄文を有し、2条の沈線による施文がみられる。36は全体が磨滅しており、施文が定かではないが、半球状の穴を有している。内面は丁寧にミガキ調整され、胎土に砂礫や雲母を顕著に含むことから阿玉台式土器と考えられる。37は無文の胴部であり、内外面はナデ調整されている。胎土に砂礫や雲母を顕著に含むことから阿玉台式土器と考えられる。38は下部に半載竹管による弧状の沈線文を有し、それに沿って角押文が施されている。内外面ともナデ調整され、胎土に砂礫を含む。39・40は胎土に砂礫を多く含み、施文も類似していることから同一個体と考えられる。39は横位の沈線文と縦位の細沈線を有し、40は縦位の沈線と細沈線を有する。41は地文に横位LRの縄文が施され、キザミを有した隆帯が付されている。隆帯の中央に沈線が施され、2条の隆帯のようにみえる。内面は横位のケズリ調整・ナデ調整後にミガキ調整されている。42は中期後葉の地文が縄文の土器であり、一部は帯状に磨り消されている。43は11と類似した施文を有する阿玉台Ⅰa式土器である。44は胎土に砂礫を多く含む。口唇に貼り付けられた突起で粘土を芯に2・3段に粘土紐を横位に貼り付けている。45は環状把手を有する口縁部である。

後期の土器は称名寺式に限られるようである。46は環状の把手である。47は注口土器の把手である。51～55は沈線文の内部に縄文や刺突文を充填している。52は称名寺Ⅰ式、その他は称名寺Ⅱ式である。60は沈線による区画内に間隔のあいた条線を斜位に充填している。61～75は、すべて櫛歯状工具による条線文が施されている。単位性はなく雑な施文である。79は幅狭の無文帯を伴っている。76～79は地文縄文である。80は波状口縁である。内面はミガキ調整されている。82は口縁部の突起である。対向する弧線の上に竹管による刺突文が施されている。中央は貫通孔となっている。内面はメガネ状の円孔となっている。83は無文の注口土器である。注口部は体部と一体となるが、2つの穿孔でアクセントを付けている。口縁は素口縁で、くびれ部は緩やかで体部は丸く膨らんでいる。文様を伴わないが、称名寺式の注口土器と考えられる。

石 器 (第17・18図、第6表、図版8)

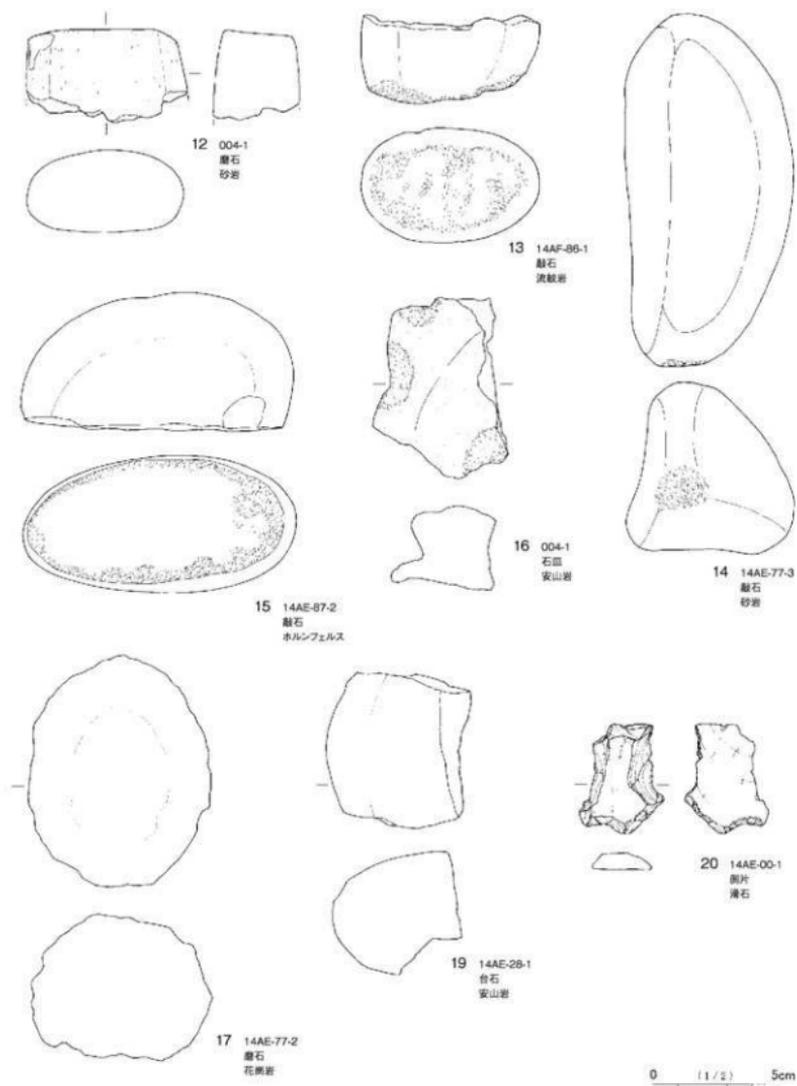
1はチャートの無茎の石鏃で晩期のいわゆる五角形鏃と考えられる。正面の器体中央部に自然面が残っている。両面の左側縁に最終的な仕上げ痕が集中しており、末端のそれは正面側である。2は黒曜石の円



第17図 遺構外等出土石器(1)

基の石礫である。折断面剥片を素材としており、右側縁は折断面形状を利用して軽微な調整加工を施すにとどまっている。両面の右側縁に最終的な仕上げ痕が集中しており、末端のそれは裏面側である。3は黒曜石の不定形な剥片である。正面器体右半分の剥離痕は多少光沢が異なり、自然面の可能性もある。末端が欠損している。4は黒曜石の不定形な剥片である。5は硬質緻密なホルンフェルスの打製石斧である。上半部が欠損している。両面に素材の大きな剥離痕が残っている。6は硬質緻密な流紋岩の打製石斧である。下半部が欠損している。両面に自然面が残っている。7は頁岩あるいはホルンフェルスの定角式の磨製石斧である。裏面の一部に磨き残しによる剥離(敲打)痕が見られるが、全体的に丁寧に研磨されている。上部と右側が欠損している。なお、表面は被熱によるものか変色している。8は流紋岩の磨製石斧で、刃部の一部である。上部と右側の大半が欠損している。なお、表面は被熱によるものか変色している。9は安山岩の磨石である。両面に磨痕、両側縁に軽い敲打痕が見られる。下半部が欠損している。10は砂岩の磨石である。表面と側縁には明確な稜が形成されるほど磨耗している。表面の一部が残っているだけで、大半が欠損している。なお、今回は全面磨耗と考えたが、左側面の表面の一部の光沢が顕著であることから、「表面は自然面で側面のみを使用」あるいは「側面が自然面で表面のみを使用」したとも考えられる。縄文時代の磨石については自然面の認識に起因した使用面の認定に差異のあることが多々ある。石材による使用行為・使用頻度等を考慮した表面観察だけではない差異の識別が重要である。11は砂岩の磨石である。両面に顕著な光沢痕が認められる。なお、周縁の一部に剥落していない部位が残っていることから、この石器についても10と同様に、「両面が自然面で周縁を使用」した可能性もある。12は砂岩の磨石としたが、後記するように変質していること等も含め、観察が困難で使用面については不明である。上部は裁ち落としたような平坦面を形成しており、なお、表面は被熱によるものかひび割れ・若干の変色が見られる。13は流紋岩の敲石である。末端にあばた状の深い敲打痕が見られる。末端のみの残存である。14は砂岩の敲石である。比較的大型で細長い礫の末端に浅い敲打痕が見られる。15はホルンフェルスのスタンプ形石器に類似した敲石である。おそらく半分に欠損(あるいは折断)した礫を素材とし、その折れ面の周縁に浅い敲打痕や剥離痕が見られる。16は多孔質安山岩の石皿あるいは凹石の一部である。明確な凹みは左側縁と上部のもので下部の凹みは自然のものかもしれない。その場合、断面図上、下部が浅い縁とそれに続く平坦な面を持つ石皿の使用面、同じく上部(正面図側)が底面、側面に凹みが見られるということになり、むしろ、そのように考えた方がいいかもしれない。17は花崗岩の磨石で、風化が激しく使用面の観察は困難である。磨石だとすると使用時は現在よりは硬質であったと想像されるが、雲母片を多量に含むことから、あるいは後述する18同様、土器混和材として、転用・再利用された可能性もある。18は雲母片岩の磨石の一部で、17よりも風化が激しく使用面の観察は全く困難である。使用時は現在よりは硬質であったと想定し、一応磨石としたが、石皿の一部かもしれない。なお、雲母片を多量に含むことから、前述した17同様、土器混和材として、転用・再利用された可能性がある。東葛地区の縄文の遺跡等では比較的多く見られる石材・器種である。

19・20は本節で記載するが、古墳時代以降の可能性の高い石器である。19は安山岩の白石である。ここでは、安山岩と表記したが、極めて硬質で、石英安山岩(あるいはデイサイト)と考えた方がいいかもしれない。他の石器にも被熱状の痕跡が見られることから断定は出来ないが、その石材と表面が若干赤色化しているようにも見えることから、金床石等の一部の可能性がある。また、20は滑石の剥片で石製模造品の素材の可能性もある。



第18図 遺構外等出土石器(2)

第4節 弥生時代

1 竪穴住居跡（第7・8表）

001（第7・19図、図版3・4・12）

14AE-79グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸方形である。主軸方位はN-46°-Wで、規模は主軸長4.54m、幅4.3m、深さ47cmである。主柱穴は4本で、北側の主柱穴の間に炉が付設される。南東壁際に平面半円状の浅いピットがあり、いわゆる貯蔵穴の可能性が考えられる。壁は比較的立ち上がり急である。周溝は巡らない。

1はコップ形のミニチュア土器である。口縁は平らではなく雑な整形である。2は壺の底部破片である。胎土が精緻で、焼成は良好である。3は甕の底部破片である。外面には附加条縄文が施される。4は甕の口縁部破片である。口縁端部には縄文原体を交互に押捺している。口縁外面にはススが附着する。外面調整は横方向のミガキ状である。内面は丁寧な横方向のミガキ調整である。

003（第7・20図、図版4・12）

15AE-39グリッド周辺に位置する。平面形は不整楕円形である。主軸方位はN-32°-Wで、規模は主軸長2.86m、幅2.44m、深さ25cmである。ピットは検出されず、炉が中央やや北寄りに付設される。壁は比較的緩やかに立ち上がる。周溝は巡らない。

1は甕である。竪穴の南東壁際に割れた状態で出土した。口縁部から頸部にかけて7条の輪積痕を残し、口縁部と頸部下端部に刻みが施される。胴部以下は細かいミガキ状のヘラケズリ調整である。

008（第7・21図、図版4・5・12）

15AE-96グリッド周辺に位置する。平面形は不整楕円形である。主軸方位はN-48°-Wで、規模は主軸長3.48m、幅2.91m、深さ34cmである。ピットは検出されず、炉が中央やや北西寄りに付設される。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝は巡らない。

1は壺頸部破片である。頸部下位に羽状縄文が施される。口縁部側の内面は赤彩された痕跡がわずかに残る。2は甕の肩部から胴部である。底部付近を除いて附加条縄文が全面に施される。

009（第7・22図、図版5・12）

15AE-08グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸方形である。主軸方位はN-47°-Wで、規模は主軸長3.1m、幅2.92m、深さ30cmである。ピットは検出されず、炉が北西壁寄りに付設される。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝は巡らない。

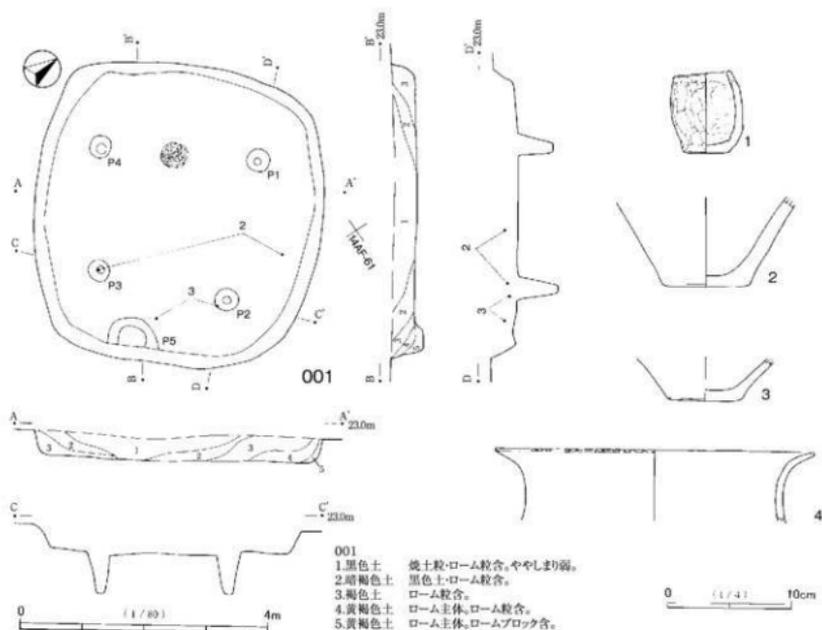
1は甕である。外面は無文であるが、口縁端部に附加条縄文が施される。内面は比較的細かくミガキ調整される。天井部外面は雑なヘラケズリ調整である。

011（第7・23図、図版5）

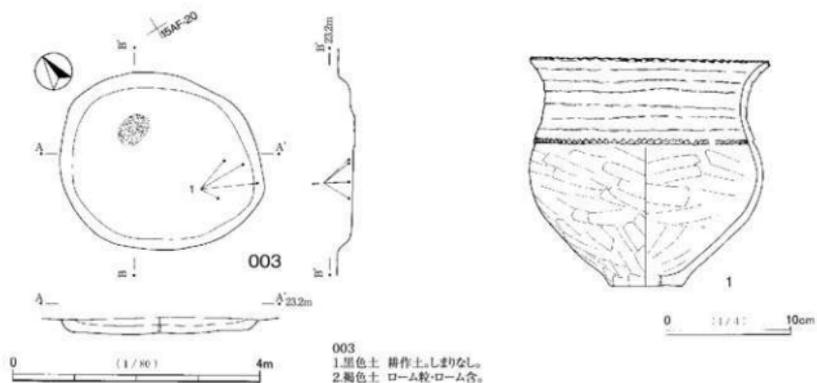
13AD-98グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸方形で正方形に近い。主軸方位はN-37°-Wで、規模は主軸長2.65m、幅2.55m、深さ30cmである。ピットは検出されず、炉が中央やや北西寄りに付設される。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝は巡らない。遺物は小片のみの出土で図示できるものはなかった。

013（第7・24図、図版5・12）

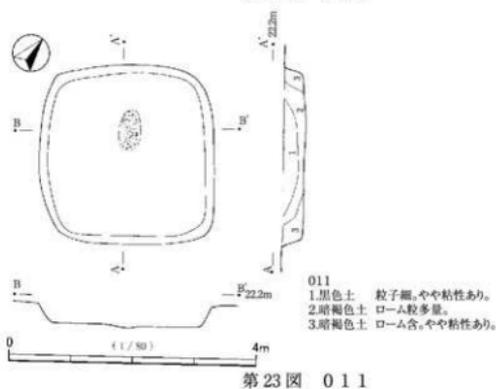
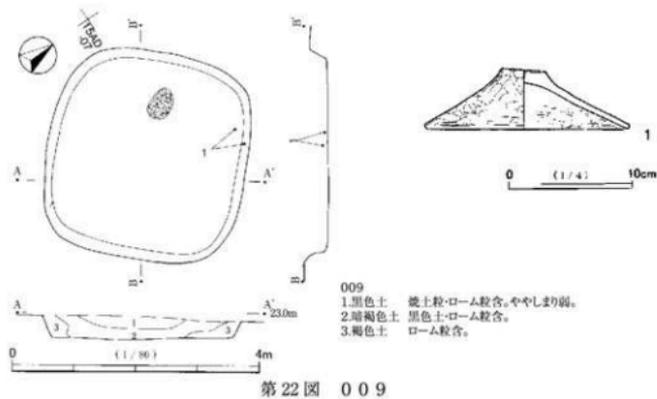
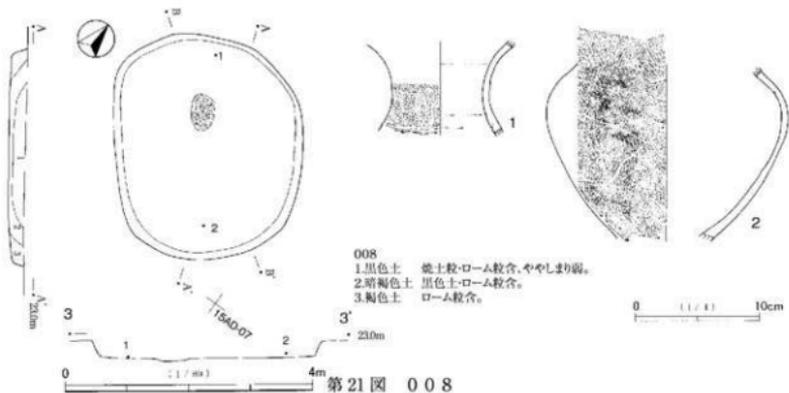
14AD-33グリッド周辺に位置する。平面形は不整形である。主軸方位はN-41°-Wで、規模は主軸長2.90m、幅2.06m、深さ22cmである。ピット・炉・周溝は検出されなかった。壁の立ち上がりは比較的急である。

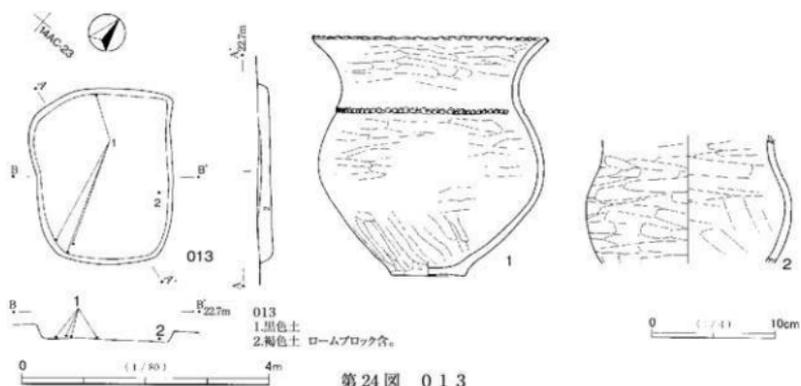


第19図 001

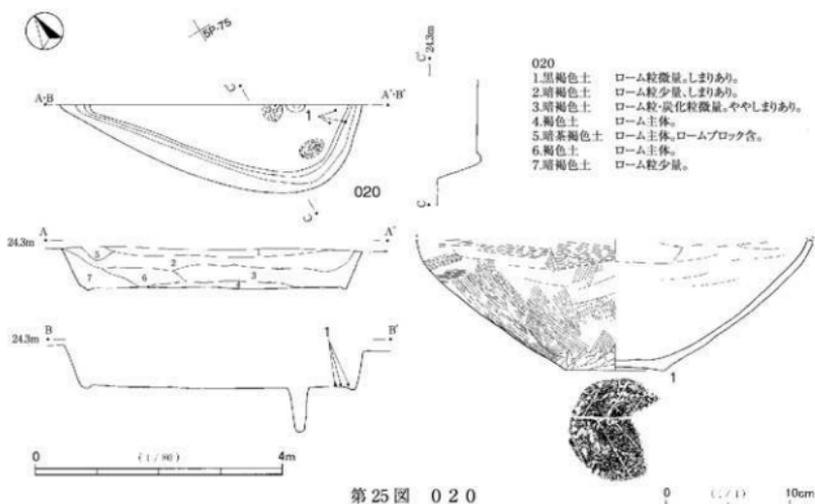


第20図 003

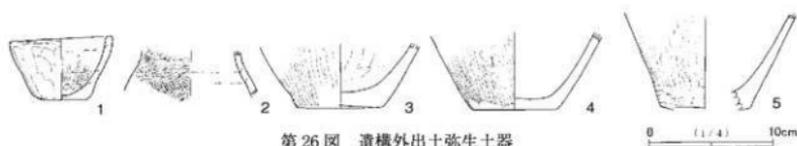




第24図 013



第25図 020



第26図 遺構外出土弥生土器

1・2は甕である。1は口縁端部を交互に押捺し波状に整形している。頸部下部には刻みが施される。外面は細かくミガキ調整が施され、頸部には一部輪積み痕がみられる。2は胴部で、内外面ともに横方向主体のナデ調整が施される。

020 (第8・25図、図版5・6・12)

13AD-98グリッド周辺に位置する。竪穴住居跡の北側は調査区外に当たるため部分的な調査である。平面形は隅丸方形と考えられる。主軸方位はN-44°-Wで、規模は推定で主軸長4.25m、深さ70cmである。ピットは南側の1基のみの検出だが、支柱穴は4本配置されていると考えられる。炉は調査区内では確認できない。焼失住居のため焼土、炭化材が多く出土した。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝は全周する。

1は大型甕または壺の底部破片である。底部から大きく開く形状である。外面はハケ目状のナデ調整、内面は丁寧なナデ・ミガキ調整である。底部に木炭痕が遺存する。

2 遺構外出土遺物 (第26図、図版12)

1はほぼ完形の小型の鉢である。小型の割に器厚はあるが、内外面ともに丁寧なナデ調整である。胎土は砂っぽく、口縁端部はやや磨滅気味である。器面に赤みをもつ部分があり、赤彩されていた可能性がある。2は広口壺形土器の頸部破片である。胴部に細かいRL縄文を施文し、その上端を横位に3条のS字結節文が施される。3～5は壺形土器の底部破片である。焼成は良好で、外面は丁寧にヘラミガキされる。4・5の外面は赤みを帯びており、赤彩されていた可能性がある。

第7表 弥生時代竪穴住居跡一覧表

() 推定

遺構No.	グリッド	平面形	主軸方位	主軸長 (m)	幅 (m)	壁高 (cm)	ピット深さ (cm)	炉の位置	調査年度
001	14AE-79	隅丸方形	N-46°-W	4.54	4.7	47	P1-56,P2-64,P3-62,P4-67	北側支柱穴間	平成14年度
003	15AE-39	不整楕円形	N-32°-W	2.86	2.8	25	-	中央やや北寄り	平成14年度
008	15AE-96	不整楕円形	N-48°-W	3.48	3.08	34	-	中央やや北西寄り	平成14年度
009	15AE-08	隅丸方形	N-47°-W	3.1	3.23	30	-	北西壁寄り	平成14年度
011	13AD-98	隅丸方形	N-37°-W	2.65	2.55	30	-	中央やや北西寄り	平成14年度
013	14AD-33	不整方形	N-41°-W	2.9	2.06	22	-	-	平成14年度
020	5P-85	隅丸方形	N-44°-W	(4.25)	-	70	P1-72	-	平成13年度

第8表 弥生時代土器類観察表

() 推定 < > 現存長

遺構No	No	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成		技法		備考
001	1	ミニチュア土器	口径 4.8	ほぼ定形	各種微砂粒多量	内面 10YR6/4 にぶい黄橙	内面 ナテ			
			底径 3.8			外面 10YR6/4 にぶい黄橙	外面 ヘラケズリ後ナテ			
			器高 6.6			焼成 良好	底外面 ナテ			
001	2	壺?	口径 -	割下半~底部 30%	精緻	内面 2.5YR5/6 明赤褐	内面 丁寧なナテ			
			底径 7.2			外面 7.5YR6/6 橙	外面 ミガキ			
			器高 <7.3>			焼成 良好	底外面 ミガキ			
001	3	甕?	口径 -	割下半~底部 70%	各種微砂粒多量	内面 5YR3/2 暗赤褐	内面 雑なナテ			
			底径 6.0			外面 5YR5/6 明赤褐	外面 附加糸縄文			
			器高 <3.6>			焼成 良好	底外面 ナテ			
001	4	甕	口径 (2.58)	口~頸部 15%	各種微砂粒中量	内面 10YR6/4 にぶい黄橙	内面 口コ方向ミガキ			口唇部縄文交互押捺
			底径 -			外面 7.5YR6/4 にぶい橙	外面 ミガキ? 縄文?			
			器高 <5.8>			焼成 良好	底外面 -			
003	1	甕	口径 19.2	70%	各種微砂粒少量	内面 7.5YR5/4 にぶい褐	内面 ヘラナテ			
			底径 5.8			外面 7.5YR5/3 にぶい褐	外面 ミガキ状ヘラケズリ			
			器高 18.7			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ			
008	1	壺	口径 -	頸部 80%	各種砂粒中量	内面 5YR6/6 橙 赤彩	内面 ナテ・ミガキ			
			底径 -			外面 10YR5/4 にぶい黄橙	外面 羽状縄文			
			器高 <7.7>			焼成 良好	底外面 -			
008	2	壺	口径 -	割部 25%	各種微砂粒中量	内面 7.5YR6/6 橙	内面 ナテ			内外面スス付着
			底径 -			外面 7.5YR5/4 にぶい褐	外面 附加糸縄文			
			器高 <14.2>			焼成 良好	底外面 -			
009	1	蓋	口径 16.3	80%	各種砂粒中量	内面 7.5YR5/6 明褐	内面 ヘラナテ・ミガキ			口唇部に附加糸縄文あり?
			摘部 3.5			外面 同内	外面 ヘラケズリ後ミガキ			
			器高 4.8			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ			
013	1	甕	口径 18.9	50%	各種砂粒多量 石英粒目立つ	内面 7.5YR4/2 灰褐	内面 ナテ・ミガキ			外面スス付着
			底径 6.0			外面 同内	外面 ミガキ・キザミ			
			器高 19.5			焼成 良好	底外面 ナテ・ミガキ			
013	2	甕	口径 -	割部 85%	各種微砂粒少量	内面 7.5YR6/6 橙	内面 ヘラナテ			
			底径 -			外面 同内	外面 ヘラケズリ			
			器高 <10.5>			焼成 良好	底外面 -			
020	1	甕 or 壺	口径 -	割下半~底部 80%	各種微砂粒少量	内面 10YR6/4 にぶい黄橙	内面 丁寧なナテ・ミガキ			
			底径 8.0			外面 10YR4/3 にぶい黄橙	外面 ハケ目状ナテ・ミガキ			
			器高 <10.7>			焼成 良好	底外面 木葉煎			
遺構外 (14AE-86・87)	1	小形鉢	口径 8.2	ほぼ定形	各種微砂粒多量	内面 7.5YR5/4 にぶい褐	内面 ミガキ			
			底径 4.0			外面 7.5YR6/6 橙	外面 ナテ			
			器高 5.0			焼成 良好	底外面 ナテ			
遺構外 (1トレンチ)	2	壺	口径 -	頸部~割上半 40%	各種微砂粒中量	内面 7.5YR5/6 明褐	内面 ナテ			
			底径 -			外面 同内	外面 S字結節・RL 縄文			
			器高 <3.7>			焼成 良好	底外面 -			
遺構外 (14AE-00)	3	壺	口径 -	割下半~底部 70%	各種微砂粒多量	内面 7.5YR6/6 橙	内面 ヘラナテ			外面赤みあり
			底径 7.2			外面 7.5YR5/6 明褐	外面 ミガキ			
			器高 <5.3>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ			
遺構外 (14AE-68)	4	壺	口径 -	割下半~底部 80%	各種微砂粒中量	内面 7.5YR5/4 にぶい褐	内面 ヘラナテ			外面やや赤み帯びる
			底径 6.9			外面 5YR5/6 明赤褐	外面 丁寧なミガキ・ヘラケズリ			
			器高 <6.4>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ			
遺構外 (14AE-88)	5	壺	口径 -	割~底部 80%	各種微砂粒多量	内面 7.5YR5/4 にぶい褐	内面 ナテ			外面赤みあり
			底径 7.2			外面 5YR5/6 明赤褐	外面 丁寧なミガキ			
			器高 <7.9>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ			

第5節 古墳時代以降

1 竪穴住居跡（第9表）

004（第7・9・27図、第10・11表、図版4・12）

13AC-37グリッド周辺に位置する。調査は平成14年度と15年度の2回にわたり実施した。平面形は横長の方形である。主軸方位はN-42°-Wで、規模は主軸長3.55m、幅3.85m、深さ12cmである。南東隅で19cmの深さのピット1基のみ検出された。炉は北西壁寄りに付設される。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝は全周するものと考えられる。

1は平底の土師器鉢である。全体的に雑な整形である。口縁が折り返し口縁状になる。外面はヘラケズリ調整が主体で、底面も雑にヘラケズリ調整される。外面は使用による磨減が部分的にみられる。2～4は土師器高坏の坏部である。大きさに違いがあるが、坏部が深く、坏部下位にヘラケズリによって稜を作り出している点は共通する、外面はヘラケズリ後ナデやミガキで、内面は比較的丁寧なナデ・ミガキ調整である。5は大型の土師器甕である。全体的に丁寧な整形で、底面は小さな平底である。口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。頸部内面は稜が明瞭である。口縁部は内外ともにハケ目を残し、胴部は一部ハケ目がみられるもの、ヘラケズリ後ナデ調整である。外面全体にスス状のものが付着する。6は土師器甕の胴部から底部である。胴部中位が張る形状である。外面は斜め方向のヘラケズリが主体で、その後ナデ・ミガキ調整が施される。内面は横方向のヘラナデ調整で、上位にはハケ目状に強く施される。7～9は安山岩製の白石破片で、外面が使用により磨減している。8・9は同一固体と考えられる。

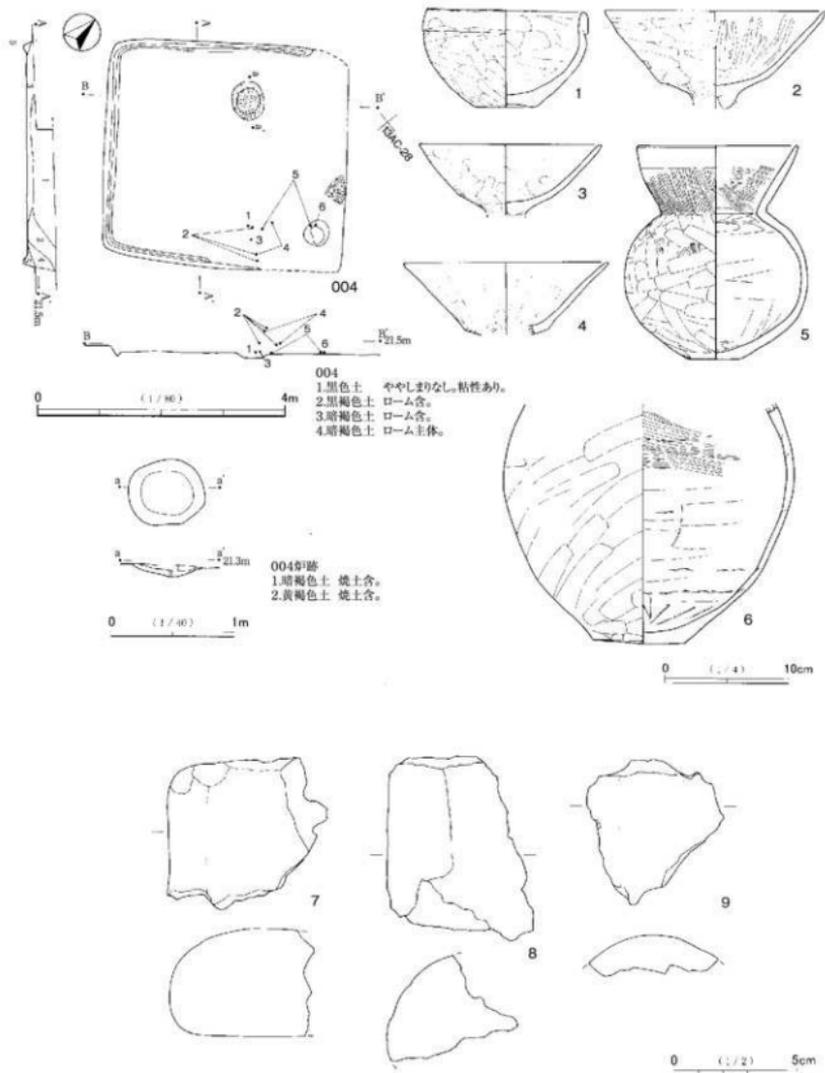
005（第7・28・29・30・31・32・33図、第11・12表、図版4・12・13・14）

14AC-98グリッド周辺に位置する。竪穴住居の南西側は調査区外に当たるため部分的な調査となった。平面形は隅丸方形である。主軸方位はN-52°-Wで、規模は主軸長4.75m、深さ40cmである。ピットは3基検出されたが、北側の1基以外は掘り込みが浅い。炉は北西壁寄りに付設される。竪穴の北側を中心に炭化材や焼土が多く出土した。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝はみられない。

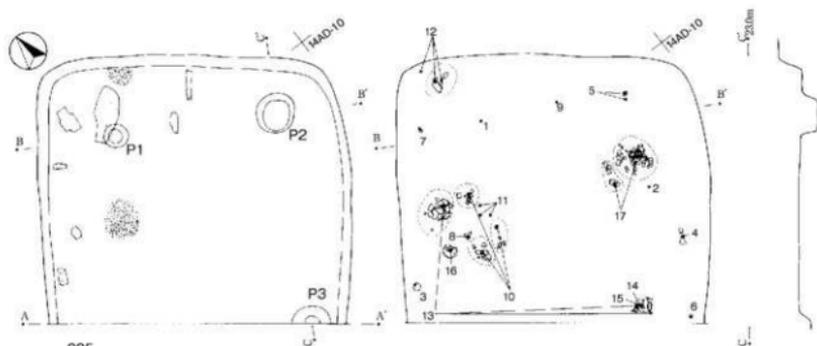
覆土中からは石製模造品の製作関連遺物のほかに土器類も多く出土した。1は甕形のミニチュア土器である。口縁はいびつである。2・3は平底の土師器碗である。胎土・形状とも酷似する。口縁が直線的で、体部との境に稜が作り出される。4～8は土師器高坏である。坏部は口径が大きく、口縁部が緩やかに外反する。脚部は2点とも内面に絞り痕がみられる。7は二次的に火を受け、色調が黒ずんでいる。坏部との接合部が磨減しているため2次利用の可能性が高い。9・10は土師器甕である。どちらも丁寧な整形である。9は小型で器厚が薄い。口縁はやや短く、わずかに内湾する。10は大型で平底である。外面と口縁内部が赤彩される。口縁内部にハケ目が一部確認できる。11は土師器の甕形の甕である。焼成後の底部に径1.1cmの孔が両側から穿孔される。口縁は厚みがあり短く立ち上がる。外面は被熱のため剥落気味である。口縁内部と外面上半が赤彩されているとみられるが、判然としなない。内面はヘラケズリされる。12～17は土師器甕である。胴部の中位からやや下位が張り、口縁部はあまり外反せずに立ち上がる形状が主体である。また、口縁外面下位に縦方向のナデ痕も共通してみられる。外面はヘラケズリ後ミガキ調整である。16はやや胴部が下膨れで、頸部には遺存が悪いが粘土紐貼付がみられる。

石製模造品の製作剥片や未成品の石材はすべて滑石で、ほとんどが白玉製作に関わるものである。遺物の観察から大きく以下のような製作工程が想定される。

I段階（荒削）：原石（母岩）から大きく剥片を剥離する工程と中・小型剥片を作出する工程は連続または、



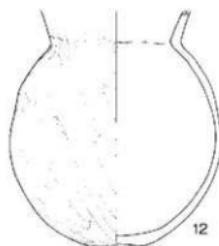
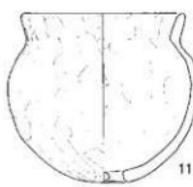
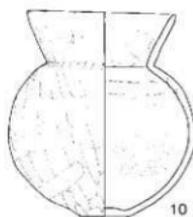
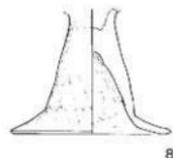
第27図 004



005

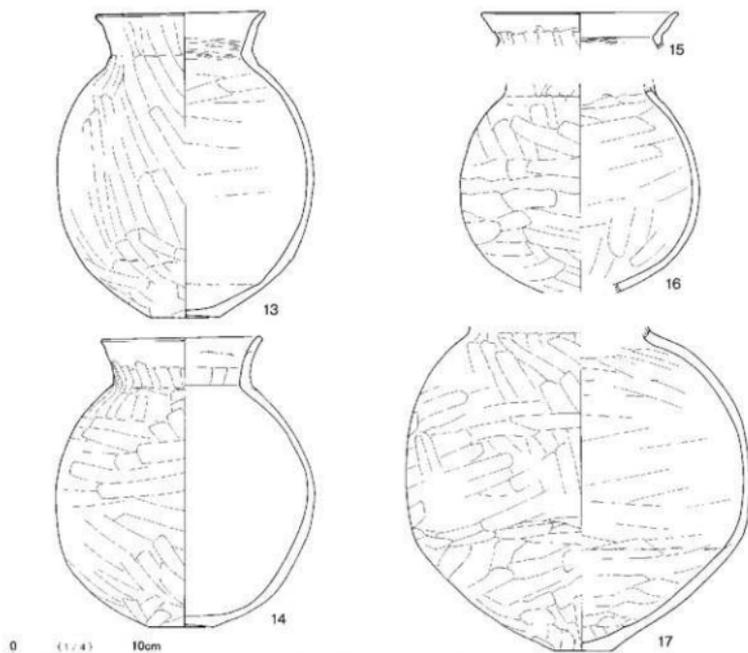
- 1.黒色土 ローム少量 4.暗褐色土 ロームブロック・焼土・炭化材含
 2.黒色土 ローム含。 5.暗褐色土 ブロックやや多量
 3.暗褐色土 ロームブロック含 6.褐色土 ローム多量、貯蔵穴覆土。

0 4m
(1/50)



0 10cm
(1/4)

第28図 005 (1)



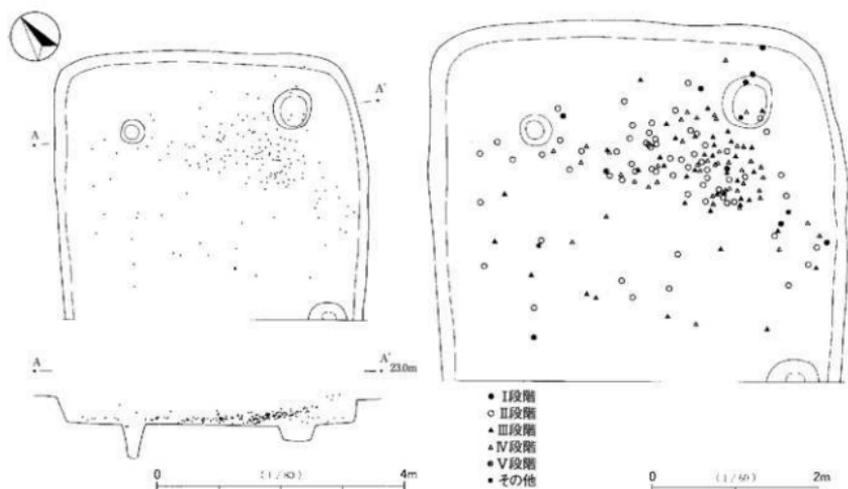
第29図 005(2)

同時に行われた可能性があるため1段階にまとめた。この段階の遺物としては母岩の残核、大～小剥片があげられる。工具痕のみられるもの(1～6)と工具痕のないもの(7～9)がある。工具痕は白く筋状の痕跡で、比較的厚めの剥片・残核に多くみられる。

Ⅱ段階(板状化)：荒削段階で方形・長方形を意識して割り出された剥片の上下面を平滑な面に研磨した板状研磨品(68～77)を作る工程である。研磨されず、平坦面のない小型剥片(10～53)は板状化する際の剥片と捉え、この段階に含めた。

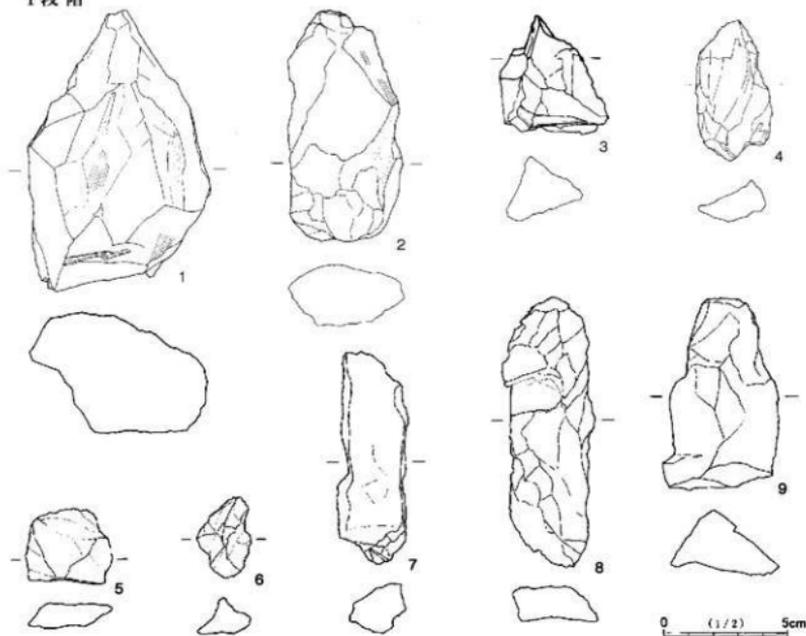
Ⅲ段階(形割・切削)：板状研磨品を白玉の大きさにしていく工程である。本来は形割段階で四角形を基本とし、切削段階でそれを多角形にしていくものと考えられる。本遺跡では穿孔の完了した個体においても定型的な多角形のものはほとんどなく、方形の段階で穿孔している個体もあるため、段階として1つにまとめた(78～115)。

Ⅳ段階(穿孔)：孔を開ける工程である。この段階と考えられる遺物としては穿孔破損品(116～177)、穿孔途中品(178～186)、穿孔完了品(187～200)がある。穿孔破損品が最も多く、穿孔部の半分で欠損したものがほとんどである。穿孔完了品は穿孔位置が中心とずれていたり、縁辺が剥離したりしていて、側面研磨されている個体は174を除くと確認できない。ほかに両面穿孔(177ほか)されたものもあり、中には186のように大きく位置のずれたものが存在する。



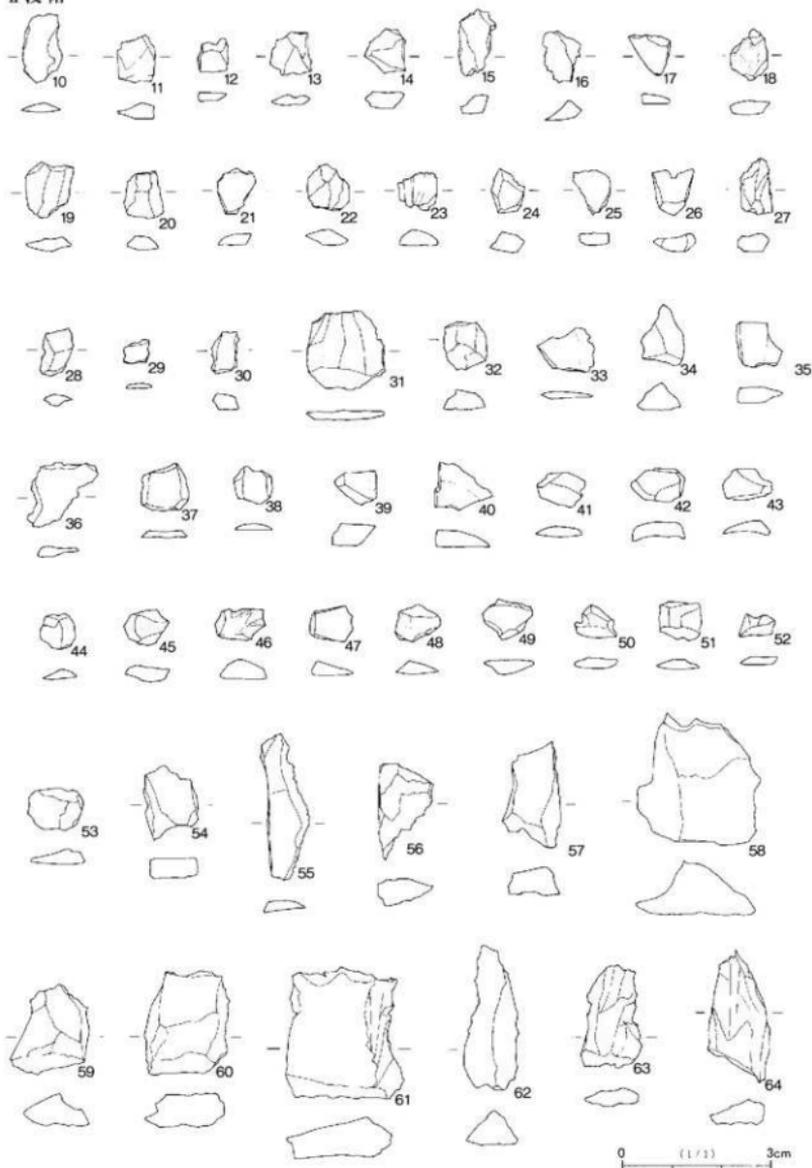
<出土状況>

I段階



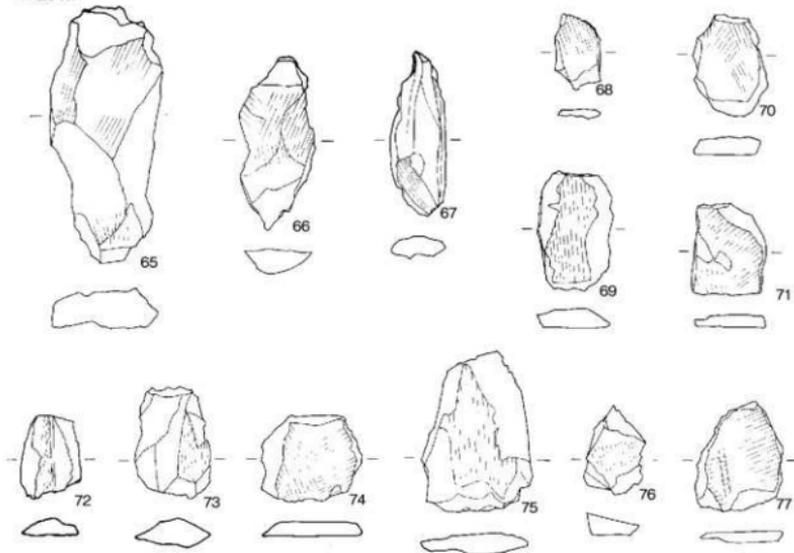
第30図 005出土石製品剥片等(1)

Ⅱ段階

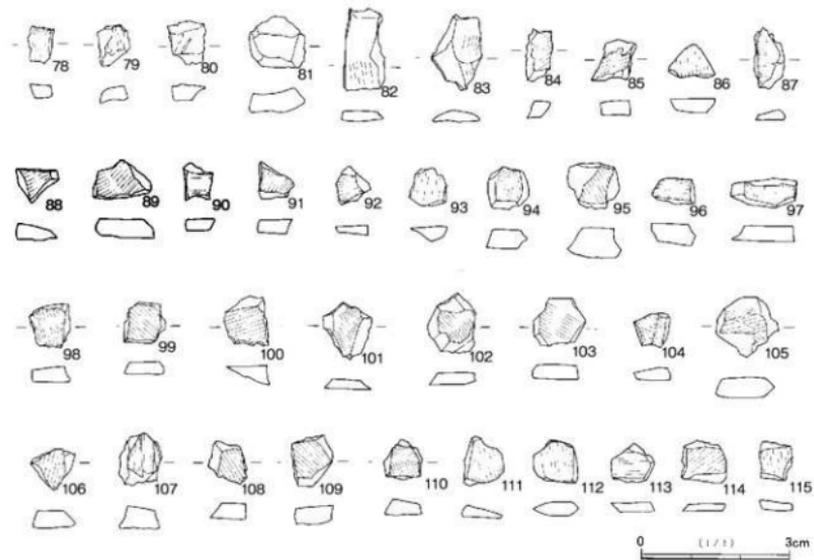


第31図 005出土石製品剥片等(2)

II 段階

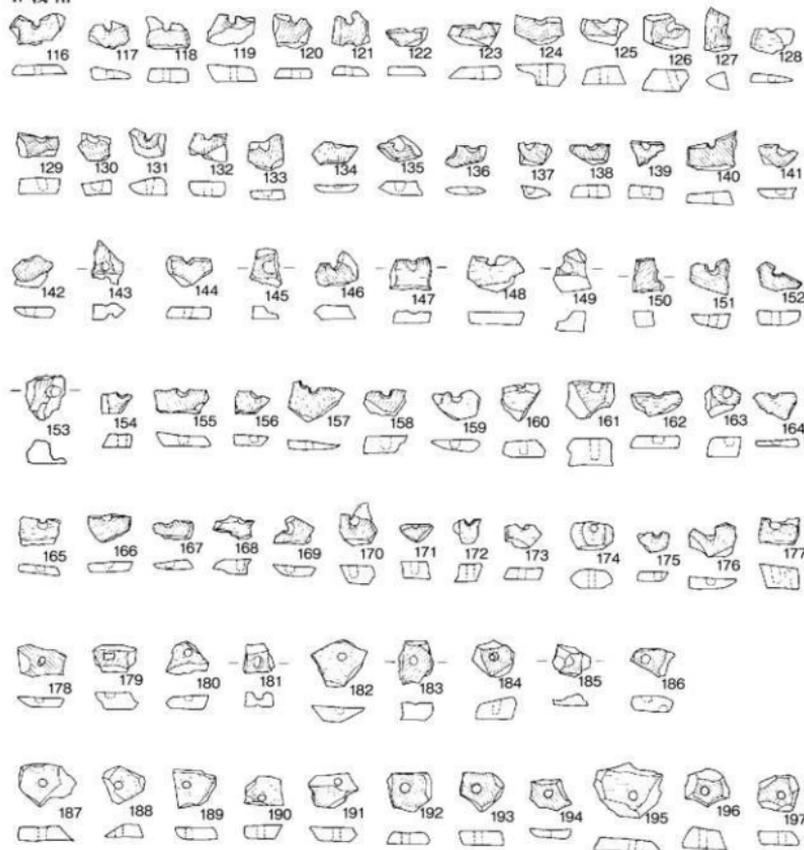


III 段階

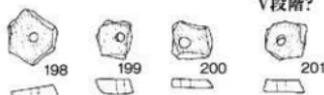


第32图 005出土石製品剥片等(3)

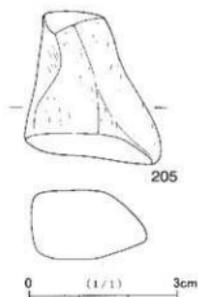
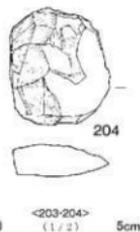
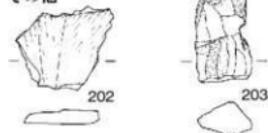
IV 段階



V 段階?



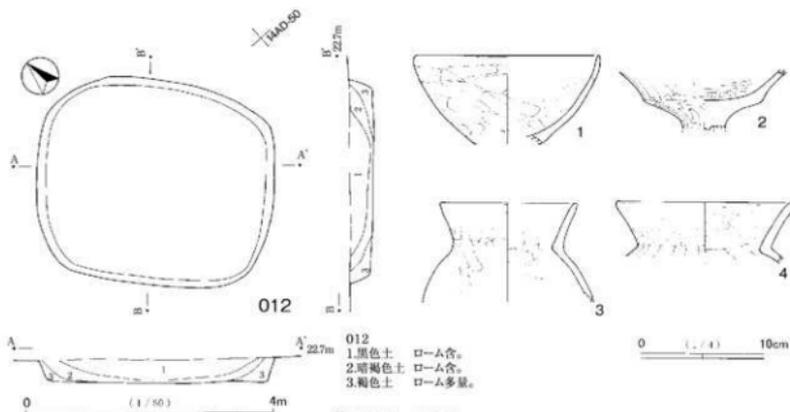
その他



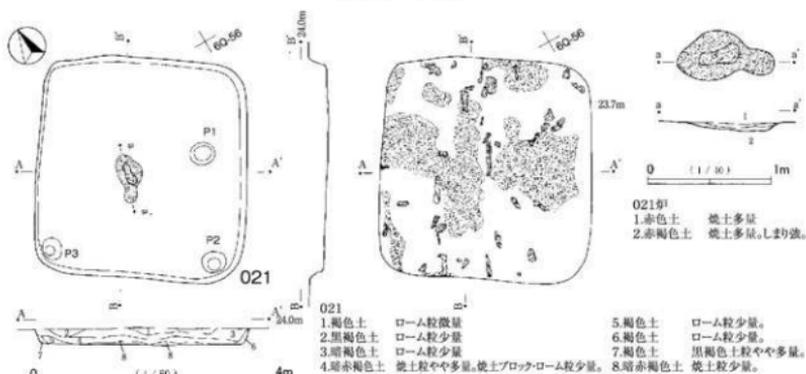
0 203-204> 5cm
(1/2)

0 (1/1) 3cm

第33図 005出土石製品剥片等(4)



第34図 012



第35図 021

第9表 古墳時代竪穴住居跡一覧表

遺構No	グリッド	平面形	主軸方位	主軸長 (m)	幅 (m)	壁高 (cm)	ピット深さ (cm)	炉の位置	調査年度
004	13AC-37	方形	N-42°-E	3.55	3.85	12	-	やや北西壁寄り	平成14年度
005	14AC-18	隅丸方形	N-52°-W	4.75	-	40	P1-56, P2-24, P3-22	やや北西壁寄り	平成14年度
012	14AD-58	隅丸方形	N-40°-W	3.56	3.1	34	-	-	平成14年度
021	6Q-55	方形	N-30°-E	3.42	3.26	26	P1-42, P2-28, P3-18	中央	平成13年度

V段階（仕上げ研磨）：最後に側面研磨され、完成品となるが成品と考えられる個体は調査区内では出土していない。一部側面研磨されたものに201がある。面が残り、途中で廃棄されたものである。

また、石製模造品の製作剥片や未成品等の出土状況は第30図のとおりである。平面的にみると壁際からの出土は少なく、中央やや北東寄りからの出土が目立つ。中央に近い部分は低い位置からの出土があるが、壁際ほど出土位置が高く、基本的に堅穴覆土第3層のロームブロックが含まれる土に包含される。遺構自体は他の堅穴住居跡と同様の構造で、やや浅いピットが確認できるものの工作用ピットとは考えがたい。工程分類ごとの遺物の出土位置にも、作業位置を復元できるようなまとまりはみられない。

白玉関連遺物以外では、鍋状に2方向に研磨している破片（202）がある。剣形品の可能性があるが、板状で厚みがなく断定できない。203は側面中央に抉った工具痕が確認できる。204は大型で厚みのある円形の未成品であり、紡錘車の可能性がある。上面と側面に整形の研磨痕が確認できるが、裏面は剥離面のままである。205は砂岩製の砥石である。模造品製作における工具として使用したものと考えられる。実測はできなかったが、他に軽石が8点（重量70g）出土した。

012（第7・34図、第11表、図版5・13）

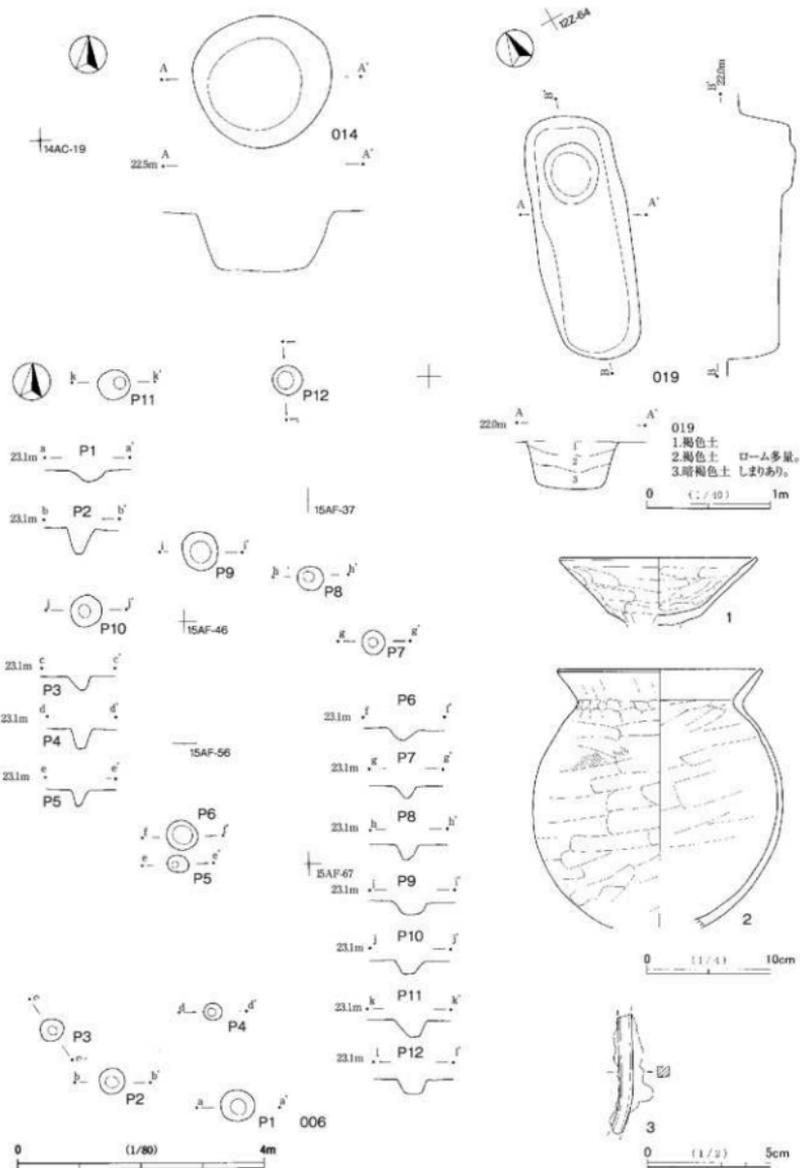
14AD-58グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸方形である。主軸方位はN-40°-Wで、規模は主軸長3.56m、幅3.1m、深さ34cmである。炉・ピット・周溝は検出されなかった。壁の立ち上がりは比較的急である。

1・2は土師器高坏の坏部である。1は口縁がわずかに内湾するため鉢の可能性もある。2は二次的に被熱しており、色調が黒みを帯びる。3・4は土師器の小型甕である。口縁は直線的に立ち上がり、頸部内面の稜はしっかりと作り出される。

021（第8・35図、図版6）

6Q-55グリッド周辺に位置する。平面形は方形である。主軸方位はN-30°-Wで、規模は主軸長3.42m、幅3.26m、深さ26cmである。ピットは3基検出されたが、配置はバランスが悪く、深さも一定しない。炉は堅穴の中央に付設される。焼失住居のため焼土、炭化材が多量に出土した。壁の立ち上がりは比較的急である。周溝はみられない。

出土遺物は細片のみで図示可能な遺物はない。ほとんどが土師器の薄手の破片で、周囲の遺構の時期も考え併せると古墳時代中期の堅穴住居跡の可能性が考えられる。



第36図 土坑・ピット群・遺構外出土遺物

2 ビット群・土坑

006 (第7・36図)

15AE-46周辺の広い範囲にビットが12基分布する。規則的に配置されず、深さも一定していない。ビットの平面形は基本的に円形である。確実に伴う遺物が出土しておらず、時期が確定できない。

014 (第7・36図、図版7)

14AD-09グリッド周辺に位置する土坑である。平面形はほぼ円形で、規模は長軸111cm、短軸108cm、深さ48cmである。底面は平らで、遺物は出土していない。011の弥生時代竪穴住居跡に近接するため、弥生時代に帰属する可能性も考えられる。

019 (第9・36図)

12Z-73グリッド周辺に位置するが、周辺に遺構は全く分布しない。平面形は隅丸の長方形で、長軸方位はN-18°-E、規模は長軸長204cm、短軸長77cm、深さ43cmである。底面北寄りに深さ10cmの浅い掘り込みがみられる。底面は平らで、側面は直立気味に立ち上がる。遺物は出土していない。

3 遺構外出土遺物 (第36図、第11表、図版13)

1は14AD-22出土の土器高坏の坏部である。口縁部の立ち上がりが急で、口縁端部はややゆがみがある。外面はヘラケズリ痕が明瞭に残り、内面のナデも強い。形状から古墳時代中期中頃の資料と考えられる。2は土器器臺である。これも14AD-22グリッド出土である。底部を欠損するが、比較でき遺存は良好である。頸部内面の屈曲が明瞭で、胴部中位が緩やかに張る。内外面ともに横方向のヘラケズリ調整が主体である。1の高坏と同時期の資料であろう。3は14AE-88グリッド出土の棒状鉄製品である。断面は方形で大きさから鉄釘の可能性がある。出土位置に一番近い遺構は006のビット群であるが、時期は特定できない。長さ4.9cm、幅0.55cm、厚さ0.4cm、重量8.13gである。

第10表 古墳時代石器属性表

挿図 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				mm	mm	mm		
第27図	7 004-1	台石	安山岩	59.8	64.8	44.9	249.5	鉄床石か
第27図	8 004-1	台石	安山岩	77.4	56.3	39.9	164.1	アイサイトか
第27図	9 004-1	台石	安山岩	59.8	56.8	27.4	67.0	アイサイトか

第11表 古墳時代土器類観察表

() 推定 < > 現存長

遺構	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考			
004	1	土師器	鉢	口径	127	1412定形	各種酸砂粒少量	内面	7.5YR6/6 橙	内面	ヘラナデ	
				底径	5.0			外面	7.5YR6/6 橙	外面	ヨコナデ, ヘラケズリ	
				器高	7.9			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
004	2	土師器	高坏	口径	17.8	坏部 80%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR6/6 橙	内面	ヘラナデ・ミガキ	
				底径	-			外面	7.5YR6/6 橙	外面	ヘラケズリ後ナデ・ミガキ	
				器高	<8.0>			焼成	良好	底外面	-	
004	3	土師器	高坏	口径	16.5	坏部 50%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR6/4 に近い橙	内面	ヘラナデ・ミガキ	
				底径	-			外面	7.5YR6/4 に近い橙	外面	ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<5.9>			焼成	良好	底外面	-	
004	4	土師器	高坏	口径	14.8	坏部 100%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR6/6 橙	内面	ヘラナデ後ミガキ	
				底径	-			外面	7.5YR6/6 橙	外面	ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<5.8>			焼成	良好	底外面	-	
004	5	土師器	埴	口径	13.0	80%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR6/3 に近い黄	内面	ハケ後ナデ, 胴部ヘラナデ	外面スス付着?
				底径	4.4			外面	7.5YR6/3 に近い黄	外面	ヨコナデ, 頸部ハケ目, 胴部ハケ	
				器高	17.5			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
004	6	土師器	甕	口径	-	胴上半~底部 60%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR5/2 灰黄	内面	ハケ状強いナデ	
				底径	7.5			外面	7.5YR6/4 に近い橙	外面	ヘラケズリ後ナデ・ミガキ	
				器高	<19.7>			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
005	1	ミニチュア土器	口径	6.1	90%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR5/4 に近い黄	内面	ヘラナデ		
			底径	3.3			外面	7.5YR5/4 に近い黄	外面	ヘラケズリ		
			器高	4.2			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ		
005	2	土師器	埴	口径	11.6	60%	各種酸砂粒微量	内面	7.5YR6/4 に近い橙	内面	ヘラナデ	
				底径	4.2			外面	7.5YR6/4 に近い橙	外面	ナデ, 体部ヘラケズリ後ナデ	
				器高	6.7			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
005	3	土師器	埴	口径	12.7	60%	精緻 各種酸砂粒微量	内面	7.5YR5/4 に近い黄	内面	ヨコナデ, 体部ヘラナデ	
				底径	4.0			外面	7.5YR5/4 に近い黄	外面	ナデ, 体部ヘラケズリ・ナデ	
				器高	6.3			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
005	4	土師器	高坏	口径	(19.9)	口~体部 25%	石英・白色砂粒目立つ	内面	10YR7/4 に近い黄橙	内面	ナデ	外面磨落 胎土白みあり
				底径	-			外面	10YR7/4 に近い黄橙	外面	ヘラナデ	
				器高	<5.9>			焼成	良好	底外面	-	
005	5	土師器	高坏	口径	(18.0)	口~体部 25%	各種酸砂粒多量	内面	5YR6/6 橙	内面	ナデ	内外面赤彩
				底径	-			外面	5YR6/6 橙	外面	ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<5.8>			焼成	良好	底外面	-	
005	6	土師器	高坏	口径	(18.9)	口~体部 30%	各種酸砂粒中量	内面	7.5YR4/3 黄	内面	ヘラケズリ後ナデ	
				底径	-			外面	7.5YR6/6 橙	外面	ヨコナデ, 体部ヘラケズリ	
				器高	<3.8>			焼成	良好	底外面	-	
005	7	土師器	高坏	口径	-	脚部 70%	各種酸砂粒多量	内面	10YR4/2 灰黄黄	内面	しほり痕	2次利用の可能性あり
				底径	-			外面	10YR4/2 灰黄黄	外面	ヘラナデ	
				器高	<6.3>			焼成	良好	底外面	-	
005	8	土師器	高坏	口径	-	脚部 100%	各種酸砂粒多量	内面	7.5YR6/6 橙	内面	しほり痕	
				底径	13.0			外面	7.5YR6/6 橙	外面	ヨコナデ, ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<10.3>			焼成	良好	底外面	-	
005	9	土師器	埴	口径	(9.0)	口~体部 20%	各種酸砂粒中量	内面	7.5YR5/3 に近い黄	内面	ヨコナデ, 胴部ヘラナデ	
				底径	-			外面	7.5YR5/3 に近い黄	外面	ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ	
				器高	<7.0>			焼成	良好	底外面	-	

遺構	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
005	10	土師器	埴	口径 11.9	80%	各種酸砂粒多量	内面 5YR5.6明赤陶, 赤彩	内面 ハケ日後ナデ, ヘラナデ	
				底径 3.9			外面 5YR5.6明赤陶, 赤彩	外面 ナデ, 胴部ミガキに近いヘラケズリ	
				器高 16.7			焼成 良好	底外面 ヘラナデ	
005	11	土師器	甕	口径 13.0	85%	各種砂粒多量	内面 5YR5.6明赤陶, 赤彩	内面 濃いヘラケズリ	焼成後穿孔
				底径 3.4			外面 5YR5.6明赤陶, 赤彩	外面 濃いヘラケズリ後ナデ	
				器高 13.8			焼成 良好	底外面 濃いヘラケズリ	
005	12	土師器	甕	口径 -	60% 口唇部欠損	各種酸砂粒中量	内面 7.5YR5/4 に近い陶	内面 ハケ後ヨコナデ, 胴部ナデ・ミガキ	
				底径 4.6			外面 7.5YR5/4 に近い陶	外面 ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ後ミガキ	
				器高 <19.3>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ	
005	13	土師器	甕	口径 13.7	70%	各種酸砂粒微量	内面 7.5YR5/4 に近い陶	内面 ハケ後ナデ, 胴部ヘラナデ	
				底径 5.6			外面 7.5YR5/4 に近い陶	外面 ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ後ミガキ	
				器高 24.9			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ	
005	14	土師器	甕	口径 12.8	90%	各種酸砂粒中量	内面 7.5YR5/4 に近い陶	内面 ヨコナデ, 胴部ヘラナデ	
				底径 5.1			外面 7.5YR5/4 に近い陶	外面 ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ後ミガキ	
				器高 23.7			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ	
005	15	土師器	甕	口径 (15.8)	口~胴部 45%	白色砂粒やや目立つ	内面 7.5YR6/6 橙	内面 ヨコナデ	赤彩か?
				底径 -			外面 7.5YR6/6 橙	外面 蓋ナデ	
				器高 <3.0>			焼成 良好	底外面 -	
005	16	土師器	甕	口径 -	胴~胴下半部 60%	各種砂粒中量	内面 7.5YR5.6 明陶	内面 ヘラケズリ	
				底径 -			外面 7.5YR5.6 明陶	外面 ヘラケズリ後ミガキ	
				器高 <17.0>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ	
005	17	土師器	甕	口径 -	胴~胴部 70%	白色砂粒やや目立つ	内面 7.5YR5/3 に近い陶	内面 ヘラケズリ	
				底径 4.9			外面 7.5YR5/3 に近い陶	外面 ヘラケズリ後ミガキ	
				器高 <26.5>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ	
012	1	土師器	高坏	口径 (14.9)	坏部 80%	各種酸砂粒多量赤褐色スコリア粒目立つ	内面 7.5YR6/4 に近い陶	内面 ヘラナデ	
				底径 (5.8)			外面 7.5YR5/4 に近い陶	外面 ヘラケズリ・ナデ	
				器高 <7.2>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ	
012	2	土師器	高坏	口径 -	坏~胴部 60%	各種酸砂粒多量赤褐色スコリア粒目立つ	内面 7.5YR5/4 に近い陶	内面 ヘラナデ・ミガキ	
				底径 -			外面 7.5YR5/4 に近い陶	外面 ヘラケズリ	
				器高 <4.9>			焼成 良好	底外面 -	
012	3	土師器	甕	口径 11.0	口~胴部 50%	各種砂粒中量	内面 7.5YR6/6 橙	内面 ヨコナデ, 胴部ヘラナデ	
				底径 -			外面 7.5YR6/4 に近い陶	外面 ヨコナデ, 胴部ナデ	
				器高 <8.1>			焼成 良好	底外面 -	
012	4	土師器	甕	口径 (14.1)	口~胴部 40%	各種砂粒中量	内面 7.5YR6/4 に近い陶	内面 ミガキ, 胴部ヘラナデ	
				底径 -			外面 7.5YR6/4 に近い陶	外面 ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ・ミガキ	
				器高 <5.0>			焼成 良好	底外面 -	
140-22	遺構外1	土師器	高坏	口径 16.0	坏部 60%	各種酸砂粒多量	内面 7.5YR5.6 明陶	内面 ヨコナデ, 胴部ヘラナデ	
				底径 -			外面 7.5YR5.6 明陶	外面 ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ	
				器高 <5.5>			焼成 良好	底外面 -	
013	遺構外2	土師器	甕	口径 16.4	口~胴下半部 75%	各種酸砂粒中量	内面 7.5YR6/6 橙	内面 ヨコナデ, 胴部ヘラナデ (ケズリ状)	
				底径 -			外面 7.5YR6/6 橙	外面 ヨコナデ, 胴部ヘラケズリ後ナデ	
				器高 <16.1>			焼成 良好	底外面 -	

第12表 石製模造品未成品・剥片類計測表

分類	No	遺物No	分類内容・特徴	長さ(mm)	幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
I	1	238	工具痕あり	110.9	73.0	48.0	456.57	
I	2	266	工具痕あり	94.0	45.0	24.5	141.82	
I	3	243	工具痕あり	45.0	42.0	24.0	43.82	
I	4	242	工具痕あり	56.0	30.0	12.5	30.43	
I	5	260	工具痕あり	29.5	35.0	10.0	13.47	
I	6	352	工具痕あり	32.0	21.5	14.5	8.99	
I	7	259	工具痕なし	84.0	27.0	18.0	50.43	
I	8	268	工具痕なし	110.0	35.0	14.0	80.90	
I	9	113	工具痕なし	77.0	44.0	24.0	99.68	
II	10	5	研磨なし・剥片	13.0	8.0	2.0	0.29	
II	11	13	研磨なし・剥片	9.0	7.5	3.0	0.37	
II	12	18	研磨なし・剥片	7.0	6.0	2.0	0.11	
II	13	38	研磨なし・剥片	8.5	8.0	2.0	0.22	
II	14	51	研磨なし・剥片	9.0	7.5	3.5	0.32	
II	15	63	研磨なし・剥片	12.0	7.0	3.5	0.39	
II	16	66	研磨なし・剥片	10.0	7.5	3.5	0.30	
II	17	68	研磨なし・剥片	7.5	7.0	2.0	0.23	
II	18	88	一部研磨?・剥片	10.5	7.5	3.0	0.26	
II	19	91	研磨なし・剥片	11.5	9.0	2.5	0.39	
II	20	95	研磨なし・剥片	9.5	7.5	2.5	0.26	
II	21	101	研磨なし・剥片	9.0	7.5	2.2	0.23	
II	22	112	研磨なし・剥片	9.0	8.5	30.0	0.28	
II	23	119	一部研磨?・剥片	7.5	7.5	3.0	0.24	
II	24	133	研磨なし・剥片	9.0	6.5	4.0	0.29	
II	25	135	研磨なし・剥片	9.0	7.5	2.2	0.23	
II	26	168	研磨なし・剥片	9.0	8.5	4.0	0.30	
II	27	181	研磨なし・剥片	11.0	6.0	3.5	0.41	
II	28	183	一部研磨?・剥片	9.0	6.0	2.3	0.15	
II	29	191	研磨なし・剥片	4.5	5.5	1.5	0.04	
II	30	212	研磨なし・剥片	8.5	5.0	3.0	0.23	
II	31	261	研磨なし・剥片	15.5	15.0	2.3	0.80	
II	32	261	研磨なし・剥片	9.5	8.5	4.0	0.43	筋あり
II	33	328	研磨なし・剥片	9.0	11.5	1.5	0.20	工具痕?
II	34	339	研磨なし・剥片	12.0	9.0	5.5	0.67	
II	35	351	研磨なし・剥片	9.5	9.0	3.0	0.30	
II	36	356	研磨なし・剥片	11.5	12.0	2.0	0.41	
II	37	363	研磨なし・剥片	10.0	10.0	1.5	0.22	
II	38	390	研磨なし・剥片	7.5	8.0	1.0	0.09	
II	39	392	一部研磨?・剥片	7.5	8.5	4.5	0.34	
II	40	396	研磨なし・剥片	10.0	12.0	3.5	0.36	
II	41	404	研磨なし・剥片	7.0	9.5	2.5	0.22	
II	42	434	研磨なし・剥片	7.0	11.0	4.0	0.45	
II	43	439	研磨なし・剥片	7.0	10.0	3.0	0.16	
II	44	452	研磨なし・剥片	7.0	7.0	2.0	0.14	
II	45	456	研磨なし・剥片	7.0	9.0	3.5	0.23	
II	46	458	研磨なし・剥片	6.0	10.0	4.0	0.32	工具痕?
II	47	461	研磨なし・剥片	7.5	9.0	3.0	0.17	
II	48	469	研磨なし・剥片	7.5	9.0	2.5	0.19	工具痕?
II	49	470	研磨なし・剥片	8.5	10.0	3.0	0.23	
II	50	509	研磨なし・剥片	6.5	8.5	2.0	0.13	
II	51	512	研磨なし・剥片	8.0	8.0	2.0	0.19	

分類	No	遺物No	分類内容・特徴	長さ (mm)	幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
Ⅱ	52	518	一部研磨?・剥片	4.0	7.5	1.8	0.07	
Ⅱ	53	524	研磨なし・剥片	8.5	11.0	3.0	0.35	
Ⅱ	54	47	研磨・平坦面なし・折片	14.0	10.0	4.0	0.98	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	55	52	研磨・平坦面なし・折片	29.5	8.5	2.0	0.96	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	56	155	研磨・平坦面なし・折片	19.5	11.0	5.0	1.28	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	57	182	研磨・平坦面なし・折片	21.0	11.5	6.0	1.66	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	58	244	研磨・平坦面なし・折片	24.5	23.5	10.5	6.23	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	59	255	研磨・平坦面なし・折片	17.0	15.0	6.0	1.56	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	60	315	研磨・平坦面なし・折片	20.5	16.0	7.0	3.20	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	61	357	研磨・平坦面なし・折片	26.5	23.5	8.0	6.25	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	62	399	研磨・平坦面なし・折片	28.0	10.5	7.0	2.33	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	63	423	研磨・平坦面なし・折片	21.0	11.0	3.5	1.09	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	64	432	研磨・平坦面なし・折片	24.0	11.0	5.0	1.94	縁辺を折ったもの?
Ⅱ	65	163	一部研磨?あり	52.0	22.0	7.5	10.87	
Ⅱ	66	253	一部研磨?あり	31.0	14.0	5.0	3.29	
Ⅱ	67	257	一部研磨?あり	66.5	22.0	0.8	15.69	
Ⅱ	68	58	板状研磨品	15.0	9.0	2.0	0.47	
Ⅱ	69	161	板状研磨品	24.0	15.0	4.0	2.59	
Ⅱ	70	173	板状研磨品	20.0	14.0	3.5	1.95	
Ⅱ	71	263	板状研磨品	18.5	14.5	2.5	1.64	
Ⅱ	72	263	板状研磨品	16.0	12.0	3.0	0.89	
Ⅱ	73	265	板状研磨品	22.5	15.0	5.5	2.96	板状ではない
Ⅱ	74	314	板状研磨品	17.5	20.5	3.0	2.16	
Ⅱ	75	407	板状研磨品	32.0	21.5	4.5	5.48	
Ⅱ	76	419	板状研磨品	17.0	11.0	4.0	1.11	
Ⅱ	77	424	板状研磨品	21.5	16.5	2.5	1.56	
Ⅲ	78	35	形割・切削剥片	12.0	5.0	3.0	0.17	
Ⅲ	79	37	形割・切削剥片	8.0	6.0	3.0	0.23	
Ⅲ	80	40	形割・切削剥片	9.0	7.0	3.0	0.28	
Ⅲ	81	56	形割・切削剥片	10.5	11.0	4.5	0.90	
Ⅲ	82	73	形割・切削剥片	16.0	8.5	2.0	0.60	
Ⅲ	83	81	形割・切削剥片	15.0	10.0	2.0	0.36	
Ⅲ	84	171	形割・切削剥片	10.0	5.0	3.2	0.27	
Ⅲ	85	223	形割・切削剥片	7.5	7.0	3.0	0.25	
Ⅲ	86	347	形割・切削剥片	7.0	9.0	3.0	0.19	
Ⅲ	87	348	形割・切削剥片	12.0	6.0	2.0	0.23	
Ⅲ	88	355	形割・切削剥片	7.0	8.5	3.5	0.24	
Ⅲ	89	360	形割・切削剥片	8.0	12.0	4.0	0.52	
Ⅲ	90	403	形割・切削剥片	7.5	5.5	2.5	0.17	
Ⅲ	91	413	形割・切削剥片	8.0	7.0	3.0	0.22	
Ⅲ	92	457	形割・切削剥片	8.0	7.0	2.0	0.13	
Ⅲ	93	467	形割・切削剥片	8.0	8.0	3.0	0.19	
Ⅲ	94	472	形割・切削剥片	8.5	8.0	4.0	0.48	
Ⅲ	95	496	形割・切削剥片	9.5	10.5	6.0	0.80	
Ⅲ	96	498	形割・切削剥片	5.5	9.0	4.5	0.31	
Ⅲ	97	103	形割・切削剥片	6.0	13.0	3.0	0.37	
Ⅲ	98	46	形割・切削	9.0	7.0	3.0	0.39	
Ⅲ	99	54	形割・切削	8.0	8.0	2.5	0.28	穿孔破損?
Ⅲ	100	62	形割・切削	10.0	8.5	4.0	0.43	板状ではない
Ⅲ	101	74	形割・切削	11.0	9.5	2.0	0.30	
Ⅲ	102	79	形割・切削	12.0	9.5	2.5	0.44	

分類	No	遺物No	分類内容・特徴	長さ (mm)	幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
Ⅲ	103	80	形割・切削	10.0	10.0	3.0	0.53	
Ⅲ	104	86	形割・切削	7.0	8.0	2.5	0.22	
Ⅲ	105	157	形割・切削	12.5	12.5	4.0	0.68	上面丸み
Ⅲ	106	160	形割・切削	9.0	8.5	3.5	0.31	
Ⅲ	107	190	形割・切削	9.5	8.0	4.5	0.58	
Ⅲ	108	214	形割・切削	8.0	7.5	3.0	0.24	
Ⅲ	109	225	形割・切削	10.0	8.0	3.8	0.44	
Ⅲ	110	231	形割・切削	8.0	7.5	3.5	0.27	
Ⅲ	111	251	形割・切削	10.0	8.0	2.8	0.28	
Ⅲ	112	362	形割・切削	9.0	9.0	3.0	0.37	
Ⅲ	113	387	形割・切削	8.0	9.0	2.0	0.22	
Ⅲ	114	422	形割・切削	9.0	9.5	1.8	0.21	
Ⅲ	115	447	形割・切削	8.0	6.5	2.0	0.17	
Ⅳ	116	1-8	穿孔破損品	6.0	11.0	2.0	0.22	
Ⅳ	117	1-10	穿孔破損品	6.0	8.0	2.5	0.10	
Ⅳ	118	1-11	穿孔破損品	7.0	8.5	3.0	0.24	
Ⅳ	119	1-12	穿孔破損品	6.5	10.0	3.8	0.26	
Ⅳ	120	1-13	穿孔破損品	7.0	8.0	2.0	0.17	
Ⅳ	121	1-14	穿孔破損品	7.0	8.0	2.0	0.11	
Ⅳ	122	1-15	穿孔破損品	4.0	8.0	2.0	0.12	
Ⅳ	123	1-16	穿孔破損品	5.0	10.5	2.5	0.17	
Ⅳ	124	1-17	穿孔破損品	6.0	9.5	4.5	0.37	
Ⅳ	125	1-18	穿孔破損品	6.0	10.0	4.0	0.31	
Ⅳ	126	1-19	穿孔破損品	7.5	9.0	4.5	0.48	
Ⅳ	127	1-20	穿孔破損品	9.0	5.5	4.0	0.24	
Ⅳ	128	1-21	穿孔破損品	5.0	8.5	2.0	0.12	
Ⅳ	129	1-26	穿孔破損品	5.0	8.5	3.5	0.23	
Ⅳ	130	1-27	穿孔破損品	6.0	7.5	3.0	0.15	
Ⅳ	131	1-28	穿孔破損品	6.0	7.5	3.5	0.22	
Ⅳ	132	1-29	穿孔破損品	6.5	7.0	3.0	0.23	
Ⅳ	133	1-30	穿孔破損品	7.5	7.5	2.0	0.19	
Ⅳ	134	1-31	穿孔破損品	5.0	9.0	2.0	0.14	
Ⅳ	135	1-32	穿孔破損品	4.5	9.0	3.0	0.22	
Ⅳ	136	1-33	穿孔破損品	5.0	8.5	1.8	0.12	
Ⅳ	137	1-34	穿孔破損品	4.5	6.5	3.0	0.15	
Ⅳ	138	1-35	穿孔破損品	4.0	8.0	2.5	0.16	
Ⅳ	139	1-36	穿孔破損品	5.0	7.0	3.0	0.16	
Ⅳ	140	6	穿孔破損品	8.5	10.0	2.8	0.26	
Ⅳ	141	31	穿孔破損品	4.0	8.0	2.5	0.10	
Ⅳ	142	32	穿孔破損品	6.5	8.0	2.0	0.15	
Ⅳ	143	39	穿孔破損品	7.5	5.5	3.0	0.27	
Ⅳ	144	49	穿孔破損品	6.0	9.0	2.5	0.20	
Ⅳ	145	72	穿孔破損品	7.5	6.0	2.5	0.18	
Ⅳ	146	87	穿孔破損品	6.0	9.0	3.0	0.22	
Ⅳ	147	100	穿孔破損品	6.5	8.5	2.5	0.29	
Ⅳ	148	103	穿孔破損品	6.5	11.5	3.0	0.26	
Ⅳ	149	118	穿孔破損品	7.0	6.5	4.0	0.25	
Ⅳ	150	149	穿孔破損品	7.0	6.3	3.0	0.17	
Ⅳ	151	158	穿孔破損品	7.0	8.0	3.0	0.23	
Ⅳ	152	166	穿孔破損品	6.0	9.0	3.0	0.17	
Ⅳ	153	169	穿孔破損品	8.5	7.5	4.5	0.38	
Ⅳ	154	176	穿孔破損品	4.0	6.0	3.0	0.13	

分類	No	遺物No	分類内容・特徴	長さ (mm)	幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
IV	155	199	穿孔破損品	5.0	11.0	3.0	0.26	
IV	156	202	穿孔破損品	6.0	7.0	2.0	0.12	
IV	157	221	穿孔破損品	8.0	11.0	2.0	0.25	
IV	158	230	穿孔破損品	5.0	8.5	3.5	0.22	
IV	159	233	穿孔破損品	6.0	10.0	2.5	0.19	
IV	160	342	穿孔破損品	8.0	8.0	3.5	0.28	
IV	161	353	穿孔破損品	8.0	10.0	5.5	0.56	
IV	162	373	穿孔破損品	5.0	10.5	2.5	0.22	
IV	163	394	穿孔破損品	6.0	7.0	4.0	0.27	
IV	164	410	穿孔破損品	5.5	9.0	1.8	0.10	
IV	165	417	穿孔破損品	6.0	8.5	2.0	0.15	
IV	166	427	穿孔破損品	5.5	9.0	2.0	0.19	
IV	167	451	穿孔破損品	4.0	8.0	2.0	0.10	
IV	168	454	穿孔破損品	5.0	8.0	3.5	0.12	
IV	169	455	穿孔破損品	5.0	9.0	2.5	0.11	
IV	170	476	穿孔破損品	8.0	7.5	4.0	0.36	
IV	171	492	穿孔破損品	4.0	7.0	4.0	0.13	
IV	172	495	穿孔破損品	4.0	5.0	4.0	0.12	
IV	173	519	穿孔破損品	4.0	7.5	2.5	0.15	
IV	174	1-3	穿孔破損品	5.5	9.0	4.0	0.29	側面一部研磨?
IV	175	1-9	穿孔破損品	4.0	6.5	2.0	0.08	穿孔ズレ・両面穿孔?
IV	176	228	穿孔破損品	7.0	10.0	2.5	0.26	両面穿孔
IV	177	478	穿孔破損品	6.0	8.0	5.0	0.35	両面穿孔
IV	178	1-23	穿孔途中品	7.0	10.0	2.0	0.26	
IV	179	1-24	穿孔途中品	6.0	9.0	4.0	0.32	
IV	180	1-25	穿孔途中品	7.0	8.0	3.0	0.20	
IV	181	36	穿孔途中品	5.5	6.0	3.0	0.17	
IV	182	43	穿孔途中品	9.5	11.0	3.0	0.42	
IV	183	109	穿孔途中品	8.5	6.5	3.5	0.36	
IV	184	1-22	穿孔途中品	8.0	9.0	4.5	0.44	片面研磨なし
IV	185	121	穿孔途中品	6.0	7.5	2.0	0.12	穿孔ズレ・片面穿孔
IV	186	465	穿孔途中品	6.0	9.0	3.0	0.21	両面穿孔
IV	187	1-1	穿孔完了品	9.0	11.5	3.0	0.42	
IV	188	1-2	穿孔完了品	8.0	8.0	2.8	0.25	
IV	189	1-4	穿孔完了品	8.0	8.5	2.5	0.28	
IV	190	1-5	穿孔完了品	6.0	8.0	3.0	0.19	
IV	191	1-6	穿孔完了品	7.0	9.5	3.0	0.26	
IV	192	44	穿孔完了品	8.0	9.0	2.8	0.32	
IV	193	193	穿孔完了品	8.0	9.0	3.0	0.32	
IV	194	248	穿孔完了品	7.0	8.5	2.0	0.17	
IV	195	334	穿孔完了品	11.0	13.0	3.0	0.63	
IV	196	393	穿孔完了品	8.0	9.0	4.5	0.45	
IV	197	433	穿孔完了品	8.0	8.5	3.0	0.26	
IV	198	446	穿孔完了品	11.5	10.0	2.5	0.38	
IV	199	449	穿孔完了品	8.0	7.0	3.0	0.26	
IV	200	1-7	穿孔完了品	8.0	8.0	2.0	0.22	穿孔ズレ・両面穿孔?
V?	201	375	穿孔完了品	8.0	8.5	2.8	0.32	一部側面研磨
その他	202	425	劍形破損品?	15.0	17.5	3.0	1.51	
その他	203	61	勾玉形?	39.0	22.0	13.0	17.43	工具痕あり
その他	204	241	紡錘車未成品?	48.0	39.0	13.0	39.16	
その他	205	239	砥石 (砂岩製)	31.0	28.0	14.0	13.67	
その他	206	285	軽石 (8点)	-	-	-	70.00	写真のみ

第3章 上高野白幡遺跡

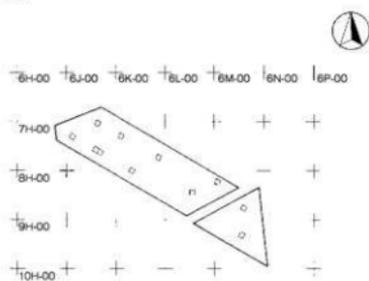
第1節 調査の概要（第37～39図）

上高野白幡遺跡における今回の調査区は印旛沼に注ぐ高野川が支流と合流する地点の南西岸、標高23mの台地上に位置する。

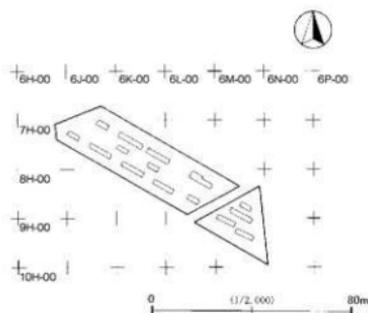
発掘調査にあたっては、未調査区を含む本遺跡の事業範囲を網羅するように公共座標（日本測地系）に基づいて20m×20mの方眼網を設定し大グリッドとした。小グリッドは2m×2mである。7J-00の座標はX = -28,840、Y = 27,740である。

発掘調査は平成22年度に実施した。調査対象面積は2,023㎡で上層237㎡、下層44㎡に対し確認調査を行った。その結果、上層では土坑と竪穴住居跡が確認されたため、その周辺を本調査範囲（810㎡）とした。本調査では縄文時代の土坑1基と弥生時代の竪穴住居跡5軒について精査した。下層については確認調査で2点出土したが、周辺で追加出土がみられなかったため、確認調査で終了した。

遺構名称の略号は、竪穴住居跡はSI、土坑はSKとし、種類毎に通し番号をつけた。報告書作成にあたり、発掘調査で付けた遺構番号をそのまま使用した。なお、今回調査区の両端の事業地内には未調査区が存在する。



第37図 下層確認グリッド配置図



第38図 上層確認トレンチ配置図

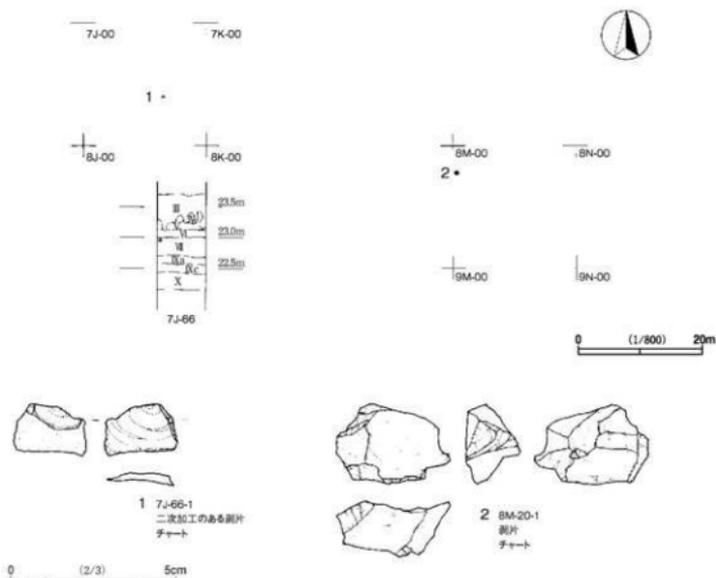


第 39 図 周辺地形図と調査地点

第2節 旧石器時代

単独出土 (第40図、第13表、図版15・18)

1は7J-66グリッドで出土し、出土層位はⅡ層である。チャートの二次加工のある剥片で、表面に自然面を多く残した不定形な剥片を素材とし、裏面右側縁に表面から細かい調整加工を行っている。2は8M-20グリッドで出土した。チャートの厚みのある不定形な剥片である。表面には90度打面転移した剥離面が見られる。



第40図 単独出土遺物分布及び出土遺物

第13表 単独出土石器属性表

神宮 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				mm	mm	mm	g		
第40図	1	7J-66-1	二次加工のある剥片	チャート	22.0	16.0	3.0	1.4	
第40図	2	8M-20-1	剥片	チャート	25.0	35.0	16.0	12.0	

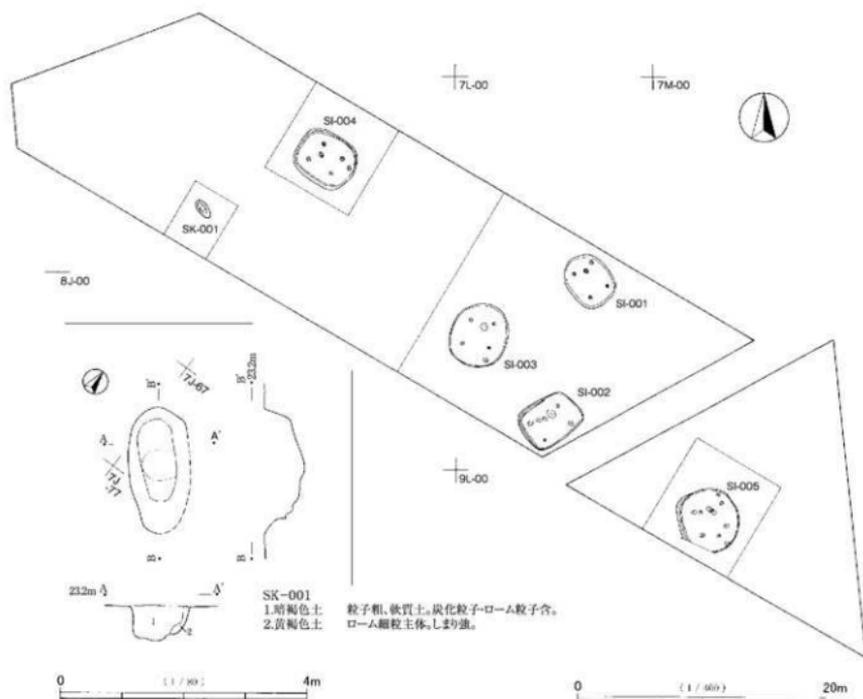
第3節 縄文時代

1 遺構 (第41図、図版17)

SK-001 縄文時代の遺構は、7J-66グリッド周辺で検出された本遺構のみである。遺物は出土しておらず、時期は特定できないが、形状、覆土から考えて、縄文時代の土坑と捉えた。平面形は長楕円形である。長軸方位はN-37°-Wで、長軸長208cm、短軸長100cm、深さ55cmである。

2 遺物 (第42図、図版18)

遺構に伴わないが、早期から後期にかけての縄文土器が少量出土した。1~4は早期条痕文系土器であり、胎土に繊維が含まれる。1は野鳥式で、隆線で区画された口縁部に集合沈線文が充填される。胴部以下には条痕文が施される。2~4は内外面ともに条痕文が施される。2は波状口縁、4は尖底に近い胴部である。5は繊維が含まれ、平底の外底面に縄文が施される前期前半の土器底部である。6は中期前半阿玉台式の土器である。断面三角形の隆線が横位に貼り付けられる。7~13は中期加曽利EⅢ~Ⅳ式の土器である。7は口縁部にナソリによる隆線で無文帯を作出する。以下には縦位の単節縄文LRが施され



第41図 遺構分布図・SK-001

る。8もナゾリによる低平な隆線で無文帯を作成する。複節縄文RLRが縦位に施される。9・10は磨消懸垂文が沈線により作出されるもので、9の磨消部は幅広い。9は0段多条の単節縄文RLが施される。10は単節縄文LRが縦位に施される。11・12は沈線によって無文の帯状部が曲線のモチーフを作出する。いずれも単節RLが縦位に施される。13は地文の単節RL上で両側にナゾリの入る隆線が曲線のモチーフを作出しよう。14・15は後期中葉の土器である。14は沈線と横位単節縄文RLが施される。15は細かな単節縄文LRが横位に施される。



第42図 遺構外出土縄文土器

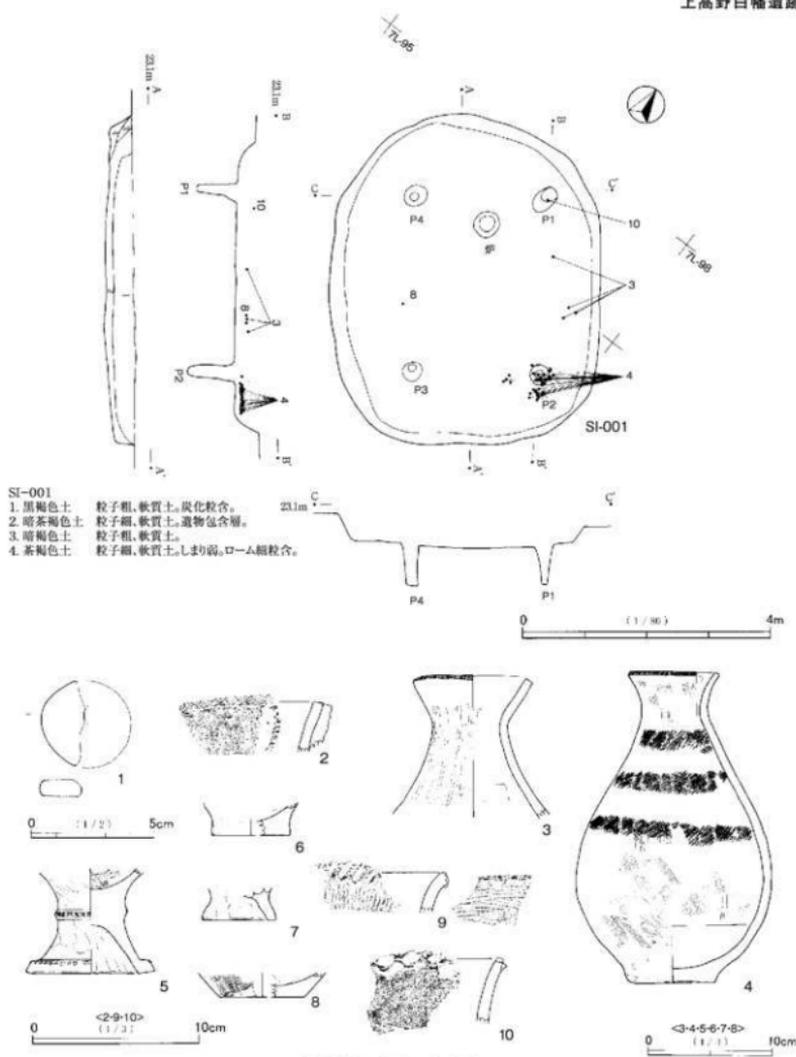
第4節 弥生時代 (第14・16表)

上高野白幡遺跡では弥生時代中期後葉(宮ノ台式期)の竪穴住居跡が5軒まとまって検出された。遺物も豊富で土器の他に石器も相伴しており良好な資料である。以下、遺構番号順に説明する。

S1-001 (第41・43図、図版15・18)

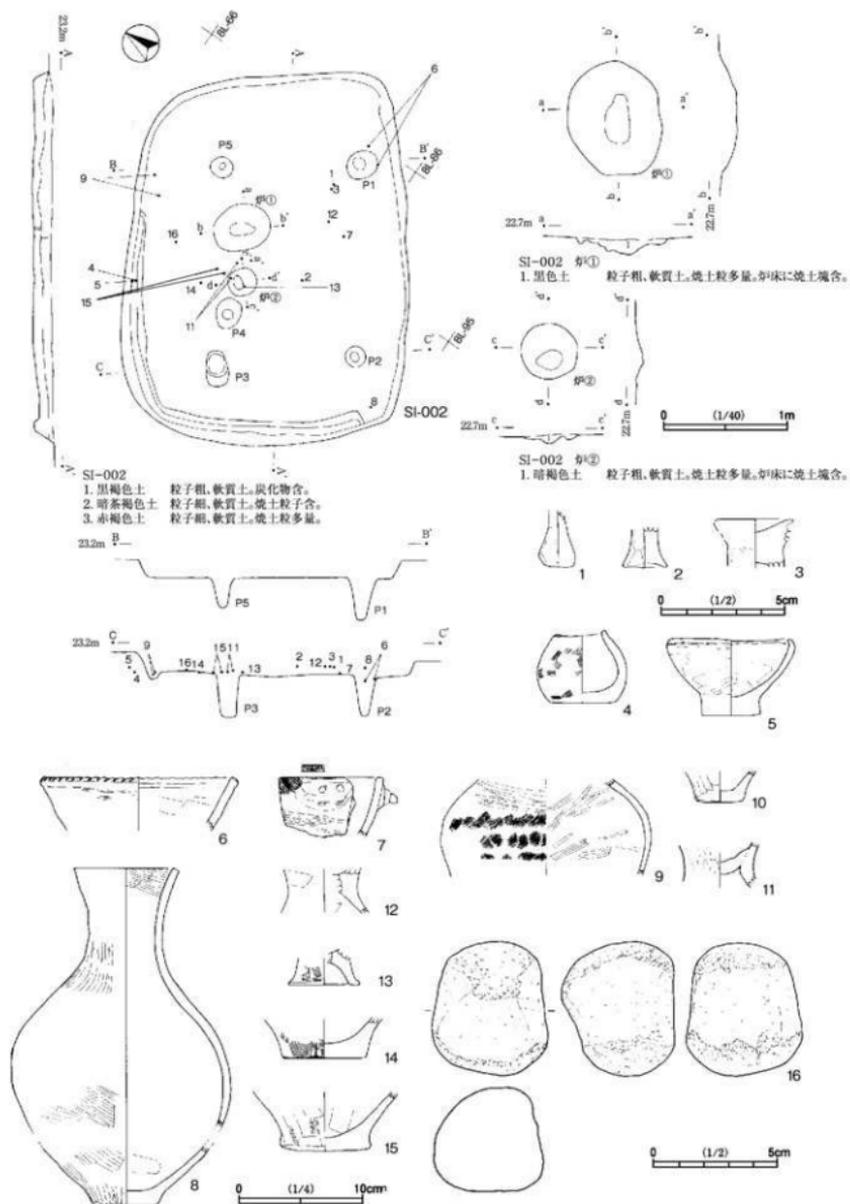
8L-07グリッド周辺に位置する。平面形はやや角が張る不整楕円形である。主軸方位はN-38°-Wで、規模は主軸長5.02m、幅4.0m、深さ44cmである。主柱穴は4本で、北側に寄った部分に炉が付設される。壁はなだらかに立ち上がり、床面は中央部が若干低い。周溝は巡らない。

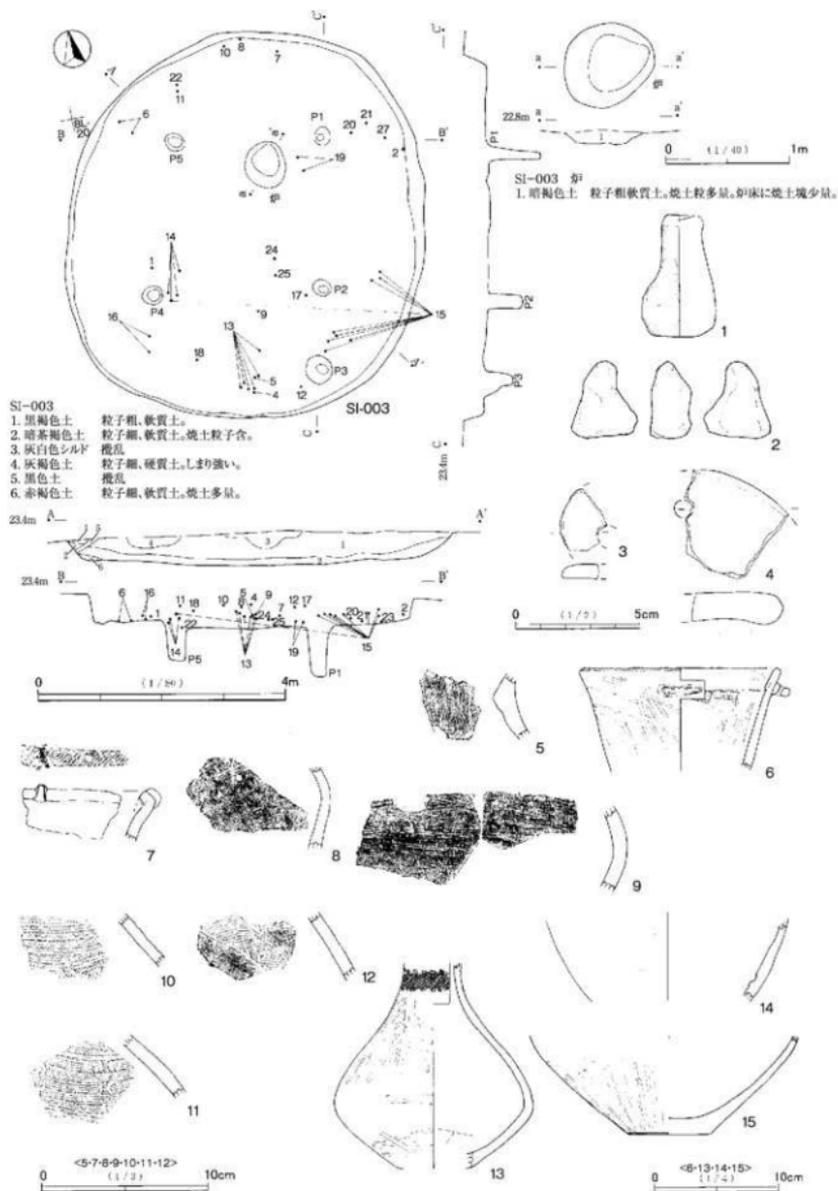
遺物は竪穴東側を中心に出土した。1は土製円板の破片である。中央に穴の痕跡が確認できるため土器の転用で紡錘車の可能性も考えられる。側面は研磨され、上下面とも赤彩される。推定径3.6cm、厚み0.7cm、重量4.7gである。2は壺の口縁破片である。口唇部に細かいLR縄文、外面に刻みのある棒状浮文が施される。口縁端部と外面は部分的に赤彩される。器面は白みを帯びる、胎土も異質である。3は壺の口縁から頸部である。口唇部にLR縄文、外面は無文で丁寧な縦位のナデ・ミガキ調整が施される。4は横位に3状のLR縄文帯が施された壺である。外面調整はハケ目後ナデ、その後にはLR縄文の順に施される。口唇部にもLR縄文が施される。底面は雑なヘラケズリとナデ調整である。5は高坏である。坏部はほとんど遺存しない。坏部内面、脚部外面は赤彩される。脚部中位に突帯が巡り円形刺突、裾部には刻みが施される。底面はハケ目で平らに整形される。6は壺、7は台付鉢、8はハケ甕の底部破片と考えられる。9・10はハケ甕の口縁部破片である。



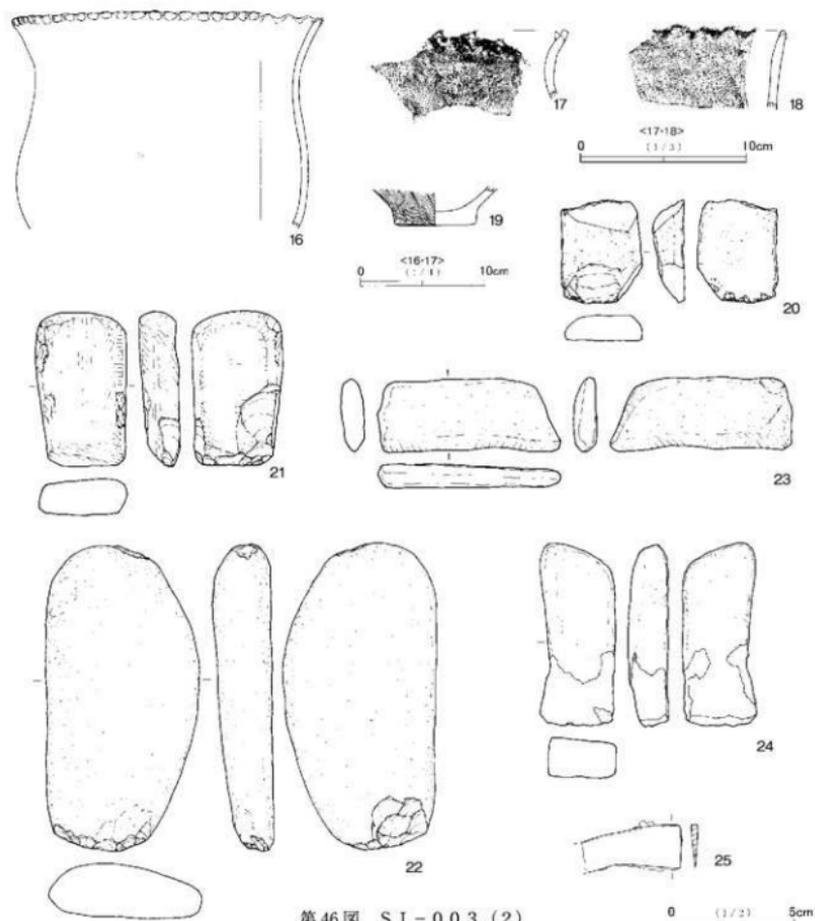
SI-002 (第41・44図、第15表、図版16・19)

8L-74グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸の長方形である。主軸方位はN-55°-Eで、規模は主軸長5.76m、幅4.42m、深さ28cmである。主柱穴は4本で、中央寄りに1基、主柱穴と同規模のビットが検出された。炉は北寄りに1基、中央寄りに小形の炉が1基検出された。壁は開きながら立ち上がる。





第45図 SI-003 (1)



第46図 SI-003(2)

周溝は西側で一部検出された。

1～3はミニチュア土器である。1は壺形、2・3は高坏形と考えられる。4は口縁がすはまる小型の無頸壺である。底面は平らで、外面にはハケ目が部分的に残る。外面にはススが付着する。5は小型の鉢である。口縁は短く内湾する。内外面とも黒い色調である。底部は厚く、底面は平らに整形される。6は口唇部に刻みのある鉢である。胎土は砂っぽく、ざらつく。口縁部直下内部が浅く沈線状に巡る。7は口縁部に耳状突起の付く鉢である。口縁上位と口唇部にRL縄文が施文される。内外面ともに赤彩される。8は細頸壺である。色調は灰白色で、胎土も異質である。口縁内外面にハケ目が施されるが、被熱により

器面が荒れており、部分的にしか確認できない。底部外周は磨減する。9は壺の胴部である。横方向にミガキ調整後、横位に3条の細かいLR縄文帯が施文される。10は壺の底部と考えられる。11～13は台付鉢の底部破片と考えられる。14・15はハケ甕の底部である。16は砂岩製の敲石である。非常に良く使い込まれ、両端部がすり減っている。

S1-003 (第41・45・46図、第15表、図版16・19)

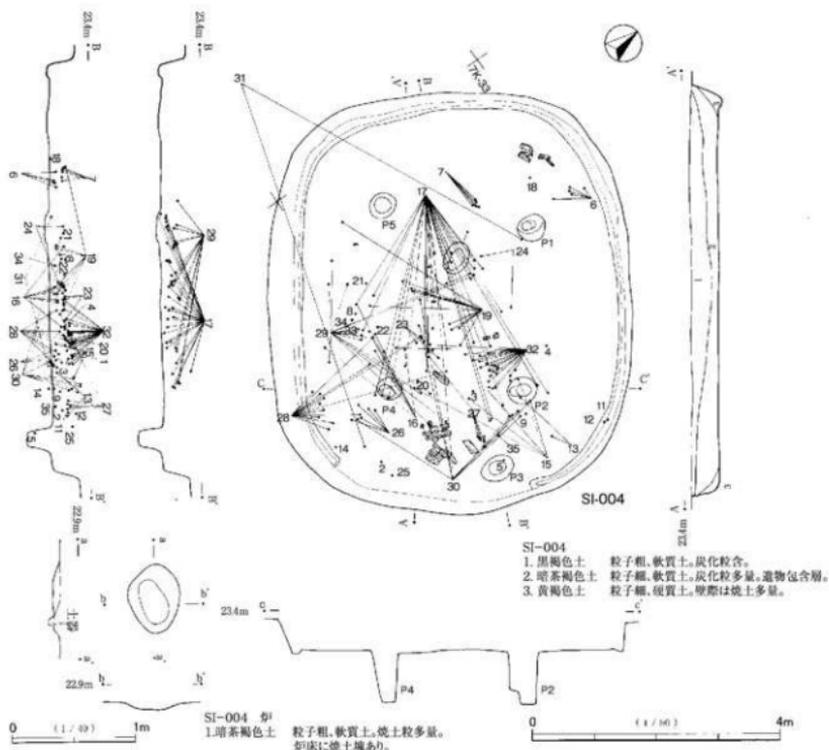
8L-30グリッド周辺に位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN-28°-Eで、規模は主軸長6.24m、幅5.58m、深さ50cmである。主柱穴は4本で、南壁側に寄った部分にやや浅い段のあるピットが1基検出された。炬は中央より北側に寄った部分に付設される。壁はなだらかに立ち上がり、周溝は廻らない。遺物は破片ではあるが、堅穴全体から多く出土した。

1は壺形のミニチュア土器である。2は不明土製品である。土器の突起部分の可能性もある。3・4は有孔円板の破片である。3の裏面は赤彩される。5は台付鉢の台部分と思われる。外面は丁寧なミガキ調整である。6は折り返し口縁の鉢である。口唇部にLR縄文が施され、口縁外側に2孔の耳状突起が添付される。内外面ともミガキ調整が主体である。7～15は壺である。7は折り返し口縁の端部にLR縄文と短い棒状浮文が施される。10は櫛描文、11はx字沈線で区画される擬流水文が施文される。12は細かいLR縄文を沈線で区画している。13は頸部文様帯にLR縄文の上下に刺突列が巡る。胴部は丁寧なミガキ調整である。遺存が不良だが、外面は赤彩されていると考えられる。14はやや焼成が不良である。胎土は白みを帯び、異質である。15は底部であるが外面は丁寧なミガキ、内面は剥落が著しい。16～19は甕である。16～18は口唇部を交互指頭押捺する。16の胴部は張らない形状で、ハケ目は胴部中位でわずかに確認できる。外面にスガが付着している。19は底部破片である。非常に焼成が良好で、堅緻である。20・21は扁平片刃石斧である。21の上面には磨痕がみられる。22は流紋岩製の敲石である。上端・下端に敲打痕がみられ、側面にも磨痕がある。23は砂岩製の石包丁状石器である。刃部の使用した部分がやや凹む。24は凝灰岩製の砥石である。上部が被熱して変色している。25は刀子破片と考えられる。24・25は出土位置は床面からやや離れた高さであるため他時期の可能性もある資料である。

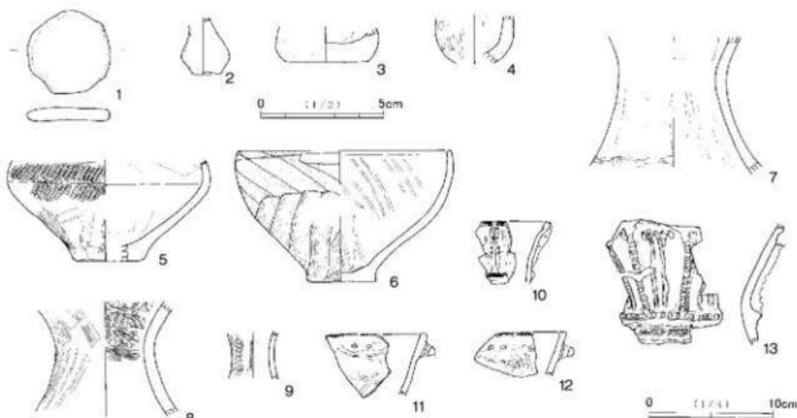
S1-004 (第41・47・48・49図、第15表、図版16・17・20・21)

8L-07グリッド周辺に位置する。平面形はやや角が張る不整楕円形である。主軸方位はN-38°-Wで、規模は主軸長5.02m、幅4.0m、深さ44cmである。主柱穴は4本で、南東壁側に寄った部分にやや浅いピットが1基検出された。中央やや北西寄りに炬が付設される。炬の南東壁には土器片が直立して出土した。周溝はほぼ全周し、壁は比較的急に立ち上がる。全体から遺物は多量に出土し、炭化材・焼土も多く出土しており焼失住居の可能性が高い。

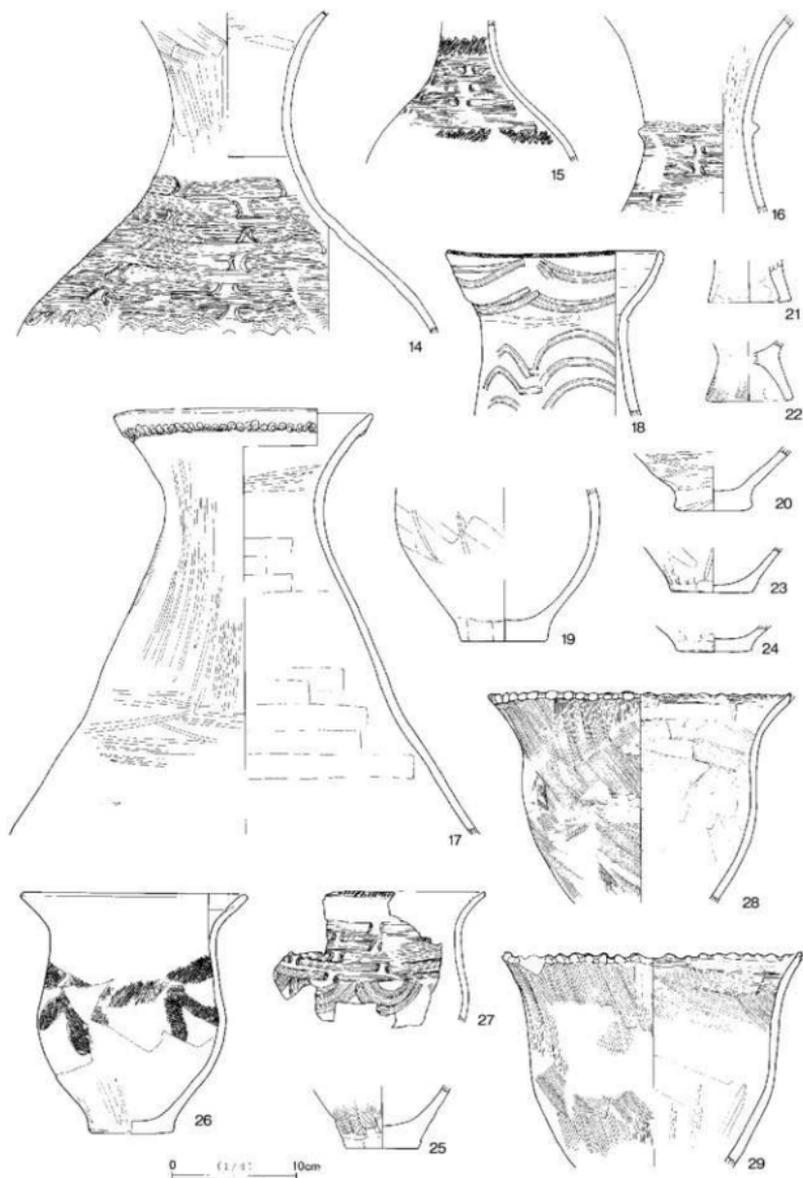
1は土製円板である。器面はざらつく。径3.3cm、厚み0.5cm、重量6.4gである。2は壺形のミニチュア土器である。3は鉢形のミニチュア土器である。4は小型の壺の底部付近の可能性があり。5・6は鉢である。5は口縁に当たる部分が破面であるが磨減しているため、壺の再利用の可能性があり。5の口縁に当たる部分に横位にLR縄文帯が巡る。6は内外面ともに被熱によりスガが付着し、黒色を呈する。7～9は壺の頸部破片である。10は小型壺口縁破片で縦棒状浮文の側面に3か所孔がけられる。11・12は耳状突起の付く鉢の口縁破片である。内外面とも赤彩され、同一個体と考えられる。13は大型の装飾壺の口縁破片である。縦横のキザミのある棒状浮線で区画した内部に浅い沈線が施文される。内外面ともに赤彩される。14～16は擬流水文をx字条の沈線で区画する文様を主体とする壺である。14は擬流水



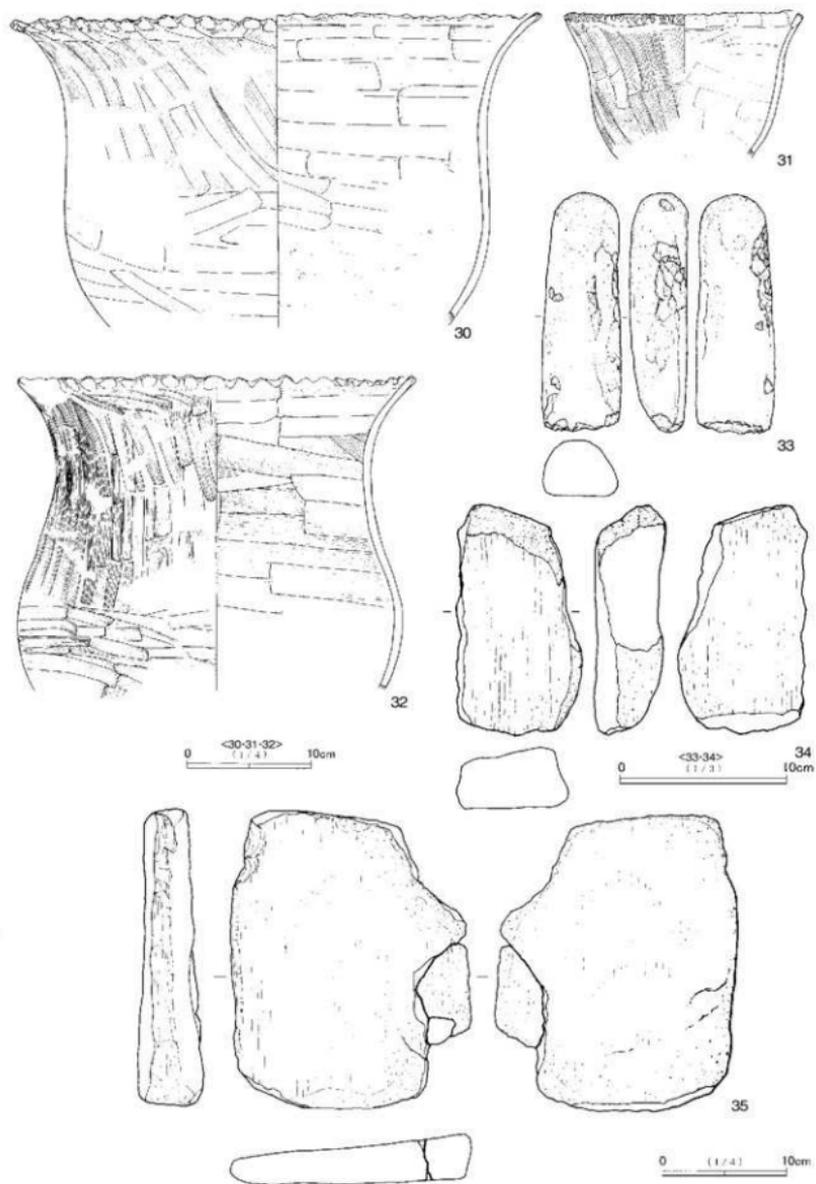
- SI-004
- 1. 黒褐色土 粒子粗、軟質土、炭化粒多量。
 - 2. 暗茶褐色土 粒子細、軟質土、炭化粒多量。遺物包含層。
 - 3. 黄褐色土 粒子細、硬質土、燻層は焼土多量。



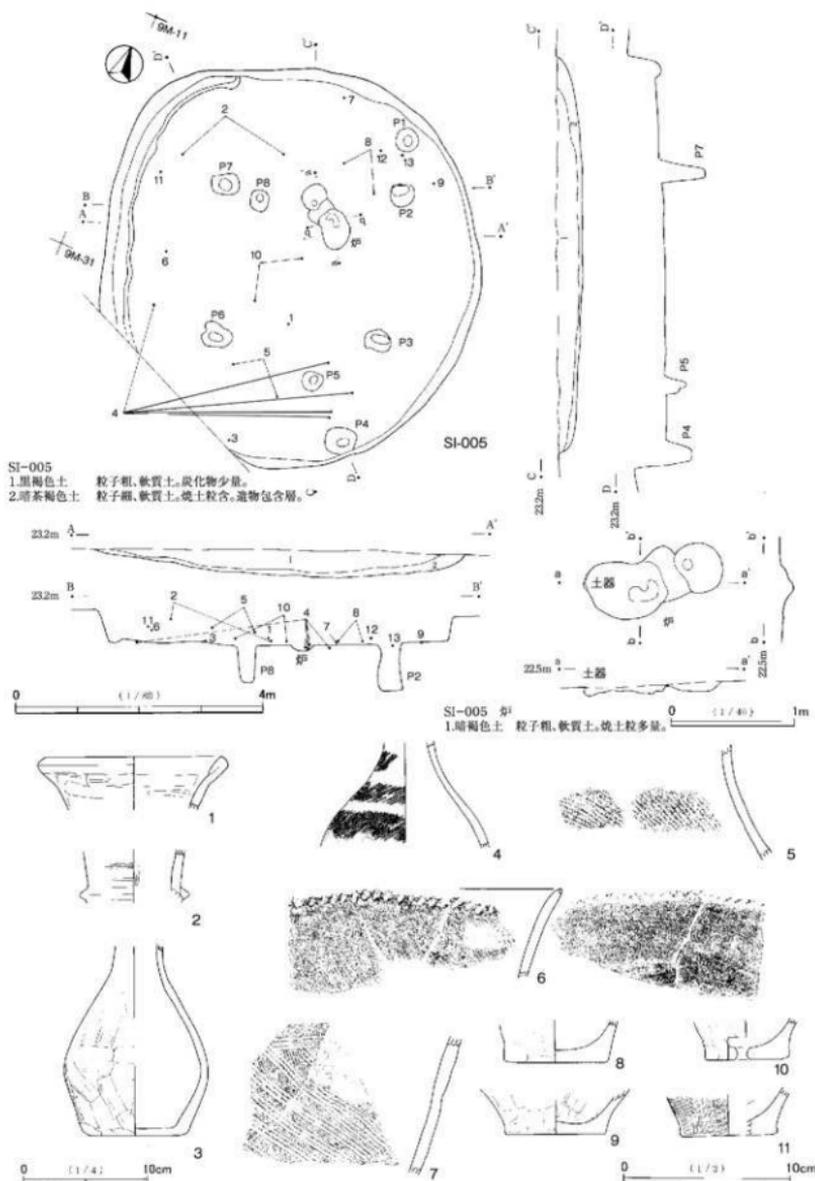
第47図 SI-004 (1)



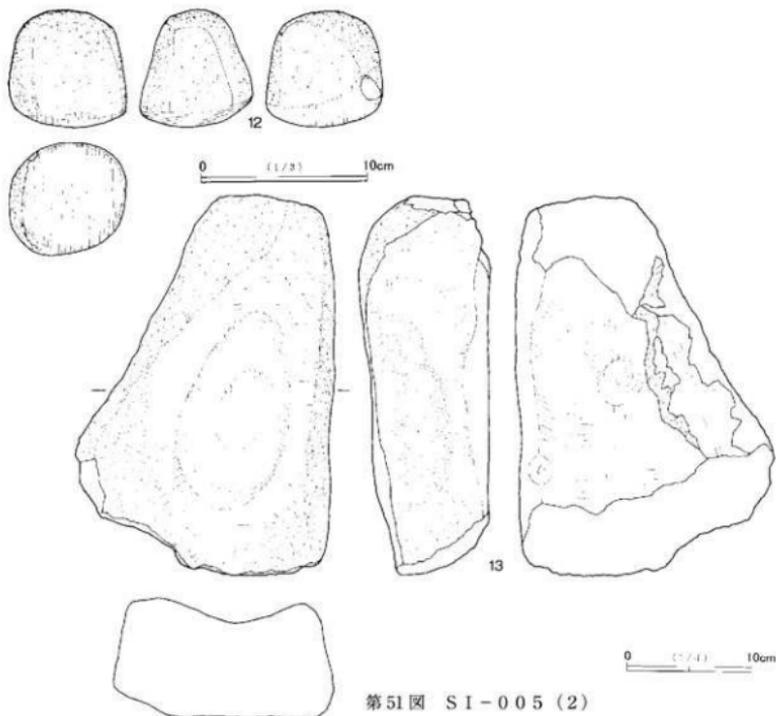
第48图 SI-004(2)



第49图 SI-004 (3)



第50図 SI-005 (1)



第51図 SI-005(2)

文の下に4本単位の丸みのある波状文が横位に施される。色調がやや白みを帯び、胎土が異質である。15は擬流水文の上下に横位の刺突列区画されたLR縄文帯が施文される。16は擬流水文の上に突帯を挟んで6本単位の櫛歯による波状文が施文される。17は大型の壺で頸部が長くハの字に直線的に広がる。口縁部は折り返しで、下端に棒状工具によるキザミが施される。以下頸部から胴部上半は無文で丁寧なミガキ調整である。18は壺の口縁から頸部である。口唇部にLR縄文が施される。先のささくれた3本の茎束の条線で、口縁部は頂部合わせの波状文、頸部はΩ条の文様が施される。19は胴部から底部である。被熱し外面が赤みをおび、内燃はひどく剥落する。20は外面が赤彩された壺の底部である。底面外周が磨滅する。内面の剥落が著しい。21・22は台付部である。21は壺、22は被熱しておりハケ目もみられるため甕の可能性ある。23～25は甕の底部と考えられる。26・27は文様をもつ甕である。26は折り返し口縁で、口縁端部が角張る。胴部はLR縄文を沈線で区画して、結紐文を描く。形はやや崩れており、沈線で区画していない部分も確認できる。27は口唇部にLR縄文が施文される。頸部は擬流水文をx字条の沈線で区画する。胴部は3重の半円文が施される。内面は口縁上端に半円文、その下にハケ目が横位に施される。28～32はハケ甕である。口唇部はキザミや交互指頭押捺が施され、胴部外面全体と内面胴部上半にハケ目が明瞭に施される。被熱して赤く変色した個体がほとんどである。31は小型で丁寧な作

りである。口縁部は折り返して作られる。33はハンレイ岩製の片刃石斧である。34は流紋岩、35が砂岩製の台石である。上下面とも磨り痕が確認できる。

SI-005 (第41・50・51図、第15表、図版17・21)

9M-22グリッド周辺に位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN-16°-Wで、規模は主軸長6.18m、幅5.84m、深さ42cmである。主柱穴は4本で、他にやや浅めのピットが3基検出された。中央やや北寄りに炉が付設される。SI-004と同様に炉の南東壁には土器片が直立して出土した。周溝は北西側で部分的に巡る。壁は緩やかに立ち上がる。

1～5は壺である。1は折り返し口縁部の破片である。口唇部にLR縄文が施される。外面はハケ目状のナデ調整である。胎土は砂っぽくざらつく。2は頸部破片である。突帯状に一条横位に粘土紐が巡る。内外面とも赤彩される。3は小型壺である。外面は弱いハケ目とナデ調整で、赤彩される。4は頸部から胴部で横位のLR縄文帯が横位に3条施文される。5は頸部破片である。細かいRL縄文が横位に施される。胎土は砂っぽくざらつく。内面は剥落している。6・7は甕破片である。6は口唇部にキザミ、内外面は弱いハケ目が施される。7は部分的だが、3本単位の横走羽状文が施されている。8～11は底部である。8・9は壺、10・11は甕と考えられる。10は中央部に焼成後穿孔される。12はハンレイ岩製の磨石、13は大型の砂岩製台石である。台石の上面は使用によりアーモンドのような形態の凹みをもつ。12・13はセットと考えられる。

第14表 弥生時代遺構一覧表

遺構No	グリッド	平面形	主軸方位	主軸長 (m)	幅 (m)	壁高 (cm)	ピット深 (cm)	炉の位置
SI-001	8L-07	不整楕円形	N-38°-W	5.02	4.00	44	P1-65,P2-76, P3-71,P4-72	中央やや北
SI-002	8L-74	隅丸方形	N-55°-E	5.76	4.42	28	P1-59,P2-61,P3-70, P4-63,P5-50	中央やや北
SI-003	8L-30	楕円形	N-28°-E	6.24	5.58	50	P1-83,P2-59,P3-43, P4-70,P5-50	中央やや北
SI-004	7K-43	隅丸方形	N-54°-E	6.40	5.24	45	P1-74,P2-85,P3-40, P4-84,P5-90	中央やや北西
SI-005	9M-22	楕円形	N-16°-W	6.18	5.84	42	P1-16,P2-78,P3-50, P4-11,P5-34,P6-64,2,P8-64	中央やや北

第15表 弥生時代石器属性表

押図番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				mm	mm	mm	g	
第44図	16 SI-002-29	敲石	砂岩	542	461	44.6	164.4	
第46図	20 SI-003-55	偏平片刃石斧	頁岩	418	322	125	30.2	
第46図	21 SI-003-56	偏平片刃石斧	砂岩	617	351	15.8	78.0	ハンレイ岩(細粒)か
第46図	23 SI-003-57	石包丁状石器	砂岩	293	726	9.7	24.6	
第46図	22 SI-003-31	敲石	流紋岩	1124	616	23.8	294.0	石斧か
第46図	24 SI-003-105	砥石	凝灰岩	74.0	31.0	16.0	58.0	被熱
第49図	33 SI-004-356	片刃石斧	ハンレイ岩	145.8	47.1	34.6	420.6	
第49図	34 SI-004-304	台石	流紋岩	138.2	77.4	41.6	408.0	軽石様
第49図	35 SI-004-409	台石	砂岩	241.2	191.0	52.8	2425.5	
第51図	12 SI-005-10	磨石	ハンレイ岩	70.6	70.4	67.9	513.1	
第51図	13 SI-005-2	台石	砂岩	308.4	209.2	104.2	8200.0	

第16表 弥生時代土器類観察表

() 推定 < > 現存長

遺構No	器種	流量(cm)	遺存度	胎土	色類・焼成	技法	備考
001	1	長 3.6	50%	胎土密 混入物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/3 に近い焼	内面 ナテ	赤影が刷かれた 可能性有 重量 4.7g
		幅 1.7			外面 7.5 Y R 7/6 焼	外面 ナテ	
		厚 0.7			焼成 良好	底外面 -	
001	2	口径 -	胎土密 白みを含ぶ 各種微砂粒中 量	内面 7.5 Y R 6/3 に近い焼	内面 ミガキ	内外面とも部分 の赤影	
		底径 -		外面 5 Y R 4/4 に近い赤焼	外面 ミガキ 棒状浮文キザミ		
		器高 -		焼成 やや不良	底外面 -		
001	3	口径 9.6	胎土密 混入物多 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 7/4 に近い焼	内面 ヘラナテ・ナテ 口唇部L&R 横文		
		底径 -		外面 7.5 Y R 7/3 に近い焼	外面 ナテ後ミガキ		
		器高 <8.6>		焼成 良好	底外面 -		
001	4	口径 7.4	胎土密 混入物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/4 浅黄焼	内面 ナテ	外面スズ?	
		底径 7.0		外面 7.5 Y R 7/4 に近い焼	外面 ハケ目後ミガキ・ナテ後ミガキ後L&R 横文		
		器高 25.0		焼成 良好	底外面 施なヘラケズリ ナテ		
001	5	口径 -	胎土密 混入物少 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/6 焼 赤影	内面 坏部ミガキ 脚部ヘラナテ	外面スズ?	
		底径 10.4		外面 2.5 Y R 5/6 明焼 赤影	外面 突帯凹形刺突文 縦部キザミ ミガキ ナテ ハケ目		
		器高 <8.5>		焼成 良好	底外面 ハケ目ナテ		
001	6	口径 -	胎土密 混入物多 各種微砂粒	内面 10 Y R 6/4 に近い黄焼	内面 ナテ ミガキ		
		底径 (6.1)		外面 10 Y R 7/4 に近い黄焼	外面 ナテ		
		器高 <2.7>		焼成 良好	底外面 ナテ		
001	7	口径 -	胎土密 混入物少 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 5/3 に近い焼	内面 ナテ		
		底径 (6.0)		外面 7.5 Y R 6/2 焼	外面 ナテ		
		器高 <2.5>		焼成 良好	底外面 ナテ		
001	8	口径 -	胎土少 混入物多 各種微砂粒	内面 10 Y R 6/4 に近い黄焼	内面 ヘラナテ		
		底径 (6.8)		外面 10 Y R 7/4 に近い黄焼	外面 ハケ目		
		器高 <2.0>		焼成 やや不良	底外面 ナテ		
001	9	口径 -	胎土密 各種微砂 粒中量	内面 7.5 Y R 5/3 に近い焼	内面 ハケ目 (縦) 口唇部ハケ目工具キザミ		
		底径 -		外面 7.5 Y R 4/1 焼 灰	外面 ハケ目 (横)		
		器高 -		焼成 良好	底外面 -		
001	10	口径 -	胎土密 各種微砂 粒中量	内面 7.5 Y R 5/8 明焼	内面 ナテ 口唇部凹文交互移動		
		底径 -		外面 7.5 Y R 5/6 明焼	外面 ナテ		
		器高 -		焼成 やや不良	底外面 ナテ		
002	1	口径 -	胎土密 各種微砂 粒多量	内面 -	内面 -	外面赤影?	
		底径 -		外面 5 Y R 6/6 焼	外面 ナテ		
		器高 <2.3>		焼成 良好	底外面 ナテ		
002	2	口径 -	胎土密 白色微砂 粒中量	内面 -	内面 -		
		底径 -		外面 10 Y R 6/3 に近い黄焼	外面 ナテ		
		器高 <1.6>		焼成 良好	底外面 ナテ		
002	3	口径 -	胎土密 各種微砂 粒中量	内面 7.5 Y R 6/4 に近い焼	内面 ナテ		
		底径 -		外面 7.5 Y R 7/6 焼	外面 ナテ		
		器高 <2.0>		焼成 やや不良	底外面 -		
002	4	口径 4.0	胎土密 混入物少 各種微砂粒	内面 10 Y R 5/3 に近い黄焼	内面 ナテ	内外面スズ付着	
		底径 5.1		外面 10 Y R 7/4 に近い黄焼	外面 ハケ目 ナテ		
		器高 5.9		焼成 良好	底外面 ナテ		
002	5	口径 10.7	胎土密 混入物中 各種微砂粒 (特 に白色)	内面 7.5 Y R 7/4 に近い焼	内面 口唇部ヨコナテ 底部一部ヘラナテ	内外面スズ付着	
		底径 4.4		外面 7.5 Y R 7/4 に近い焼	外面 口唇部ヨコナテ 口唇一部ナテ		
		器高 6.25		焼成 良好	底外面 ナテ・ミガキ		
002	6	口径 (16.0)	胎土密 混入物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 7/4 に近い焼	内面 ナテ	内外面黒底	
		底径 -		外面 7.5 Y R 7/6 焼	外面 ハケ目ナテ 口唇部ハケ目工具キザミ		
		器高 <4.3>		焼成 良好	底外面 -		
002	7	口径 -	胎土密 各種微砂 粒中量	内面 7.5 Y R 5/4 に近い焼	内面 ミガキ	耳状突起 (2孔)	
		底径 -		外面 5 Y R 5/6 明赤焼	外面 口唇部 口唇部H&L 横文 ナテ ミガキ		
		器高 -		焼成 良好	底外面 -		
002	8	口径 8.5	胎土密 混入物多 各種微砂粒 (白 黒目立つ)	内面 10 Y R 7/3 に近い焼	内面 口唇部ハケ目 頸部一部下ナテ 底部ナテ	胎土白みが強い	
		底径 5.0		外面 10 Y R 8/3 浅黄焼	外面 口唇部ナテ 頸部一部ナテハケ目		
		器高 27.5>		焼成 良好	底外面 ナテ		
002	9	口径 -	胎土密 混入物多 各種微砂粒 (特 に黒色目立つ)	内面 7.5 Y R 6/8 焼	内面 ナテ後ミガキ	外面黒底	
		底径 -		外面 10 Y R 7/4 に近い黄焼	外面 上部ミガキ 下位部L&R 横文3条		
		器高 <8.0>		焼成 やや不良	底外面 -		
002	10	口径 -	胎土密 混入物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 7/4 に近い焼	内面 ナテ		
		底径 3.8		外面 5 Y R 6/6 焼	外面 脚部ヘラケズリ後ナテ		
		器高 <2.5>		焼成 良好	底外面 ナテ		
002	11	口径 -	胎土密 混入物中 各種微砂粒	内面 10 Y R 6/4 に近い黄焼	内面 ナテ		
		底径 -		外面 7.5 Y R 7/6 焼	外面 ミガキ		
		器高 <3.8>		焼成 やや不良	底外面 -		
002	12	口径 -	胎土密 混入物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/4 に近い焼	内面 坏底部ナテ 脚部ヘラナテ	内外面スズ?	
		底径 -		外面 7.5 Y R 6/6 焼	外面 ナテ		
		器高 <3.6>		焼成 良好	底外面 -		

濃度No	No	砂種	流量 [cm]	濾存率	土質	色調・組成	技法	備考
004	1	土質円盤	直径 3.4	112 100%	粘土質 各種微砂 粒少量	内面 2.5 Y R 4/1 黄灰	内面 ナダ	
			幅 4.4			外面 10 Y R 7/3 に近い黄褐色	外面 ナダ	
			厚 0.57			組成 やや不貞	底外面 -	
004	2	空 (ミニナマア)	口径 -	90%	粘土質 混入物少 各種微砂粒 (雲 母粒少量)	内面 -	内面 -	
			底径 3.5			外面 5 Y R 6/6 橙	外面 ナダ	
			容高 <2.3			組成 やや不貞	底外面 -	
004	3	空 (ミニナマア)	口径 -	底部 100%	粘土質 混入物多 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/3 に近い黄褐色	内面 ナダ	
			底径 3.4			外面 7.5 Y R 7/4 に近い黄褐色	外面 ナダ	
			容高 <1.4			組成 良好	底外面 -	
004	4	小笠原	口径 -	明下平 40%	粘土質	内面 7.5 Y R 4/2 灰褐色	内面 ココナテ	
			底径 -			外面 5 Y R 7/6 橙	外面 ミガキナダ	
			容高 <3.9			組成 やや不貞	底外面 -	
004	5	鉢	口径 (13.5)	60%	粘土質 混入物中 各種微砂粒	内面 5 Y R 5/6 明赤褐色	内面 口縁-底部ヘラナダ	
			底径 (5.8)			外面 5 Y R 5/4 に近い赤褐色	外面 口縁部2段上&縦文 下-底部ナダミガキ	
			容高 <8.3			組成 良好	底外面 磨滅	上部欠損後再生使用?
004	6	鉢	口径 (17.2)	65%	粘土質 混入物多 各種微砂粒	内面 5 Y R 2/1 黒褐色	内面 口縁部ココナテ 口縁-底部ナダミガキ	
			底径 5.6			外面 5 Y R 1/7 黒	外面 口縁-底部ハナ目	
			容高 10.7			組成 良好	底外面 ヘタズリ後ナダ	内面茶褐色物質 外面スズ 赤 粉心?
004	7	空	口径 -	腹部 80%	粘土質 混入物少 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 7/6 橙	内面 ナダミガキ	
			底径 -			外面 7.5 Y R 7/6 橙	外面 ヘラナダ 横状縦線文	
			容高 <106.6			組成 良好	底外面 -	
004	8	空	口径 -	腹部 60%	粘土質 混入物多 白色微細粒	内面 7.5 Y R 7/3 に近い黄褐色	内面 腹部上位ハケ 下位ナダ	
			底径 -			外面 10 Y R 7/3 に近い黄褐色	外面 ヘラナダ後ミガキ	
			容高 <9.3			組成 良好	底外面 -	
004	9	小笠原	口径 -	腹部破片	粘土質 各種微砂 粒少量	内面 2.5 Y R 5/6 明赤褐色	内面 ナダ	
			底径 -			外面 2.5 Y R 6/6 橙	外面 ハケ目	
			容高 <3.9			組成 良好	底外面 -	
004	10	空	口径 -	口縁部破片	粘土質 混入物少 各種微砂粒	内面 2.5 Y R 4/6 赤褐色	内面 折返し口縁	
			底径 -			外面 10 Y R 4/6 赤	外面 口縁部上&縦文ミガキ 隆帯細上&縦文	
			容高 <9.3			組成 良好	底外面 -	内外面赤影
004	11	鉢?	口径 -	口縁部破片	粘土質 各種微砂 粒少量	内面 2.5 Y R 5/6 明赤褐色	内面 横方向ミガキ	
			底径 -			外面 2.5 Y R 5/8 明赤褐色	外面 口縁部上&縦文 ハケ後ナダミガキ 耳状突起	
			容高 -			組成 良好	底外面 -	内外面赤影 11・ 12 同一個体
004	12	鉢?	口径 -	口縁部破片	粘土質 各種微砂 粒少量	内面 2.5 Y R 5/6 明赤褐色	内面 横方向ミガキ	
			底径 -			外面 2.5 Y R 6/6 橙	外面 口縁部上&縦文 ハケ後ナダミガキ 耳状突起	
			容高 -			組成 良好	底外面 -	内外面赤影 11・ 12 同一個体
004	13	空	口径 -	口縁部破片	粘土質 混入物多 各種微砂粒	内面 10 R 4/8 赤	内面 ミガキナダ	
			底径 -			外面 10 R 5/6 赤	外面 横状縦文・キザミ 縦状沈線 隆帯・キザミ上&縦文	
			容高 -			組成 良好	底外面 -	内外面赤影
004	14	空	口径 -	口縁-1/3部	粘土質 混入物中 各種微砂粒 (雲 母粒少量)	内面 10 Y R 7/2 に近い黄褐色	内面 腹部ナダ 腹部-体部中位ミガキ	
			底径 -			外面 2.5 Y R 6/8 橙	外面 ハケ目後ミガキ 縦流水文X字沈線区画 内形破状文	
			容高 <25.5			組成 良好	底外面 -	内面茶褐色物質
004	15	空	口径 -	腹部-1/3部 上半 80%	粘土質 混入物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 5/2 灰褐色	内面 ナダミガキ	
			底径 -			外面 7.5 Y R 6/4 に近い黄褐色	外面 ナダミガキ 上&縦文帯向突区画 縦流水文X沈線区	
			容高 <11.5			組成 やや不貞	底外面 -	外面赤影 内面 茶褐色物質
004	16	空	口径 -	口縁-腹部	粘土質 混入物多 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 8/6 浅黄褐色	内面 ナダミガキ	
			底径 -			外面 7.5 Y R 8/6 浅黄褐色	外面 ナダミガキ 腹部磨面波状文 突印 縦流水文X沈線区	
			容高 <56.7			組成 良好	底外面 -	
004	17	空	口径 (21.0)	口縁-腹部	粘土質 混入物中 各種微砂粒 (雲 母粒やや多い)	内面 5 Y R 6/8 橙	内面 口縁ミガキ 腹部ヘラナダ	
			底径 -			外面 7.5 Y R 7/6 橙	外面 縁状工具磨跡 ハケ、ナダ後ミガキ	
			容高 <34.7			組成 良好	底外面 -	
004	18	空	口径 17.6	口縁-腹部 上半 90%	粘土質 混入物少 白色針状物質・ 雲母粒少量	内面 5 Y R 6/4 に近い黄褐色	内面 口縁ココナテ 腹部ナダミガキ	
			底径 -			外面 5YR7/6 橙	外面 口縁部上&縦文 ココナテ後ナダ 粗上&沈線破状文	
			容高 <13.4			組成 良好	底外面 -	外面黒黄
004	19	空	口径 -	腹部下平底 部 70%	粘土質 混入物少 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 5/6 明赤褐色	内面 ナダミガキ	
			底径 7.0			外面 2.5 Y R 5/8 明赤褐色	外面 ヘラナダ後ナダミガキ	
			容高 <136.6			組成 やや不貞	底外面 -	内面茶褐色物質
004	20	空	口径 -	底部のみ 100%	粘土質 混入物中 各種微砂粒	内面 10 Y R 6/3 に近い黄褐色	内面 ナダ	
			底径 6.2			外面 2.5 Y R 4/6 赤褐色	外面 ヘラナダ後ナダミガキ	
			容高 <5.2			組成 やや不貞	底外面 木炭粉	外面赤影 内面 茶褐色物質
004	21	台付鉢	口径 -	台部 30%	粘土質 混入物少 各種微砂粒	内面 5 Y R 6/6 橙	内面 ヘラナダ	
			底径 (6.8)			外面 7.5 Y R 6/6 橙	外面 ナダ 腹部ナダ	
			容高 <3.5			組成 良好	底外面 -	
004	22	台付壺	口径 -	台部 50%	粘土質 混入物多 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/6 橙	内面 腹部ナダ 腹部ナダ (ミガキ状)	
			底径 (7.0)			外面 7.5 Y R 7/4 に近い黄褐色	外面 ハケ目後ナダ 腹部無調整?	
			容高 <4.9			組成 良好	底外面 -	外面スズ?

遺構№	No.	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
004	23	壺	口径 -	底部 70%	胎土密 混人物多 白色微砂粒	内面 7.5 Y R 7/4 に近い橙	内面 ナメミガキ	内面茶褐色物質 外面黒色物質
			底径 6.7			外面 10 Y R 7/4 明赤褐色	外面 胴部ハケ目 (ケズリ) のちナメミガキ	
			器高 <3.7>			焼成 やや不且	底外面 ヘラケズリ後ナメ	
004	24	壺	口径 -	底部 95%	胎土密 混人物中 各種微砂粒	内面 5 Y 4/1 灰	内面 ナメ	外面ヘラケズリ後ナメ
			底径 6.1			外面 10 Y R 7/2 に近い黄橙	外面 ヘラケズリ後ナメ	
			器高 <2.0>			焼成 良好	底外面 ナメ	
004	25	壺	口径 -	底部 100%	胎土密 混人物多 各種微砂粒	内面 2.5 Y 2/1 黒	内面 ナメ	内面茶褐色物質 外面黒色
			底径 5.8			外面 2.5 Y 2/2 灰白	外面 ハケ目 底部ヘラケズリ	
			器高 <5.1>			焼成 やや不且	底外面 ナメ	
004	26	壺	口径 (18.5)	65%	胎土密 混人物中 各種微砂粒	内面 7.0YR4/3 黒	内面 ナメミガキ 新り返し口縁	内面スス 外面 スス黒
			底径 6.6			外面 7.5 Y R 5/6 明焼	外面 ナメ・ミガキ 比較区Ⅱ R 焼文	
			器高 <19.6>			焼成 良好	底外面 ナメミガキ	
004	27	壺	口縁-胴部 上半破片	-	胎土密	内面 5 Y R 6/6 橙	内面 口縁上端平切文 惣方向ハケ目ナメ	内外面スス
			底径 -			外面 5 Y R 6/6 橙	外面 L 区焼文 縦流氷文 Y 字状沈箱区画	
			器高 -			焼成 良好	底外面 -	
004	28	壺	口縁-胴部 底径 -	85%	胎土密 混人物少 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 橙	内面 口縁-胴部中位ハケ目 下位強ヘラナメ	内外面スス
			器高 <17.0>			外面 5 Y R 5/6 明赤褐色	外面 指面交互押捺 ハケ目	
			口径 (24.0)			焼成 良好	底外面 -	
004	29	壺	口縁 (24.0)	70%	胎土密 混人物少 各種微砂粒	内面 10 Y R 6/4 に近い黄橙	内面 口縁部ハケ目 胴部ヘラナメミガキ	内外面スス
			底径 -			外面 5 Y R 5/6 明赤褐色	外面 指面? 交互押捺 ハケ目	
			器高 <17.5>			焼成 良好	底外面 -	
004	30	壺	口縁 (43.0)	-	胎土密 混人物中 雲母粒・スコリア 中位 55%	内面 2.5Y5/6 黄褐色	内面 横方向ハケ目 ナメ後ミガキ	外面スス
			底径 -			外面 7.0YR5/8 明焼	外面 指面交互押捺 ハケ目	
			器高 <25.5>			焼成 良好	底外面 -	
004	31	壺	口径 19.2	85%	胎土密 混人物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/6 橙	内面 ハケ目 ヘラナメ 内面附付口縁	内外面加炭
			底径 -			外面 7.5 Y R 7/6 橙	外面 ハケ目工具によるキザミ ハケ目	
			器高 <13.0>			焼成 良好	底外面 -	
004	32	壺	口径 31.6	60% (口縁 80% 胴部 90 器高 <25.6> %)	胎土密 混人物中 白色微砂粒	内面 5YR7/6 橙	内面 ハケ目 ナメ	内外面スス
			底径 -			外面 5YR7/6 橙	外面 指面交互押捺 ハケ目	
			器高 <25.6>			焼成 やや不且	底外面 -	
005	1	壺	口径 (14.4)	-	胎土密 混人物中 各種微砂粒	内面 5 Y R 6/6 橙	内面 横方向ナメミガキ 新り返し口縁	内外面スス
			底径 -			外面 10 Y R 8/4 浅黄褐色	外面 口縁部 L 区焼文 ハケ目状ナメ	
			器高 <4.3>			焼成 やや不且	底外面 -	
005	2	壺	口径 -	-	胎土密 混人物中 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 7/4 に近い橙	内面 ナメミガキ	内外面赤彩
			底径 -			外面 7.5 Y R 7/4 に近い橙	外面 ナメミガキ	
			器高 <4.4>			焼成 良好	底外面 -	
005	3	壺	口径 -	胴部-底部 100%	胎土密 混人物多 各種微砂粒	内面 2.5 Y R 6/4 に近い橙	内面 ナメミガキ?	外面赤彩
			底径 8.0			外面 2.5 Y R 5/6 明赤褐色	外面 ナメ ハケ目 胴部上部網目	
			器高 <15.5>			焼成 良好	底外面 ヘラケズリ後ナメ	
005	4	壺	口径 -	胴部上半 80 %	胎土密 混人物多 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 8/2 浅黄褐色	内面 ナメミガキ	内外面スス
			底径 -			外面 7.5 Y R 7/6 橙	外面 L 区焼文等 3 条帯網目消し (ミガキ)	
			器高 <8.5>			焼成 良好	底外面 -	
005	5	壺	口径 -	-	胎土密 混人物多 白色微砂粒	内面 10YR7/6 明黄褐色	内面 ナメミガキ	内面茶褐色物質
			底径 -			外面 10YR7/4 に近い黄橙	外面 ナメミガキ 細かい L 区焼文 (横位)	
			器高 <7.0>			焼成 やや不且	底外面 -	
005	6	壺	口径 -	-	胎土密 混人物少 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 6/4 に近い橙	内面 ハケ目 (横)	内外面スス
			底径 -			外面 7.5 Y R 6/4 に近い橙	外面 口縁部工具のキザミ ハケ目 (斜め)	
			器高 -			焼成 良好	底外面 -	
005	7	壺	口縁 -	-	胎土密 混人物少 各種微砂粒	内面 5Y 8/6 橙	内面 ハケ目ナメ	外面スス
			底径 -			外面 5Y 8/6 明赤褐色	外面 ハケ目後縁部羽状文か?	
			器高 -			焼成 良好	底外面 -	
005	8	壺	口径 -	底部 90%	胎土密 混人物少 各種微砂粒	内面 10 Y R 7/4 に近い黄橙	内面 ナメ	外面ヘラケズリ後ナメ
			底径 8.4			外面 2.5 Y 8/4 浅い黄	外面 ナメ	
			器高 <3.4>			焼成 良好	底外面 ナメ	
005	9	壺	口径 -	底部 80%	胎土密 混人物多 各種微砂粒	内面 7.5 Y R 7/6 橙	内面 ヘラケナメ	外面ヘラケズリ後ナメ
			底径 (8.0)			外面 7.5 Y R 7/3 に近い橙	外面 ナメ	
			器高 <4.5>			焼成 やや不且	底外面 ナメ	
005	10	瓶	口径 -	底部 75%	胎土密 混人物中 雲母粗粒微量	内面 5 Y R 7/6 橙	内面 ナメ	外面ヘラケズリ後ナメ 方向向成後穿孔
			底径 6.8			外面 7.5 Y R 6/3 に近い橙	外面 ナメ	
			器高 <3.3>			焼成 やや不且	底外面 ナメ	
005	11	壺	口径 -	底部 45%	胎土密 混人物多 各種微砂粒	内面 2.5 Y R 5/6 明赤褐色	内面 ナメ	内面茶褐色物質 外面スス
			底径 (7.4)			外面 7.5 Y R 7/6 橙	外面 胴部下位ハケ目	
			器高 <3.8>			焼成 良好	底外面 ナメ	

第4章 平沢遺跡

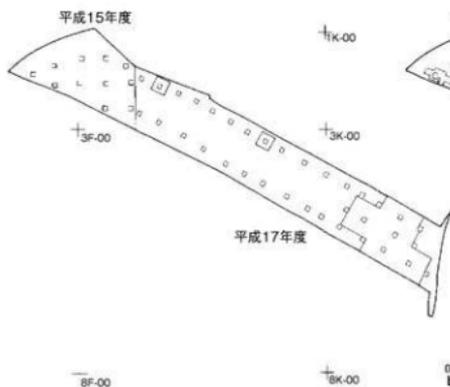
第1節 調査の概要（第52図～第54図）

平沢遺跡における今回の調査区は印旛沼南岸、高野川の支流が形成する小支谷に面した標高23mの台地縁辺部にあたり、東に堂の上遺跡が隣接する。本遺跡は、平成6年度に今回の調査対象地域の南のややはなれた部分を都市計画道路の建設に伴い八千代市教育委員会による発掘調査が行われている。比較的狭い範囲を調査しただけにもかかわらず、弥生時代の堅穴住居跡や奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出されている。

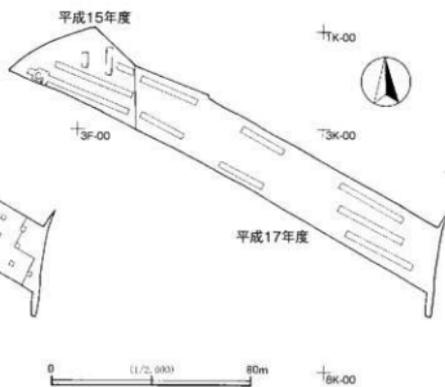
発掘調査にあたっては、公共座標に基づいて堂の上遺跡と共通の20m×20mの方眼網を設定しグリッド設定を行った。設定内容は前述の第2章第1節のとおりである。

発掘調査は平成15年度に西側、平成17年度に東側を対象として2回に分けて実施した。平成15年度は1,068m²に対して確認調査を行った。上層では調査区西端で土坑を2基検出したが、それ以外遺構は確認されなかったため、周囲を拡張し、確認調査の範囲で終了した。下層の確認調査では、旧石器は出土しなかった。本遺跡では立川ローム層が比較的薄く、それに続く武蔵野ローム層も、台地縁辺部分のためあまり厚い堆積がみられず、その下にごく薄い東京バミス層を挟んで常層粘土層が堆積している。この層序の状況は、西側の谷津を挟んだ阿蘇中学校東側遺跡の調査においても同様であった。平成17年度には3,492m²に対して確認調査を実施した。上層では遺構は確認されなかったが、下層では5か所で遺物集中地点が確認されたため、620m²の本調査を実施した。

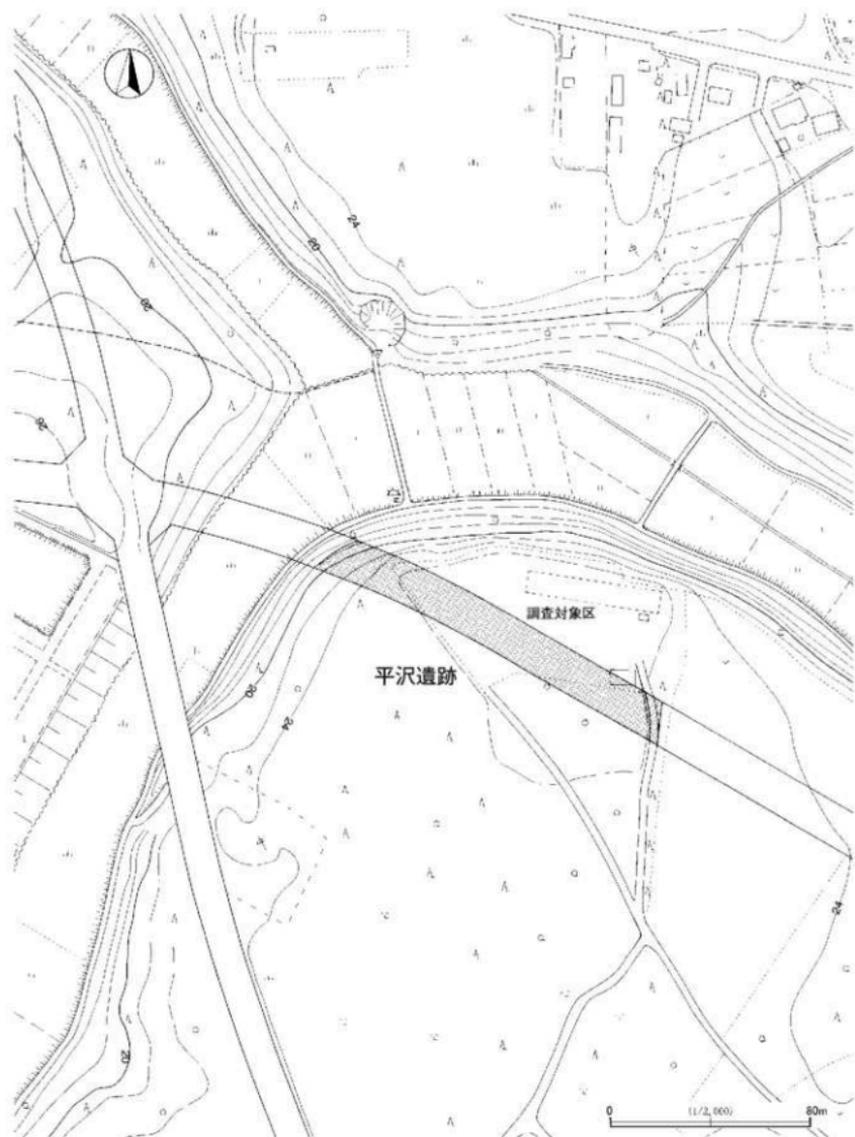
なお、上層で検出された土坑は遺構名称としてSKを付し、通し番号をつけて調査したが、報告書作成にあたり遺構名称・番号は変更していない。



第52図 下層確認グリッド配置図



第53図 上層確認トレンチ配置図



第54図 周辺地形図と路線図

第2節 旧石器時代

単独出土 (第61図、第21表)

2D-28グリッドで出土した。出土層位はV層である。チャートの礫片である。

第1ブロック (第55・56・57・58・59図、第17・18表、図版22・23)

第1ブロックは3F-74・75・83～86・95、4F-21・23・31～33・41・42・グリッドに位置する。ブロックの規模と形状は長軸18m×短軸5mで64点の石器・礫が分布する。出土層位はⅢ層からⅦ層にかけて100cmほどの高低差で包含されている。

集中Aの規模と形状は長軸5m×短軸3mで51点の石器が分布する。出土層位はⅢ層からⅥ層にかけて100cmほどの高低差で包含されている。器種構成は、二次加工剥片2点、剥片32点、砕片16点、石核1点である。石器石材は黒曜石47点、メノウ2点、チャート2点である。

集中Bの規模と形状は長軸2m×短軸1mで2点の礫が分布する。出土層位はⅦ層で30cmほどの高低差で包含されている。石器石材は砂岩1点、流紋岩1点である。

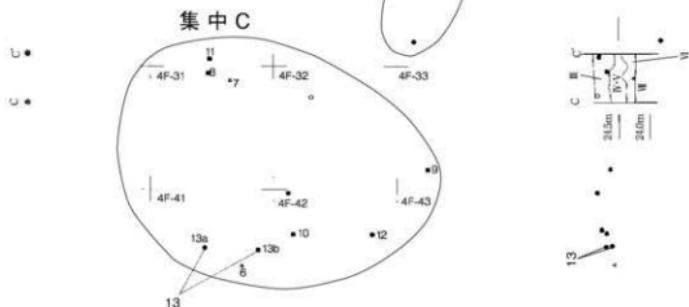
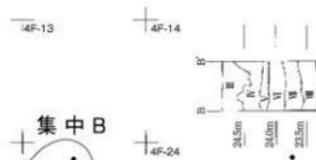
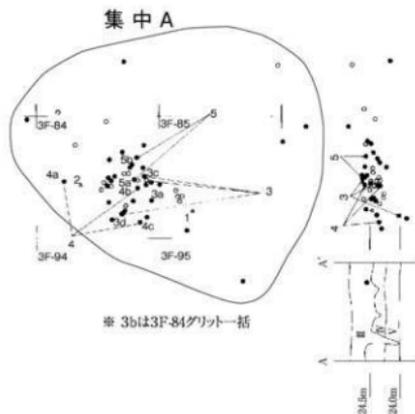
集中Cの規模と形状は長軸5m×短軸4mで11点の石器が分布する。出土層位はⅢ層からⅥ層にかけて80cmほどの高低差で包含されている。器種構成は、二次加工剥片2点、剥片2点、砕片1点、石核6点である。石器石材はメノウ10点、珪質頁岩1点である。

1～5は集中A出土の石器で、1・2は黒曜石の二次加工のある剥片である。黄灰色の夾雑物を含む若干透明感のある栃木県高原山産と推測される黒色の黒曜石である。1は小型で不定形な折断剥片の両側縁に細かい調整加工を行っており、左側縁の調整加工は折断面を打面としている。2は同じく小型で不定形な剥片の末端の一部に細かい調整加工を行っている。3は黒曜石の剥片・石核の接合資料である。黄灰色の夾雑物を多量に含む栃木県高原山産と推測される漆黒の黒曜石である。3a・bと3c・dの2つに折れた剥片の内、後者を石核として頻繁な打面転移を行いながら、3cのような不定形な剥片を剥離している。なお、3a・bは接合して1個体となるが、3aとbとc・dは同時割れの可能性がある。4は黒曜石の不定形な剥片の接合資料である。黄灰色の夾雑物を多量に含む栃木県高原山産と推測される若干透明感のある黒色の黒曜石である。表面と底面には自然面が残っている。4aと4bの新旧関係は不明であるが、aを剥離後、90度打面転移してb・cを剥離している。5は黒曜石の不定形な剥片の接合資料である。黄灰色の夾雑物を多量に含む栃木県高原山産と推測される漆黒の黒曜石である。5bを剥離後、打点を左に移動して5aを剥離している。表面等の観察から頻繁に90度の打面転移を行っていたことが分かる。

6～13は集中C出土の石器で、6・7はメノウの二次加工のある剥片である。6は剥片の末端両側縁に細かい調整加工を行っている。裏面左側縁の一部に微細な剥離痕が見られる。基部加工のナイフ形石器の破損品の可能性がある。7は小型の縦長剥片(あるいは石刃)の表面の右側縁下部と裏面の右側縁下半部に調整加工を行っている。裏面の剥離痕は表面に比べるとより微細であることから使用に伴うものかもしれない。8は灰褐色で硬質緻密な珪質頁岩の石核である。頻繁に90度の打面転移を繰り返しながら、小型で不定形な剥片を剥離している。9～12はメノウの石核である。9は両面に求心的な剥離を行って小型で不定形な剥片を剥離している。10は図上、正面の旧主要剥離面と考えられる平坦な剥離面を打面として、小型で不定形な剥片を剥離している。11は正面に対向する剥離面が見られ、裏面の器体中央には旧主要剥離面と考えられるポジティブな剥離面が見られることから、剥片を素材としたことが分かる。その裏面側に求心的な剥離を行って小型で不定形な剥片を剥離している。12は図上、正面に旧主要剥離面



- 二次加工のある割片
- 割片
- 石核
- 碎片
- 礫



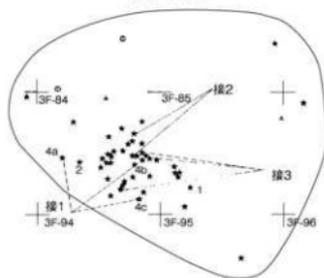
第55図 第1ブロック出土遺物分布 -器種別-

0 (1/80) 2m



- 珪質頁岩
- 黒曜石
- メノウ
- ✱ チャート
- ✱ 流紋岩
- ✱ 砂岩

集中 A



4F-13

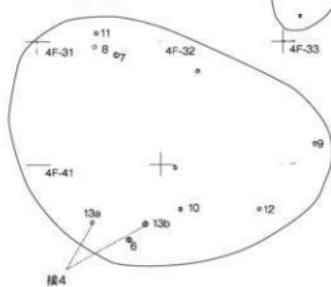
4F-14

集中 B

4F-23

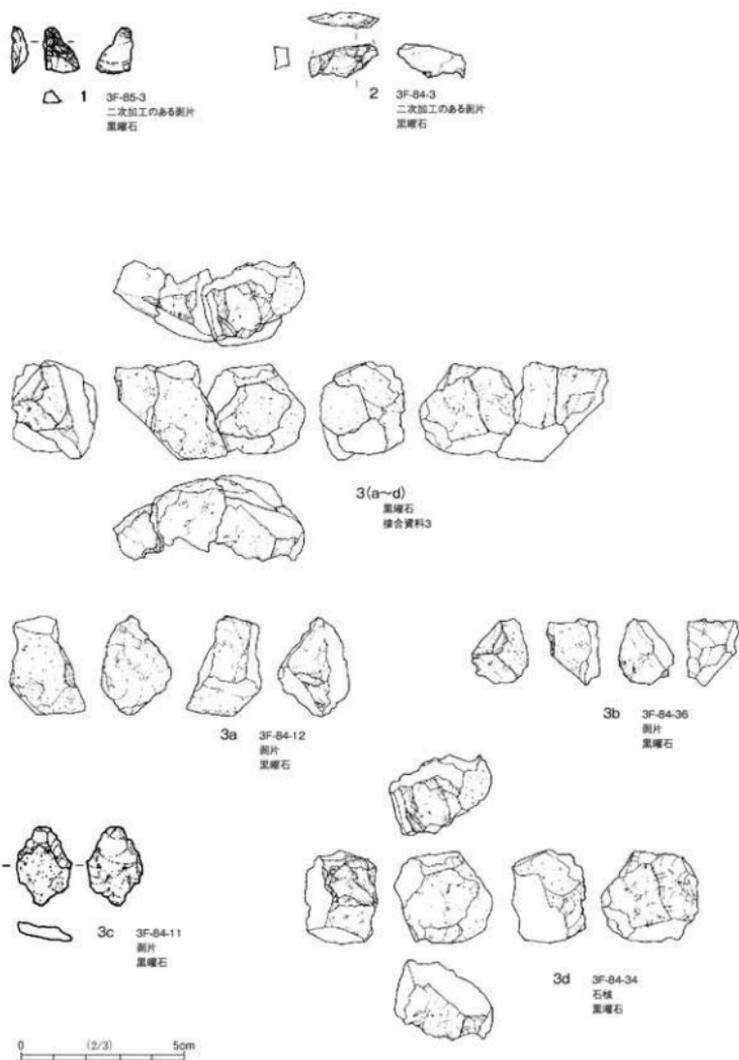
4F-24

集中 C

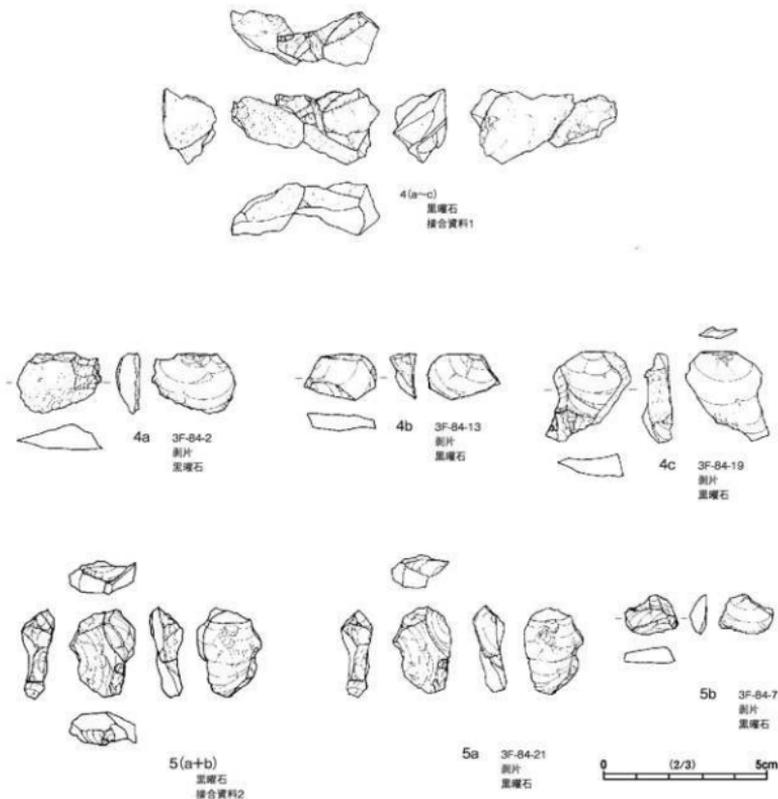


0 (1/80) 2m

第 56 図 第 1 ブロック出土遺物分布 - 石材別 -



第57図 第1ブロック出土遺物(1) -集中A-



第58図 第1ブロック出土遺物(2) -集中A-

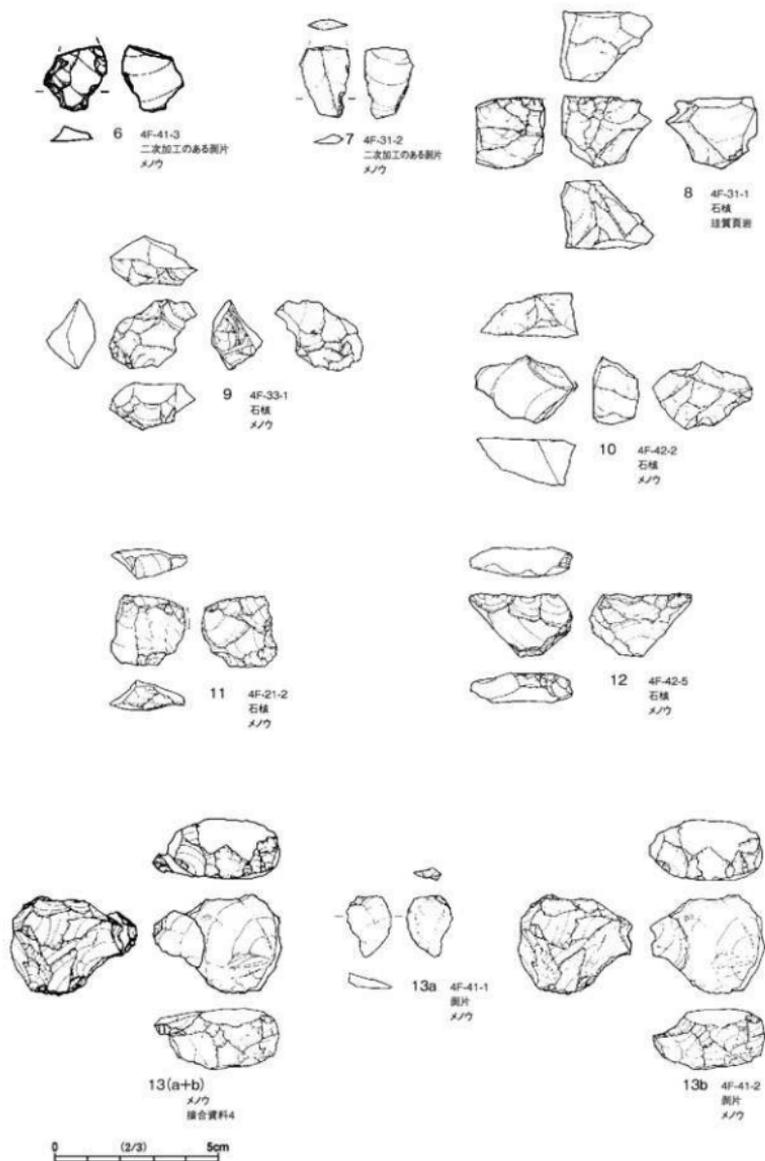
と考えられる平坦な剥離面が見られ、剥片を素材としたことが分かる。上部の表裏両面で打点を移動しながら、小型で不定形な剥片を剥離している。13はメノウの剥片・石核の接合資料である。13は比較的大型の剥片を素材とし、旧主要剥離面を打面として、周回するように打点を移動して、小型で不定形な剥片を剥離しているが、13aは作業面とは直行する小型の剥片であることから、打面再生ないし調整剥片の可能性はある。

第2ブロック(第60図、第19・20表、図版23)

第2ブロックは4F-00グリッドに位置する。ブロックの規模と形状は長軸3m×短軸1mで4点の石器が分布する。出土層位はⅢ層からⅣ層にかけて20cmほどの高低差で包含されている。

器種構成は、剥片4点である。石器石材は安山岩2点、珪質頁岩1点、メノウ1点である。

1は安山岩の不定形な剥片である。正面下部と右側面に自然面が残っている。

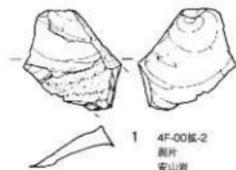
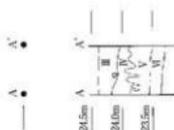


第59図 第1ブロック出土遺物(3) - 集中C -



3E-67

3E-97



0 (2/3) 5cm

- 割片
- 安山岩
- 割片
- メノウ
- 砂片
- 柱状貫岩

0 (1/80) 2m

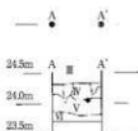
第 60 図 第 2 ブロック出土遺物分布



2C-28

2C-29

● 壁
チャート



0 (1/80) 2m

第 61 図 単独出土遺物分布

第17表 第1ブロック出土石器属性表

神岡 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量 g	備考	
				mm	mm	mm			
第57図	1	3F-85-3	二次加工のある剥片	黒曜石	15.0	11.0	5.0	0.6	集中A
第57図	2	3F-84-3	二次加工のある剥片	黒曜石	21.5	10.0	5.0	0.9	集中A
第57図	3a	3F-84-12	剥片	黒曜石	30.0	20.0	21.0	11.2	集中A、接合資料3
第57図	3b	3F-84-36	剥片	黒曜石	20.0	17.0	15.0	3.4	集中A、接合資料3
第57図	3c	3F-84-11	剥片	黒曜石	24.0	17.0	4.0	2.0	集中A、接合資料3
第57図	3d	3F-84-34	石核	黒曜石	28.0	30.0	22.0	17.6	集中A、接合資料3
第58図	4a	3F-84-2	剥片	黒曜石	25.0	18.5	7.5	2.8	集中A、接合資料1
第58図	4b	3F-84-13	剥片	黒曜石	14.5	22.0	8.0	2.2	集中A、接合資料1
第58図	4c	3F-84-19	剥片	黒曜石	24.0	23.5	10.0	4.4	集中A、接合資料1
第58図	5a	3F-84-21	剥片	黒曜石	27.0	18.0	10.0	3.8	集中A、接合資料2
第58図	5b	3F-84-7	剥片	黒曜石	12.0	16.5	5.0	0.8	集中A、接合資料2
		3F-74-1	砕片	メノウ	8.0	7.0	2.3	0.1	集中A
		3F-74-2	剥片	メノウ	20.0	12.0	6.5	1.9	集中A
		3F-75-1	砕片	黒曜石	13.0	8.0	5.2	0.8	集中A
		3F-83-1	剥片	黒曜石	17.0	12.0	6.7	1.5	集中A
		3F-84-1	砕片	黒曜石	13.0	11.0	6.9	0.8	集中A
		3F-84-4	砕片	チャート	14.0	10.0	2.7	0.4	集中A
		3F-84-5	剥片	黒曜石	14.0	20.0	6.8	1.8	集中A
		3F-84-6	剥片	黒曜石	12.0	11.0	3.5	0.5	集中A
		3F-84-8	剥片	黒曜石	16.0	16.0	4.0	1.0	集中A
		3F-84-9	剥片	黒曜石	13.0	14.0	3.0	0.4	集中A
		3F-84-10	剥片	黒曜石	24.0	20.0	8.8	3.3	集中A
		3F-84-14	砕片	黒曜石	10.0	5.0	2.3	0.1	集中A
		3F-84-15	剥片	黒曜石	9.5	11.0	3.2	0.4	集中A
		3F-84-16	剥片	黒曜石	13.0	8.0	4.3	0.3	集中A
		3F-84-17	剥片	黒曜石	11.0	17.0	5.4	0.8	集中A
		3F-84-18	剥片	黒曜石	24.5	15.0	8.0	2.8	集中A
		3F-84-20	剥片	黒曜石	15.5	13.0	3.5	0.7	集中A
		3F-84-22	剥片	黒曜石	14.0	14.0	4.0	1.0	集中A
		3F-84-23	剥片	黒曜石	18.0	9.5	5.7	1.0	集中A
		3F-84-24a	砕片	黒曜石	9.5	7.0	2.5	0.1	集中A
		3F-84-24b	砕片	黒曜石	9.0	5.0	2.1	0.1	集中A
		3F-84-25	剥片	黒曜石	14.0	1.0	4.9	0.8	集中A
		3F-84-26	砕片	黒曜石	7.0	5.5	3.2	0.1	集中A
		3F-84-27	砕片	黒曜石	7.0	5.0	0.7	0.1	集中A
		3F-84-28	砕片	黒曜石	6.0	4.0	1.7	0.1	集中A
		3F-84-29	砕片	黒曜石	9.0	5.0	2.5	0.1	集中A
		3F-84-30	剥片	黒曜石	20.0	11.0	4.5	0.9	集中A
		3F-84-31a	剥片	黒曜石	17.0	12.5	5.8	1.3	集中A
		3F-84-31b	砕片	黒曜石	6.5	5.0	1.6	0.1	集中A
		3F-84-32	剥片	黒曜石	11.0	10.0	2.7	0.3	集中A
		3F-84-33	剥片	黒曜石	12.0	11.0	3.2	0.3	集中A
		3F-84-35	剥片	黒曜石	13.5	16.0	5.2	1.2	集中A
		3F-85-1	剥片	チャート	13.0	21.0	7.5	1.8	集中A
		3F-85-2	砕片	黒曜石	11.0	7.5	4.3	0.3	集中A
		3F-85-4	剥片	黒曜石	12.5	18.5	4.2	1.0	集中A
		3F-85-5a	砕片	黒曜石	10.5	8.5	3.3	0.2	集中A
		3F-85-5b	砕片	黒曜石	13.0	6.0	2.5	0.2	集中A
		3F-85-6	砕片	黒曜石	5.0	3.0	1.8	0.1	集中A
		3F-86-1	剥片	黒曜石	15.0	16.5	3.4	0.4	集中A
		3F-95-1	剥片	黒曜石	12.5	24.0	8.9	2.7	集中A
		4F-23-1	礫	砂岩	41.0	18.0	15.8	10.5	集中B
		4F-23-2	礫	流紋岩	64.0	46.0	10.7	51.4	集中B
第59図	6	4F-41-3	二次加工のある剥片	メノウ	18.0	20.0	4.0	1.7	集中C
第59図	7	4F-31-2	二次加工のある剥片	メノウ	22.0	13.0	3.3	1.2	集中C
第59図	8	4F-31-1	石核	珪質頁岩	22.0	28.0	21.0	15.0	集中C
第59図	9	4F-33-1	石核	メノウ	20.5	21.0	15.0	6.1	集中C
第59図	10	4F-42-2	石核	メノウ	20.0	30.0	14.0	7.0	集中C
第59図	11	4F-21-2	石核	メノウ	21.5	22.0	9.5	4.4	集中C
第59図	12	4F-42-5	石核	メノウ	19.0	28.0	9.0	5.4	集中C
第59図	13a	4F-41-1	剥片	メノウ	19.0	14.0	3.7	1.0	集中C、接合資料4
第59図	13b	4F-41-2	石核	メノウ	31.0	35.0	18.0	21.2	集中C、接合資料4
		4F-32-1	砕片	メノウ	11.5	12.5	4.2	0.5	集中C
		4F-42-1	剥片	メノウ	20.5	11.5	5.0	0.9	集中C

第18表 第1ブロック出土石器組成表

石 材	器 種	二次加工の ある剥片	剥片	砕片	石核	敲石	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
チャート			1	1			2	3.13	2.20	1.06
黒 曜 石	2	30	14	1			47	73.44	77.30	37.20
珪 質 頁 岩					1		1	1.56	15.00	7.22
砂 岩						1	1	1.56	10.50	5.05
メ ノ ウ	2	3	2	5			12	18.75	51.40	24.74
全 体 点 数 合 計		4	34	17	7	2	64	100.00	207.80	100.00

第19表 第2ブロック出土石器属性表

神宮 番号	遺物番号	器 種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	
				mm	mm	mm	g		
第60図	1	4F-00 披-2	剥片	安山岩	29.0	30.0	6.5	6.0	第1ブロックと同一母岩か
		4F-00 披-1	剥片	メノウ	9.5	10.5	9.6	1.2	
		4F-00 披-4	砕片	珪質頁岩	14.0	13.5	6.7	0.9	

第20表 第2ブロック出土石器組成表

石 材	器 種	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
珪 質 頁 岩	1	1	25.00	0.90	11.11	
メ ノ ウ	1	1	25.00	1.20	14.81	
全 体 点 数 合 計		4	4	100.00	8.10	100.00

第21表 単独出土石器属性表

神宮 番号	遺物番号	器 種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考
				mm	mm	mm	g	
第61図	2D-30-1	礫	チャート	17.0	8.5	5.1	0.9	

第3節 縄文時代

1 遺 構

SK-001 (第62・63図、図版22・23)

1E-93グリッド周辺に位置する土坑である。南西に浅い不整形な凹みが見られるが伴うものかどうかは不明である。平面形はややいびつな楕円形で、長軸方位はN-30°-E、規模は長軸長276cm、短軸長220cm、深さ42cmである。底面は中央部がやや高く、周縁がわずかに凹む。北側壁面の立ち上がりは急である。覆土中に焼土がブロックと第8層の下位の底面部分も被熱痕が認められる。

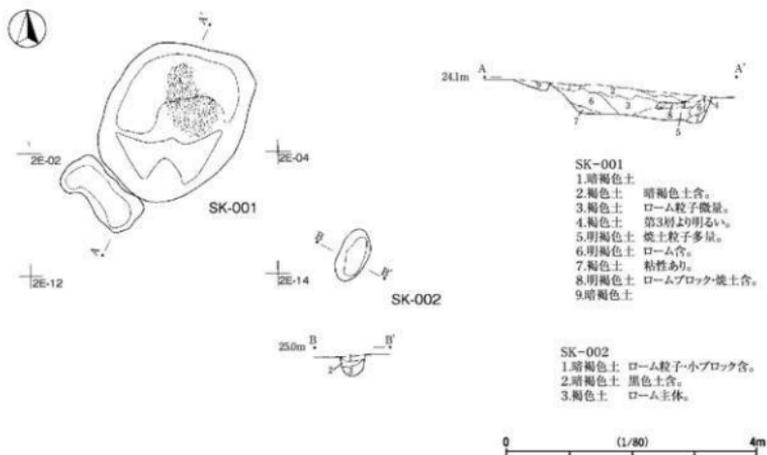
覆土中からは縄文土器の細片と石器剥片が出土した。1～7は擦痕状の調整痕から早期の田戸上層式から子母口式の時期と考えられる。1～3は口縁部である。1・3は丸い口唇部、2は指によるつまみ上げのような薄い口唇部である。8は早期捻糸文土器である。井草式ないしは夏島式であろう。9は地文が無節で縦位の結節を伴う。中期前葉の土器である。また、出土した石器の石材はチャートが主体で一部頁岩が含まれる。恐らく石鏃製作に伴うもので楔形石器と剥片が確認できる(図版23)。

SK-002 (第63図、図版22)

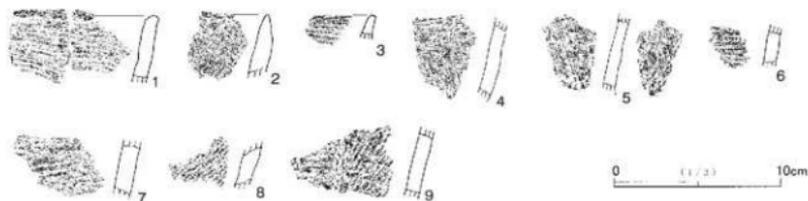
2E-14グリッド周辺で、SK-001の南東2mに位置するピット状の土坑である。平面形は長い楕円形で、長軸方位はN-24°-E、規模は長軸長90cm、短軸長47cm、深さ37cmである。遺物は出土していない。

2 遺構外出土土器 (第64図、図版23)

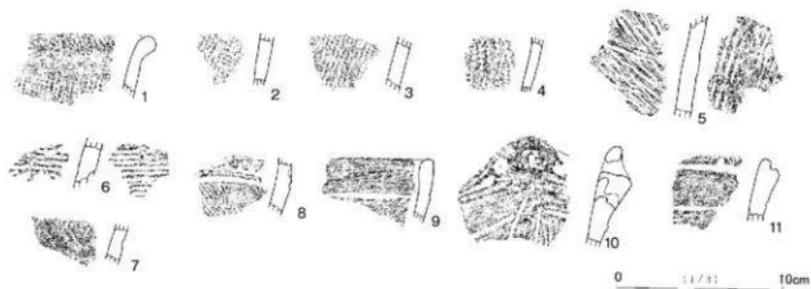
遺構外から出土した土器は、わずかな量である。早期、前期、後期の土器からなる。1～4は早期の捻糸文土器である。1は口縁部である。口唇部が外反し肥厚する。縄文原体が口唇部と胴部に施文されている。井草Ⅱ式である。2～4も胎土と施文から同型式であろう。5・6は表裏に貝殻条痕を伴っている。早期後半であろう。7はアナタラ属の貝殻による波状貝殻文を伴う。浮島ⅡないしⅢ式であろう。8は陰刻文を沈線に沿って施文している。下部は縦位の結節縄文が施文されている。五領ヶ台式である。9～11は後期掘之内式Ⅰ式である。9は口縁部内面が膨らむ。幅の狭い無文帯を沈線で区画し、それ以下は縄文を施文している。10・11は口縁部である。10は波状の口縁部突起で貫通する小孔がある。波頂下に沈線による文様が施されている。11は口唇部に沈線が施され、外面は無文帯となっている。



第62図 SK-001・SK-002



第63図 SK-001出土縄文土器



第64図 遺構外出土縄文土器

第5章 赤作遺跡

第1節 調査の概要（第65図～第67図）

赤作遺跡における今回の調査区は新川東岸、高野川支流の最奥部にあたる標高26mの台地上に位置する。平成9年度に同事業で先行して調査を実施した部分では縄文時代の土坑、中・近世の溝や土坑等が検出されており、それについては平成11年3月に同事業の巻1として発掘調査報告書で報告されている。

発掘調査にあたっては、今回の平成11年度・12年度・14年度・16年度調査区に合わせて20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。小グリッドは2m×2mである。起点(1A-00)の座標はX = -28,460、Y = 26,260である。

発掘調査は平成11年度に、2,505㎡を対象として上層290㎡、下層106㎡の確認調査を実施した。その結果、上層では、縄文時代の陥穴および土坑、中・近世の溝状遺構を検出した。下層は、99㎡の本調査を実施し、石器集中地点1か所を検出し、99㎡の本調査を実施した。平成12年度には、161㎡を対象に上層161㎡、下層6㎡の確認調査を実施したが、ほぼ全域が深く掘削されており、遺物・遺構が確認されず、確認調査で終了した。平成14年度は、対象面積1,194㎡について上層119㎡、下層48㎡の確認調査を行った。その結果、上層では、中・近世の土坑墓4基、中・近世の溝状遺構2条を検出した。下層では石器集中地点1か所を検出し、64㎡の本調査を実施した。平成16年度は、927㎡を対象として上層136㎡、下層40㎡の確認調査を行い、近世と考えられる溝状遺構3条のみ検出した。

なお、上層で検出された土坑・溝状遺構は遺構名称としてSK・SDを付し、通し番号をつけて調査したが、報告書作成にあたり遺構名称・番号は変更していない。

第2節 旧石器時代

第1文化層第1ブロック（第68・69図、第22・23表、図版24・28）

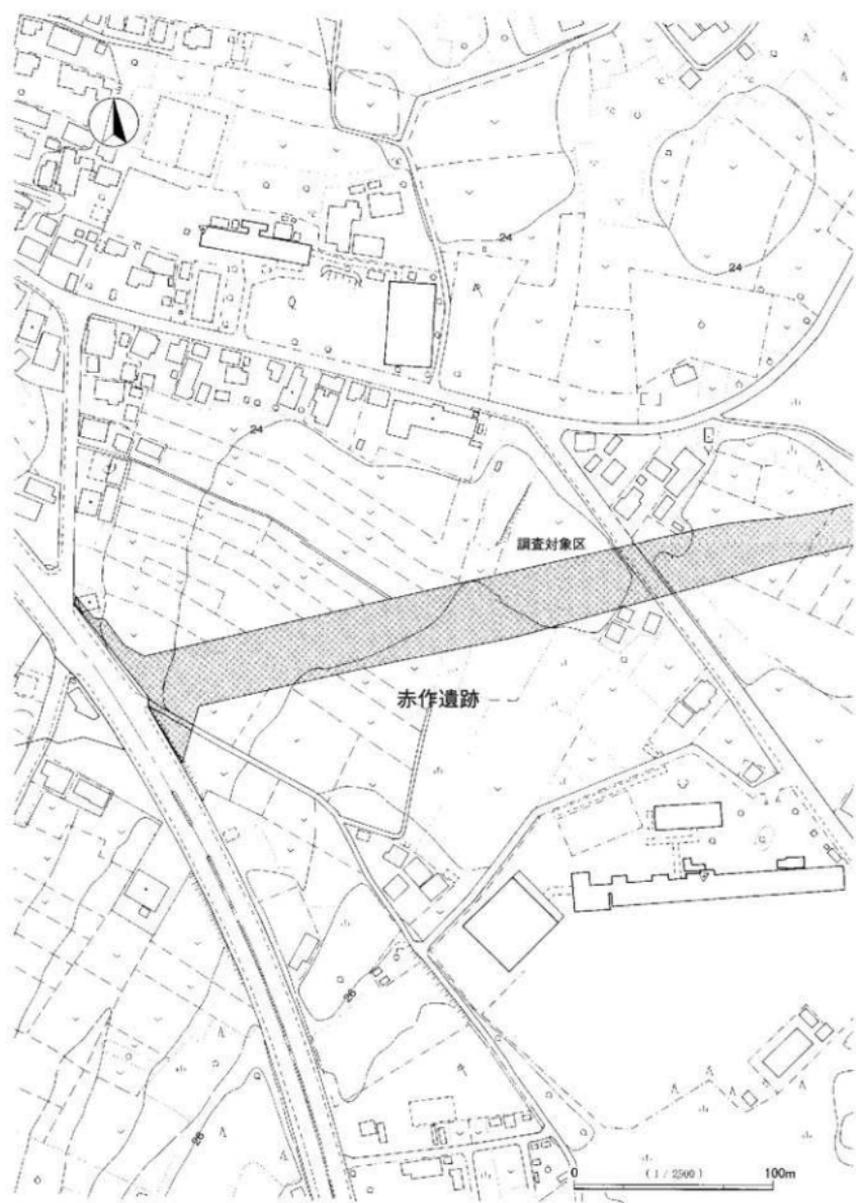
第1文化層第1ブロックは15AA-06・15・16グリッドに位置する。ブロックの規模と形状は直径1mで3点の石器が分布する。出土層位はX a層からX b層にかけて30cmほどの高低差で包含されている。

器種構成は、ナイフ形石器1点、剥片2点である。石器石材は珪質頁岩である。

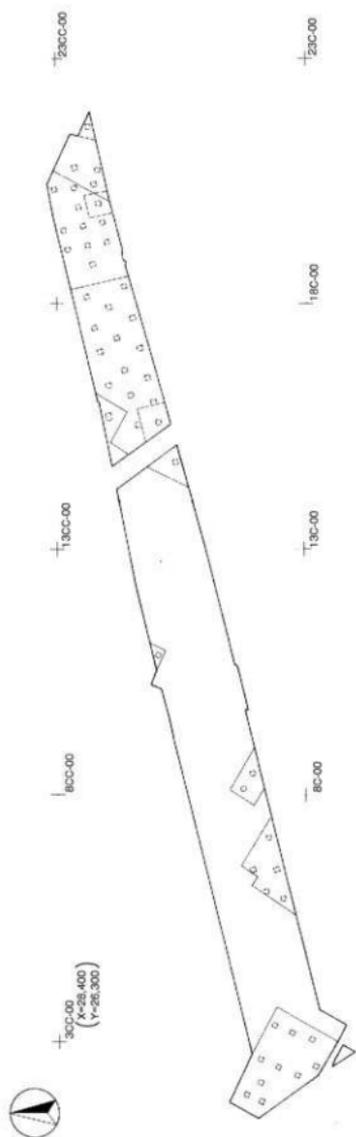
1・2は珪質頁岩の石器である。珪化度が極めて高くいわゆる海沢層産チャートに類似している。他に本ブロック出土で図示しなかった資料も同様な石材である。1は二側縁加工のナイフ形石器である。石刃の打面側を基部とし、正面左側縁と右側縁下部及び裏面右側縁下部に細かい調整加工を行っている。ただし、正面左側縁上部の剥離痕は他の剥離痕に比べ微細なことから、使用痕の可能性もあり、その場合、両面右側縁下部の加工による基部加工のナイフ形石器と考えられる。なお、先端部が欠損している。2は後付き石刃あるいは石刃状の縦長剥片である。器体中央に細かい剥離痕が見られるが、稜上調整と考えられる。

第2文化層第1ブロック（第70・71図、第24・25表、図版24・28）

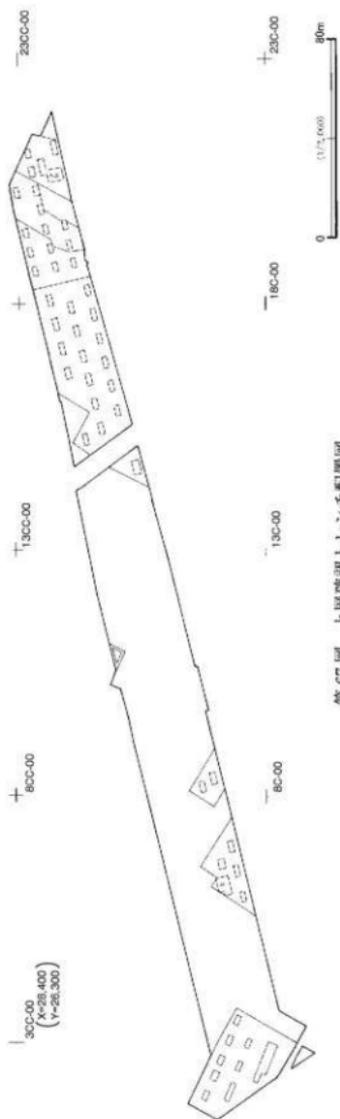
第2文化層第1ブロックは15BB-95、15AA-05グリッドに位置し、ブロックの規模と形状は長軸5m×短軸3mの範囲に6点の石器が分布する。出土層位はⅢ層からⅥ層にかけて40cmほどの高低差で包含されている。



第 65 図 周辺地形図と路線図



第66図 下層確認グリッド配置図



第67図 上層確認トレンチ配置図

器種構成は、使用痕のある剥片1点、剥片5点である。石器石材は珪質頁岩6点である。

1～4は珪質頁岩の石器である。珪化度が高くいわゆる嶺岡産珪質頁岩（八丁層ノジュールを含む）の可能性がある。他に本ブロック出土で図示しなかった資料も同様な石材である。1は珪質頁岩の使用痕のある剥片である。裏面左側縁下部に細かい剥離痕が見られる。2～4は珪質頁岩の不定形な剥片である。2は若干縦長の剥片である。3は若干縦長の剥片で表面に自然面が残る。八丁層ノジュールか。4は厚みのある横長の剥片である。節理が発達しており、ブロック状に剥離（剥落）している。

第3文化層第1ブロック（第72・73図、第26・27表、図版28）

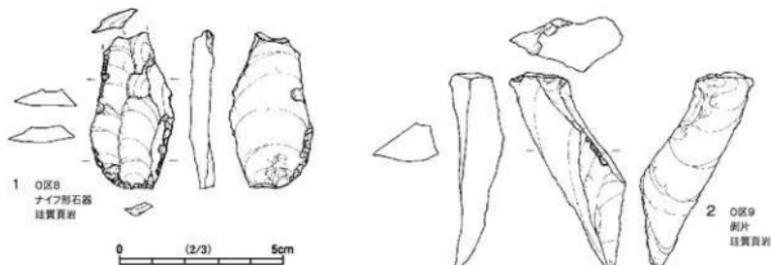
第3文化層第1ブロックは19CC-79・89、20CC-70・80グリッドに位置する。ブロックの規模と形状は長軸5m×短軸4mの範囲に7点の石器が分布する。出土層位はⅢ層からⅧ層にかけて40cmほどの高低差で包含されている。

器種構成は、二次加工剥片1点、剥片4点、碎片1点、石核1点である。石器石材は黒曜石3点、珪質頁岩4点である。

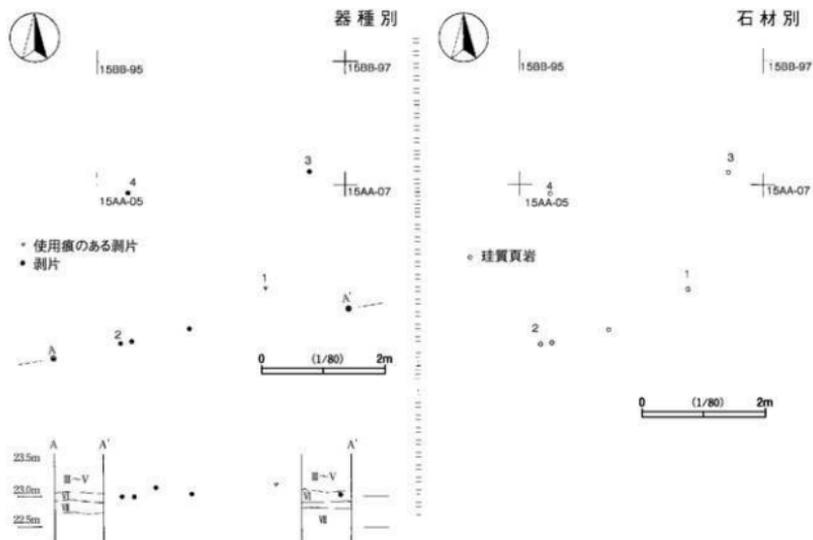
1は黒曜石の二次加工のある剥片である。薄墨を流したような透明な地に黒灰色のもやが入る和田峠周辺産と推測される黒曜石である。左側面に自然面が残り、末端右側に剥離痕が見られる。2は黒曜石の石核である。薄墨を流したような透明な和田峠周辺産と推測される黒曜石で、黒灰色の比較的大型の夾雑物を含む。両面に求心的な剥離作業を行って小型で不定形な剥片を剥離している。なお、裏面右側の大半は自然面の可能性が高い。3・4は珪質頁岩の不定形な剥片である。3は末端側に自然面か節理が残っている。4は表面に頭部調整と考えられる細かい調整痕が見られ、左側面の平坦面を打面として小型の剥片を数枚剥離した後、再び90度打面転移して4を剥離している。なお、正面には細かい頭部調整痕に切られなおかつ直交する剥離痕が見られることから、4が剥離されるまでに何度か90度の打面転移を行っていたことが分かる。



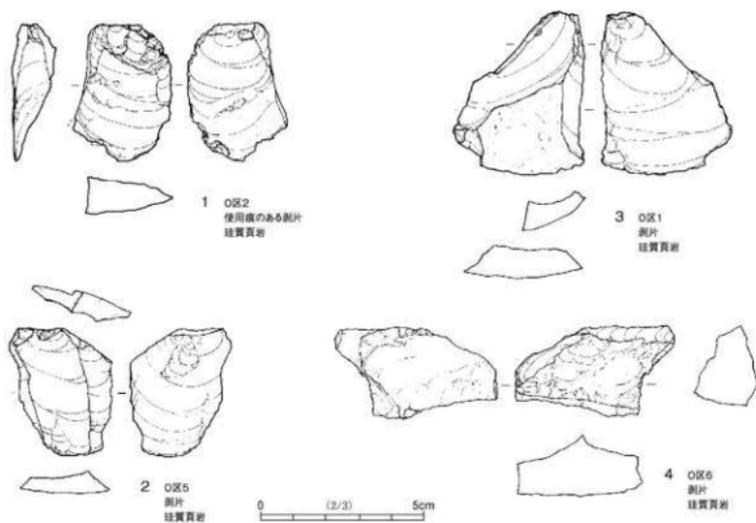
第68図 第1文化層第1ブロック出土遺物分布



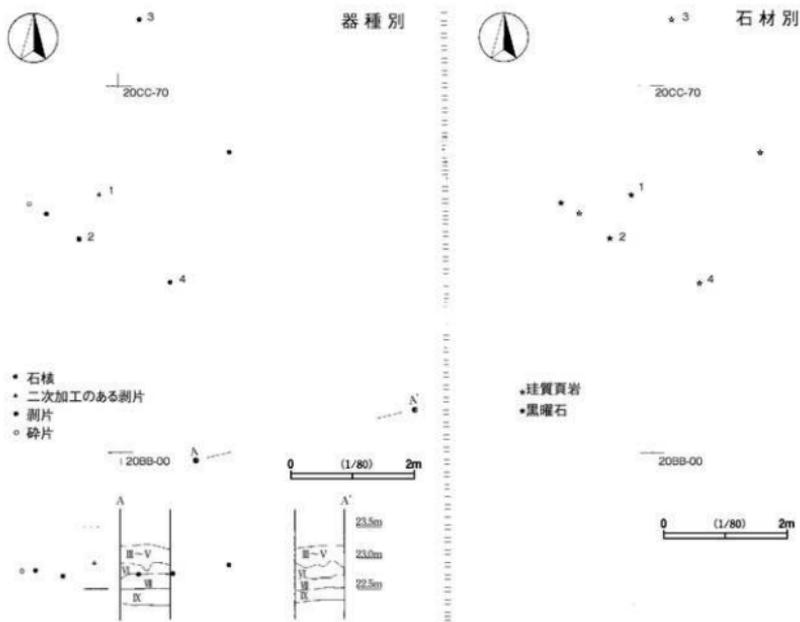
第69図 第1文化層第1ブロック出土遺物



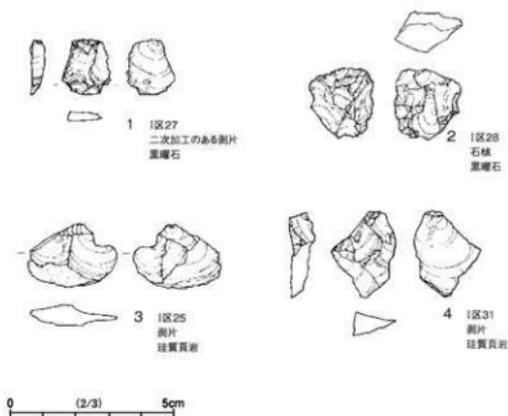
第70図 第2文化層第1ブロック出土遺物分布



第71図 第2文化層第1ブロック出土遺物



第72図 第3文化層第1ブロック出土遺物分布



第73図 第3文化層第1ブロック出土遺物

第22表 第1文化層第1ブロック出土石器属性表

神岡 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				mm	mm	mm	g	
第69図	1 O区8	ナイフ形石器	珧質頁岩	49.0	26.0	5.0	7.9	いわゆる海沢層産チャートか
第69図	2 O区9	剥片	珧質頁岩	61.0	20.0	12.0	14.5	いわゆる海沢層産チャートか
	O区7	剥片	珧質頁岩	26.8	22.1	5.5	3.8	いわゆる海沢層産チャートか

第23表 第1文化層第1ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形石器		剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
		1	2					
珧質頁岩		1	2	2	3	100.00	26.20	100.00
全体点数合計		1	2	2	3	100.00	26.20	100.00

第24表 第2文化層第1ブロック出土石器属性表

神岡 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				mm	mm	mm	g	
第71図	1 O区2	使用痕のある剥片	珧質頁岩	42.0	31.0	14.0	13.0	嶺岡産か
第71図	2 O区5	剥片	珧質頁岩	39.0	31.0	9.8	10.9	嶺岡産か
第71図	3 O区1	剥片	珧質頁岩	50.0	40.0	10.0	16.7	八丁層か
第71図	4 O区6	剥片	珧質頁岩	48.0	28.0	18.0	25.5	嶺岡産か
	O区3	剥片	珧質頁岩	32.0	25.5	6.8	6.7	嶺岡産か
	O区4	剥片	珧質頁岩	32.0	18.0	17.3	5.6	八丁層か

第25表 第2文化層第1ブロック出土石器組成表

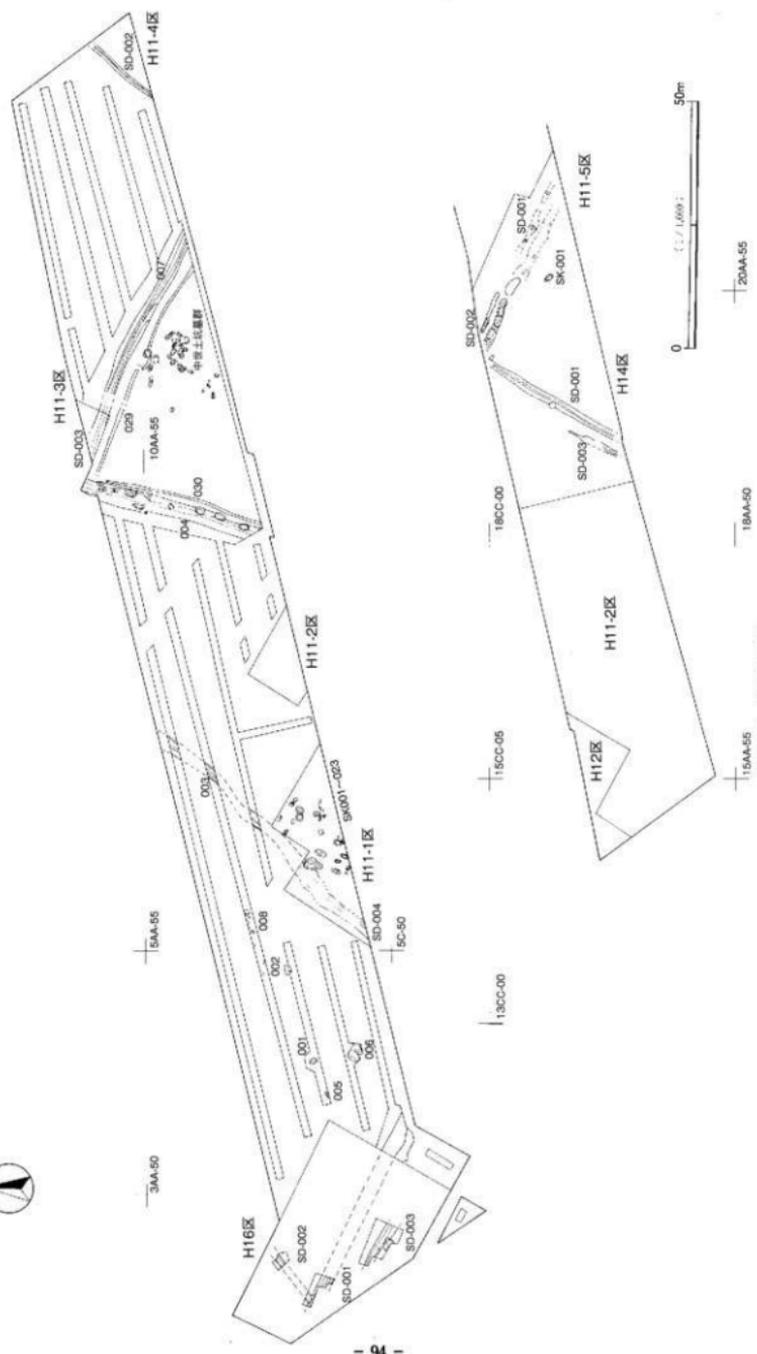
石材	器種	使用痕のある 剥片	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
全体点数合計		1	5	6	100.00	78.40	100.00

第26表 第3文化層第1ブロック出土石器属性表

神岡 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				mm	mm	mm	g	
第73図	1 I区27	二次加工のある剥片	黒曜石	17.0	15.0	3.0	0.9	
第73図	2 I区28	石核	黒曜石	22.0	20.0	22.0	4.3	
第73図	3 I区25	剥片	珧質頁岩	20.0	27.0	6.5	2.3	
第73図	4 I区31	剥片	珧質頁岩	26.0	20.0	7.0	2.0	
	I区26	剥片	珧質頁岩	20.0	14.0	4.1	0.9	
	I区29	剥片	珧質頁岩	18.0	11.0	1.3	0.2	
	I区30	砕片	黒曜石	9.0	11.0	2.0	0.2	

第27表 第3文化層第1ブロック出土石器組成表

石材	器種	二次加工の ある剥片	剥片	砕片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
珧質頁岩			4			4	57.14	5.40	50.00
全体点数合計		1	4	1	1	7	100.00	10.80	100.00



第74図 遺構分布図

第28表 土坑一覧表

() 推定

遺構No	地区	グリッド	種類	時期	平面形	長軸方位	規模 (cm)	深さ (cm)	ビット等 (cm)	
									長軸×短軸	(長軸×短軸×深さ)
SK-001	H11-1	7B-00	土坑	中近世	楕円形	N-1°-W	95 × 76	34	北側 30 × 29 × 33, 南側 28 × 26 × 34	
SK-002	H11-1	7A-90	土坑	中近世	楕円形	N-46°-W	104 × 92	16	58 × 44 × 4	
SK-003	H11-1	6B-09	土坑	中近世	楕円形	N-34°-E	176 × 135	16		
SK-004	H11-1	6B-08	土坑	中近世	楕円形	N-38°-E	145 × 140	16		
SK-005	H11-1	6B-28	土坑	中近世	楕円形	N-3°-W	144 × 92	40		
SK-006	H11-1	6B-28	土坑	中近世	楕円形	N-74°-W	115 × 55	16		
SK-007	H11-1	6B-38	土坑	中近世	楕円形	N-11°-W	70 × 56	20		
SK-008	H11-1	6B-39	土坑	中近世	楕円形	N-71°-E	236 × (102)	33		
SK-009	H11-1	6B-27	土坑	中近世	楕円形	N-67°-W	100 × 90	33	20 × 15 × 16	
SK-010	H11-1	6B-54	土坑	中近世	楕円形	N-23°-E	170 × 84	24		
SK-011	H11-1	6B-44	土坑	中近世	楕円形	N-4°-W	138 × 73	17		
SK-012	H11-1	6B-53	土坑	中近世	楕円形	N-62°-W	106 × 73	33	12 × 10 × 25	
SK-013	H11-1	6B-53	土坑	中近世	楕円形	N-31°-W	57 × 45	10		
SK-014	H11-1	6B-43	土坑	中近世	楕円形	N-20°-E	198 × 111	26	34 × 33 × 6	
SK-015	H11-1	6B-45	土坑	中近世	楕円形	N-44.5°-E	140 × 130	14		
SK-016	H11-1	6B-56	土坑	中近世	楕円形	N-40°-E	92 × 69	23		
SK-017	H11-1	6B-46	土坑	中近世	楕円形	N-30°-E	45 × 39	40		
SK-018	H11-1	6B-08	土坑	中近世	楕円形	N-86°-E	93 × 75	14		
SK-019	H11-1	6A-97	土坑	中近世	楕円形	N-62.5°-W	115 × 86	25		
SK-020	H11-1	6A-88	土坑	中近世	楕円形	N-47°-E	(70) × 115	28		
SK-021-022	H11-1	6B-23	土坑	縄文	不整形	N-20°-E	383 × 256		107-41(段部)	
SK-022	H11-1	6B-25	土坑	中近世	楕円形	N-33°-E	216 × 136	33	北側 48 × 26 × 11 南側 40 × 35 × 11	
SK-001	H11-5	20CC-66	陥穴	縄文	長方形	N-41°-W	198 × 90	87	30 × 22 × 13	

第29表 溝状遺構一覧表

[] 底面 () 推定

遺構No	地区	グリッド	時期	形状	幅 (cm)	長さ (m)	深さ (cm)
SD-004	H11-1	5B-77 ~ 6B-03	中近世	直線	180 ~ 290 [45 ~ 150]	(22.8)	22 ~ 38・段部 12 ~ 28
SD-003	H11-3	10BB-95 ~ 10AA-09	中近世	直線	240 [38 ~ 68]	(8.4)	89
SD-002	H11-4	14BB-97 ~ 14AA-52	中近世	直線	92 ~ 110 [26 ~ 28]	(15.4)	23 ~ 27・段部 16 ~ 20
SD-001	H11-4	20CC-25 ~ 21CC-65	中近世	直線	A50 ~ 155 [20 ~ 30] B55 ~ 180 [20 ~ 110]	A (18.2) B (21.2)	A42 ~ 48・B23 ~ 30
SD-001	H14	19CC-07 ~ 18BB-29	中近世	直線	120 ~ 195 [30 ~ 40]	(30.5)	38 ~ 57
SD-002	H14	20DD-54 ~ 20DD-79	中近世	直線	125 [40]	(11.3)	24
SD-003	H14	18BB-19 ~ 18BB-38	中近世	直線	150 [30]	(11.6)	不明
SD-001	H16	1B-18 ~ 2B-30	中近世	直線	A180 [55] B80 [40]	(7.2)	A60・B25
SD-002	H16	1B-18 ~ 2A-83	中近世	直線	125 [70]	(11.9)	28
SD-003	H16	2B-72 ~ 2C-06	中近世	直線	155 ~ 230 [70 ~ 80]	(9.7)	34・段部 25

第3節 縄文時代

1 遺構 (第28表)

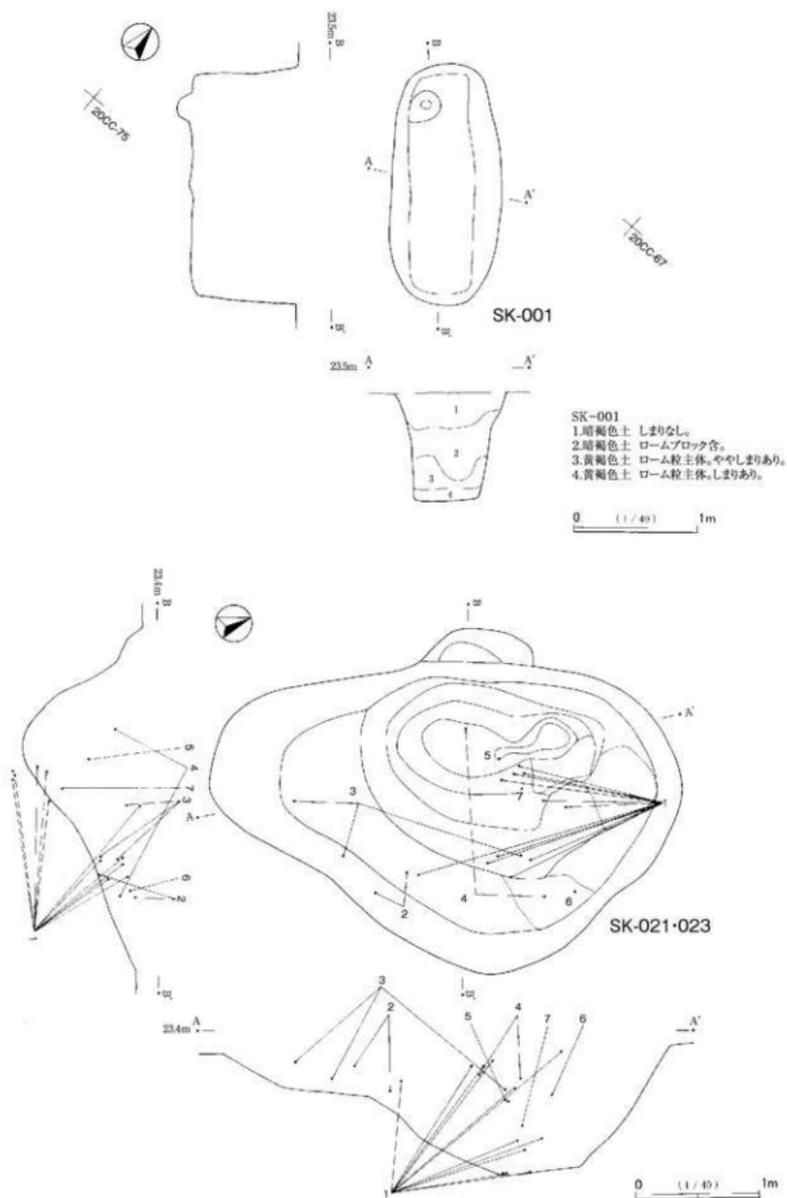
SK-001 [H 11-5区] (第74・75図、図版24)

20CC-66グリッド周辺に位置する土坑である。平面形は長方形で、長軸方位はN-41°-E、規模は長軸長198cm、短軸長90cm、深さ87cmである。底面は中央部がやや凹凸があるが、ほぼ平坦で北西端に浅いピット(深さ13cm)がある。壁面はほぼ直立に立ち上がり、上部でやや開く。形状・覆土の状況から陥穴と考えられる。

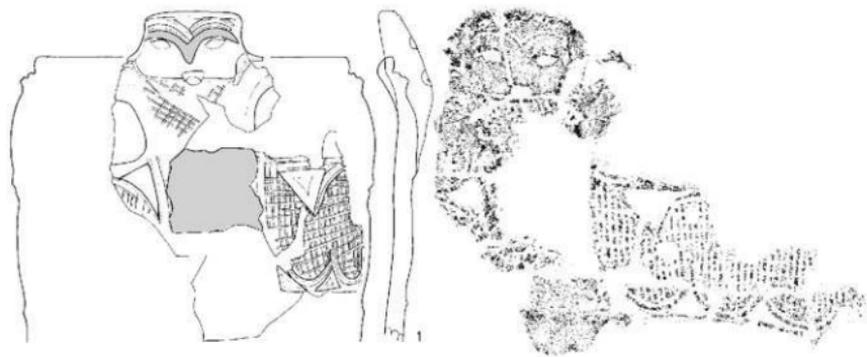
SK-021・023 [H 11-1区] (第74・75・76図、図版27・28)

6B-23グリッド周辺に位置する土坑である。南東側1m離れた部分にSK-022が分布し、その間には確認面に粘土がみられた。調査当初は平面的に土坑が東西に2基ならんでプランが確認できたため、南西側をSK-021、北東側をSK-023として精査した。その結果、平面形は不整形で、壁面・底面も凹凸が目立つ部分が多く、もともと土坑があった部分に、倒木痕で攪乱されている可能性が高い。覆土中や南東側確認面で検出された粘土も倒木に伴って地山の粘土が上に上がった影響が考えられる。掘り上がった規模は、長軸長383cm、短軸長256cm、深さ107cmである。断面図では、本来の土坑の覆土が不明瞭であり、遺物の出土状況や底面の状況から判断すると、南西側(SK-021)は浅いテラス部分が相当し、遺物の多く出土した北東側(SK-023)は深い土坑であったと想定される。

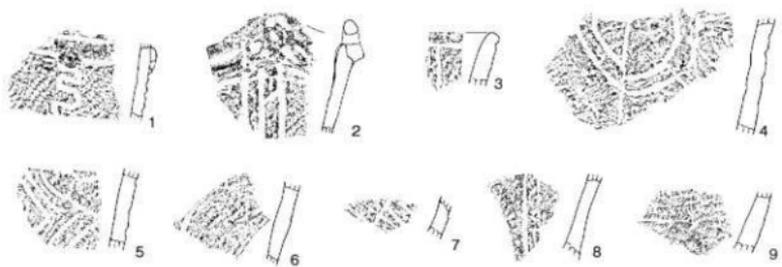
1～7はSK-021-023出土の土器である。1～4は口縁部から胴部上半が部分的に遺存する同一個体で、胎土中に細かな砂礫が少量含まれる。1は平口縁の一部が山形にやや突出するが、その部分に人の顔面表現が付く深鉢である。上向きの平坦な顔面は、上下端を沈線で区切っている。上端は突起の形状に沿ってほぼ水平に、下端は突起の付け根に沿って弧状に引かれており、突起の形状と相まってやや下膨れである。顔面には穿孔による両眼と口の表現がある。両眼の目尻は若干切れ上がり、口元は左上に上がり気味である。また、黒く変色している範囲は隆起線が剥落したものであると思われる。この範囲と付随する複列の沈線から、眉と鼻梁を連結した意匠が貼付されていたと推察される。口縁部には顔面突起を囲むように枠状の区画文が形成されていたと思われ、顔面突起下の剥落部にはこの区画文の稜線を集約した橋状等の突起が付された可能性がある。胴部には幅広い文様帯が形成される。文様帯の周縁は平行沈線文で区画され、地文に細かな格子目文が施される。区画の上下には交互に三角印刻文が施され、大柄な雲形モチーフが描出されているが、欠損した胴部下半にもこの文様帯が形成されていた可能性がある。格子目文は縦位の平行沈線が強く引かれているため、平行沈線が横位の1本引きの沈線を切るように観察されるが、整然と引くためには平行沈線文→1本引き沈線の順が合理的である。2は口縁端部の形状が分かる破片で、やや口縁部が膨らみ器形である。端部はつまみ上げたように僅かに外反し、基部に平行沈線を巡らせる。口縁部の表面は殆どが剥落面であるが残存する部分から推察すると、地文の格子目文を平行沈線文で縁取り、要所に三角印刻文が施される文様が展開すると思われる。なお、この部分の格子目文は横位が平行沈線、斜位が1本引きの沈線となり、胴部と逆になる。文様が施される部分と剥落面の断面を観察した結果、空間が認められることから口縁部は追加成形されたことがわかる。胴部には1と同じ構成の雲形モチーフが描出される。3は口頸部に付されたと思われる橋状突起である。4は2と同様に口縁部表面が剥落しているが、口縁基部の平行沈線が認められる。5・6は同一個体で、結節回転が付く単節LRが施される。7は単節RLが施される。5～7の胎土中には細かな砂礫が多く含まれる。



第75図 SK-001・SK-021・023



第76図 SK-021・023出土土器



第77図 遺構外出土縄文土器

2 遺構外出土土器 (第77図、図版29)

遺構外から出土した土器は、僅かな量である。全て後期堀之内1式に限られている。1は胴部である。蛇行する単沈線が垂下し、上端に円形の貼付文が伴う。2は波状口縁の波頂部である。貫通する円孔があり、その下から3本の沈線が垂下している。3は直線的に開く小型の深鉢であろう。口唇部直下に沈線を巡らし、縄文地文に沈線の単位文様を施している。4～9は胴部破片である。縄文地文だが弱い回転施文である。太い沈線で文様が雑に施されている。

第4節 中・近世

赤作遺跡では縄文時代以降の遺構は中・近世になってから確認することができた。土坑と溝のみで、遺物の出土も少量であった。

1 土坑 (第28表)

SK-001 [H11-1区] (第78図、図版24) 7B-00グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-1°-W、規模は長軸95cm、短軸76cm、深さは34cmである。底面にはピットが2か所、南北方向に並んで検出された。底面北側ピットは長軸30cm、短軸29cm、深さ33cmである。南側ピットは長軸28cm、短軸26cm、深さ34cmである。

SK-002 [H11-1区] (第78図、図版25) 7A-90グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-46°-W、規模は長軸104cm、短軸92cm、深さは16cmである。南東にピットがあり、長軸58cm、短軸44cm、深さ4cmである。

SK-003 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-09グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-34°-E、規模は長軸176cm、短軸135cm、深さ16cmである。

SK-004 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-08グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-38°-E、規模は長軸145cm、短軸140cm、深さ16cmである。

SK-005 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-28グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-3°-W、規模は長軸144cm、短軸92cm、深さ40cmである。

SK-006 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-28グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-74°-W、規模は長軸115cm、短軸55cm、深さ16cmである。

SK-007 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-38グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-11°-W、規模は長軸70cm、短軸56cm、深さ20cmである。

SK-008 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-39グリッドに位置する。南側半部が調査区外にあたる。平面形は楕円形である。長軸方位はN-71°-E、規模は長軸236cm、短軸推定102cm、深さ33cmである。

SK-009 [H11-1区] (第78図、図版25) 6B-27グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-67°-W、規模は長軸100cm、短軸90cm、深さ33cmである。南東端にピットがあり、長軸20cm、短軸15cm、深さ16cmである。

SK-010 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-54グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-23°-E、規模は長軸170cm、短軸84cm、深さ24cmである。

SK-011 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-44グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-4°-W、規模は長軸138cm、短軸73cm、深さ17cmである。

SK-012 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-53グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-62°-W、規模は長軸106cm、短軸73cm、深さ33cmである。北西端にピットがあり、長軸12cm、短軸10cm、深さ25cmである。

SK-013 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-53グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-31°-W、規模は長軸57cm、短軸45cm、深さ10cmである。

SK-014 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-43グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-20°-E、規模は長軸198cm、短軸111cm、深さ26cmである。南端にピットがあり、長軸34cm、

短軸 33cm、深さ 6cmである。

SK-015 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-45グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-44.5°-E、規模は長軸140cm、短軸130cm、深さ14cmである。

SK-016 [H11-1区] (第78図) 6B-56グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-40°-E、規模は長軸92cm、短軸69cm、深さ23cmである。

SK-017 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-46グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-30°-E、規模は長軸45cm、短軸39cm、深さ40cmである。

SK-018 [H11-1区] (第78図、図版26) 6B-08グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-86°-E、規模は長軸93cm、短軸75cm、深さ14cmである。

SK-019 [H11-1区] (第78図、図版27) 6A-97グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-62.5°-W、規模は長軸115cm、短軸86cm、深さ25cmである。

SK-020 [H11-1区] (第78図、図版27) 6A-88グリッドに位置する。北東側半部が調査区外にあたる。平面形は楕円形である。長軸方位はN-47°-E、規模は長軸推定70cm、短軸115cm、深さ28cmである。

SK-022 [H11-1区] (第78図、図版27) 6B-25グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-33°-E、規模は長軸216cm、短軸136cm、深さ33cmである。底面はビット状に凹凸があり、北端は長軸48cm、短軸26cm、深さ11cm、南端は長軸40cm、短軸35cm、深さ11cmである。

2 溝状遺構 (第29表)

SD-004 [H11-1区] (第74・78図、図版27) 5B-77～6B-03グリッドに位置する。北東-南西方向へ直線的に延びる。溝の規模は長さ22.8m、幅180cm～290cm、底面幅、45cm～150cm、深さ22cm～38cm、段部までの深さ12cm～28cmである。北東端は前回調査区確認トレンチ3・4・5内の溝003につながる。溝が2条平行するが、土層断面観察では明確な時期差はなく、北側に段を持つ溝と考えられる。

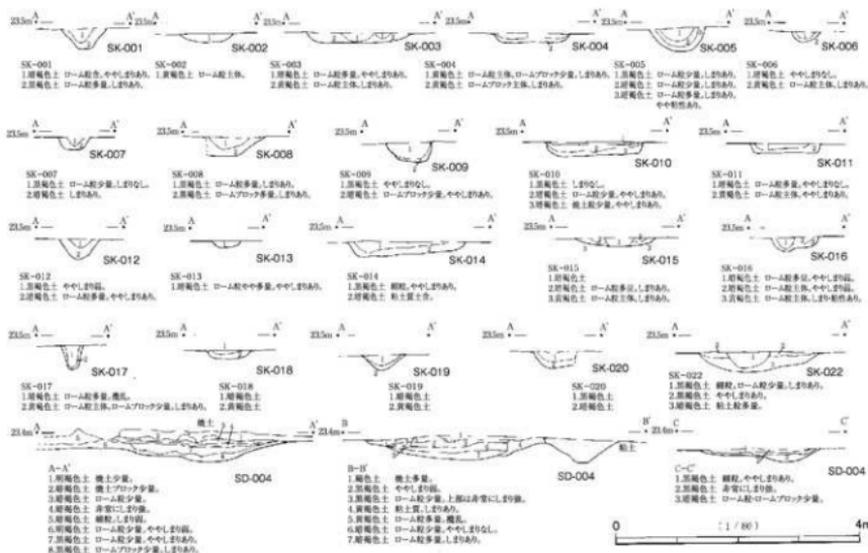
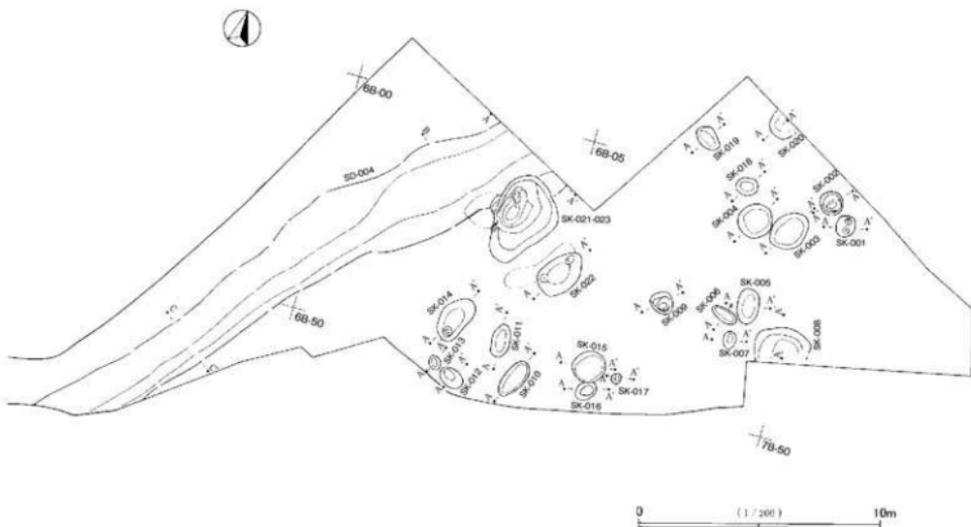
SD-003 [H11-3区] (第74・79図、図版27) 10BB-95～10AA-09グリッドに位置する。西北西-東南東方向に直線的に延びる。溝の規模は長さ推定8.4m、幅240cm、底面幅38cm～68cm、深さ89cmである。東南東端は前回調査区の東部溝007につながる。

SD-002 [H11-4区] (第79図、図版27) 14BB-97～14AA-52グリッドに位置する。北東-南西方向に直線に延びる。溝の規模は長さ推定15.4m、幅92cm～110cm、底面幅26cm～28cm、深さ23cm～27cm、段部までの長さ16cm～20cmである。溝が2条平行するが、土層断面観察では明確な時期差はなく、北側に段を持つ溝と考えられる。

SD-001 [H11-5区] (第74・80図) 20CC-25～21CC-65グリッドに位置する。西北西-東南東方向に直線的に延びる2条平行の溝である。平面形は直線である。溝の規模はAは長さ推定18.2m、幅50cm～155cm、底面幅20cm～30cm、深さ42cm～48cmである。Bは長さ推定21.2m、幅55cm～180cm、底面幅20cm～110cm、深さ23cm～30cmである。楕円形の土坑を伴う。西北西端はH14区のSD-002につながる。

SD-001 [H14区] (第74・81図) 19CC-07～18BB-29グリッドに位置する。北東-南西方向に直線的に延びる溝である。溝の規模は長さ推定30.5m、幅120cm～195cm、底面幅30cm～40cm、深さ38cm～57cmである。

SD-002 [H14区] (第74・81図) 20DD-54～20DD-79グリッドに位置する。西北西-東南東方向



第 78 図 H11-1 区遺構

に直線的に延びる2条平行の溝である。溝の規模は長さ推定11.3m、幅125cm、底面幅40cm、深さ24cmである。楕円形の4基の土坑を伴う。東南東端はH11-5区のSD-001につながる。

SD-003〔H14区〕(第74・81図) 18BB-19～18BB-38グリッドに位置する。SD-001にはほぼ平行し、北東-南西方向に直線的に延びる。南西端は調査区外へ続くが、北東端は細くなり途切れる。溝の規模は長さ11.6m、幅150cm、底面幅30cmである。

SD-001〔H16区〕(第74・82図) 1B-18～2B-30グリッドに位置する。西北西-東南東方向に直線的に延びる2条平行する溝である。西北西端はSD-002と重複し、調査区外へ続く。溝の規模はAは長さ推定7.2m、幅180cm、底面幅55cm、深さ60cmである。Bは長さ推定7.2m、幅80cm、底面幅40cm、深さ25cmである。東南東端は前回調査区の溝033につながる。

SD-002〔H16区〕(第74・82図) 1B-18～2A-83グリッドに位置する。北東-南西方向に直線的に延びる。溝の規模は長さ11.9m、幅125cm、底面幅70cm、深さ28cmである。南西端はSD-001と重複する。

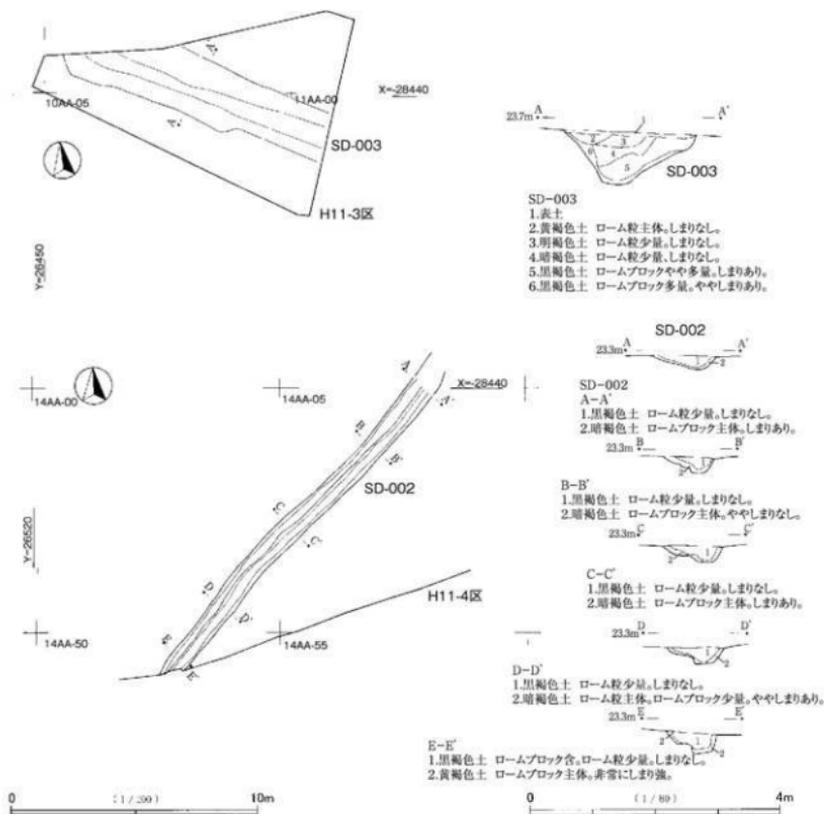
SD-003〔H16区〕(第74・82図) 2B-72～2C-06グリッドに位置する。西北西-東南東方向にSD-001とはほぼ平行して直線的に延びる。溝の規模は長さ9.7m、幅155cm～230cm、底面幅70cm～80cm、深さ34cmである。南側壁部一部に段があり、段までの深さ25cmである。底面にピットが2基検出された。

3 遺物 (第83図、第30表、図版29)

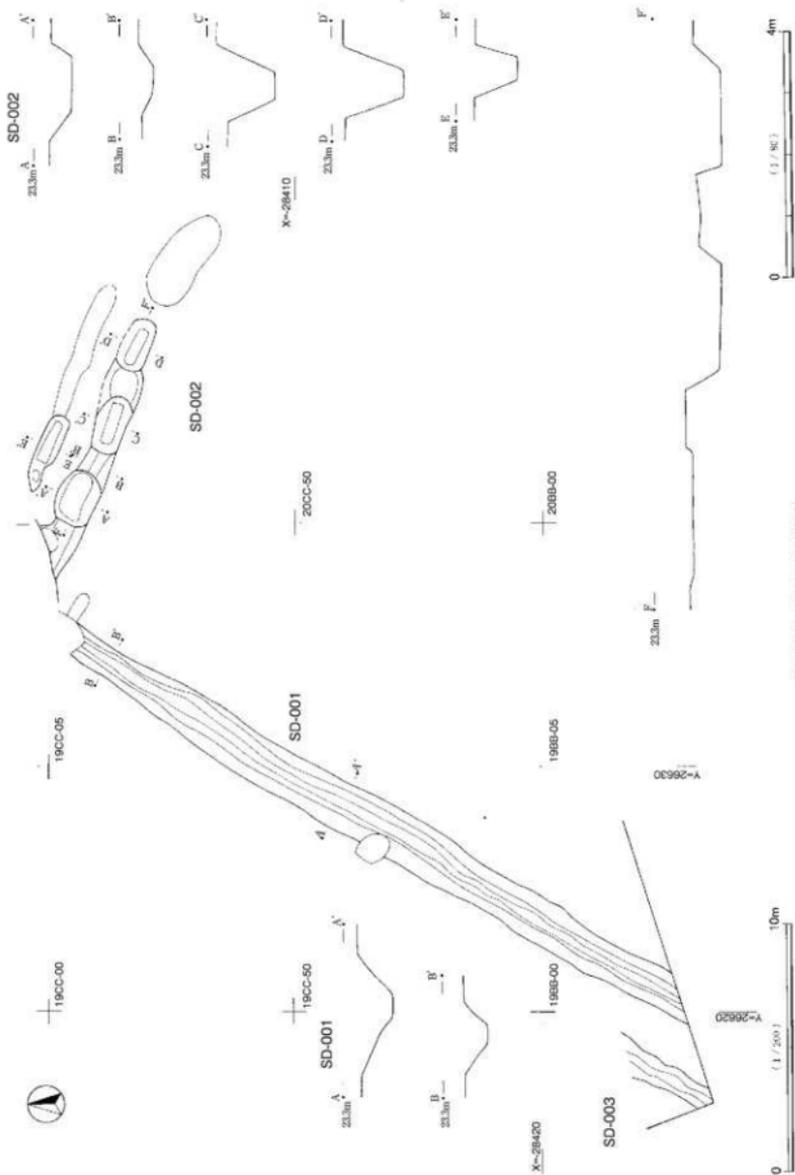
1～6は瀬戸・美濃産の陶器である(6は写真図版のみ)。1は鉄軸播鉢の底部から体部下端である。平成14年度調査SK-001の覆土からの出土である。内面は使用により磨れている。胎土はやや白みを帯び、緻密である。形状・胎土より古瀬戸後期Ⅳ期新段階～大窯期(15世紀後半～16世紀)のものと考えられる。2も鉄軸播鉢で口縁部破片である。平成14年度の1区からの出土である。器面に黒い吹き出しが目立つ。形状より古瀬戸後期Ⅳ期新段階(15世紀後半)の所産と考えられる。3は天目茶碗の口縁部破片である。平成14年度調査SK-001の覆土からの出土である。口縁端部が短く外反する。形状より古瀬戸後期Ⅳ期新段階～大窯2期(15世紀後半～16世紀前半)の所産と考えられる。6も天目茶碗で、体部の破片である。平成14年度調査1区からの出土である。3と同時期と考えられる。4は灰軸端反皿の口縁部破片である。平成14年度調査1区からの出土である。口縁端部が緩やかに広がりながら外反する。形状より大窯1期前半(15世紀末～16世紀初頭)の資料と考えられる。5は灰軸腰反皿の口縁部破片である。SD002の溝の覆土からの出土である。胎土は白みを帯びる。口縁端部はやや厚みもち、外反する。形状より古瀬戸後期Ⅳ期新段階(15世紀後半)の資料と考えられる。7～9は銭貨ですべて寛永通宝である。法量等は表にまとめた。

第30表 銭貨計測表

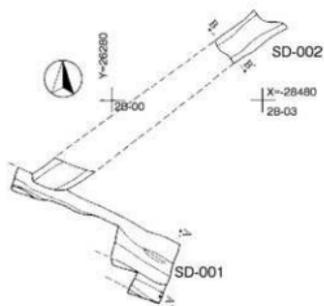
押図No.	遺構No.	遺物No.	銭貨名	初鋳年	計測値(mm)					重量(g)	
					縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚		
第83図	7	東側調査区	一括	寛永通寶	1636	21.6	17.9	7.5	6.5	0.9	1.4
第83図	8	表探	0001	寛永通寶	1636	22.8	18.7	7.5	6.5	1.3	2.4
第83図	9	E区	一括	寛永通寶	1636	23.4	18.8	7.0	5.7	1.0	1.2



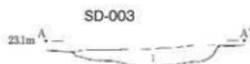
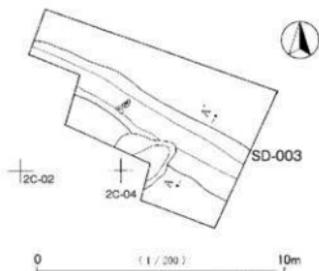
第79図 H11-3区・4区遺構



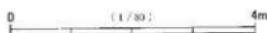
第81図 H14区遺構



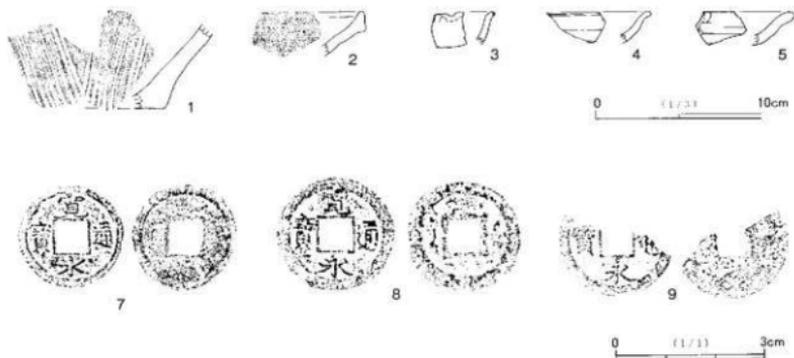
- | | |
|--------------------|-------------------|
| SD-001 | SD-002 |
| 1.黒色土 | 1.黒色土 暗褐色土ブロック多量。 |
| 2.黒色土 粘土粒やや多量。 | 2.黒色土 明褐色土細粒含。 |
| 3.黒色土 粘土粒少量。 | 3.黒色土 黄白色粘土粒含。 |
| 4.黒色土 粘土粒・粘土ブロック含。 | |
| 5.黄白色粘土ブロック | |
| 6.黒色土 水分・粘性あり。 | |



- SD-003
1.黒色土 黄白色粘土粒含。水分あり。



第82図 H16区遺構



第83図 中・近世 出土遺物

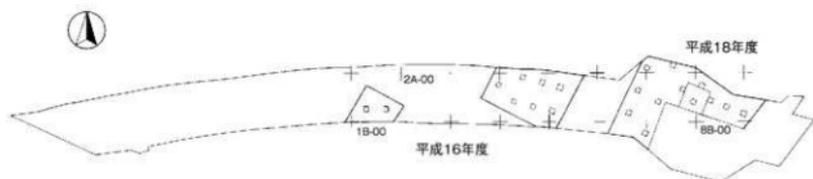
第6章 阿蘇中学校東側遺跡

第1節 調査の概要（第84図～第86図）

阿蘇中学校東側遺跡における今回の調査区は高野川の支流南西岸の標高25m前後の台地上に位置する。本遺跡は同事業で平成9年度に発掘調査が実施され、縄文時代の土坑、中・近世の土坑群が検出されている。また、南北方向に走る県道千葉竜ヶ崎線の建設工事に伴う発掘調査では旧石器時代の石器集中地点と縄文時代の土坑、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。今回調査区の南側では八千代市が広範囲を発掘調査し、弥生時代後期の集落が検出されている。

発掘調査にあたっては、今回の平成16年度・18年度調査区に合わせて20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。小グリッドは2m×2mである。起点(1A-00)の座標はX=-28,380、Y=26,780である。平成16年度に、確認調査対象面積877㎡について上層88㎡、下層36㎡の確認調査を実施した。その結果、上層・下層とも遺構・遺物の検出がなく、確認調査で終了した。平成18年度には、確認調査面積1,142㎡を対象として、上層154㎡、下層48㎡の確認調査を実施した。上層では、縄文時代と中・近世の土坑を検出したが、群としての広い展開はみられなかったため、トレンチの拡張で対応し、確認調査の範囲内で終了した。下層では旧石器集中出土地点が3か所検出されたため、その周囲90㎡について本調査を実施した。

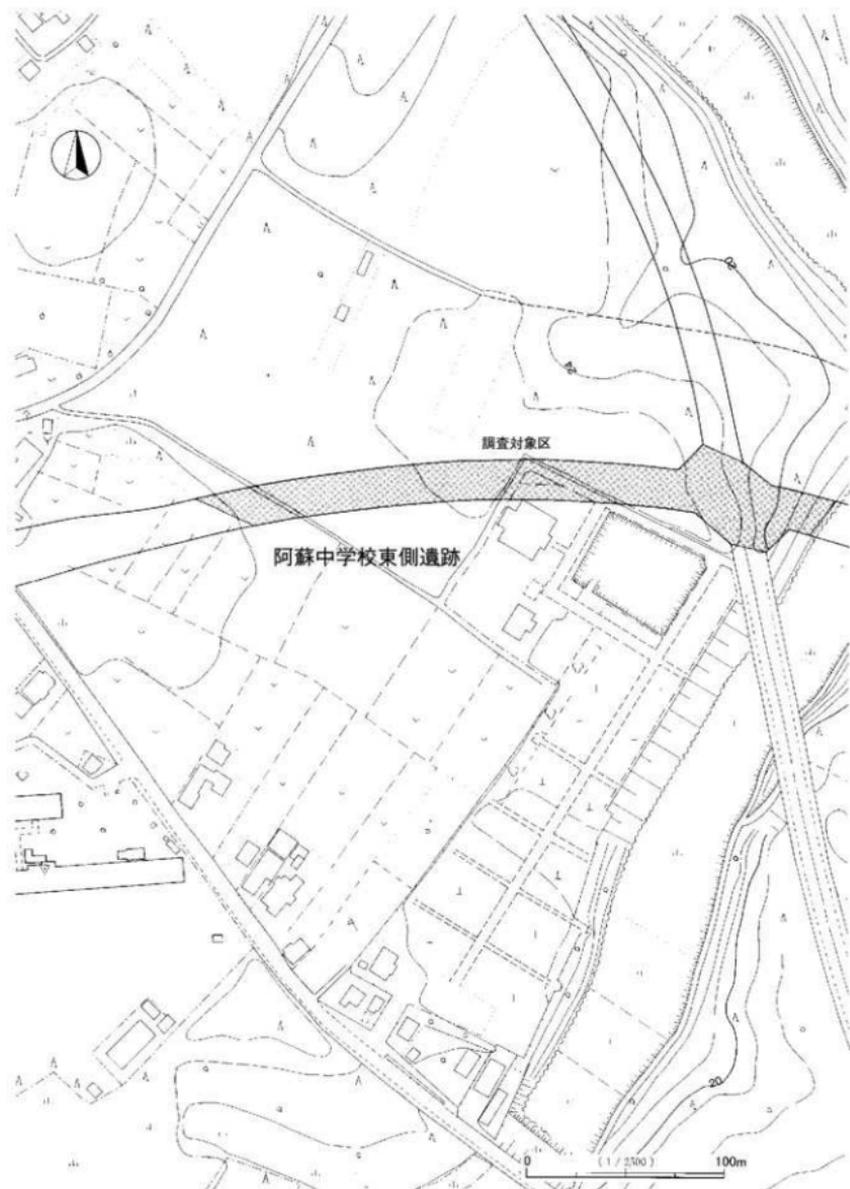
なお、上層で検出された土坑は遺構名称としてSKを付し、通し番号をつけて調査した。報告書作成にあたり遺構名称・番号は変更していない。



第84図 下層確認グリッド配置図



第85図 上層確認トレンチ配置図



第 86 図 周辺地形図と路線図

第2節 旧石器時代

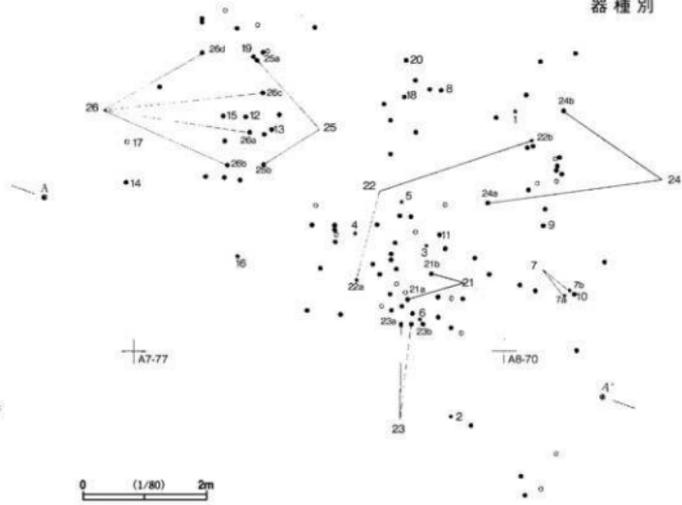
第1ブロック (第87・88・89・90図、第31・32表、図版30・31・33)

第1ブロックはA7-47～49・56～59・67～69・79、A8-40・50・60・70・80グリッドに位置する。ブロックの規模と形状は長軸12m×短軸8mで117点の石器が分布する。出土層位はⅤ層を中心にⅣ層からⅩ層にかけて60cmほどの高低差で包含されている。

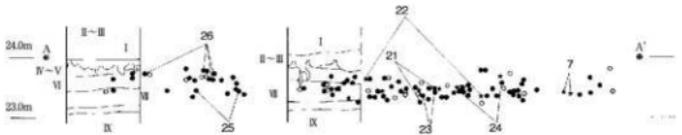
器種構成は楔形石器11点、剥片87点、砕片17点、石核1点、敲石1点である。石器石材は安山岩30点、流紋岩13点、砂岩2点、珪質頁岩(嶺岡)7点、珪質頁岩(黒色)19点、珪質頁岩2点、黒色頁岩3点、チャート41点である。なお、安山岩は①いわゆるガラス質黒色安山岩、②いわゆるトロトロ石のような風化を示すもの(あるいはデイサイトか)、③いわゆる黒色頁岩のような外見を示すもの(あるいは(緑色)凝灰岩か)の大きく3種類に識別され、それぞれはほぼ同一母岩の可能性がある。また、珪質頁岩(黒色)はクレター状の剥離やひび割れ等の明確な被熱痕は見られなかったが、多少火バネ状の剥離(落)と考えられる痕跡もあることから被熱等による変色の可能性が高いと思われる。

1・2は黒色頁岩のような安山岩の小型の楔形石器である。1は不定形な剥片の正面と左側面にほぼ対向する細かい剥離痕が見られる。なお、末端の剥離痕は調整加工の可能性もある。2は不定形な剥片の両面に対向する細かい剥離痕が見られ、正面器体中央に自然面が残っている。3は珪質頁岩(嶺岡)の小型の楔形石器である。不定形な剥片の両面に対向する剥離痕が見られる。4・5はチャートの小型の楔形石器である。4は不定形な剥片の両面に対向する細かい剥離痕が見られる。裏面左側に自然面が残っている。5は不定形な剥片の正面両端に対向する微細な剥離痕が見られる。裏面はほぼ全面に自然面が残っている。6は安山岩の比較的小型の楔形石器である。縦長剥片の正面両端に対向する細かい剥離痕が見られる。正面の下半部の一部に自然面が残っている。7は流紋岩の楔形石器である。やや厚みのある不定形な剥片の両面に対向する剥離痕が見られる。接合して1個体となる。16はトロトロ石のような安山岩の楔形石器である。不定形な剥片の両面に対向する剥離痕が見られる。8は珪質頁岩の縦長剥片である。正面に自然面が残っている。9は珪質頁岩(黒色)の縦長剥片である。平坦打面から剥離されているが、加撃方向と剥離方向にずれがある。10・11は7と同一母岩と考えられる流紋岩の剥片である。10は大型の縦長剥片で、左側が欠損している。11は縦長剥片である。器体中央の稜の左側に細かい頭部調整あるいは打面調整状の細かい剥離痕が見られる。12はトロトロ石のような安山岩の縦長剥片で、左側が欠損している。13は安山岩の縦長剥片である。14・15はチャートの不定形な剥片である。14は自然面が残っている。18は珪質頁岩(黒色)の横長剥片である。19は安山岩の横長剥片である。20は珪質頁岩の石核である。正面に自然面が残ることから、比較的小型の礫を2分割し、求心的な剥離作業を行って小型で不定形な剥片を剥離している。末端と右側縁下部に細かい剥離痕が見られることから、割器のような石器として転用された可能性がある。17は砂岩の敲石の破片である。正面の一部に浅い敲打痕が見られる。21はチャートの剥片の接合資料である。対向する剥離面が見られることから22のような楔形石器から剥離された剥片と考えられる。aの正面には全面が自然面である。22はチャートの楔形石器の接合資料である。22aに対向する剥離面が見られる。a・bともに自然面が残っている。23はチャートの石核・剥片の接合資料である。23aは両面の右側縁側で不定形な剥片を剥離している。24はチャートの剥片の接合資料である。剥片としたが、両極技法により剥離された可能性が高い。25は珪質頁岩(黒色)の小型で不定形な剥片の接合資料である。26は珪質頁岩(黒色)の剥片の接合資料である。26aを剥離した後、頭部調整をしながら、

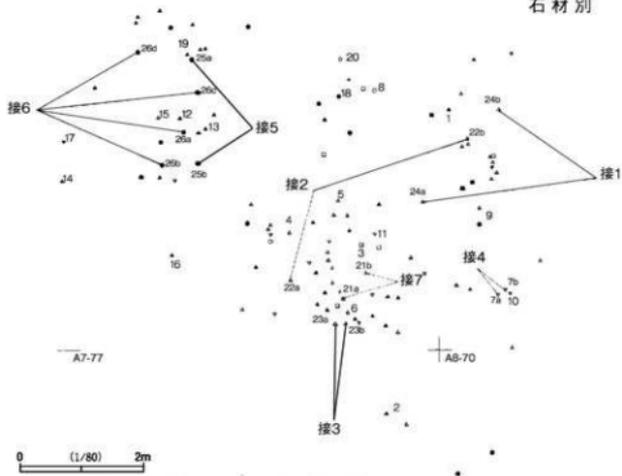
器種別



- 剥片
- 破片
- ◐ 楔形石器
- 石核
- 敲石

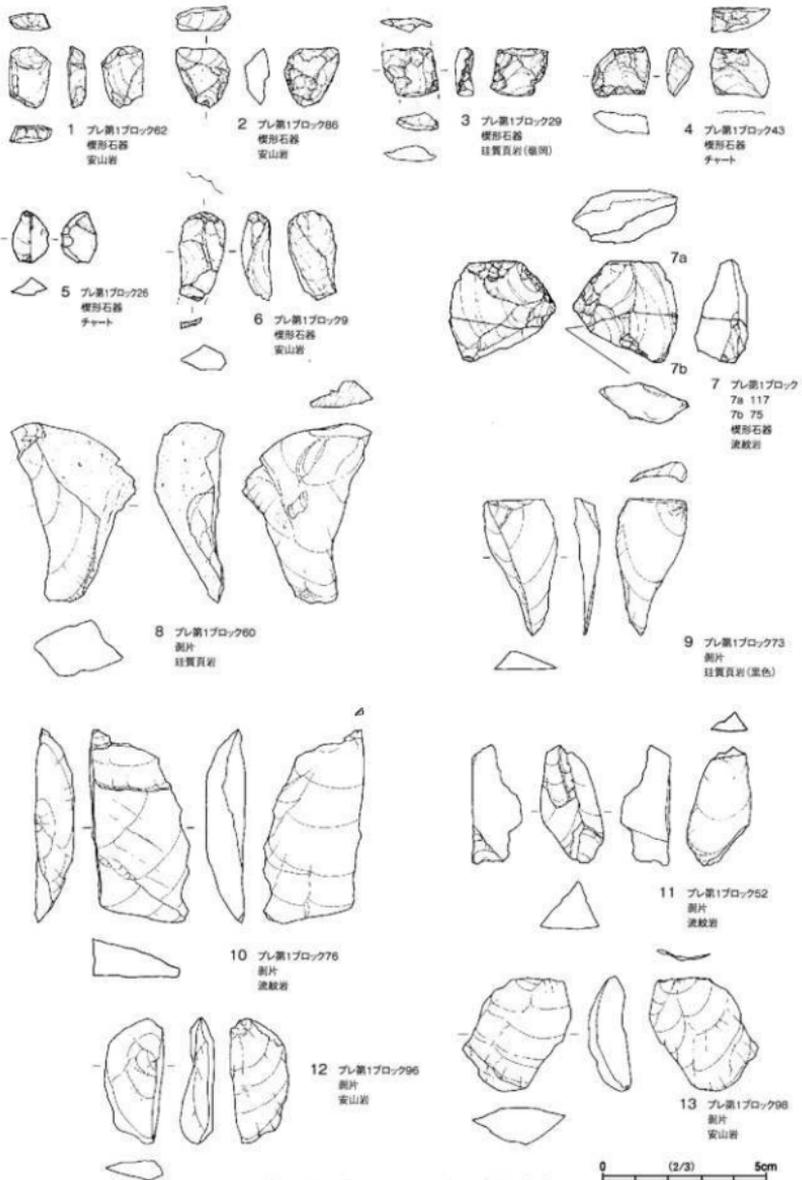


石材別

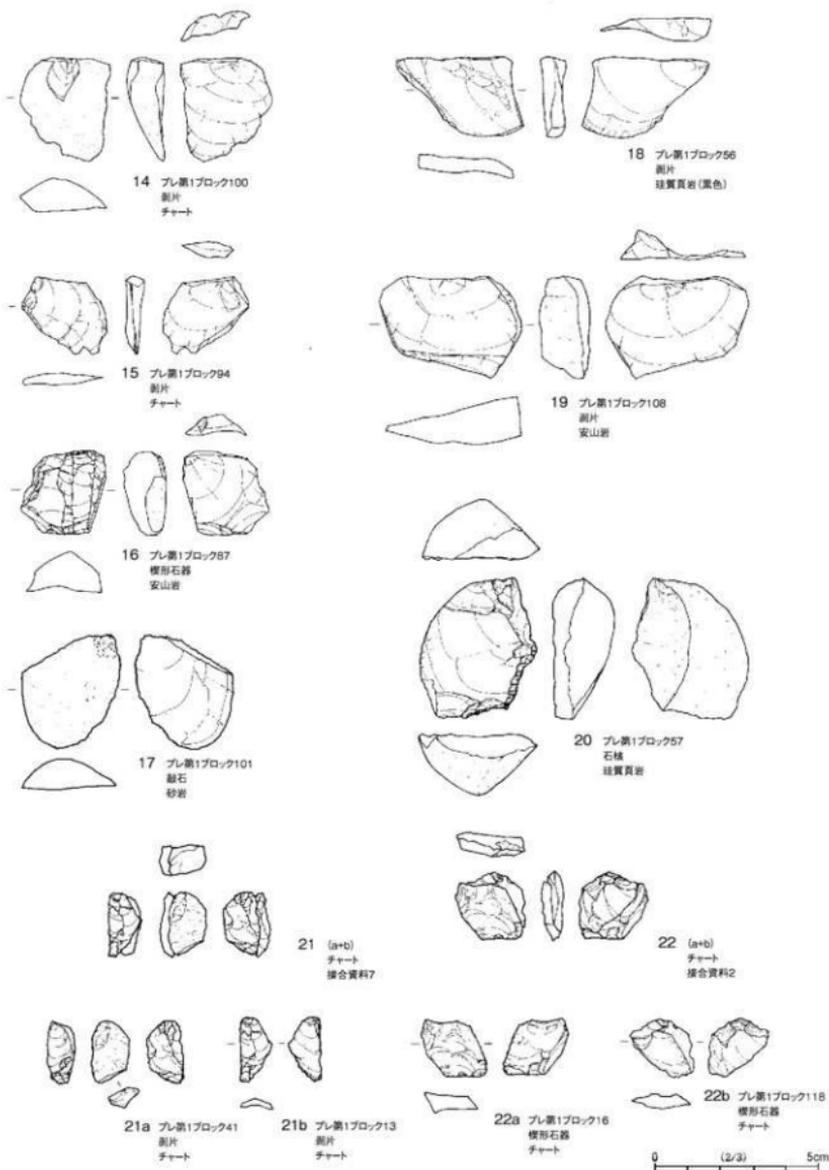


- 珪質頁岩
- 珪質頁岩(黒色)
- ◐ 珪質頁岩(横岡)
- 黒色頁岩
- ▲ チャート
- ▲ 安山岩
- ▲ 流紋岩
- ▲ 砂岩

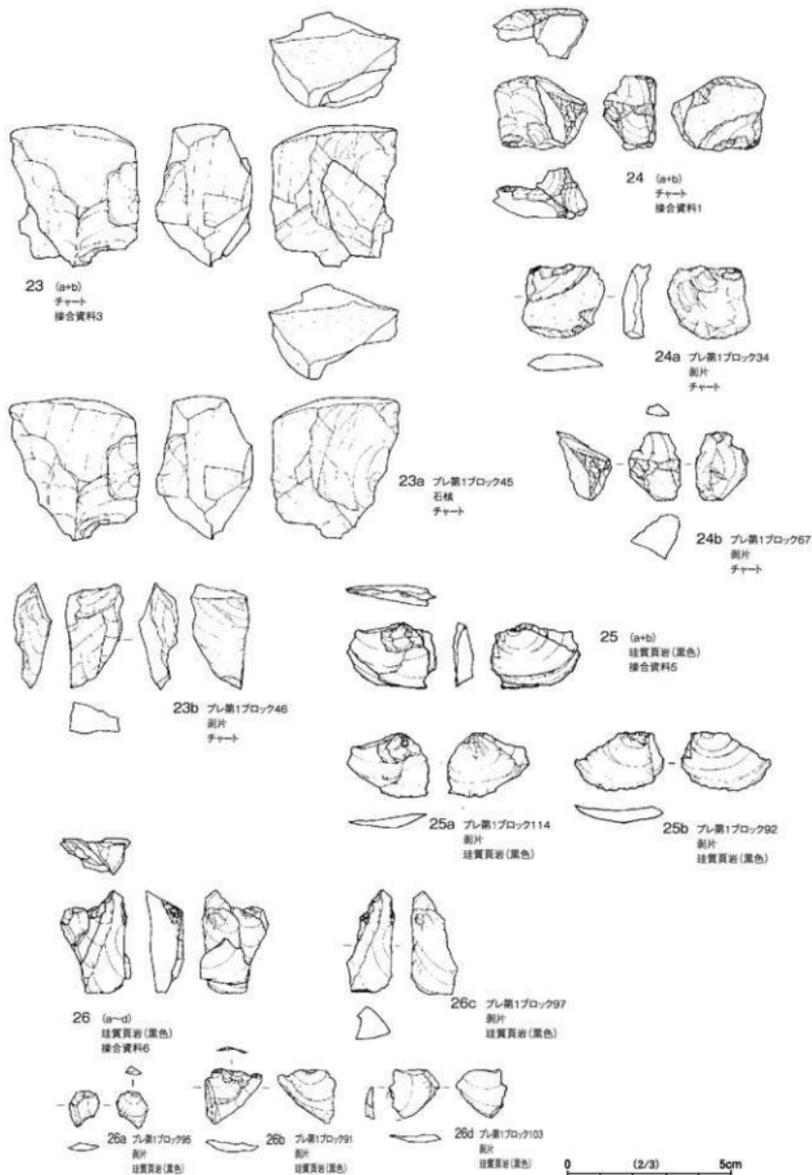
第 87 図 第 1 ブロック出土遺物分布



第88図 第1ブロック出土遺物(1)



第89図 第1ブロック出土遺物(2)



第90図 第1ブロック出土遺物(3)

第31表 第1ブロック出土石器属性表

棟号 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
				mm	mm	mm	g		
第88号	1	フレ第1ブロック62	楔形石器	安山岩	190	125	5.5	1.7	(緑色) 凝灰岩か
第88号	2	フレ第1ブロック86	楔形石器	安山岩	185	155	7.0	2.1	(緑色) 凝灰岩か
第88号	3	フレ第1ブロック29	楔形石器	珪質頁岩(縞面)	150	160	5.5	1.6	
第88号	4	フレ第1ブロック43	楔形石器	チャート	150	180	8.0	2.2	
第88号	5	フレ第1ブロック26	楔形石器	チャート	190	130	6.5	1.4	
第88号	6	フレ第1ブロック9	楔形石器	安山岩	275	140	9.0	3.4	
第88号	7a	フレ第1ブロック117	楔形石器	流紋岩	210	325	14.5	7.5	接合資料4
第88号	7b	フレ第1ブロック75	楔形石器	流紋岩	280	150	16.5	4.1	接合資料4
第88号	8	フレ第1ブロック60	削片	珪質頁岩	55.0	32.0	18.0	30.0	
第88号	9	フレ第1ブロック73	削片	珪質頁岩(黒色)	42.0	21.5	8.0	4.5	被熱による変色か
第88号	10	フレ第1ブロック76	削片	流紋岩	59.0	29.0	12.0	19.4	
第88号	11	フレ第1ブロック52	削片	流紋岩	36.5	18.0	15.0	6.1	
第88号	12	フレ第1ブロック96	削片	安山岩	38.5	18.0	8.4	5.2	デイスaitカ
第88号	13	フレ第1ブロック98	削片	安山岩	34.5	28.0	11.5	11.1	
第89号	14	フレ第1ブロック100	削片	チャート	31.5	26.5	11.5	8.8	
第89号	15	フレ第1ブロック94	削片	チャート	22.0	24.5	5.5	2.9	
第89号	16	フレ第1ブロック87	楔形石器	安山岩	26.0	23.5	13.5	8.8	デイスaitカ
第89号	17	フレ第1ブロック101	砥石	砂岩	39.5	35.0	11.5	16.9	
第89号	18	フレ第1ブロック56	削片	珪質頁岩(黒色)	24.0	36.0	8.0	5.9	被熱による変色か
第89号	19	フレ第1ブロック108	削片	安山岩	31.5	42.0	16.0	22.3	デイスaitカ
第89号	20	フレ第1ブロック57	石核	珪質頁岩	40.5	35.5	18.5	26.1	
第89号	21a	フレ第1ブロック41	削片	チャート	19.5	12.0	8.5	2.5	接合資料7
第89号	21b	フレ第1ブロック13	削片	チャート	20.0	10.0	2.5	0.5	接合資料7
第89号	22a	フレ第1ブロック16	楔形石器	チャート	18.0	17.0	6.0	2.0	接合資料2
第89号	22b	フレ第1ブロック118	楔形石器	チャート	18.0	18.0	4.5	1.3	接合資料2
第89号	23a	フレ第1ブロック45	石核	チャート	44.0	38.0	27.0	42.7	接合資料3
第89号	23b	フレ第1ブロック46	削片	チャート	29.5	17.0	12.0	6.2	接合資料3
第89号	24a	フレ第1ブロック34	削片	チャート	28.0	24.0	6.0	4.1	接合資料1
第89号	24b	フレ第1ブロック67	削片	チャート	21.5	16.0	13.0	3.0	接合資料1
第89号	25a	フレ第1ブロック114	削片	珪質頁岩(黒色)	20.0	24.5	3.5	1.4	接合資料5、被熱による変色か
第89号	25b	フレ第1ブロック92	削片	珪質頁岩(黒色)	18.0	28.0	3.5	1.7	接合資料5、被熱による変色か
第89号	26a	フレ第1ブロック95	削片	珪質頁岩(黒色)	11.5	9.0	2.5	0.3	接合資料6、被熱による変色か
第89号	26b	フレ第1ブロック91	削片	珪質頁岩(黒色)	17.0	17.0	3.0	0.9	接合資料6、被熱による変色か
第89号	26c	フレ第1ブロック97	削片	珪質頁岩(黒色)	31.0	13.5	10.0	3.0	接合資料6、被熱による変色か
第89号	26d	フレ第1ブロック103	削片	珪質頁岩(黒色)	14.5	15.0	2.5	0.6	接合資料6、被熱による変色か
		フレ第1ブロック1	削片	安山岩	20.5	22.5	2.3	0.5	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック2	削片	安山岩	17.0	7.5	4.4	0.4	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック3	砕片	安山岩	8.5	8.0	2.0	0.3	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック4	削片	流紋岩	22.0	11.0	6.3	0.9	
		フレ第1ブロック5	削片	安山岩	24.0	7.5	4.4	0.4	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック6	削片	安山岩	11.5	9.0	4.0	0.5	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック7	削片	チャート	19.0	7.0	3.0	0.6	
		フレ第1ブロック8	削片	珪質頁岩(縞面)	14.5	10.0	5.2	0.8	
		フレ第1ブロック10	砕片	チャート	8.0	5.0	3.5	0.2	
		フレ第1ブロック11	削片	黒色頁岩	24.0	15.0	5.8	2.4	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック12	砕片	チャート	10.5	9.0	1.1	0.1	
		フレ第1ブロック14	削片	チャート	14.0	16.0	5.2	1.2	
		フレ第1ブロック15	削片	チャート	13.0	11.5	6.2	1.0	
		フレ第1ブロック17	削片	安山岩	17.5	9.5	3.0	0.5	
		フレ第1ブロック18	削片	珪質頁岩(縞面)	18.5	18.0	5.3	1.4	
		フレ第1ブロック20	削片	珪質頁岩(黒色)	12.5	22.0	5.6	1.5	被熱による変色か
		フレ第1ブロック21	砕片	チャート	11.0	4.5	1.4	0.1	
		フレ第1ブロック22	削片	チャート	25.0	12.5	3.6	1.2	
		フレ第1ブロック23	削片	安山岩	27.0	16.0	5.9	2.9	デイスaitカ
		フレ第1ブロック24	削片	流紋岩	11.5	14.0	5.0	0.7	
		フレ第1ブロック25	削片	チャート	22.0	16.5	4.2	1.3	
		フレ第1ブロック27	削片	チャート	15.0	8.0	3.0	0.4	
		フレ第1ブロック28	砕片	安山岩	8.5	4.0	1.5	0.1	(緑色) 凝灰岩か
		フレ第1ブロック30	削片	珪質頁岩(縞面)	11.5	12.0	4.0	0.5	
		フレ第1ブロック31	削片	珪質頁岩(縞面)	16.5	24.0	3.4	1.7	
		フレ第1ブロック32	砕片	チャート	7.5	10.0	3.4	0.3	
		フレ第1ブロック33	削片	チャート	12.0	17.0	5.0	1.6	
		フレ第1ブロック35	削片	黒色頁岩	15.0	22.5	7.1	1.9	

阿蘇中学校東側遺跡

採回 番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量 g	備 考
				mm	mm	mm		
	プレ第1ブロック36	碎片	黒色頁岩	35	8.0	2.6	0.1	
	プレ第1ブロック37	碎片	安山岩	7.0	7.0	1.7	0.1>	(緑色) 凝灰岩か
	プレ第1ブロック38	割片	流紋岩	24.0	8.0	6.1	0.9	
	プレ第1ブロック39	割片	流紋岩	15.5	7.0	3.5	0.3	
	プレ第1ブロック40	割片	安山岩	16.5	13.5	2.7	0.7	
	プレ第1ブロック42	碎片	チャート	9.0	4.0	2.8	0.1	
	プレ第1ブロック44	割片	チャート	13.5	11.0	6.8	1.1	
	プレ第1ブロック47	割片	流紋岩	23.0	18.5	11.8	2.6	
	プレ第1ブロック48	割片	チャート	14.0	24.0	3.2	1.1	
	プレ第1ブロック49	割片	流紋岩	14.5	15.5	2.2	0.5	
	プレ第1ブロック50	割片	チャート	11.5	9.5	2.5	0.2	
	プレ第1ブロック51	割片	チャート	10.5	19.5	2.5	0.4	
	プレ第1ブロック53	割片	安山岩	14.5	22.0	2.3	0.9	(緑色) 凝灰岩か
	プレ第1ブロック54	割片	珪質頁岩(黒色)	26.0	22.0	7.8	4.4	被熱による変色か
	プレ第1ブロック55	割片	珪質頁岩(黒色)	15.0	15.0	4.6	0.6	被熱による変色か
	プレ第1ブロック58	割片	チャート	17.0	39.0	4.6	2.6	
	プレ第1ブロック59	割片	珪質頁岩(嶺岡)	18.5	17.5	3.9	1.4	
	プレ第1ブロック61	割片	黒色頁岩	12.0	5.5	4.2	0.3	
	プレ第1ブロック63	割片	チャート	16.5	11.5	7.0	1.2	
	プレ第1ブロック64	割片	安山岩	28.0	24.0	8.5	7.9	デイスaitカ
	プレ第1ブロック65	割片	チャート	15.5	19.0	4.5	1.7	
	プレ第1ブロック66	割片	チャート	9.5	4.5	3.0	0.2	
	プレ第1ブロック68	碎片	チャート	4.0	8.5	1.0	0.1>	
	プレ第1ブロック69	割片	砂岩	30.0	10.5	8.5	2.4	
	プレ第1ブロック70	割片	チャート	12.0	12.5	5.1	0.7	
	プレ第1ブロック71	碎片	チャート	6.5	7.0	2.2	0.2	
	プレ第1ブロック74	割片	チャート	11.5	15.0	9.0	2.2	
	プレ第1ブロック78	割片	チャート	27.0	8.0	4.0	1.4	
	プレ第1ブロック79	割片	チャート	11.5	10.0	8.1	1.3	
	プレ第1ブロック80	碎片	珪質頁岩(黒色)	5.5	7.0	1.0	0.1>	被熱による変色か
	プレ第1ブロック81	割片	珪質頁岩(黒色)	10.0	14.0	1.1	0.1	被熱による変色か
	プレ第1ブロック82	碎片	珪質頁岩(黒色)	7.5	9.5	0.8	0.1>	被熱による変色か
	プレ第1ブロック83	割片	珪質頁岩(黒色)	9.0	12.5	1.0	0.3	被熱による変色か
	プレ第1ブロック85	割片	チャート	15.5	14.0	4.8	1.7	
	プレ第1ブロック88	割片	珪質頁岩(黒色)	10.0	10.0	1.9	0.2	被熱による変色か
	プレ第1ブロック89	割片	安山岩	14.0	16.0	3.5	0.9	(緑色) 凝灰岩か
	プレ第1ブロック90	割片	流紋岩	10.5	12.0	1.0	0.2	
	プレ第1ブロック93	割片	珪質頁岩(黒色)	7.5	16.0	1.4	0.1	被熱による変色か
	プレ第1ブロック99	割片	安山岩	27.0	7.0	4.3	0.9	デイスaitカ
	プレ第1ブロック102	割片	安山岩	12.0	10.0	3.2	0.4	(緑色) 凝灰岩か
	プレ第1ブロック104	割片	安山岩	9.5	12.0	3.3	0.4	
	プレ第1ブロック105	碎片	安山岩	5.5	9.5	1.8	0.1	
	プレ第1ブロック106	割片	珪質頁岩(黒色)	12.0	17.0	7.3	1.5	被熱による変色か
	プレ第1ブロック107	碎片	安山岩	9.5	7.5	1.7	0.2	デイスaitカ
	プレ第1ブロック109a	割片	安山岩	8.0	8.0	2.5	0.1>	デイスaitカ
	プレ第1ブロック109b	碎片	安山岩	5.5	7.0	1.4	0.1>	デイスaitカ
	プレ第1ブロック110	割片	珪質頁岩(黒色)	10.5	11.0	2.7	0.3	被熱による変色か
	プレ第1ブロック111	割片	流紋岩	16.0	23.5	3.9	1.3	
	プレ第1ブロック112	割片	安山岩	11.0	9.0	4.4	0.5	デイスaitカ
	プレ第1ブロック113	割片	安山岩	13.0	13.0	3.1	0.7	デイスaitカ
	プレ第1ブロック115	碎片	流紋岩	6.0	7.0	1.3	0.1>	
	プレ第1ブロック116	割片	珪質頁岩(嶺岡)	14.5	15.0	3.8	0.7	
	プレ第1ブロック119	割片	チャート	11.0	22.0	12.1	1.9	
	プレ第1ブロック120	割片	チャート	12.0	5.5	1.6	0.1>	

第32表 第1ブロック出土石器組成表

石 材	器 種						点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
		楔形石器	剥片	碎片	石核	敲石				
安 山 岩		4	20	6			30	25.64	47.30	21.44
流 紋 岩		2	10	1			13	11.11	44.60	20.22
砂 岩			1			1	2	1.71	19.30	8.75
珪 質 頁 岩 (凝 間)		1	6				7	5.98	8.10	3.67
珪 質 頁 岩 (黒 色)			17	2			19	16.24	32.70	14.82
珪 質 頁 岩			1		1		2	1.71	56.10	25.43
黒 色 頁 岩			2	1			3	2.56	12.50	5.67
チ ャ ー ト		4	29	7	1		41	35.04	104.30	47.28
全 体 点 数 合 計		11	86	17	2	1	117	100.00	220.60	100.00

26 b・cを剥離している。なお、b・cの打面は同一で、aも多少段差があるが、同一面の可能性があらと思われるが、26 dについては上部を欠損していることから不明である。

第3節 縄文時代

1 遺 構 (第91・92図、第33表)

阿蘇中学校東側遺跡では縄文時代の遺構は土坑のみである。

SK-006 (第91・92・93図、図版31)

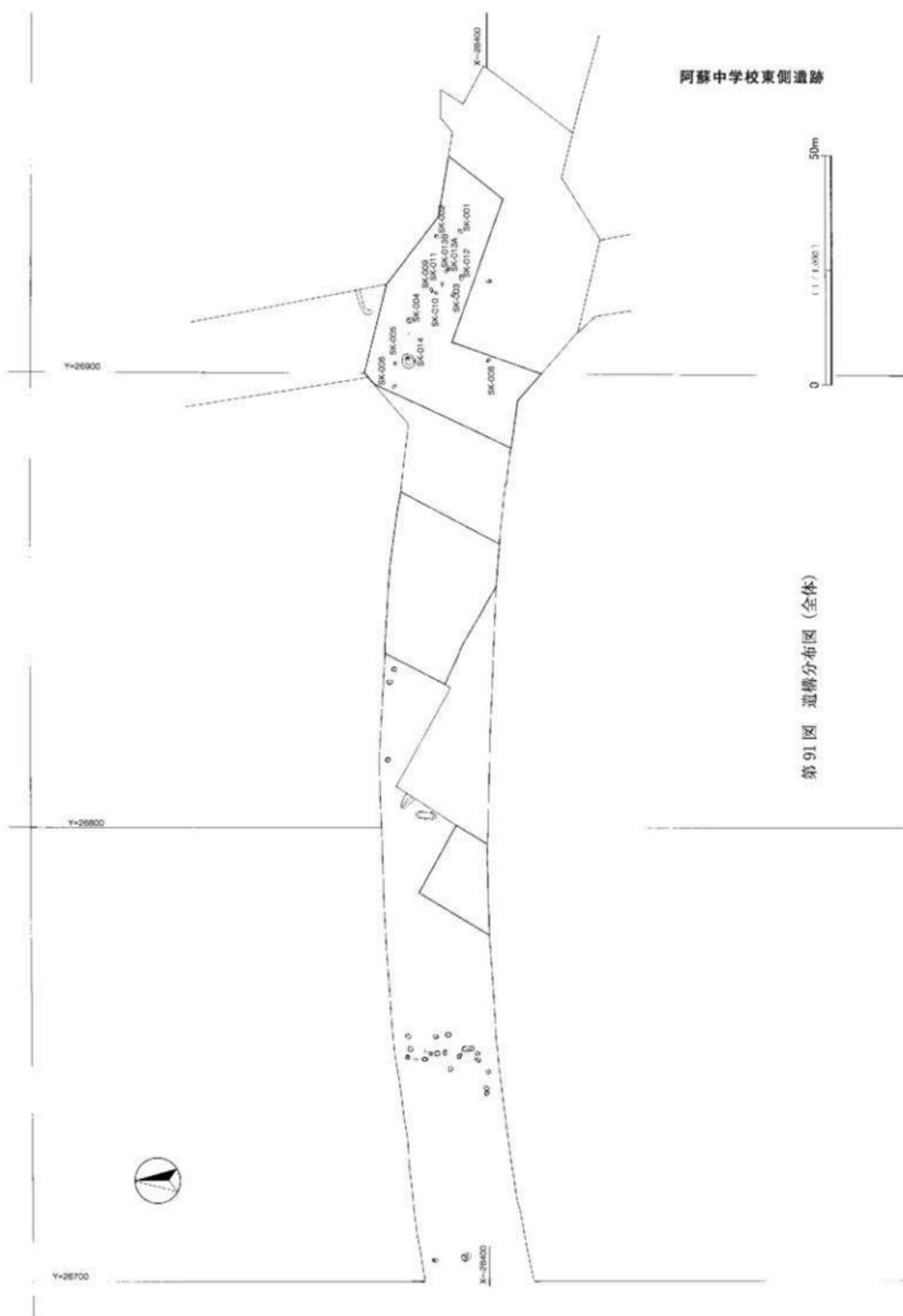
6A-08グリッド周辺に位置する土坑である。2基の土坑が平面上重複するようにみえるが、調査時の観察では新旧関係は判断が困難であった。平面形は長い楕円形で、長軸方位はN-38°-W、規模は長軸長118cm、短軸長65cm、深さ36cmである。遺物は出土していないが、覆土が他の中・近世とした土坑に比べ、しまりが強く、ソフトロームが主体であり、縄文時代の可能性が考えられる。

SK-013A・B (第91・92・93図、図版31)

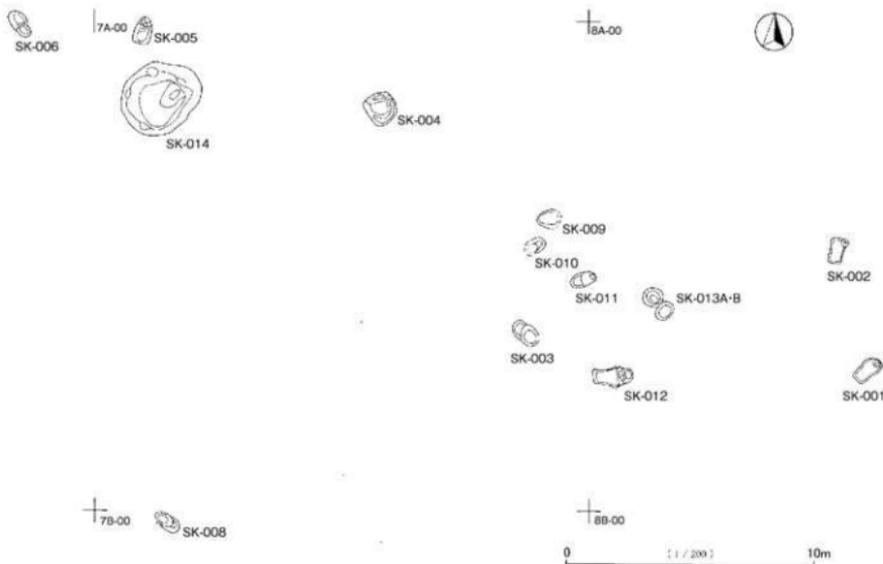
8A-51グリッド周辺に位置する炉穴である。火床部をもつ2基の炉穴が隣接する。中央部の切り合いがわずかで、新旧関係は判然としない。平面形はどちらも楕円形で、長軸方位はAがN-41°-W、BがN-55°-Eである。Aは浅い皿状の落ち込みで、全体に硬化し、覆土の焼土は少量である。上下に2つの火床面を検出した。下部は焼土が多く堆積し、炉底面等の被熱範囲が厚い。上部炉跡よりも長く使用されたと考えられる。Bはわずかな硬化面として検出された。規模はAが長軸長83cm、短軸長80cm、深さ16cmである。規模はBが長軸長81cm、短軸長62cm、深さ17cmである。出土遺物は縄文土器の細片のみで図示は困難であった。条痕文の施された個体がわずかに確認できる。

2 遺構外出土土器 (第94図、図版33)

調査区から出土した縄文土器は非常に少ない。1は中・近世の土坑覆土から出土した土器破片である。胎土は堅緻で、粗い砂が混入している。中期前葉であろう。2も同様に中・近世土坑からの出土で、1と同一個体の可能性があり、中期前葉であろう。



第 91 図 遺構分布図 (全体)

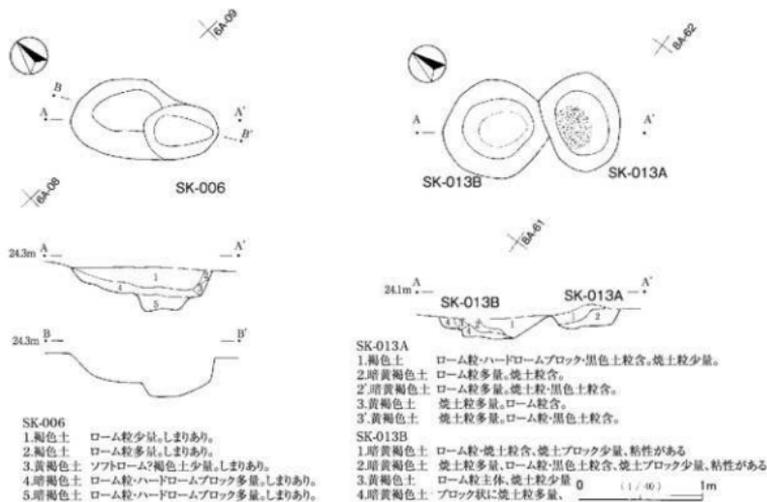


第 92 図 遺構分布図 (今回調査区)

第 33 表 土坑一覧表

() は推定、< > は現存値

遺構No	グリッド	種類	時期	平面形	長軸方位	規模		深さ	ビット等
						長軸×短軸 (cm)	(cm)		
SK-001	A8-75	土壇墓	中近世	長方形	N-48° -E	118 × 66		28	32 × 30 × 13
SK-002	A8-45	土壇墓	中近世	長方形	N-16° -E	104 × 52		18	30 × 20 × 3
SK-003	A7-68	土壇墓	中近世	不整形	N-44° -W	A87 × 66, B (39) × (64)		A28, B23	-
SK-004	A7-15	土坑	中近世	楕円形	N-34° -W	132 × 120		6	ビット 95 × 39 × 9 溝幅 12 ~ 23 深さ 12
SK-005	A7-01	土壇墓	中近世	長方形	N-16° -E	A64 × 39, B (42) × (66)		A65, B44	31 × 13 × 4
SK-006	6A-08	土坑	縄文	長楕円形	N-38° -W	118 × 65		北 23, 南 36	-
SK-007	欠番	-	-	-	-	-		-	-
SK-008	B7-01	土壇墓	中近世	不整形	N-59° -W	A80 × 49, B (61) × 59		A74, B (25)	-
SK-009	A7-49	土壇墓	中近世	楕円形	N-87° -W	98 × 78		18	-
SK-010	A7-48	土坑	中近世	楕円形	N-57° -E	95 × 60		42 ~ 47, 段部 33	-
SK-011	A7-59	土坑	中近世	楕円形	N-69° -E	108 × 57 段部 62 × 53		32, 段部 23	-
SK-012	A8-70	土壇墓	中近世	不整形	N-89° -E	164 × 54 ~ 86		32 ~ 36	東端 (37 × 24) × 25 中央 60 × 26 × 5
SK-013A-B	A8-51	卯穴	縄文	楕円形	AN-41° -W, BN-55° -E	A (83) × 80, B 81 × 62		A 16, B 17	-
SK-014	A7-11	土坑	中近世	不整形円形	N-51.5° -E	334 × 276		107.5	103 × 70 × 37



第93図 SK-006・SK-013



第94図 遺構外出土縄文土器

第4節 中・近世 (第33表)

中・近世の遺構は土坑のみである。前回調査区では中・近世の陶磁器や人骨が出土したが、今回の調査では図示できる遺物は出土しなかった。形状・土層の堆積状態が前回調査区での検出例と類似しているため、同様に中・近世の土壌墓の可能性もある。

SK-001 (第91・92・95図、図版31)

A8-75グリッドに位置する。平面形は長方形である。長軸方位はN-48°-E、規模は長軸118cm、短軸66cm、深さ28cmである。底面東端にピットがあり、長軸32cm、短軸30cm、深さ13cmであるがやや不整形で木根の可能性もある。

SK-002 (第91・92・95図、図版31)

A8-45グリッドに位置する。平面形は長方形である。長軸方位はN-16°-E、規模は長軸104cm、短軸52cm、深さ18cmである。底面北東端にピットがあり、長軸30cm、短軸20cm、深さ3cmであるがやや不整形で木根の可能性もある。

SK-003 (第91・92・95図、図版31)

A7-68グリッドに位置する。平面形は不整形である。長軸方位はN-44°-W、規模はAは長軸87cm、短軸66cm、深さ28cmである。Bは長軸推定39cm、短軸推定64cm、深さ23cmである。下層確認時に検出された。土坑2基の重複にもみえるが、新古は不明瞭で、遺物は出土していない。

SK-004 (第91・92・95図、図版32)

A7-15グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-34°-W、規模は長軸132cm、短軸120cm、深さ6cmである。底面北端にピットがあり、長軸95cm、短軸39cm、深さ9cmである。同じく南端に溝状の落ち込みがあり、幅12cm～23cm、深さ12cmである。

SK-005 (第91・92・95図、図版32)

A7-01グリッドに位置する。平面形は長方形である。長軸方位はN-16°-E、規模はAは長軸64cm、短軸39cm、深さ65cmである。Bは長軸推定42cm、短軸66cm、深さ44cmである。Aの底面にピットがあり、長軸31cm、短軸13cm、深さ4cmである。底面は段差があり、凸凹である。覆土がSK-001-002に類似する。

SK-008 (第91・92・95図、図版32)

B7-01グリッドに位置する。平面形は不整形である。土坑2基の重複にもみえるが新古は不明瞭で、遺物はない。長軸方位はN-59°-W、規模はAが長軸80cm、短軸49cm、深さ74cmである。Bが長軸推定61cm、短軸59cm、深さ推定25cmである。第3層上面が硬化する。

SK-009 (第91・92・95図、図版32)

A7-49グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-87°-W、規模は長軸98cm、短軸78cm、深さ18cmである。底面は凹凸がある。

SK-010 (第91・92・96図、図版32)

A7-48グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長軸方位はN-57°-E、規模は長軸95cm、短軸60cm、深さ42cm～47cm、段部までの深さ33cmである。東側に段がある。底面はかなり凸凹がある。

SK-011 (第91・92・96図、図版32)

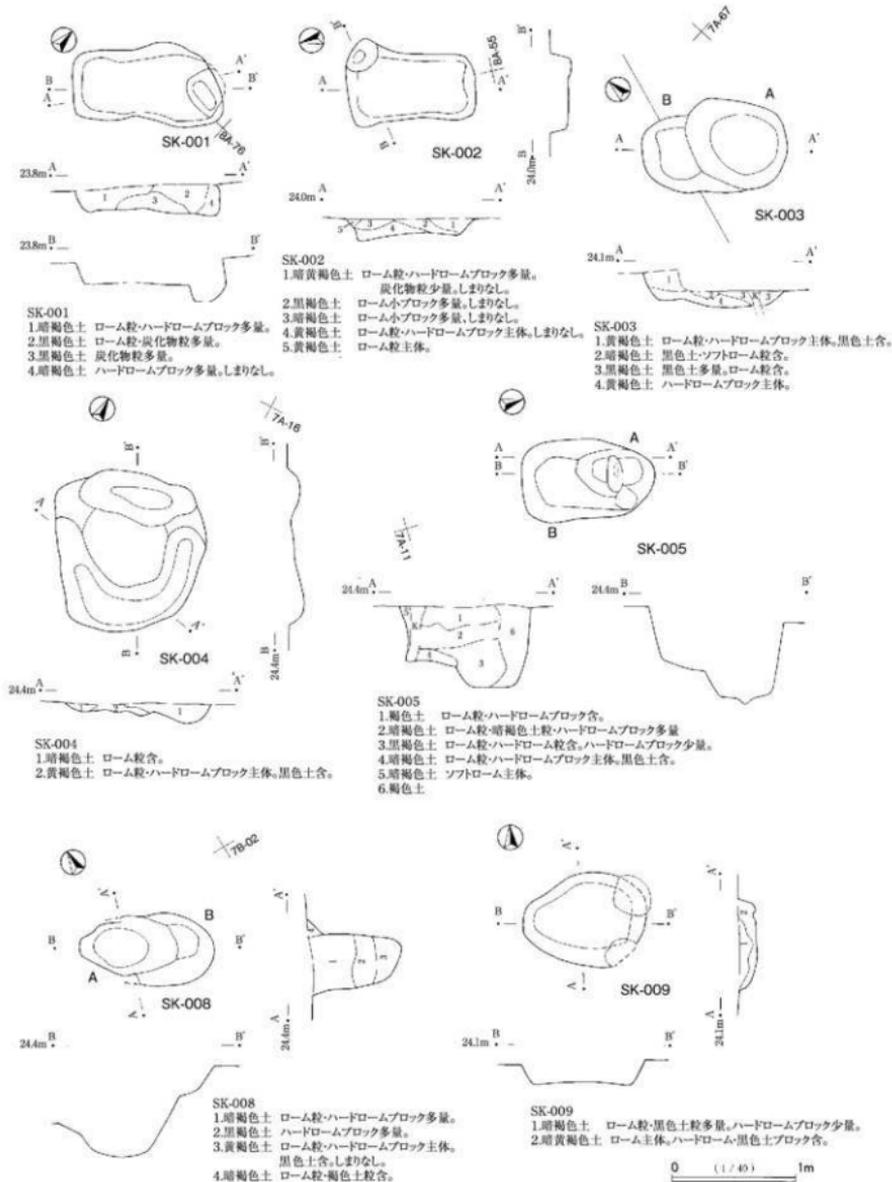
A7-59グリッドに位置する。下層確認時に検出した。平面形は楕円形である。長軸方位はN-69°-E、規模は長軸108cm、短軸57cm、深さ32cmで、テラス状の段部は長軸62cm、短軸53cm、深さ23cmである。底面は比較的平坦である。

SK-012 (第91・92・96図、図版32)

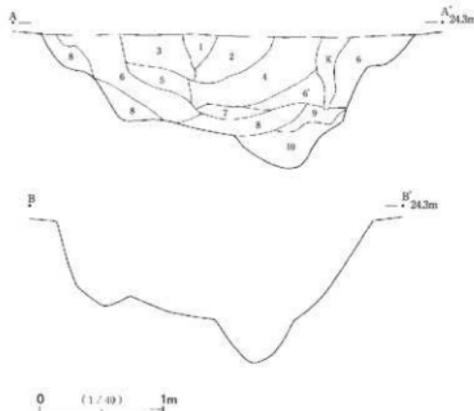
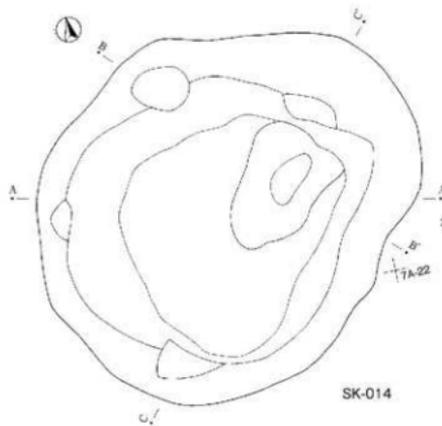
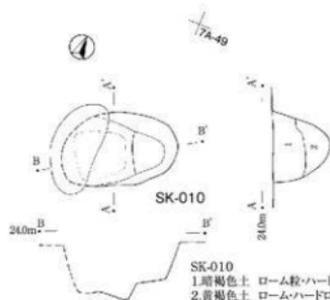
A8-70グリッドに位置する。平面形は不整形である。長軸方位はN-89°-E、規模は長軸164cm、短軸54cm～86cm、深さ32cm～36cmである。底面東端にピットがあり、長軸推定37cm、短軸推定24cm、深さ25cmである。同じく中央にピットがあり、長軸60cm、短軸26cm、底面からの深さ5cmである。

SK-014 (第91・92・96図、図版32)

A7-11グリッドに位置する。平面形は不整形である。長軸方位はN-51.5°-E、規模は長軸334cm、短軸276cm、深さ107.5cmで、テラス状の段部までの深さは北側75.2cm、東側86.2cm、南側83.1cm、西側71.7cmである。底面北東端に土坑状のピットがあり、長軸103cm、短軸70cm、深さ37cmである。



第95図 中・近世土坑(1)



第96図 中・近世土坑(2)

第7章 総括

ここでは各遺跡の成果を時代ごとにまとめることにする。

旧石器時代 上高野白幡遺跡では旧石器時代の石器が単独で2点のみの出土にとどまったが、それ以外の遺跡では石器集中地点の本調査が実施された。今回の調査では、北は栃木県高原山等の北関東地域、西は信州和田峠周辺や奥多摩地域、南は房総半島南部等各地域から各時期に渡り各種の石材がもたらされ、様々な行動の痕跡を残した旧石器時代の人々の来歴の一部を垣間見ることができた。

堂の上遺跡では第2黒色帯上部と考えられる安山岩を主体とする小規模な石器集中出土地点が1か所検出された。

平沢遺跡の旧石器時代ではⅢ層～Ⅶ層にかけての石器集中地点が2か所検出された。両ブロックともⅣ層下部の石器群と考えられる。この内、第1ブロックは栃木県高原山産と考えられる黒曜石を主体とする比較的大規模な集中A、礫2点の小規模な集中B、メノウの石核を主体とする中規模な集中Cの3か所に分かれる。なお、集中Aにはメノウが共伴することと出土層位から集中Cとの同時性の可能性が高いと考えられるが、集中Bは別な文化層の可能性もある。今回は投影した地点が多少離れていることと出土遺物からは判断がつかなかったことから同一文化層のブロックとした。

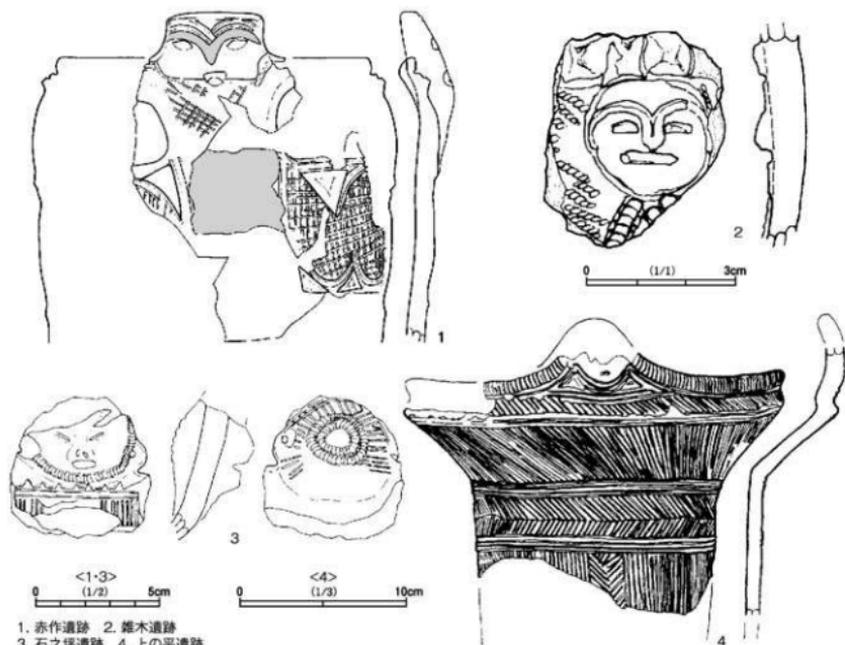
赤作遺跡の旧石器時代ではⅢ層～Xb層にかけての小規模な石器集中地点が3か所検出され、3枚の文化層を確認した。第1文化層第1ブロック出土の石器はすべて東京都奥多摩町海沢を中心に分布するいわゆる海沢層産チャートに類似しており、他の遺跡では八千代市坊山遺跡で出土している。出土層位的にはX層上部で今回の調査では最古の石器群である。なお、海沢層のチャートの県内での利用(出土)状況については山岡・青山(2013)の文献に詳しい¹⁾。第2文化層第1ブロック出土の石器はすべて房総半島南部産と推定されている八丁層ノジュールを含むいわゆる嶺岡産珪質頁岩と考えられる。第3文化層第1ブロックは信州和田峠周辺産と考えられる黒曜石や産地不明の珪質頁岩を主体としたものである。第2・第3文化層は定型的な石器が出土しなかったことと出土層位にそれほど差がないことから両者ともⅥ層ないしⅦ層下部段階の石器群の可能性はあるが、若干の出土層位等の差から別な文化層とした。

阿蘇中学校東側遺跡では今回の調査区では最大規模の石器集中地点が1か所検出された。Ⅶ層を中心とした第2黒色帯上部の石器群と考えられる。北関東産と考えられる石材を主体とし、これらにいわゆる嶺岡産珪質頁岩が若干伴い、定型的な石器はないが、楔形石器が多く出土している。また、調査では炭化物や焼土等の痕跡は見えていないが、被熱の痕跡の伺われる石器が比較的多く出土している。

縄文時代 各遺跡から縄文土器の出土がみられ、特に堂の上遺跡と赤作遺跡において良好な資料を得た。

堂の上遺跡では後期前葉を主体とする竇穴住居跡と土坑を調査した。002土坑からは胴部に列状の刺突文を有する称名寺Ⅱ式終末期と胴部に鈎手文や剣先状の沈線文を有する堀之内1式初期の土器がまとめて出土した。後期初頭から前葉にかけての土器様相を示す遺構として良好な資料であり、遺構外からも称名寺式の土器片が多数出土していることから周辺に該期の集落跡が存在している可能性が高い。

赤作遺跡では、顔面表現のある深鉢土器の出土が特筆される。これらの土器は土坑から一括して出土したものであるため、その幅面的位置づけを考えておきたい²⁾。同一個体の可能性の高い第76図の1～4は、印刻を伴う雲形の文様モチーフから前期末十三菩提式の範疇と考えられる。地文が格子目文となるものは



1. 赤作遺跡 2. 雑木遺跡
3. 石之坪遺跡 4. 上の平遺跡

第97図 顔面表現付の土器の類例

中期初頭沈線文系（師場系）に多く、十三菩提式では少ないが、ここでは文様モチーフを重視しておきたい。他の共伴遺物も胎土中の含有物に共通性があり、横位の結節回転が施される点で前期末縄文系の土器と考えられる。中期を通じて特徴的にみられる顔面表現の系譜は、中部地方とりわけ甲信地域で前期末葉～中期初頭以降に出現し、本例のような眉と鼻梁が連結した意匠として中期初頭以降に引き継がれていくものである。十三菩提式では山梨県北杜市雑木遺跡・葦崎市石之坪遺跡に顔面部分の破片例、中期初頭沈線文系（師場系）では上半を欠損するが口の表現が遺存する甲府市上の平遺跡に個体例があるというように、甲州地域に類例（第97図）が見られる。そのような中、赤作遺跡出土資料は突起と文様等の内容が概ね捉えられるという点で重要であり、本土器群は前期末の一括性の高い好資料と位置づけられる。

弥生時代 堂の上遺跡で後期集落、上高野白幡遺跡では中期集落を調査した。それ以外の遺跡では遺構・遺物とも確認されなかった。堂の上遺跡では後期の竪穴住居跡が7軒検出された。調査対象区の南東側（平成14年度調査区）に偏って分布し、浅い谷を挟んで北西側の調査区には竪穴住居跡の1軒のみが分布する。遺物の出土は全体的に少なく、011 竪穴住居跡からは遺物がほとんど出土していない。主柱穴を有するものは001と020 竪穴住居跡のみで、他は炬を有するが小型でピットのない竪穴である。出土土器³⁾には櫛描文系の土器は含まれず、多段の輪積み痕系の甕で段が消失気味の個体が確認できることから、後期でも後半の資料と考えられる。後期最終段階に特徴的な口縁下端に貼り瘤をもつ個体は破片資料にも確認で

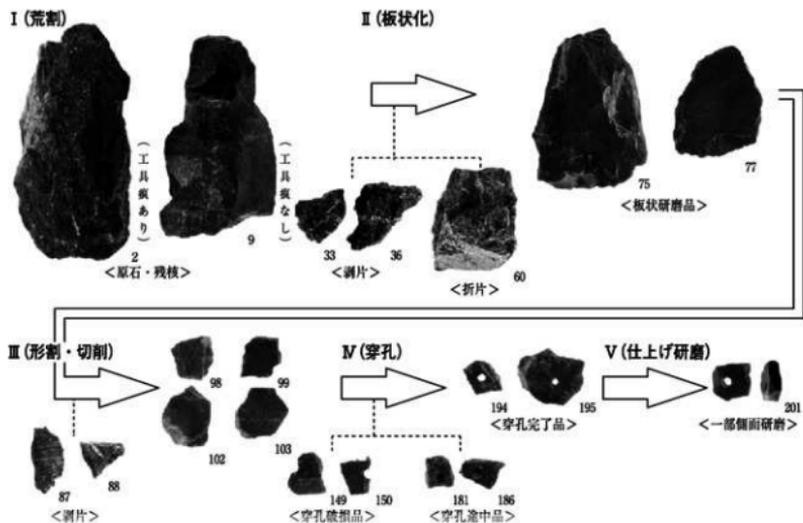
きないため、集落は後期後半の比較的短期間に営まれたものと想定される。

上高野白幡遺跡では堅穴住居跡から宮ノ台式土器⁴⁾が豊富に出土した。比較的狭い範囲で5軒の堅穴住居跡が集中して検出されたことから、周辺には該期の集落域が展開するものと想定され、立地・時間的に八千代市田原窪遺跡のように環濠集落となる可能性もある。出土土器には擬流水文や沈線文、縄描文等古段階に特徴的な文様モチーフがやや崩れ、無区画の細帯縄文や結紐文の区画沈線に省略化がみられるなど新相の特徴を有する個体が含まれる。新段階の指標となる羽状縄文や結節縄文が施文される個体は破片資料にもほとんど確認できないことから、宮ノ台式の中段階後半～新段階前半の資料群と位置づけられる。

また、土器の他にも石包丁状石器や台石・片刃石斧等が出土しているものの、典型的な大陸系石器が伴っていない点も興味深い。

古墳時代 堂の上遺跡においてのみ遺構が検出され、中期の集落跡の存在が明らかとなった。堅穴住居跡は4軒検出されたが、散漫な分布である。主柱穴が4基揃う堅穴はなく、すべてに炬が伴う。4軒のうち021は出土遺物が少なく時期が特定できないが、他の3軒及び遺構外出土遺物ではほぼ同時期と考えられ、いわゆる和泉式の土師器が出土した。須恵器は破片資料においても確認されない。土師器の時期は平底埴や長脚高坏、甕の形状から白井らによる千葉県の古墳時代中期土器編年案⁵⁾のⅣ期～Ⅴ期（5世紀中葉～後葉）に相当すると考えられる。甕は頸部の屈曲がやや弱く、新相の特徴をもつ。

その中で、005 堅穴住居跡からは石製模造品の製作⁶⁾に関わる剥片と未成品が多く出土した。石材はすべて滑石で、ほとんどが白玉製作に関わる剥片と未成品である。出土状況から堅穴住居焼失後の窪地となったところに土器類とともに廃棄されたものであろう。堅穴住居に伴うものではないことは明らかであるが、全体の出土遺物の様相からみて、堅穴住居跡の年代と廃棄の時期は大きな差はないものと考えられる。遺構自体は他の堅穴住居跡と同様の構造で、製作の各段階を示す遺物がまとまりなく出土していることから



第98図 白玉製作工程模式図

ら工房ではなく、近隣地で製作が行われたと判断できる。遺物の観察から白玉の製作工程（第98図）を5段階（Ⅰ：荒削、Ⅱ：板状化⁷⁾、Ⅲ：形削・切削、Ⅳ：穿孔、Ⅴ：仕上げ研磨）設定し、遺物を分類した。遺物のほとんどがⅡ・Ⅲ段階の素材と排出された剥片⁸⁾と考えられる。成品は1点も出土せず、一部側面研磨されたⅤ段階に相当する可能性のある遺物が1点のみであった。孔の位置が大きくずれた両側穿孔品や破損していない穿孔途中品が作出されていることについては、小林が指摘した複数個体を重ねて同時に穿孔する（複数穿孔b）方法で、両側穿孔作業を行ったものと想定される（1995 小林）。すべてこの方法によるとは限らないが、複数重ねた白玉未成品のうち中央に位置する個体ならば、ずれた位置に両側穿孔されたり、破損なしで穿孔途中品になる状況が説明可能である。また、穿孔を行うⅣ段階の遺物を見る限り、成品としては比較的厚みのない白玉（推定直径8mm以下、厚み2～3mm、孔径1.5mm）を、多角形化する切削工程を一部省略するものを含みながら製作していたことが分かる。

奈良・平安時代 近隣の萱田遺跡群や栗谷遺跡等では大規模な集落跡が検出されているのにも関わらず、確実な遺構は、今回の調査対象区内では検出されていない。

中・近世 阿蘇中学校東側遺跡と赤作遺跡において土坑等が検出されている。土坑については前回調査区の発掘成果により中・近世の土壌墓群の一角をなすと考えられるが、部分的であり遺物の出土も極めて少なく、残念ながら当時の様相を復元できるような具体的な成果は得られなかった。

注1) 2013 山岡磨由子・青山幸重「現状ブロックの“場”その2・神山型彫器に類する資料について—泉北領第3遺跡・復山谷遺跡（6次～8次）補遺—」『研究連絡誌』第74号 公益財団法人千葉県教育振興財団

2) 顔面表現のある土器については下記文献を参考とした。

1994 山梨県教育委員会「甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園 上の平遺跡第6次調査・東山北遺跡第4次調査・鏡子塚古墳南東部試掘」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第94集

1998 榎原功一「山梨県の縄文時代中期土偶—有脚立像土偶の出現をめぐって—」『土偶研究の地平（2）』

2001 荏崎市教育委員会「石之坪遺跡（西地区）—県営園地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」

3) 弥生時代後期の土器編年については下記文献を参考とした。

2000「東日本弥生時代後期の土器編年」第9回東日本埋蔵文化財研究会

2005「埴塚遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」八千代市遺跡調査会

4) 弥生時代中期後半の宮ノ台式土器編年については下記文献を参考とした。

1996 小倉淳一「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第27号 史館同人

1996 安藤広道「関東地方 中期後半・後期」『YAY！弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』弥生時代を語る会

1997 黒沢 浩「房総宮ノ台式土器考」『史館』第29号 史館同人

5) 2012 白井久美子ほか「古墳時代中期の房総」『研究紀要27』財団法人千葉県教育振興財団

6) 白玉の製作工程については下記文献を参考とした。

1991 山本哲也「西上総における古墳時代中期の玉作—文蔵遺跡の例を中心として—」『研究紀要Ⅴ—君津郡市文化財センター設立10周年記念論集—』財団法人君津郡市文化財センター

1995 藤原祐一「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1995 小林清隆「房総の石製模造品製作—白玉の製作について—」『研究紀要16—20周年記念論集—』財団法人千葉県文化財センター

2004「千葉県八千代市 川崎山遺跡h地点—店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—」八千代市遺跡調査会

2004「千葉県船橋市 辺田台遺跡（1・2）」船橋市教育委員会

7) 先行研究ではこの段階を「荒削Ⅱ」と表記する例が多いが、この作業の最終形態が上下面を研磨された板状研磨品であることから今回は「板状化」とした。

8) 厳密にはⅠ段階（荒削）で生じた剥片も存在している可能性はある。

写 真 图 版



阿部中学校東側遺跡

赤作遺跡

平谷遺跡

堂の上遺跡

上高野白幡遺跡

航空写真(S=1/10,000)



堂の上遺跡



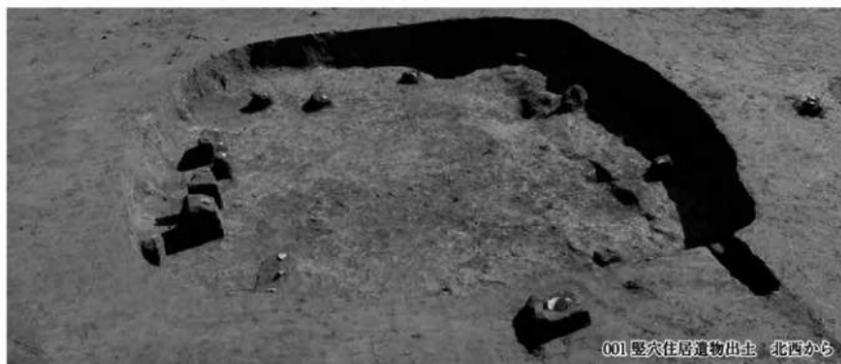
第7トレンチ (平成12年度) 南から



基本土層 (MAD-12グリッド) 南東から



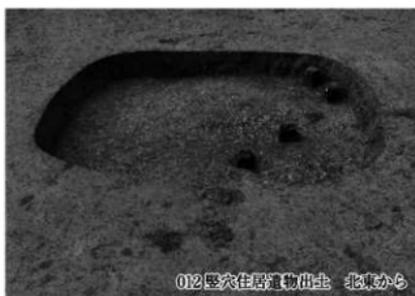
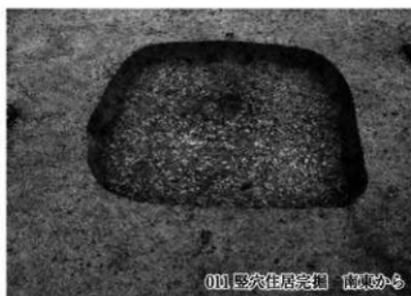
第1ブロック石塔出土 西から

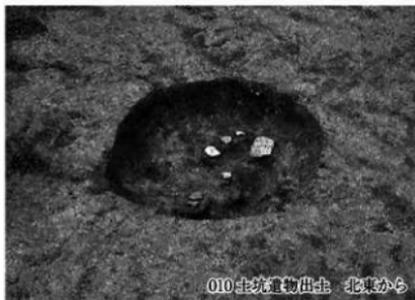
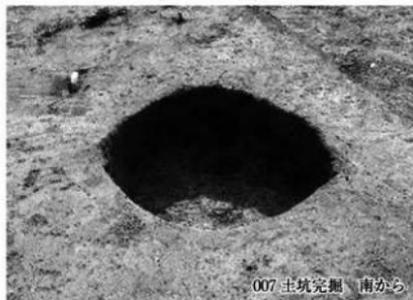
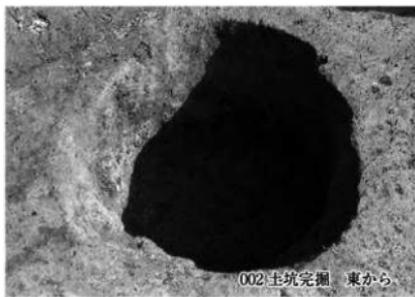
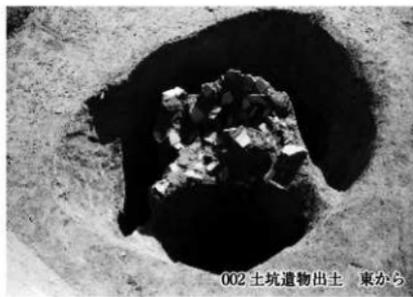
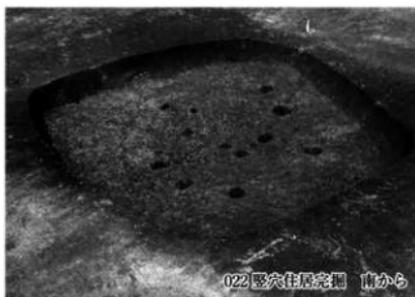


001 壁穴住居遺物出土 北西から

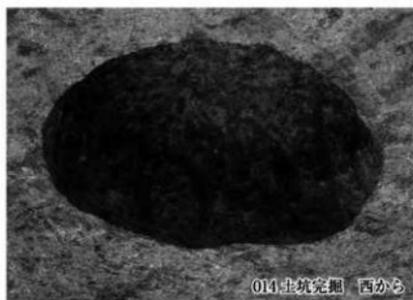


堂の上遺跡





堂の上遺跡



014 土坑完掘 西から



015 土坑遺物出土 南東から



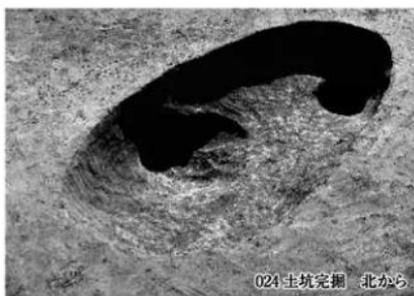
016 土坑遺物出土 南東から



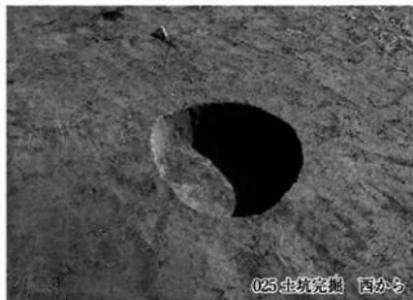
017 土坑遺物出土 南東から



023 土坑完掘 西から



024 土坑完掘 北から

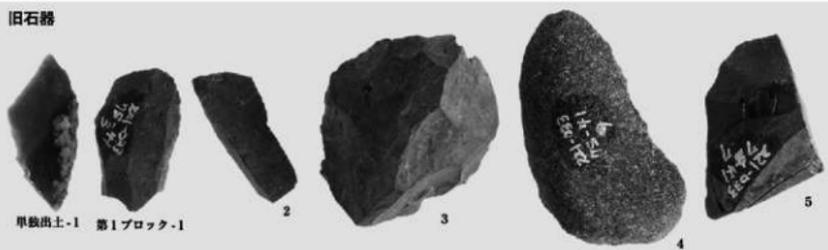


025 土坑完掘 西から

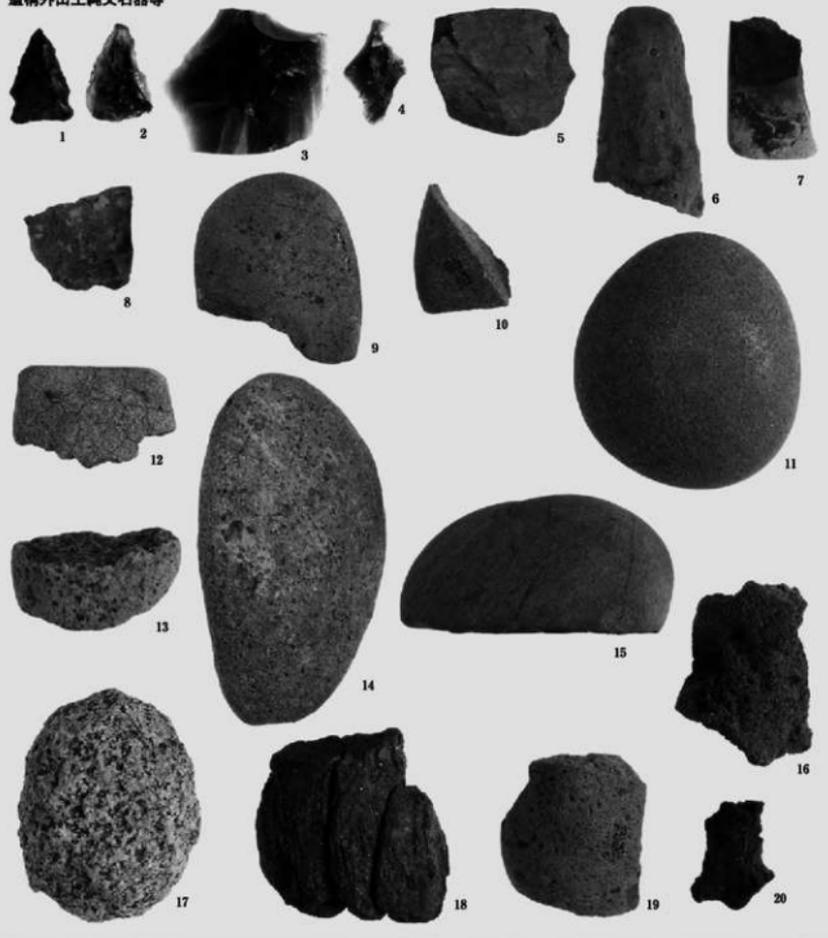


027 土坑完掘 南から

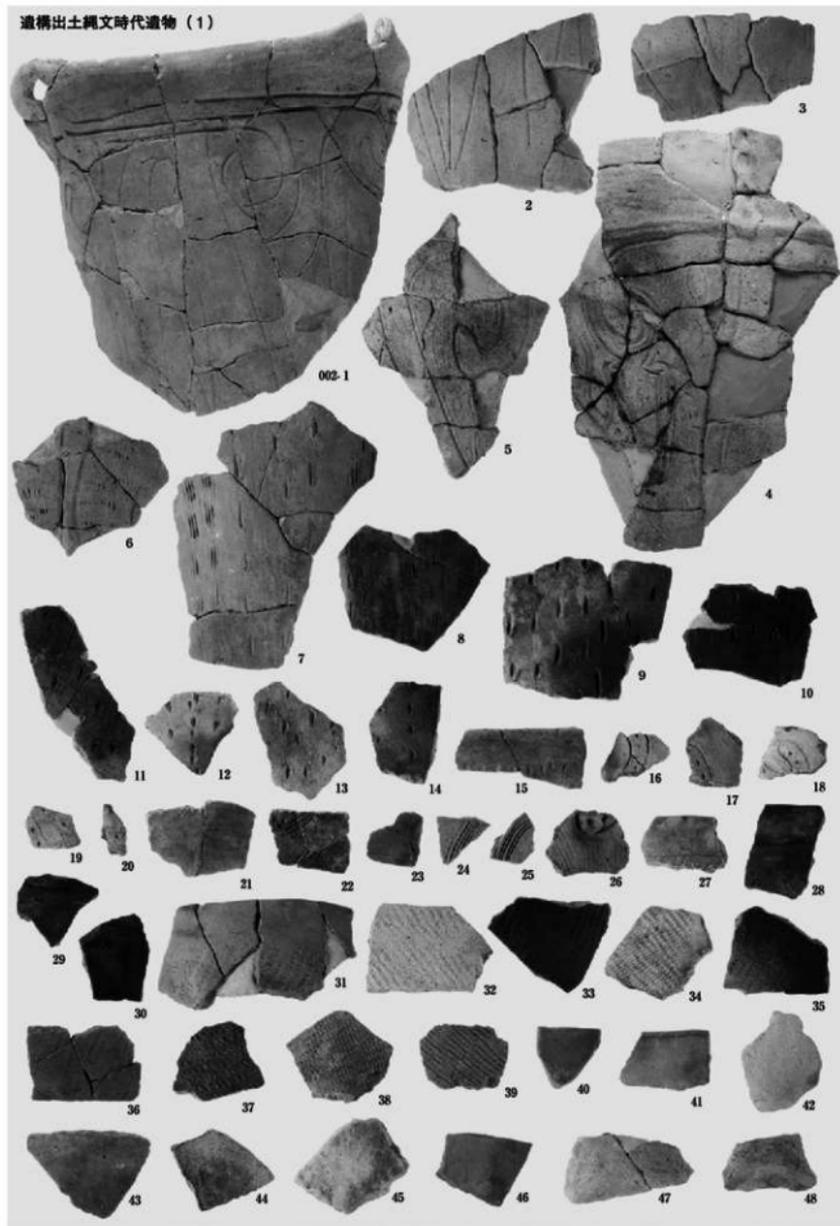
旧石器



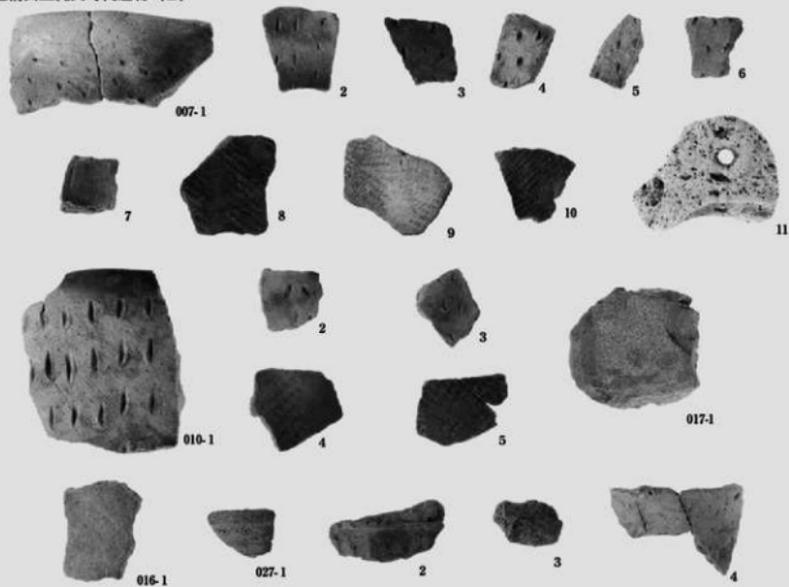
遺構外出土縄文石器等



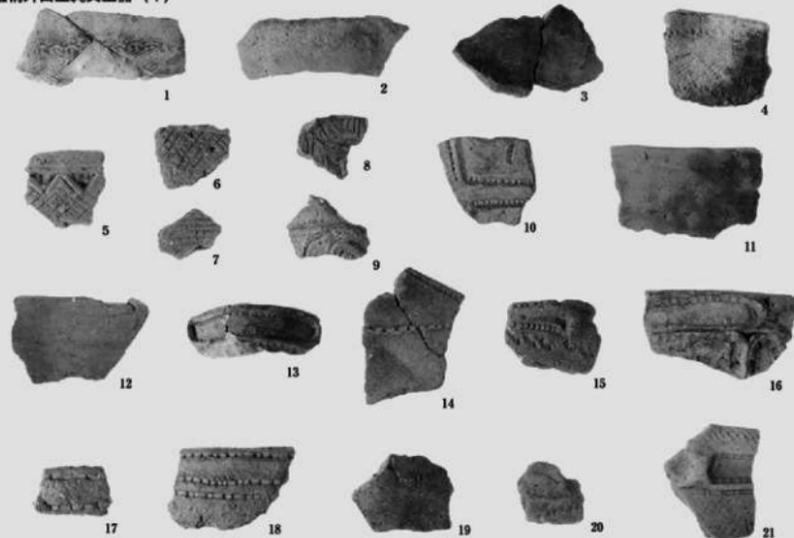
遺構出土縄文時代遺物 (1)



遺構出土縄文時代遺物 (2)

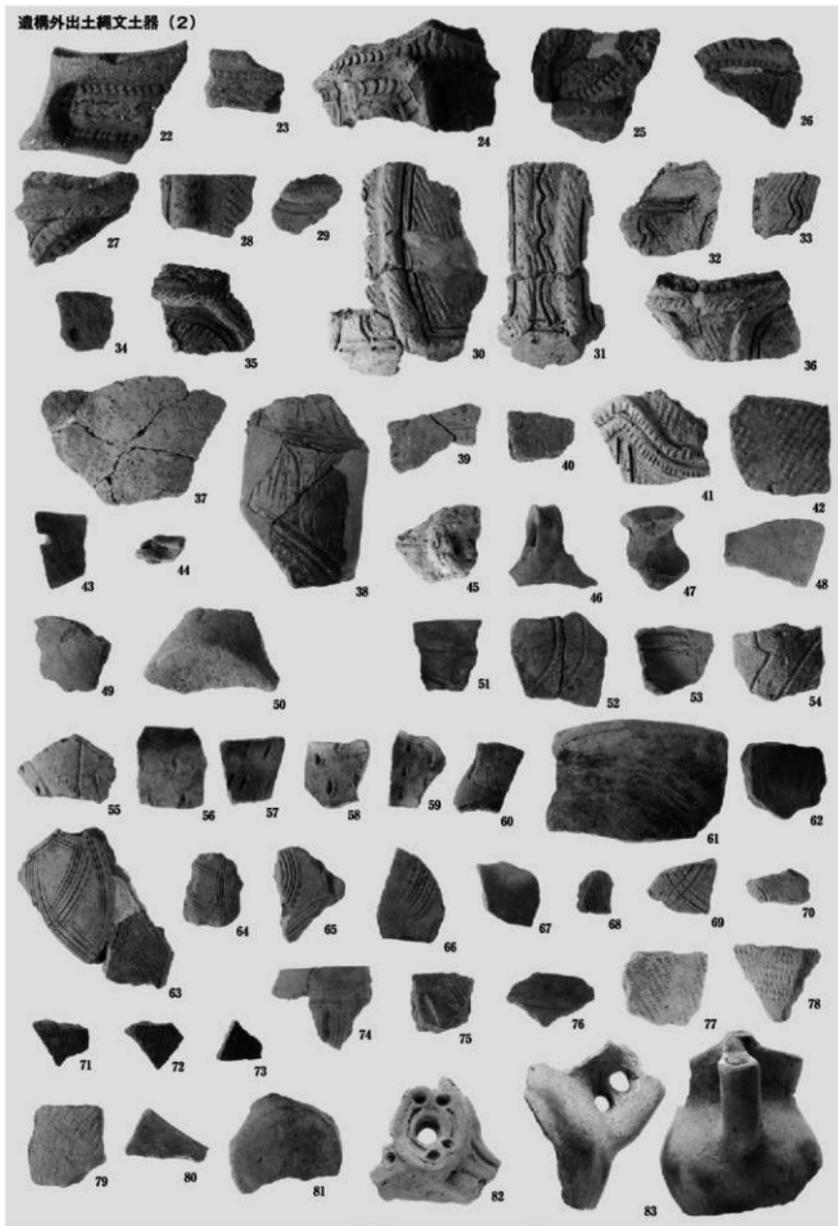


遺構外出土縄文土器 (1)



堂の上遺跡

遺構外出土縄文土器 (2)



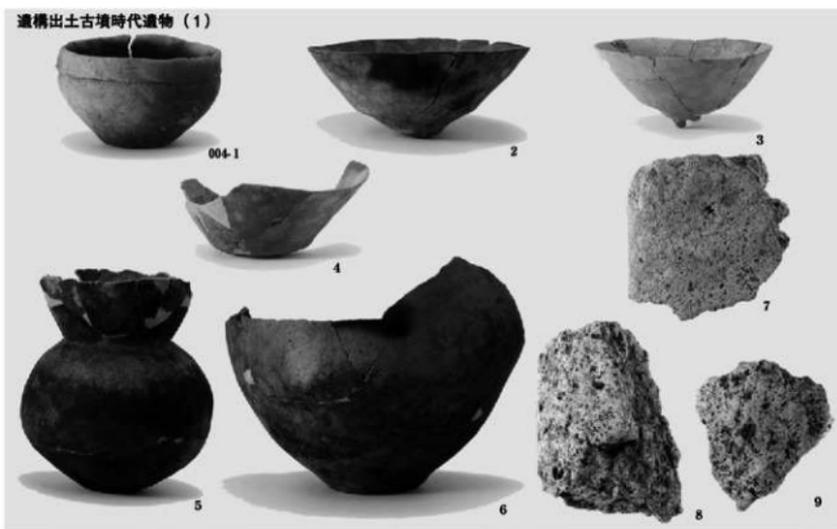
遺構出土弥生土器



遺構外出土弥生土器

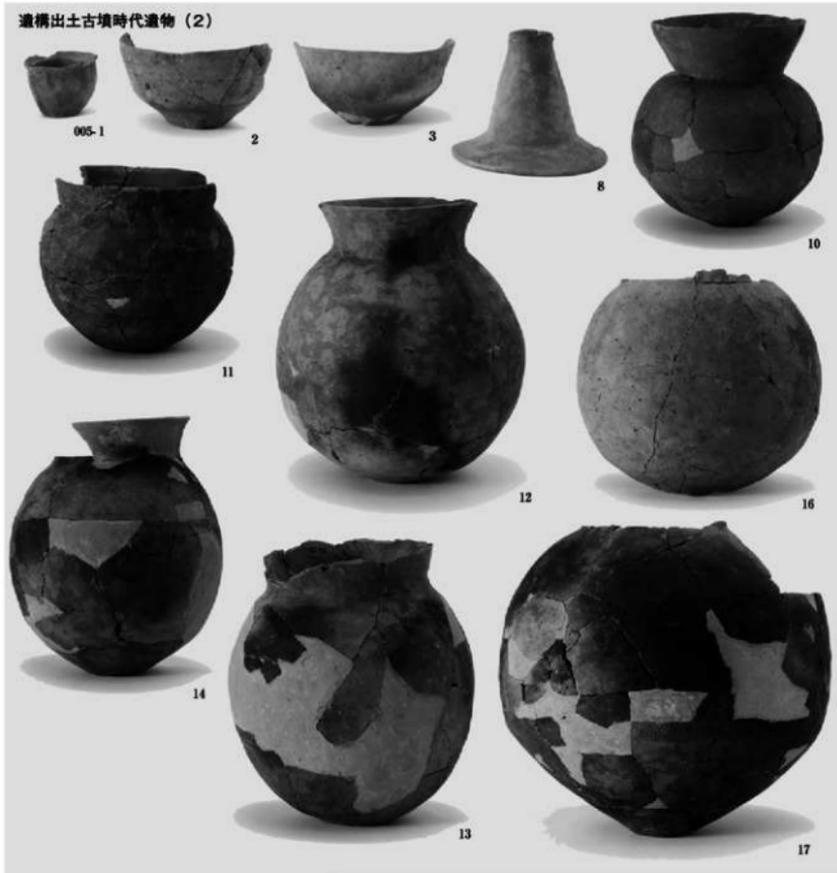


遺構出土古墳時代遺物 (1)



堂の上遺跡

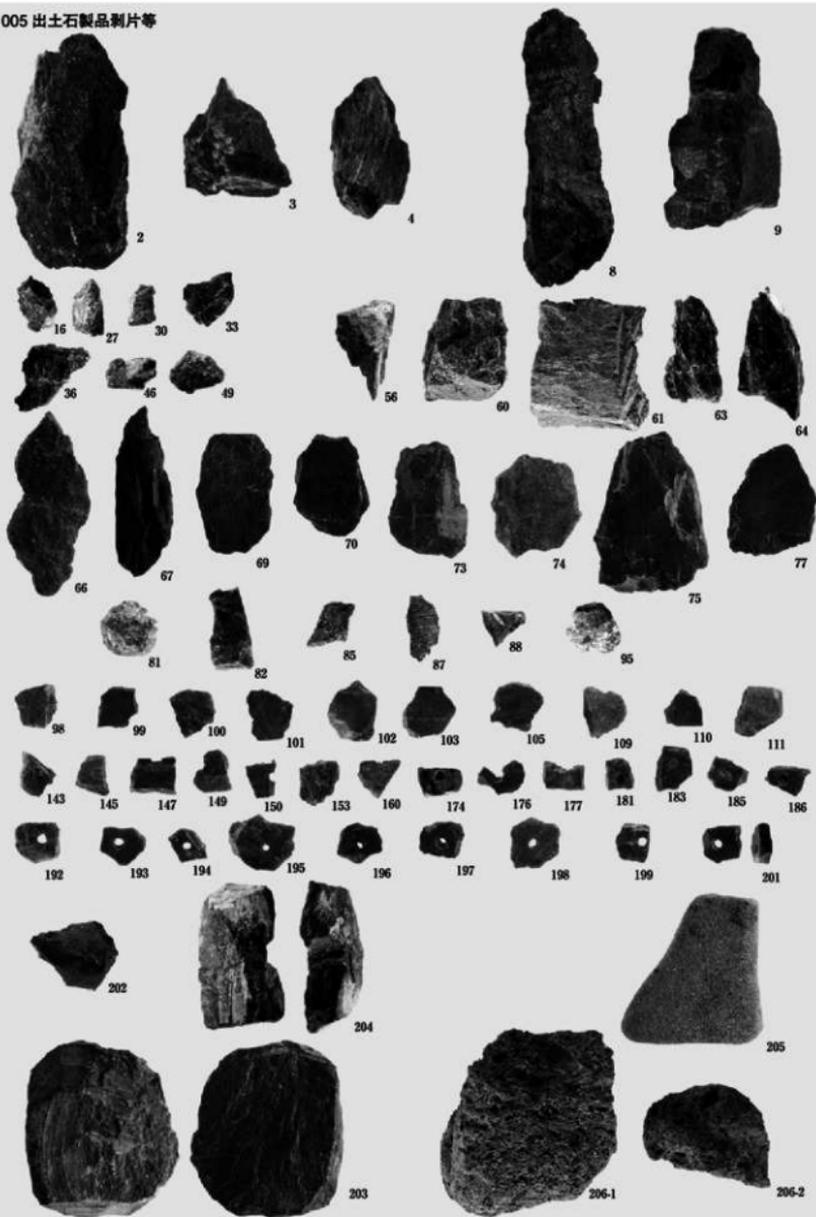
遺構出土古墳時代遺物 (2)



遺構外出土古墳時代遺物



005 出土石製品断片等



上高野白幡遺跡



調査前風景 (平成22年度)



調査前風景 (平成22年度) 西から



第9トレンチ (平成22年度) 北西から



第10トレンチ (平成22年度) 北西から



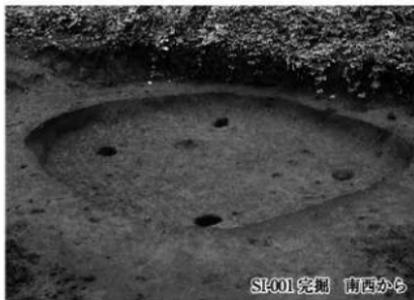
基本主層 (7J-66 グリッド) 南西から



単独石器出土 (7J-66付近) 南東から



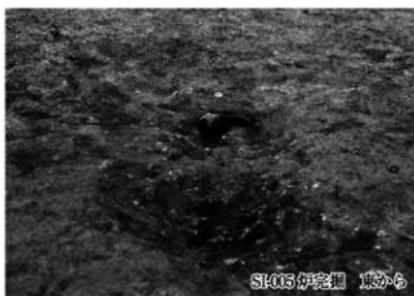
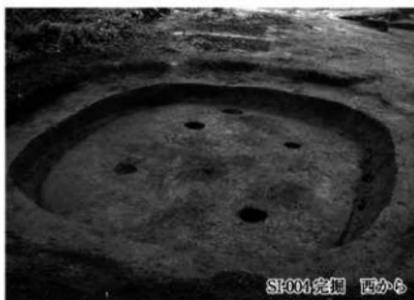
SI-001 遺物出土 西から



SI-001 発掘 南西から



上高野白幡遺跡



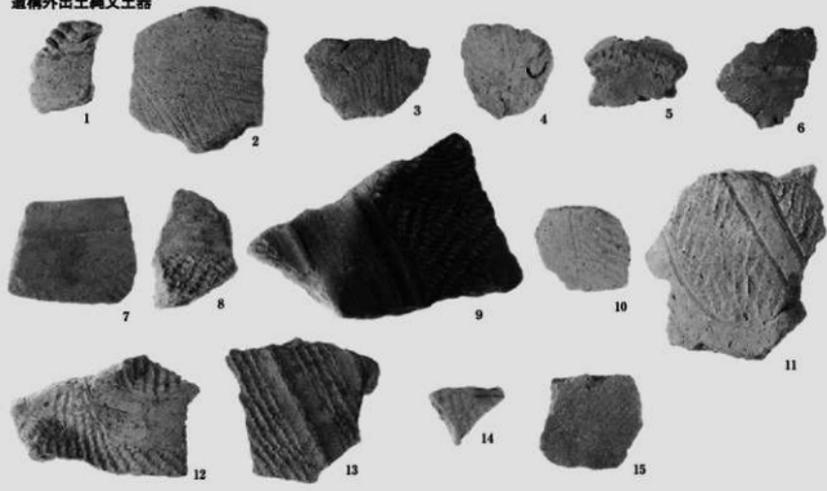
旧石器



早蕨出土-1

2

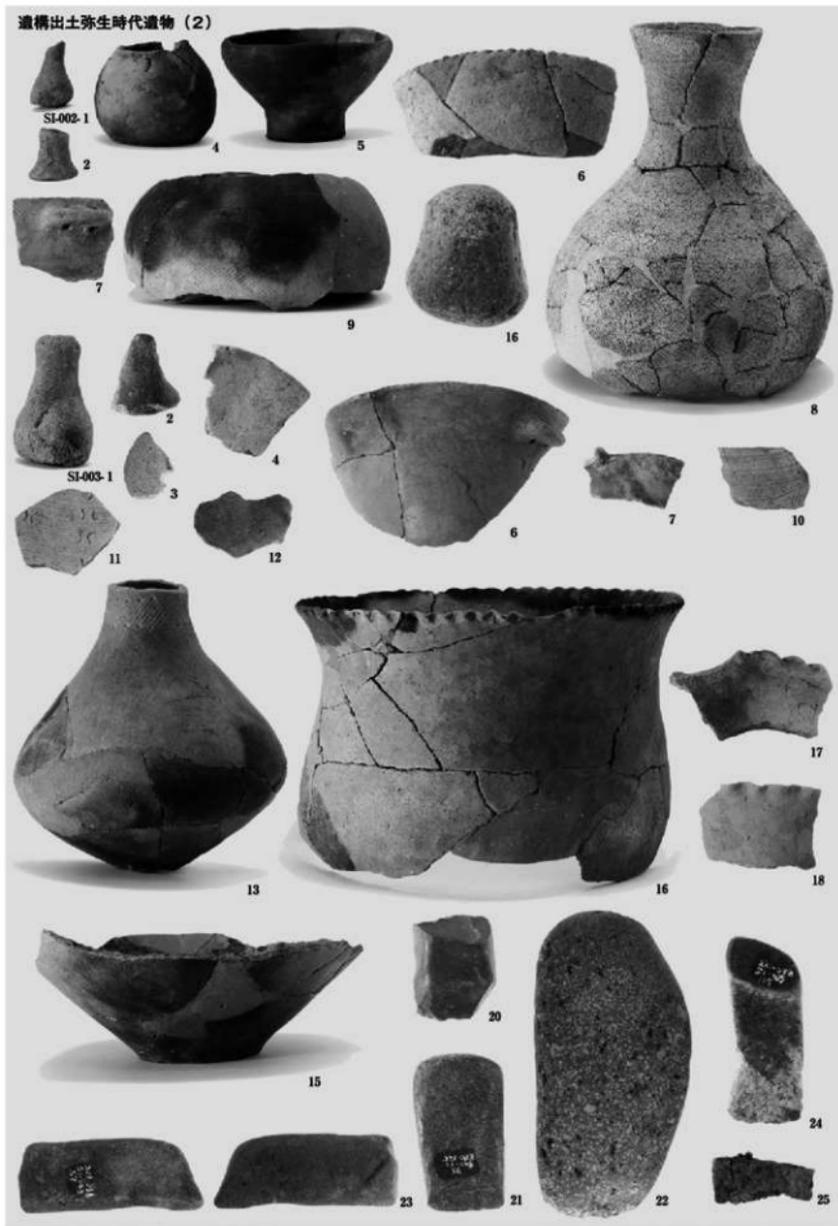
遺構外出土縄文土器



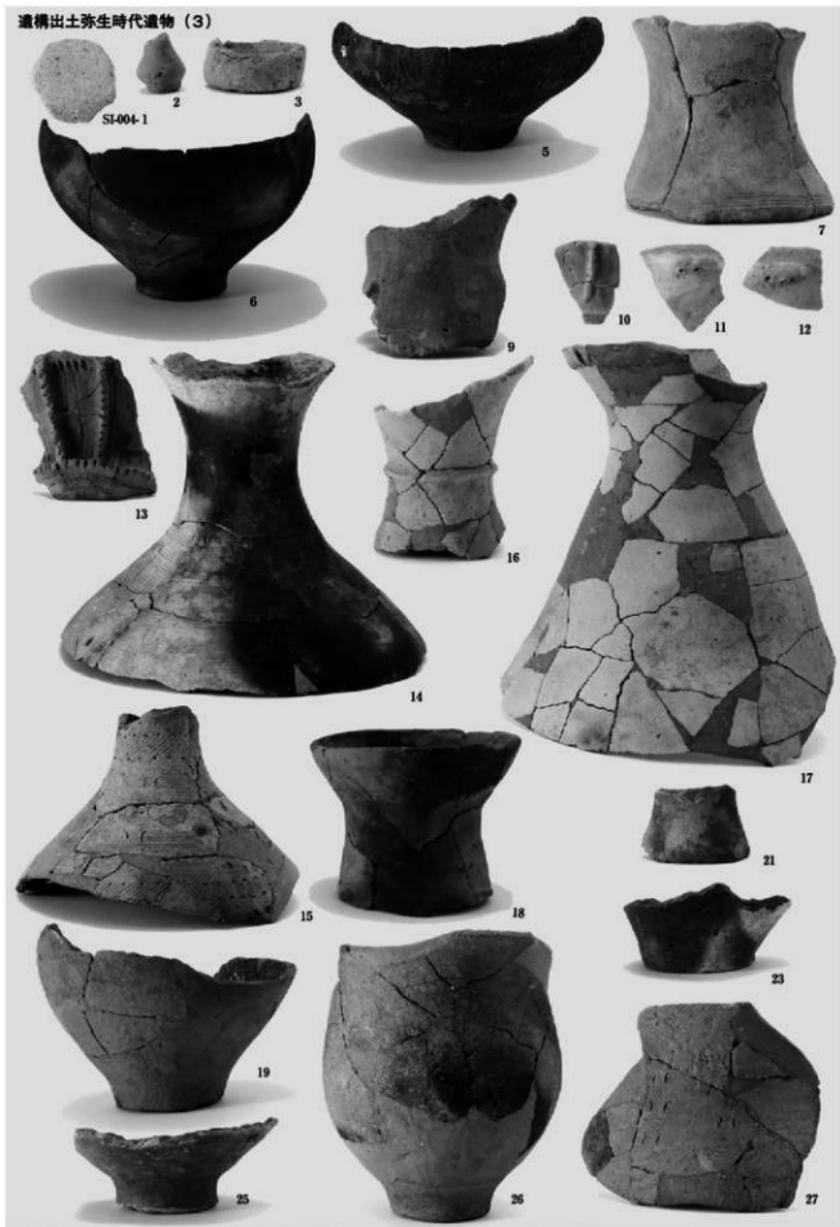
遺構出土弥生時代遺物 (1)



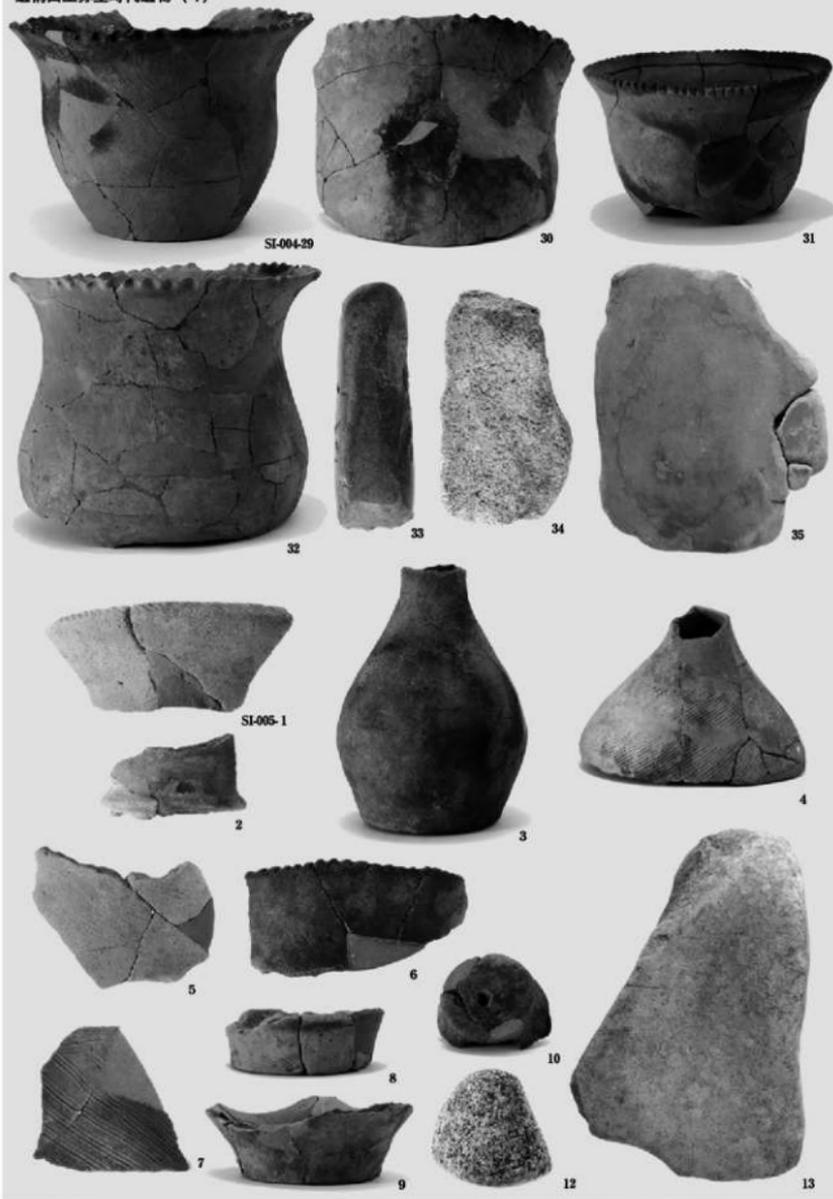
遺構出土弥生時代遺物 (2)

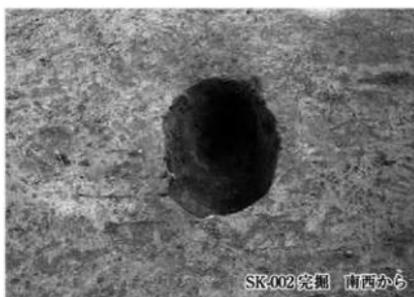


遺構出土弥生時代遺物 (3)

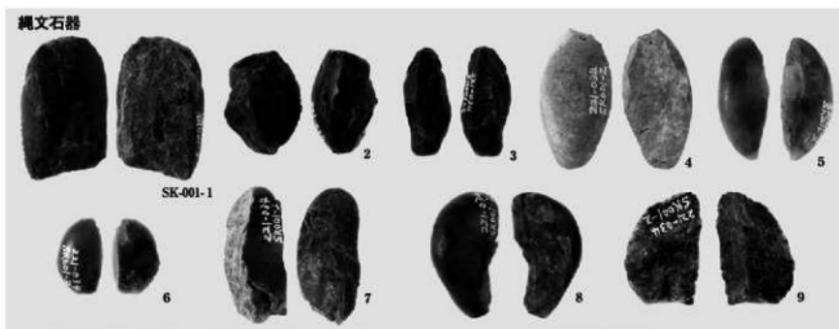
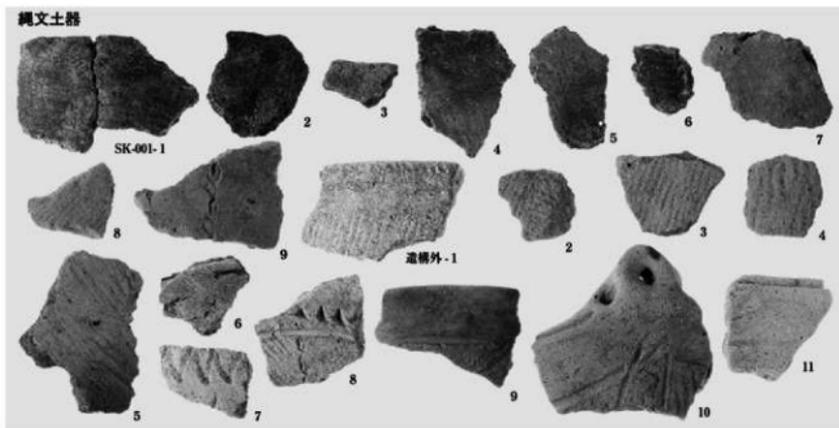
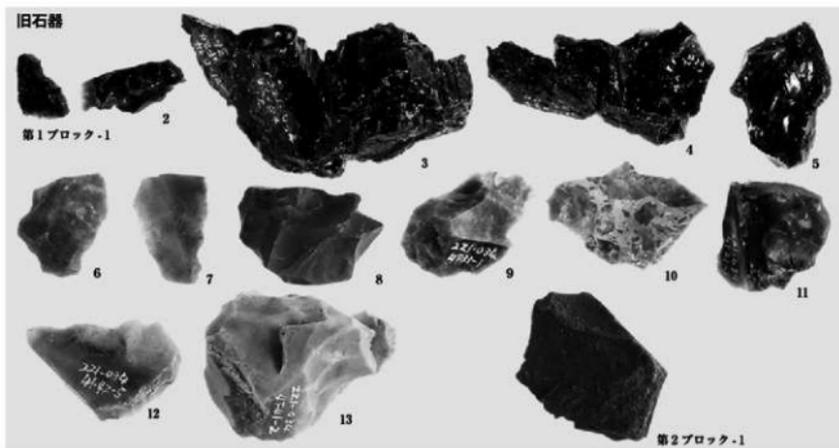


遺構出土弥生時代遺物 (4)





平沢遺跡





調査前風景（平成14年度）南から



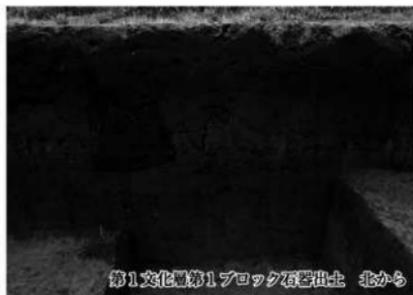
調査前風景（平成14年度）南から



調査区域概観全景（平成11年度）南から



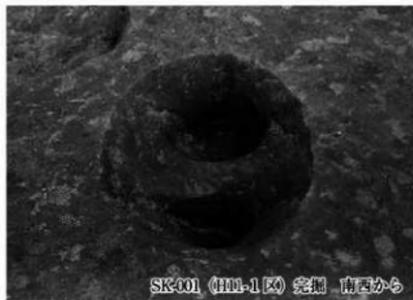
基本土層（66BB-13グリッド）



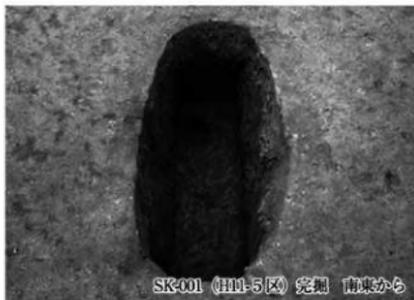
第1文化層第1ブロック石器出土 北から



第2文化層第1ブロック石器出土 東から

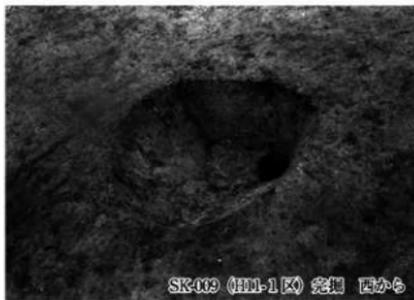
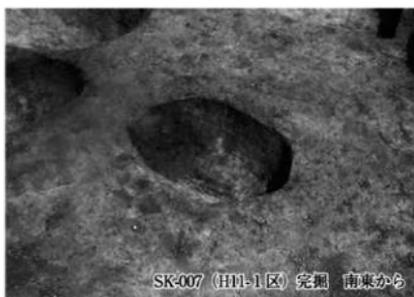
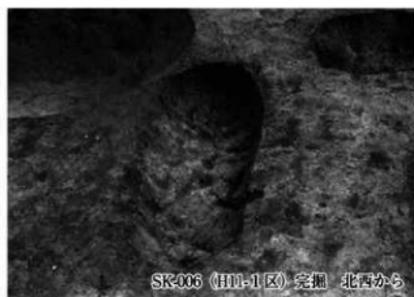
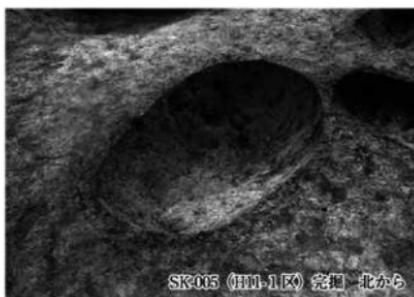
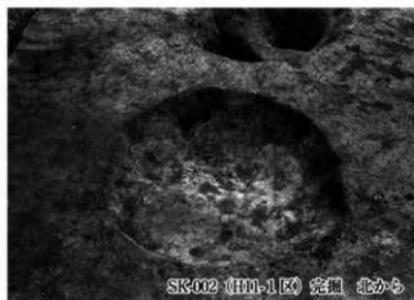


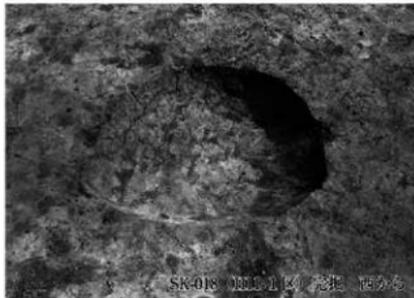
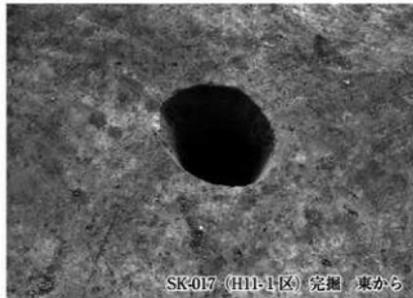
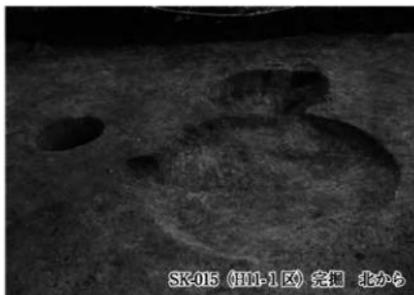
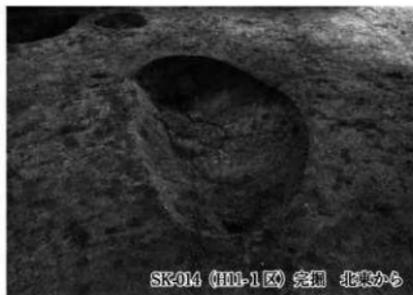
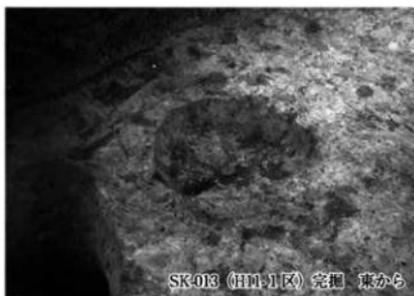
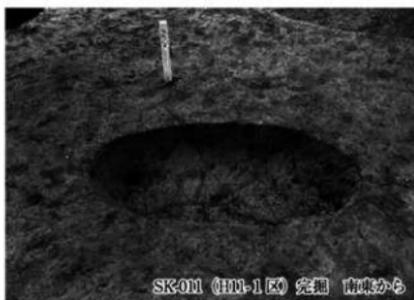
SK-001 (H11-1区) 発掘 南西から



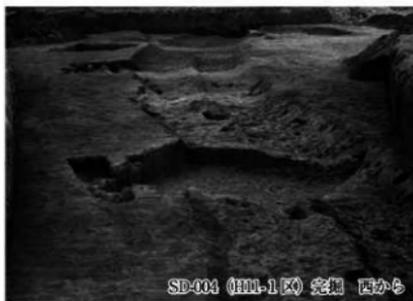
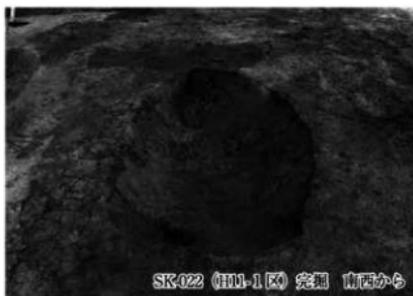
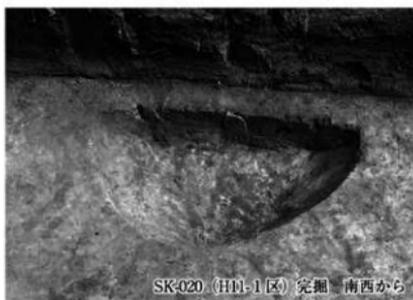
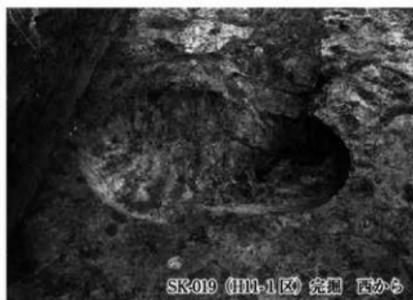
SK-001 (H11-5区) 発掘 南東から

赤作遺跡

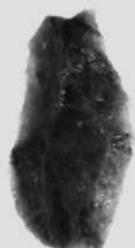




赤作遺跡



旧石器



第1文化層第1ブロック-1



2



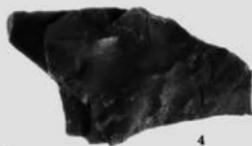
第2文化層
第1ブロック-1



2



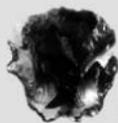
3



4



第3文化層第1ブロック-1



2



3



4

SK-021・023 出土縄文土器



1 (正面)



(側面)



(顔面アップ)



2



3



4



5



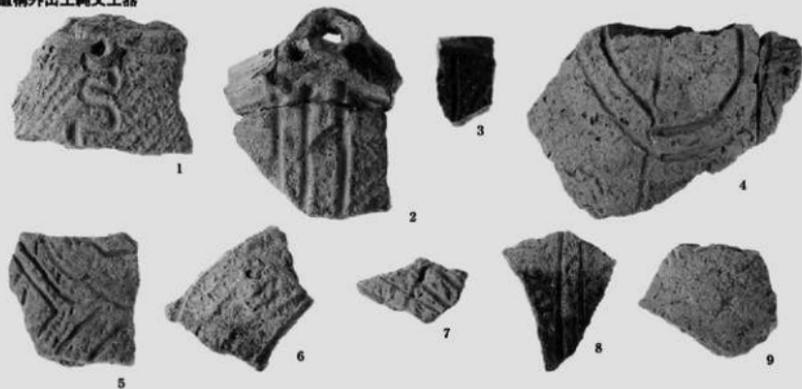
6



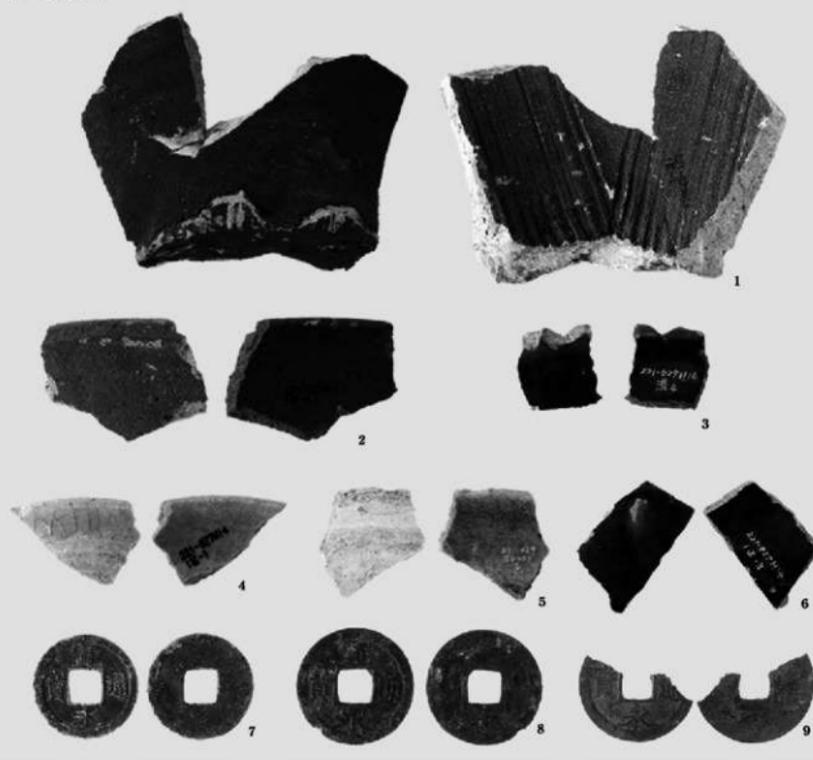
7

赤作遺跡

遺構外出土縄文土器

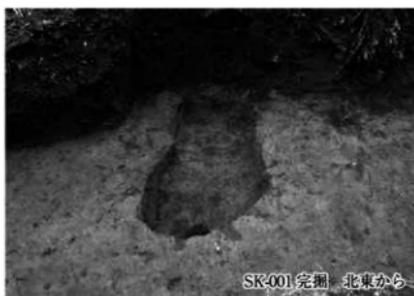
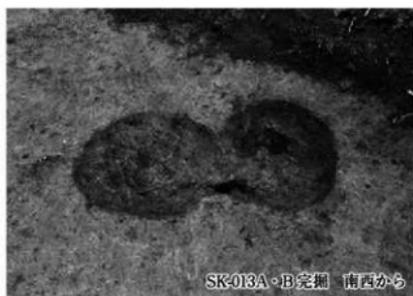
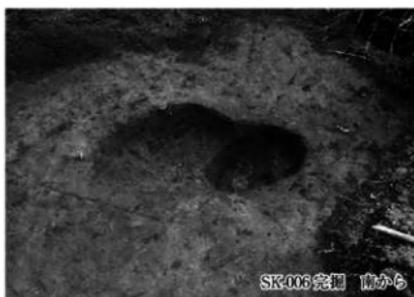


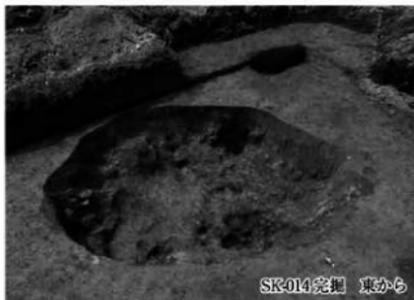
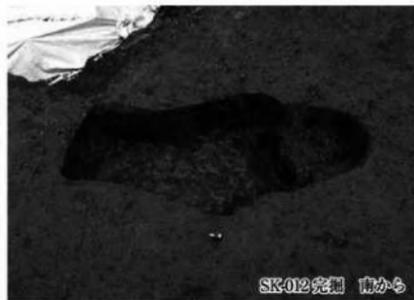
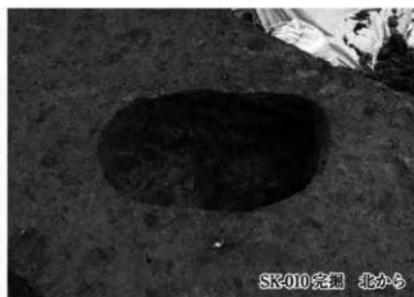
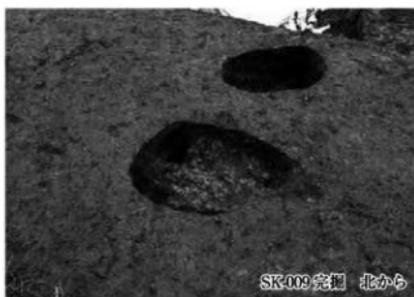
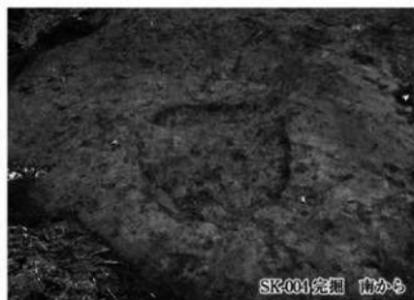
中・近世遺物





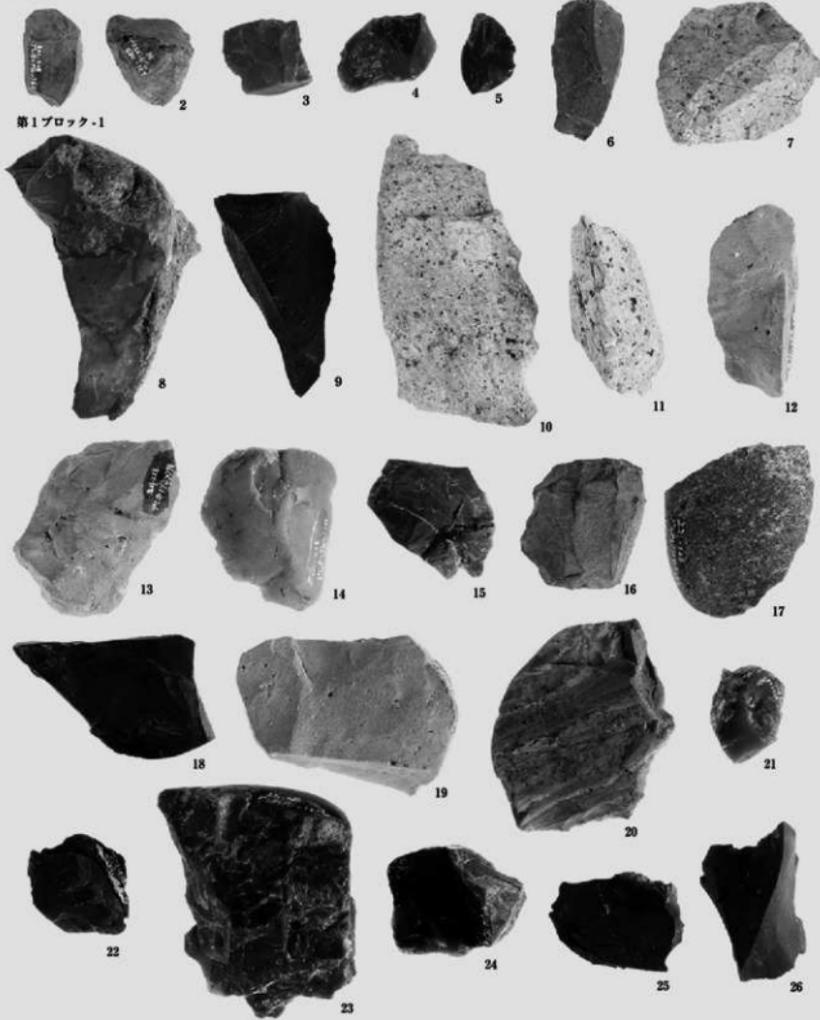
阿蘇中学校東側遺跡



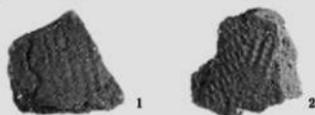


阿蘇中学校東側遺跡

旧石器



遺構外出土縄文土器



報告書抄録

ふりがな	やちよじょうのかみいせき・かみこうやしらはたいせき・ひらさわいせき・あかさきいせき・あそらゆうがっこうひがいがいせき							
書名	八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡・平沢遺跡・赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡							
副書名	一般国道296号道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	田島新 黒沢崇 牧武尊							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
堂の上遺跡	八千代市堂の上41-3ほか	12221	033	35度44分40秒	140度8分1秒	20010216～20010228ほか	7,060m ²	一般国道296号道路改良事業
上高野白幡遺跡	八千代市上高野699-2の一部ほか	12221	038	35度44分40秒	140度8分14秒	20010801～20010927ほか	2,023m ²	
平沢遺跡	八千代市上高野142ほか	12221	034	35度44分48秒	140度7分45秒	20030901～20030930ほか	4,560m ²	
赤作遺跡	八千代市米本1956ほか	12221	027	35度44分46秒	140度7分28秒	19990801～19990930ほか	4,787m ²	
阿蘇中学校東側遺跡	八千代市米本2716-2ほか	12221	028	35度44分51秒	140度7分40秒	20041004～20041029ほか	2,019m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
堂の上遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代	石器集中出土地点 竪穴住居・土坑 竪穴住居 竪穴住居・土坑・ピット	旧石器 縄文時代土器・石器 弥生時代土器 古墳時代土師器・石製 模造品・土製品	古墳時代中期の滑石製 模造品(白玉)製作剥片・ 未成品が多数出土した。			
上高野白幡遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代	土坑 竪穴住居	旧石器 縄文時代土器 弥生時代土器・石器・ 土製品	弥生時代中期後葉(宮ノ台式期)の竪穴住居がまがまごって検出された。			
平沢遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	石器集中出土地点 土坑	旧石器 縄文時代土器				
赤作遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 中・近世	石器集中出土地点 土坑 土坑・溝	旧石器 縄文時代土器 陶器・銭貨	縄文時代前期末の土坑から顔面表現の付く深鉢が出土した。			
阿蘇中学校東側遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 中・近世	石器集中出土地点 土坑 土坑	旧石器 縄文時代土器				
要約	<p>堂の上遺跡は4回にわたり発掘調査を実施した。旧石器時代ではⅣ層～Ⅵ層にかけて小規模な石器集中出土地点が1か所検出された。縄文時代では称名寺式土器を主体に土器が多く出土したが、遺構は竪穴住居跡1軒と土坑のみである。弥生時代では後期集落が検出された。遺物の出土は少量である。古墳時代では中期の集落が検出され、その中の1軒から滑石製白玉の製作剥片や未成品が多数出土した。</p> <p>上高野白幡遺跡の旧石器時代では単独で剥片が2点出土したのみである。縄文時代では土坑が1基のみと早期から後期の縄文土器破片が少量出土した。弥生時代では中期後葉(宮ノ台式期)の竪穴住居跡が5軒まがまごって検出された。石器を伴うなど出土遺物も豊富である。</p> <p>平沢遺跡の旧石器時代ではⅣ層～Ⅴ層にかけて石器集中地点が2か所検出された。縄文時代では土坑が2基検出され、石製の製作剥片が出土した。縄文土器は早期・前期・後期のものが少量出土した。赤作遺跡の旧石器時代ではⅣ層～Ⅴ層にかけての石器集中地点が3か所検出された。縄文時代では土坑が2基のみであったが、前期末と考えられる顔面表現の付く深鉢が出土した。中・近世では土坑と溝が検出され、遺物では陶器と銭貨が少量出土した。</p> <p>阿蘇中学校東側遺跡の旧石器時代ではⅣ層を中心とした比較的規模の大きい石器集中地点が1か所検出された。縄文時代では土坑と竪穴が1基ずつ、遺物の出土も極めて少ない。中・近世では土坑が11基検出された。</p>							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 15 集

八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡・平沢遺跡・赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡

— 一般国道 296 号道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 —

平成 28 年 3 月 25 日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区市場町 1-1
印刷 株式会社白樺写真工芸
千葉県稲毛区山王町 102-5
